

靈界の星々

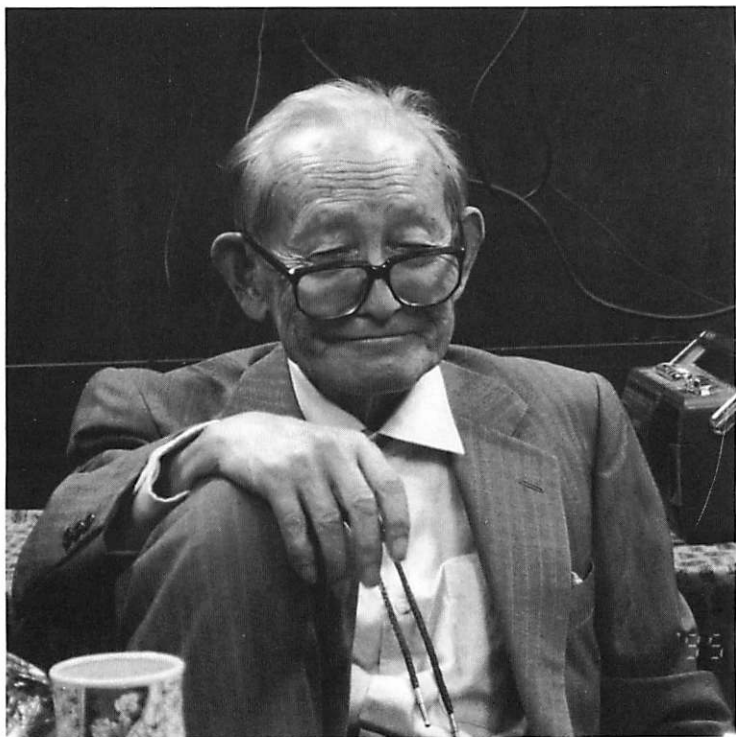
神の幕屋人物詩伝

小池辰雄

靈界の星々

神の幕屋人物詩伝

小池辰雄



吉祥寺で伝道集会を始めて55年、その記念集会後、演台の前でくつろぐ著者
(1995年9月24日、沢田正信撮影)

本長詩は、パラダイスの霊界の次元に於て、主として同次元的人物、それは何らかの意味に於て筆者を感動させた人物を出遭うまにまに書いた詩群から成っている。それゆえ、歴史的、客観的、論理的秩序によるものではない。謂わば、野や山や谷を散策して瞳目させられる景勝に喜ぶようなものである。特に撰んだわけではないから、見落とした然るべき人物が勿論たくさんある。アンデルセンのお月さんがあちこち照らし廻ったように、あちこちを歩き廻ったので、詩の行数が意外に増えて、おそらく世界最長の詩になるだろう。昨年、一九九二年から執筆して十二年かかるつもりであるから、二〇〇三年頃に擱筆できたあたりがたいわけだ。昨年は八十八歳であつたから、出来あがるのが九十九歳、白寿、本になるのが百歳の頃になるわけだ。なぜ、十二年という歳月にしたかという、あの「青の洞門」の禪海和尚が、あの洞門を鑿一本金鎚一挺で十二年間コツコツ穿つて遂に穿徹した故事に感激したからである。私もかつて現地に旅して熟々見て感嘆したわけであつた。もう一つの理由は聖書の中に十二という数値の重要さが、その著しい用例でうなずけるからである。だから、百歳を目指して、といったら、ノンフィクションの柳田邦男氏が某誌上に「百歳に完成を目指す長編詩への挑戦」という御丁寧な玉文を書かれたので、恐縮千万、且つありがたく思った。ともあれたのしく毎日コツコツやっている。人々は私が百歳という年齢を平気で唱えているのを不思議に思うだろう。だが私は使命のある限り、神様は生かして下さると信じているのだ。

詩篇の構造（ゴシックのものは遺稿のあるもの）

一九九三年二月二十七日 作成

天弓詩篇序歌

第一篇 生い立ち 乳児時代～東大時代

第二篇 藤井、塚本両先生の助手時代

第三篇 独立道（一九四〇年九月二十二日より）

第一章 聖霊降臨以前

第二章 一九五〇年晩秋 大阿蘇に於ける聖霊降臨

第三章 一九五一年一月より 「曠野の愛」誌時代

第四章 日本キリスト召団結成から各召団独立まで 「エン・クリスト」誌時代

第五章 一九八八年 長詩発足 十二年計画 一九九九年出版予定

第四篇

第一章 幕末維新の烈士 象山、松陰、西郷、海舟、龍馬

第二章 哲人 プラトン、カント、キェルケゴール、西田

第三章 教育者 ベスタロッツ、新島襄、小原、天野貞祐、佐々木吉三郎

第四章 政治家 グラッドストーン、ピスマルク、リンカーン

第五章 武人

ナポレオン、クロムウエル、ゴルドン將軍

第六章 科学者

ダーウイン、ニュートン、エディソン、アインシュタイン

第七章 医者

レントゲン

第五篇 芸術家

第一章 詩人

ホーマー、ダンテ、シェクスピア、ミルトン

ブラウニング、ゲーテ、シラー、ユーゴー

アンドルセン、トルストイ、ドストエフスキー

杜甫等

第二章 楽人

バッハ、モーツァルト、ベートーヴェン

第三章 画家

ラファエル、レンブラント、フランス画家、スペイン画家

第四章 彫刻家

フィディアス、ロダン

第六篇 宗教家

第一章 仏教

最澄、空海、法然、親鸞、荣西、道元

日蓮、一遍、一休、沢庵、良寛、白隠、大拙

第二章 旧約界

アブラハム、ヤコブ、モーセ

アモス、ホセア、ミカ、イザヤ、エレミヤ

第二イザヤ、第三イザヤ、ヨエル

第三章 キリスト教（福音） ペテロ、パウロ、ヨハネ

ルター、ウエスレー、スウェーデンボルグ

内村鑑三、藤井武、賀川豊彦、九州のキリシタン殉道者たち

アッシジのフランチェスコ、フランチェスコ・ザビエル

ピューリタン（アメリカ）

第七篇 特殊な人物 禅海（青の洞門）、塙保己一、蓮月

第八篇 芸能人 チャップリン、マリリン・モンロー

松井須磨子、美空ひばり

第九篇 （黙示録に因んで新天新地。フィナーレ）

目次

天弓詩篇序歌	11
--------	----

第一篇 生い立ち	19
----------	----

乳児時代―東大時代	19
-----------	----

聖書伝道五十年の峠にて	66
-------------	----

第二篇 幕末維新の烈士

佐久間象山	87
-------	----

吉田松陰	92
------	----

西郷隆盛	114
------	-----

勝海舟	133
-----	-----

坂本龍馬	141
------	-----

第三篇 教育者

新島襄	151
-----	-----

天野貞祐	180
------	-----

佐々木吉三郎……………187

第四篇 芸術家

第一章 詩人

ダンテ……………199

第五篇 宗教家

第一章 仏教

最澄……………217

空海……………219

法然……………222

親鸞(一)……………225

親鸞(二)……………235

栄西……………244

道元……………247

日蓮……………251

一遍……………266

一休……………273

良寛……………283

第二章 キリスト教（福音）

白隠 291

アッシジのフランチェスコ 298

聖書の人ルター 317

内村鑑三 351

藤井武 360

賀川豊彦 374

第六篇 特殊な人物

禅海（青の洞門） 411

塙保己一 430

蓮月 434

第七篇 芸能人

チャップリン 441

マリリン・モンロー 462

松井須磨子 468

中山晋平 476

美空ひばり 484

わが賜りたる福音	490
小池辰雄遺作刊行にあたって	494
編集後記	498
著者略歴	502
小池信雄	
沢田正信	

霊界の星々

神の幕屋人物詩伝

天弓詩篇序歌

1

明治は三十七の年
 日露開戦その直前
 真午まひるの太陽輝ける
 弥生やよひが岡に産声うぶごえを
 あげて生れにし吾れなるか。

2

幼き時に父は去り
 母は五人ごたりの遺児抱え
 お茶の水なる女子校に
 教育の道励みつつ
 われらをよくぞ育てたる。

3

田園情緒ゆたかなる
 千駄ヶ谷せんたがやにて幼年を
 一人の友と野に川に
 遊び貫ぬきける思い出が
 心のカメラに今もあり。

4

小石川区の林町
 高師こうし附属の小学の
 前半時代を暮しけり
 「よく学びてよく遊べ」
 われはよくぞ遊びける。

告白的自伝詩。旧制一高
 寮歌「晓寄する新潮の」
 の歌調にて歌うことを得
 る。(七五調)

*高師＝高等師範学校。

5

我は弱虫泣虫の

寢「づくなき」児なりけり

さはあれ真善美に対し

感激性の浅からぬ

夢ゆたかなる少年よ。

6

西片町に転居して

小学高年暮しける

時しも我は病臥せり

英語を長兄に学びしが

英語の興味津津よ。

7

同心町の二階屋に

長兄政美と暮しける

附中時代の生きざまが

髣髴として目交に

現前するかな感無量！

8

英語の実力抜群の

長兄政美はロンドンに

赴任内定ありけるに

サタンに謀略られ北京赴任

悪疫のため仆れたり。

9

時期は世紀の二十一

北京の空に点りしは

長月二十二の日なり。

小池政美若くして

生命を棄てぬ何ゆえぞ。

10

上司公森語りけり

「小池政美の喪失は

国家の損失誰か知る

常人四、五年の仕事をば

一年足らずで仕上げたり」

*附中＝高等師範学校の
附属中学校の略称。

*長月＝陰曆九月の異称。

11

政美の重病に母と次男
朝鮮南満経由して
同仁病院に馳せ往きぬ。
すでに高熱、死の床よ
嗚呼悲劇的再会よ。

12

死の三日前キリストが
白衣を纏うて現われぬ
「愛する母よ、キリストが
迎えに来臨、ゆるされよ
お先きに失礼いたします」

13

夫婿亡き世の嶮路をば
永年歩みしわが母は
今や過労と悲涙の身
杖と頼みし長男の
遺骨抱きて帰路につく。

14

黄海上にてわが母は
失明したり、噫無情！
次男龍二に手を曳かれ
遺骨を抱くわが母が
東京駅に降り立てり。

15

何たる悲劇ぞ、迎えたる
わが眼は霞みて言なし。
「政美兄上、母上よ」
眼にて叫びしわが胸中
天地晦冥どん底よ！

16

わが青春の暴風雨なり
借家を去つて叔父のもと
母と我とは借り住居
高校受験の我なれば
一高目指して猛準備。

略。
*南満洲国中国の南満州の

*夫婿はおつと。

*一高は東京大学の前身。
一九四七年、旧制の一
高・東京高校をあわせて
新制大学となる。

17 憧憬^{どうけい}一高受験^{*}には

自信充分ありければ

受験票をば手に入れぬ

されど叔父への責めゆえに

水高受験^{すいこう}と母の声。

18 涙を呑^のんで水高を

受験、合格トツプ級

されば一高も合格^{パス}のはず

残念無念^{ひげん}悲憤^{ひふん}なり

長兄^{あに}の墓前^{ふんだ}で泪^{なみだ}せり。

19 水戸高校の時にして

大手町^{うしろまち}なる内村^{*}の

聖書の講義胸をうち

光を浴びて信ぜしは

二十歳^{はたち}に満ため時なりし。

20

病の波に襲^{さん}われて

惨憺^{さんたん}たりし水高よ。

聖書とルツター、ヒルティーを

燈火^{ともしび}として辿^{たど}りける

ひとり旅路^{ひとり}を忘れめや。

21

東大独文学窓は

古典の粹^{すい}たるゲーテ、シラー

ダンテとミルトン、西欧の

詩歌の世界に憧憬^{あこが}れて

日に夜を継いで読み耽^{ふけ}る。

22

藤井^{かじい}の門下五星霜^{せいすう}

主の日^ま遵^{まも}りて貫きぬ。

噫^{あゐ}、千九百三十年

内村、藤井^{なむら}仆^{たふ}れたり

み空^{とら}に点^{とも}る巨星^{はし}二つ。

*憧憬^{どうけい}＝あこがれ。

*水高^{すいこう}＝水戸高校。

*藤井^{かじい}＝藤井武。著者の
信仰上の恩師。

*内村^{なむら}＝内村鑑三。

23

藤井の信友 塚本の
門弟となりて学びけり
かくて無教会の陣營で
聖書の研究一点張り
観念信仰我もまた。

24

時期は世紀の五十年よ
阿蘇は霜月三日より
垂玉温泉滝見荘
聖書講読の集会にて
手島と小池の告白よ。

25

神キリストに祈り入る
彩雲裂きて聖霊が
われを靈撃したりけり。
その瞬間にわが体軀
宙に浮びて地に伏しぬ。

26

わが全身はみ霊にて
漲り溢れ痺れたり
聖霊降臨、新生よ！
使徒らの次元慕わしや！
生涯を賭けて追及往かん。

27

十字架聖霊のキリストの
無者たる実存賜りて
左顧右眄なくわれは往く。
この罪びとを抱き給う
無量の愛ぞ力なる。

28

八八峠を越えゆきて
無尽の涙を霊泉とし
燃ゆる血潮を霊火とし
聖霊の霊生を力とし
天弓詩篇は進みゆく！

*塚本「塚本虎」。

*無教会は無教会主義
内村鑑三が創唱した、日
本独特のキリスト教。教
会的な諸制度を認めず、
聖書中心の福音主義的信
仰に立つ。

*霜月＝陰暦十一月の異
称。

*手島＝手島郁郎。

*無者＝無目的実存者。
自分を何者ともしない
者。著者の福音把握の
主要なキーワード。キ
リストは「神の無者」
であり、キリストを信
受する者は「キリスト
の無者」とされる。無
者則無限無量者。キリ
ストの十字架の贖罪に
より無者とされた者は
聖霊の内住により無限
無量者とされる。（小池
辰雄著作集第一巻「無
者キリスト」参照）

第一篇 生い立ち

生い立ち

― 乳児時代―東大時代―

豊葦原の瑞穂の国の
米に因める米寿を迎え

この害われたる天体地球の

時空を越えてキリストの無者天弓は

今何処に來たのか。

身は地上にありながらわが魂之靈は

聖靈のみ力で靈界に翔んで來た。

此処は十字架上のキリストの

両脇に十字架されていた悪人共の

一方の者が今わの極に魂砕け

「イエスよ、私を覚えて下さい

あなたの国にお入りになるとき！」

この嘆願にイエスは即答！

「本當にお前に言う

今日、私はお前を天国に伴れて往く！」

この天国、バラダイスに私はやつて來た。

わが魂之靈は幽靈ならんや

わが肉体も靈的な生命に満たされている。

これが私の詩の世界の現実なのだ。

私は夢の中でも屢々そのような境涯に入る。

小池辰雄（こいけ たつお）一九〇四年二月七日、東京に生まれる。一九五〇年秋、十字架・聖靈の本格的体験以来、使徒的次元の原始キリスト道を唱道し、キリスト召団を結成。独立伝道者にして詩人。一九九六年八月二十九日、往生。

*米寿＝数え年八十八歳のこと。

*天弓＝虹のこと。著者の最後の雅号。

さてこの靈界から時空を越えて
わが生れし時代を鳥瞰しよう。

ポルトガル、スペイン、オランダの

遠洋航海と植民地政策に継ぎ

前世紀後半から二十世紀初期にかけ

イギリス、ドイツ、フランス、ロシアが

帝国主義的領土拡大の政策を競うた。

アメリカすらも太平洋のハワイ諸島を手

入れてフィリッピンへの植民政策を進め

日本に国交と貿易を促した。

シベリヤを既に配下にもつロシアは満州に

勢力を伸ばし不凍港旅順を軍港とした。

東亞の風雲ただならぬ様相を呈し

やがては朝鮮半島に勢力を伸ばし

日本の存在を脅かさんとの状態となり

明治天皇竟に一九〇四年二月十日

ロシアに対し宣戦布告を発令。

かかる国家の命運に関わる

日露戦争開戦直前

明治は三十七年二月七日

東京は本郷弓町の一角に

陽光燦たる日曜の真昼時

私は光を初めて身に浴びた。

大詩人ゲーテの生誕時刻に類似したとは！

かかる風雲急なる甲辰の年なので

辰雄と命名、龍は東洋の靈獸

風雲に乗じて天に昇るといふ。

しかもキリスト復活の聖日の真昼時

陽を浴びたとは！

靈的摂理！ 目前に平伏す。

全人類は神の大家族

各民族も国家も夫々使命的存在

互いに敬愛すべきなるに何故争うか。

軍備は戦争を招く。世界歴史は戦争史か。

善隣友好史ではないのか。

*摂理Ⅱ自然や世の中を支配している理法。創造者である神が世界と人間の歴史を支配し導くこと。

既往八十有余年を顧うと

わが国は三度び歴史的大變動に遭遇。

日露戦争、第一次、第二次世界大戦。

かかる劇的戦雲にめぐり遭つたこの身は

魂の遍歴に於ても霊的な風雲児。

日清戦争、これを義の戦いとなし

戦争肯定者なりし内村鑑三は

日露戦争開戦前には戦争を人間の

悲惨事なりとなす断乎たる非戦論者。

こは国際政治的判断からでなく

人道的に人間最大の罪過となした。

日露戦争の関ヶ原こそは旅順の大激戦。

旅順は日清戦争の際日本軍の占領下。

されどロシア、ドイツ、フランスの

三国干渉に遭い

わが国は遼東半島を清国に返還。

然るに帝政ロシアは

清国からこれを横取りし

旅順山地に東洋第一の要塞を構築し

不凍港旅順を軍港となし

東亜制海の根拠地たらしめんとした。

かくて日露戦争の焦点は

旅順の要塞と軍港を巡つての

一大決戦とならざるを得なかつた。

ここにその戦況の顛末を叙す要はない。

実に難攻不落の要塞旅順は

その堅牢な砲台、城壁の完璧な装備

機関砲、機関銃、爆弾等の新鋭武器

かかる武器を以てする上からの斉射には

日本軍の三次に互る総攻撃も

死傷者の犠牲夥しく、なす術は尽きた。

竟に内地より山砲の大輸送

これが敵砲台破壊に大成功。

ともあれ敵の残塁は松樹山、東鶏冠山

*既往〓過ぎさつた昔
過去。

*顛末〓物事の始終。
いきさつ。

二龍山、而して最高の二〇三高地要塞。

かくて第四次乾坤一擲の*

最終総攻撃に移った。

さしも頑強なりし敵陣も砲撃の傷手深く
ついに総崩れとなり

一九〇五年（明治三十八年）一月二日

にれいさん
爾靈山（二〇三）高地に

決定的な日章旗が翻る。

さわれ、この旅順攻城戦の

わが軍の戦死戦傷幾万か。

正に死屍墨々山を蔽う惨状。

一九三七年（昭和十二年）筆者満州旅行の際

旅順二〇三高地を親しく訪ねたが

そのときですら白骨の破片を発見！

うたた旅順戦に感無量、しばし瞑目！

時の陸軍総指令官は大山巖元帥

旅順攻城軍司令官の中核は乃木希典大将

乃木將軍凱旋時の挽詩に曰く

「王師百万征強虜 野戦攻城屍作山

愧我何顔看父老 凱歌今日幾人還」

（王師百万 強虜を征す

野戦攻城 屍山を作す

愧ず 我 何の顔あつてか父老を看ん

凱歌 今日 幾人か還る）

正に万斛の悲涙を以ての感慨の辞。

旅順攻城戦死の將兵山を作す

自分は何んな顔で家族の人に会えるのか。

人間味深厚、責任感深刻な司令官

乃木將軍らしき告白である。

將軍の二児勝典と保典の二将校も

南山及び旅順の攻城戦で「名誉の戦死」。

五年一月二日、水師營で

乃木とステッセル両將軍は

幕僚を随伴して開城談議。

乃木將軍は武士道と人間性を以て

有終の美を為した。

*乾坤一擲のるかさる
か、運命をかけて勝負す
ること。

*「王師百万」明治
乃木希典の「凱旋感有り」
（凱旋有感）と題する七
言絶句。

*王師 天子の軍。皇軍。
*強虜 強いえびす。こ
こではロシア軍をさす。

同年三月十日、奉天の大会戦が終結し、茲に日本陸軍は終局的勝利を勝ち得た。満州軍総司令官は南洲の門弟たりし大山巖元帥。

これより先、ロシヤは

バルチック艦隊を出動させ

旅順港のロシヤ艦隊救援の挙に出でた。

一隊は地中海を横断し、スエズ運河を経て

他隊はアフリカ大陸西岸を迂回して

両艦隊はマダガスカル島で相会す。

彼らはその間、旅順陥落の報に接し

且つ第三東洋艦隊の追派遣を知る

いずれの艦隊も印度洋を渡り

シンガポールを経て安南の南方で相合流。

三十余隻の大艦隊は威風堂々

ウラジオストック目指して

北東に進路をとった。

目的は日本海軍撃破に在った。

ピアノその他不要のものを海に投じ

スピード・アップ、白波を蹴立てて鷺進。

コースは対馬海峡か津軽海峡か。

時正に一九〇五年

明治三十八年五月二十七日、夜明け四時半

哨艦、仮装巡洋艦信濃丸が

敵艦影を発見、直ちに本隊に無電通告

「敵艦隊二〇三地点に見ゆ

東水道へ向うが如し」

同日午後一時四十分

敵艦隊と相距る五海里。

東郷元帥の旗艦三笠の橋上に戦闘旗掲揚

続いてかのトラファルガル海戦で

ネルソン将軍が

"England expects that every man

will do his duty."

のZ旗を翻した如く、東郷司令長官は

*橋はばしら。

*南洲は西郷隆盛。
*門弟は弟子。門人。

「皇國の興廢此の一戦に在り

各員一層奮勵努力せよ」

の乙旗を掲げた。

この日本海海戦こそは

日本の国運を決する海戦。

バルチック艦隊の二列縦陣に対し

日本艦隊は一列横陣もて敵の進路を阻む。

「天気晴朗なれども濤高し」のこの日

敵は早くも砲門を開いた。が、

わが艦隊はその距離六千米になるや

やや弓形の丁字形を以て

敵艦に集中砲火を浴せた。

敵味方の砲声百雷の轟くが如し。

同日夕刻、敵の旗艦スワロフは竟に沈没。

夜の帳降りるや駆逐艦、水雷艇隊が

手負いの猛獣を追う獵犬の如く活躍

大戦果をあげて、翌二十八日を迎えた。

茲に戦況を述べる要はないが

五月二十七、二十八両日を以て

バルチック全艦隊三八隻のうち

二〇隻は撃沈、五隻は捕獲、残る一二隻は

或は自爆、或は武装解除、結局全滅。

わが海軍の戦死一一六名、負傷五三六名

敵海軍の大半は戦死

司令長官ロヂェストウエンスキー外

六千余名の捕虜、という大敗。

紀元前四八〇年のサラミス海戦の

ギリシヤ海軍の勝利も

紀元一八〇五年のトラファルガル海戦の

英海軍の勝利も

この日本海海戦とは同日の談ではない。

半歳の風雨に耐え、地球半周の如き航海

波濤二万軒を乗り切つて来た大艦隊が

二日一夜の海戦でその偉容を

幻影の如く消したとは。

これを旅順の陸戦に於ける

わが陸軍の大犠牲と合わせ想うとき

敵味方の戦没者の英霊に対して

筆者は茲に瞑目合掌せざるを得ない。

わが乳児時代は正に如上の日露戦争時。

高等師範（現筑波大学）附属小学校

五、六年時に、写真、挿画入りの

巖谷小波著『少年日露戦史』

全二十巻を感激して読んだ。

惜しむべし、この全巻はわが書架になし。

私には兄三人姉一人妹一人

兄三郎は乳母の乳悪しく生後三ヶ月で他界。

母は第四児三郎からは

母乳の不足であったから。

人生は奇運、私は牛乳で育てられた。

さて、わが生れ出でし東京は本郷の

弓町の上空から八十八年前を下瞰する。

一九〇四（明治三十七）年如月七日

太陽は黄道の水瓶座と出会っている。

時正に日露開戦直前、弓町の一角に

既述の如く政吉、光子の四男として

生れいでた風雲児なるかな。

長兄政美、次兄龍二、姉は富士子

三男三郎は生後間もなく他界。

私より三年の後に妹愛子。

我らの家は同じ丘陵の妻恋に移転。

私はその二階の欄干から庭に転落

鎖骨を折ったが頸骨はまぬかれた。

ある夏のことに大磯で海岸生活

あの大浪小波は今も眼前に砕け散る。

母は程近きお茶の水女学校教員となる。

それゆえ私はお茶の水幼稚園の

園児として通園、担任は雨の森先生

先生の笑顔は今もなお眼前に髣髴。

*下瞰＝高い所から見下ろす。

*如月＝陰暦二月の異称。

あの藤棚の下で手に手を執^とつて

輪舞したのも昨日のようにあざやかだ。

幼少年時代の印象の何と深きや。

編袋に円筒形の弁当箱

おかずはしばしば^{うぐいすまめ} 鰯豆

あの昔の味が蘇^{よみがえ}る。

さてここで両親のことにちよつと触れよう。

父政吉は佐渡が島相川^{あいかわ}生れ、家紋は巴藤^{しもんふじ}

家系は藤原末流、生活は佐渡の金山勤務

三井系なる鉱山技師、語学の才あり

南米アンドスの金鉱探索に出張している。

わが語学愛好は父の素質に由っている。

「佐渡の金山、此の世の地獄」と詠^{うた}われた

徳川封建時代の悪代官らの残虐^{せうけんごうやく}の

昔を審判^{さはん}かんと

地下の金鉱採掘の様相をつぶさに再現

人形に地獄的情景を現前させている。

現実^{こくれつ}は更に酷烈人道^{こくれつ} 叛逆^{はんぎ}のものだったろう。

明治末年の頃金鉱は枯れて来た。

佐渡の人情はあたたかい。

佐渡おけさ踊りは優雅なものだ。

さて父は洞察力^{とうさつ}深く

天藉^{てんか}するに尚^{なお}十年を以てせば

技師として大いに業績^{しよく}を

遺^{のこ}したに相違なしと

その死を惜しまれた由^{よし}である。

即ち父は東京の本社勤め^{しんめ}のとき

病のために他界した、私の五歳^{いつつ}のときに。

雨のそぼ降る中を母に抱かれ人力車^{にんりくしや}で

染井^{そめい}の墓地にゆき、土葬^{どさう}の際に

埋められた寝棺^{ねかん}の上に

小さな手でひと握りの土を

投げ入れて手を合せたことが

八十余年後の今日もなお

わが脳裏^{のうり}の写真版^{しやうしんぱん}に遺^{のこ}っている。

母光子は信州松代、明治二年の生れ。

明治維新時の先覚者佐久間象山と

明治末期から大正初葉にかけての

大女優松井須磨子と同郷の人。

ともあれ私にとり母の恩は

山よりも高く海よりも深い。

母は意志の強靱な女性

「精神一到何事か成らざらん」*

の実証者。この一句は我らに対する

母の訓育のモットーであつた。

母は善意を以て敢えて重荷を負い

此の世的にはまことに不幸な生涯であつた。

母は太田家八人姉妹の第五女で

十七歳のとき、江戸へ出て勉強したいと

父母に願ひ出た。

「若い女性が独りで

そんなことをしてはいけません」

すでに決意の光子、夜陰に乗じ

家を抜け出し、東へ東へと歩徒の旅。

それと知つた両親は二人力の力車で

使者をして追跡させた。小諸で追いつく。

「御両親がお帰りなさい、とのことですよ」

「そうですか」

どうしても帰れと言われるのなら

私の首をもつていつて下さい！」

断乎たる光子の返答。

これには追手も降参。言に窮した揚句

「そんなにお志が堅いのなら

お江戸へどうぞ！」

と、むしろ励まして

持ち合わせの路銀をくれた。このことは

わが青年時に母から直に聴いた。

その時私の腹の中に熱湯が湧いた。

女子高等師範学校をトップで卒業。

父亡きあと、母は

*精神一到何事か成らざらん
精神をその一点に集中して行えば、どんなにむずかしく思えることもできないことはないという教え。

我ら五人をよくぞ育ててくれた。

生徒はあのバンドに袴^{はかま}すがたの

お茶の水女学校の教員生活二十年

勤務の他に家庭教師もしていた。

ついに過労のため胃腸のアトニー

ためにお粥^{かゆ}やパン食。

母の労苦の容易ならざる相^{すがた}を

今もありありと想い出す。

本郷の弓町生れの私は弓が好き

竹ぎれで弓を作つて金魚を狙^{ねら}う猫を狙った。

それに因^{ちな}んだわけでもないが

てんきゅう^{てんきゅう}が最後の雅号^{がごう}。

弓町から同じ丘陵地帯の妻恋に転居。

程近きお茶の水幼稚園の園児となった。

担任の女の雨の森先生の笑顔は

今もはつきり想い出す。

母に伴れられて幼稚園に通ったが

毛糸編袋に入れた円筒形の弁当箱

鶯豆のおかずが大好き。

ある時どうした原因^{わけ}か

藤棚^{ふじだ}の角で泣いていた。

A先生が駆け寄つて私を抱きあげて

「どうしたの！」

こんな愛のなぐさめが忘れられない。

もし私が画^え書きなら今でも描ける。

園児の中には後に東大文学部で

イスラエル宗教史を共に聴講の

作曲家諸井三郎君がいた。

そのうちに父が病気で他界し

立派な門扉の屋敷から

千駄ヶ谷の借家に移った。幼稚園は中退。

向いの家に関西生れで

「坊^はちゃん」呼ばわれの

幼児がいたのでこれが唯一の友となる。

直ぐ仲好しと相なつて

*虹霓^{にじ}にじ。雄を虹、雌を霓という。

朝から夕方まで、遊び暮した。
中断はお午どきだけ。

「春の小川は さらさら流る。」

岸のすみれや れんげの花に……
蝦やめだかや 小鮒の群に……」

あの唄そっくりの田園風景だ。

蓮華の花が野原一面のパラダイス。

小川には小蝦が潜行艇のように泳いでいた。

小川には狭い橋や丸太が渡してあった。

丸太はこれに股がついていざり渡った。

初夏の夕には蛍が水べにちらほら

東京といつても田園情緒まことにゆたか。

のちにこの「春の小川」の唄の発祥地が

正しく昔の千駄ヶ谷代々木だと知って

なつかしさがこみあげた。

七月のある日、ぼんちゃんと二人で

代々木練兵場への大通りを歩いていて。

道の真中に向って這つてゐる虫を
彼が見つけて

「兜虫！」

と言うが早い、走り寄った。とその時

米俵満載の八車車がさしかかった。

ぼんちゃんはこれにぶつかって倒れた。

彼の首が、前輪後輪の間に位置した

その瞬間、悲鳴一声！

噫、彼は敢え無くこの世を去った。

と、その時奇しく

長兄政美が帰宅に来合わせ

驚いて直ぐ彼を担ぎ、交番に届け出た。

私はおどおど泣きの涙で帰った。

あの衝撃的な一瞬は

生涯忘れられないのだが

遠き昔をまざまざと想い出し

「ああ、ぼんちゃんに会いたいなあ！」

すると見よ、彼が何処ともなく現われた。

「ああ、辰^{たつ}ちゃんか、嬉しいな！

耳^{みみ}の恰好^{かつこう}が昔の通りだよ

よく忘れないで呼んでくれたね」

「忘れないどころでないよ！

初夏の頃、千駄ヶ谷のあたりを

電車で通ると君のことを

想い出すこと幾度か知らないね

君が兜虫をさきにもつけたので

あんなことになって、何とも……！

もし僕が先にみつけたら

僕があのようにになったかも知れないよ

君は僕の代りに霊界に先立ったのだ

君に対して言う言葉がないね」

「そんなことはないよ

僕が狼狽^{あわて}たまでさ」

「ああ、あれからもう八十余年が経^たった

僕の地上での仕事が終わったら

再会するからもうしばらく待つてね

すまないね」

「ああ、楽しみにしているよ」

彼と握手をして「ではサヨナラ！」

霊体の彼の手は若々しい生命に満ちていた。

「人その友のために生命^{いのち}を棄^おつる

これより大いなる愛^{おほ}はなし」

この聖言^{みことば}を念^{おも}いながら

彼の後姿^{がしやう}に合掌^{がつしやう}！

幼稚園を中退したことが

私に二つの深い印象を与えた。

即ち田園情緒ゆたかな環境と

文字通り刎頸^{ふんけい}の交わりが与えられ

奪^{うば}われたこと。

私は自然の光と美をおのずから体感^{たいかん}し

心魂は自然に対する愛と情感を喚起^{かんき}された。

先きに父を失い、今や唯一の友を失った。

これはわがたましひの世界に哀感^{あいがん}と

*「人その友のために生命を棄つる、これより大いなる愛はなし」Ⅱ新約聖書ヨハネ伝15・13。
(文語訳)

*刎頸Ⅱ首をはねること。
刎頸の交わりⅡその友人のためなら、首をはねられてもいい、というほどの深いつきあい。

知られざる神仏への合掌の心情を誘致した。
父と友を失った寂しさは
母への甘えを増した。

夕方母が帰ってくる姿を

門で待つ自分の姿が

今でも、夕陽への憧憬と共に浮びでる。

やがて東京は小石川林町九十四番地に転居

小学四年生までは林町時代

よく学びよく遊べの後半時代だ。

私は高師附属小学校第二部に入學

正帽は烏帽子横折りの帽子に下級生は赤総

一学年一学級男女十二名ずつ机は隣り合せ

まことに人間味ゆたかなものだ。

一・二学年、三・四学年、五・六学年

夫々が同一教室で同一先生から

異なる学科を学ぶ。

先生は一時限を巧みに教壇を右往左往して

夫々の学年に夫々の学科を教える。
かくて六年間

総半時間数で所定の学業を修得。

先生は実にヴェテラン先生たちだった。

担任は二学年ずつ同一、即ち担任三人で

六年間の教科内容を見事に修得させた。

修身、唱歌、手工、地理、歴史、理科は

一学年ずつ夫々の特別教室で学んだ。

私は修身が好きで、相島、加藤、蘆田の

三担任が語る史実談に感激。

三・四年時の加藤先生の習字の時間に

先生はわが右手を上から掴み

魂こめた迫力で

習字のこつを教えて下さった。

習字も単なる技術ではない

たましひの力だ。

何ごとも全身是れ眼是れ耳の

体感体得体現が本道。

蘆田恵之助先生は今想うと禪的な魂の人

「作文はどんな課題にも

自分との関わりを以て書け」

と。五年生の夏休みあけの作文時間に

「この夏の面白かったこと」という出題。

私は或る温泉地で

誰にも教わらず自分の工夫で

泳ぎ得た体験をつぶさに書いた。

それは美に三重丸をつけた評価をい戴いた。

高師附属小・中学では甲乙丙でなく美良可。

あの作文は何処へ往ったか。

小、中学校の少年少女よ

いろいろな作品や

教科書なども大切に保存せよ。

日記を必ず書けよ。日記は人生の歴史。

非常に大切なことだ。その素材から

後年に何か役立つことが生れてくるからだ。

同級生に宮下真一君という

異常な頭形の画の天才が居た。

正直、先生も顔負けだ。

何であれ、ちらっと見れば

それを苦もなく描くのだ。

チャップリンの活動写真を見

て来た或るとき

私の眼前でいろいろな場面を描いてみせた。

静物、動物、人物、風景、何でもござれ。

彼は中学二年生のとき夭折した。

彼の死は日本画界の損失といつて可い。

弁舌も巧みで、物語の画を何枚も描き

それを綴じてめぐりながら

活弁（活動写真弁士）然と、語り聴かせ

同級生を涙させたり笑わせたり。

「噫、宮下真一君！」

私の強い念波を無電の如く体受した彼が

翼もないのに飛んで来た。

*夭折＝若死にすること。

*弁士＝無声映画の説明者。

「おどろいたよ、小池辰雄君！」

君は霊的な人だね、昔は心の友だった嬉しいな、ところで地上はどうだね」

「今は人情の薄れた世の中よ

昔がなつかしいよ。大正四、五年

君と親しく語り合ったあの頃が

昨日今日のように感ずるよ。

何しろ君は画の天才だから

今でもあのチャップリンの画などは

眼前^{はうふつ}髣髴だ、君の名画を

幾枚ももらっておくべきだった

後悔先に立たず、残念千万だ」

「好いよ、今に地上の歴史が終つたら

神さまが新天地を創造^{つく}つて下さる。

そこは昔の地球よりすばらしい天地で

そこでは不思議な筆や画の具や画紙で

自由に描けるようになるう。

東西古今の大画家たちが

昔に優るすばらしい創造力で

奇想天外の画を描くにちがいないね。

僕もそのときを楽しみにしている！

では君との再会を待っているよ！」

「では、サヨナラ、宮下君！」

中学初年の宮下君は、霊界では壮年の相^{すがた}。

さて小学五年生の春の遠足

中野から井の頭までの片道徒歩である。

私は扁桃腺が腫れているので、母が

「遠足をする^{かんし}と病気になる」と諫止した。

それを聴かずに出かけたところ大変疲れた。

一夜にして顔が腫^{はく}んだ、急性腎臓炎。

ために一学期を棒にした。

何とも申し訳なき次第であった。

しかしその間、病床で（旧制）一高生なる

長兄政美から英語をABCから学んだ。

小池政美と言えば、その当時一高文科では

*諫止^{かんし}＝いさめて思いと
どまらせること。

英語の代名詞とされていたほど拔群だった

そんなヴェテランの兄から学んだので

私もすっかり英語が好きになり

二学期に登校したら、英語は一番

「英語の先生」などと綽名^{あだな}された。

病気のマイナスが

英語のプラスになったとは。

人生にはふしぎな導きがあるものだ。

このわが病中に、妹愛子が入院

可哀相に、法定伝染病たる猩紅熱^{しやうこうねつ}罹病^{りびよう}。

小学二年生にして彼女は天界に去った。

そのことを母は病中の私には黙秘。

噫、快活だった愛ちゃん！

あとで知った私の寂しみは何とも。

六月五日の命日には

お花とお菓子で供養する。

「小池愛子ちゃん！

お兄ちゃんだよ！」

「ああ驚いた、お兄ちゃん

どうしたの、こんなところへ！」

「何十年経ったかね、でも此処^{ここ}は

年数なんか問題でないだろう」

「そうなのよ、時間なんかないのよ

地上のような時計は要らないの！」

「好いね、自由自在

永遠を今として、だね

お兄ちゃんは地上でも

永遠を今としてるよ

地上で十二年かかる詩を

今書いている最中よ

もうしばらく待っていてね

そしたらこの霊界のパラダイスで

たのしく遊ぶからね」

「ええ、待っているわ、たやすい御用よ

でも兄ちゃんは偉いのね

*罹病＝病氣にかかること。

こんなところへやってくるとは」

「偉くもないんだよ」

全くキリストさまのおかげなのよ

いずれゆつくり話すでしょう

ではさようなら、愛ちゃん！

「さようなら、お兄ちゃん！」

彼女は元氣な美しい乙女に見えた

しかも昔の面影がハッキリ現われている。

その秋には一高の

名投手内村祐之の投球振りを

兄に伴れられて見に行った。

あのあざやかなカーブやドロップ

あの左腕投球のフォームそのものが

今でも眼前^{はうみづ}髣髴だ。

五大学を零敗^{ゼロ}させた一高全盛時代は

正にこの内村左腕名投手のときに現じた。

『野球界』誌の「一高全盛」特輯号が

今でも眼に映る、保存すべかりし。

後年内村祐之先生(精神病学の泰斗^{たいと})を訪ね

「先生は何故^{なぜ}、獨協(中学)に

入られたのですか」

「父が "How I Became a Christian" * の

独訳 ("Wie ich ein Christ werde") が

よく売れたので

ドイツ人は私をわかってくれる

だからお前は獨協に入れ

と言われたからです」

私は笑って

「そうだったのですか！」

獨協中学五年間を内村は一番で通した。

野球のために三番以下に落ちたら、許さぬ

日曜は聖書集会だから試合参加も相成らぬ

これが内村鑑三先生の厳命だった由。

ともあれ、日曜を特に魂の日としない

日本の民主主義一般の在り方は嘆かわしい。

* 泰斗 〓 その道であおぎ
たつとばれている人。権
威。

* How I Became a
Christian 〓 内村鑑三著
「余は如何にして基督教
徒となりし乎」

わが小学時代は

明治四十三年（一九一〇）春から

大正五年（一九一六）春まで。

その日常生活を垣間見れば

市内電車の往復切符が七銭

菓納豆が一銭五厘、大福餅が二銭

理髪屋が十銭、銭湯が五銭

子供の一ヶ月のお小遣いが五十銭銀貨一枚

といったところが庶民の水準。

暮、正月は風あげ、独楽まわし、羽根つき

いろは加留多、双六あそび、百人一首等

素朴なあの賑わいはなつかしい。

長兄政美は何でもござれの万能男児

百人一首は全部諳んじ、抜群の巧さ。

風あげもヴェテラン、あの大風赤龍に

すごい「唸り」と長い尾をつける。

相当の風の日に天高く揚げる兄の面影。

赤龍のあの雄姿、あの唸り、今もありありと。

後学年時の校長は佐々木吉三郎先生だ。

校長は月曜の朝、高学年、低学年交互に

全校生徒に対して半時間ほど

講堂修身なる講話を実施

内容はメモしてないが

わが心魂が感動したのは事実だ。

この校長は正に附属小学教育の柱であった。

小学卒業後七十余年も経ったある日

私は高師附属小学校を訪ねた。

若い校長さんに、私は斯く斯くの者で

今日は突然思い起ち

昔々の佐々木校長の御恩忘れがたく

何か先生の遺著あらんかと

お訪ねした旨を語ると

校長さんはある先生に

図書館への案内を命じた。

果せる哉、『教育研究』誌の

バックナンバーの中に

佐々木先生の論説が幾種も

連載されてあった。そのある部分を

コピーしていただいて辞去した。

わが小学在学当時、一学年上と下に

校長の令嬢淑子、徳子の二人が在学。

名簿により氏家徳子さんの家が

登校当時の途上近くに在るを知り

電話をかけた。彼女は驚き飲んだ

未だかつてこんなことを

言う人はなかった。

その後両嬢（老婆だが）を訪ねて

懐旧の談に花咲いた。

さて徳子氏に『青年と人生観』という

校長の遺著が唯一冊あったので

それを借りてきた。

この一冊の本に先生の本質が凝集している。

茲にこの希代の教育者の人生観

世界観を簡単に紹介しよう。

先生は大正十三年元日

伊豆の長岡に出向き

その大和館六畳間で一尺七寸四方の

チャブ台を机にしてこの本の原稿を書いた。

何の参考書もなく

多年の読書と体験に基づき

自由自在に書いた。

哲学的精神の先生は言う

「万人は哲学すべきである

権兵衛、太郎作、お鍋どんの果てまで

自分自身の人生観を以て生きるべし。

特に青年たちは人生のスタートを切る

前に、即ち二十代に人生観を堅持して

実社会に立ち出でよ」

先生は極めて積極的な心魂の人

万物は生く、鉱物に到るまで

*懐旧は昔をなつかしく
思うこと。懐古。

*希代は世にもまれなこ
と。

と物活論を説く。

先生はギリシヤ人の如き議論過多ではなく

ヘブライ人の如く

実践の裏付けを以てものを言う人。

先生は万有の差別相の奥に

万有帰一の相を洞察

多即一、一即多という

西田哲学と相通ずる哲理を告白

宗教哲学的性格が見られる。

これに因んで私見を述べれば

各民族各国家も

夫々天与の本質と使命がある。

何を好んで争うか

互いに特質を認識し尊重し

相助け相補つて

世界の多民族、多国家が

大交響樂の如く大調和を成すべし。

それが帰一せんためには

人間として超人間の絶対者に

―それを何と名称すとも―

平伏すたましひの在り方こそが^{だいかなめ}大要。

真の帰一はこれなくしては不可能だ。

平和をいかほど唱えても平和来たらず。

絶対者との縦の絆こそ平安なるぞ。

平安あつてこそ横の連なり、平和が成るぞ。

人類何ぞ愚かなる

「剣を交えよ^{くわさ}鉄鎌に」

かく叫んだ預言者イザヤが

天界で歎いているぞ。

核文明の元素ブルトニウムは人類をも

動植物をも害いつつある。

況んや核兵器全廃こそ急課題。

人間が神のみに平伏さざる限り

何をどう議論しようと虚空に消える。

大西郷の「敬天愛人」は世界的な真理だ。

リンカーンが喝破した如く

デモクラシーが

アンダー・ゴッド（神の下に）でない限り

人間は傲慢と慾と殺人の

親玉サタンの配下だ。

二十一世紀は一体どうなるのか。

さて物活論の校長先生は原子構造に於ても

愛の抱合、極微分子の舞踏

元素間の親和力といった表現を用いた。

「現象は他観なり、実体は自観なり

他観は物質にして

自観は生命なり心力なり

生命心力を併称して心霊という

万物は他観せば物質と見え

自観せば心霊と見ゆ。

心霊の現象が物質にして

物質の実体は心霊なり」

正に物心一如の妙諦を喝破した名言である。

「之を外観し、現象として

研究するを科学とし

之を内観し、実体として

研究するを哲学の本領とす」

と道破し、宇宙の大理法を直観し

且つ宇宙を目的論的に観じ

進化して歇まずとなしている。

この宇宙に生を享けたる人生の抱負を語る。

「吾人は、進化の大潮流に投ぜられたる

一小分子なり。此の潮流に

幾滴かの貢献をなし

以て社会進化の助勢をなし

造物主をして

余あるが為に益する所あつて

損する所なかりきといわしめよ。

これ吾人の最終の希望なり、目的なり。

吾人は、之を達して初めて

*妙諦||この上なくすぐれた道理。

*本領||本来の性質。特質。特色。

*道破||言い尽くすこと。言つてのけること。喝破。

*吾人||われわれ。

*余||われ。わたくし。

莞爾かんじとして瞑目めいしすべきなり」

先生の氣宇きうまことに雄大ゆうだいにして

人生じんせいに対する烈々れつれつたる氣魄きはく

嚴肅げんしゆくなる態度の片鱗なにし乃至本質ほんしつを茲こゝに見た。

先生はその後、文部省の重要ポストに就つき

昼夜しやを別たざる激務おつしやうに執掌しやくしやうして

流石さすが頑健がんけんな先生も身体を害し

壮年期に突如世を去つた。

量的に未完成なりし先生は

質的に完全性を以て目的を果した。

愚生ぐせいの如き小さな一小学生の魂に

不滅の印象を遺された

佐々木吉三郎校長先生！

先生のこの悲願ひがんに

なお残れる生涯を以て応えまつらん。

茲に於て胎児、乳児の原始期から

幼児期、学童時代の育児教育は

如何いかにあるべきかに

深く想いを致さんと欲おもう。

この四期は人間形成の第一段階

その責任と栄光の大半は母親にある。

母親が源泉であるから、源泉そのものの

心身の在り方が先ず問題。

女性の本質は愛、愛の源泉は何処いずこに！

新約聖書のキリストは愛の体现者。

釈迦しやくかの仏道ぶつどうの極意ごくいも慈悲じひである。

この二大宗教の与えんとするものは慈愛じあい。

人間の魂の本質は宗教的である。

然るに現代人はその本質を自覚していない。

二十一世紀はどうなるかの火急かきゆうの問題は

現代人よ神に帰れ、である。

第二の国民、民族の産みの親たるべき女性

母親の責任と栄光を果さんためには

何としても偉大なこの二宗教の

*莞爾かんじにつこり笑うさま。

*瞑目めいし＝目を閉じること。

*氣宇きう＝心の広さ。心意氣。

*執掌しやくしやう＝せわしく働くこと。「執」は背負う。「掌」は手にもつ。

*愚生ぐせい＝自分をけんそんして言う語

叫ばざるを得ない。

しかも私は自分の体験からは

新約聖書のキリストに來よと

告白せざるを得ない。そこは

愛の生命いのちがあふれている源泉だ。

この愛にはまことの光と力がある。

若き新婚の女性よ

新約聖書の福音書を繙ひもといて

キリストの愛の言動の中に

胎児の如く抱かれよ

その体感が直ちに貴女あなたの胎児に伝わる。

胎教これに如くものなしである。

胎児を抱く母親は一般に言われる如く

美しき画えを見、美しき音楽を聴き

美しき自然に接し、美しき童話うたわを読む。

更には心魂に愛の情、善の意志を起こし

よろこばしき知識を与えるものを

体受する等すべて胎教に不可欠の糧である。

伝記をよむと偉大な人物の母親はなべて

心魂に宗教的な深みある愛の女性。

第二は乳児期だが、かくの如き愛の母が

乳児を抱き乳房に顔を寄せて吸わせ

生命の乳と柔肌やわはだを体感させるが大切。

さて第三の幼児期を迎えたならば

保育園の保母さんは、同じく愛の心と

楽しい歌心ですべてをなすのみ。

園児の生れながらの自由の心に

保母さんを通して何か天的な光と愛が

沁み込んで来ることが極めて望ましい。

幼稚園では兄弟姉妹のような

友だち意識が芽生めはえ来て

団体で楽しく歌を歌いつつ

お手々をつないで跳び回る。

男も女もごっちゃごちゃ

これがこの世のパラダイス。

それに幼稚園の女の先生が

昔がたりの民話を語り

更には聖書のおはなしや

イソップやグリムやアンデルセンを

聴かせることが極めて大切。

これらのことを母親と心を合わせて

いとなむときは

幼児の心に天的な幸をもたらず。

かくて第四期学童時代に入りゆく。

さて小学校は昔も今も六年間

胎児、乳児、幼年時代が

パラディーン（楽園）ならば

学童時代はプルガトリオ（煉獄）の初期か。

私自身の小学時代は既に瞥見したが

現下日本の所謂民主主義下の

小学校教育は概して寒心に耐えぬ。

何ゆえか、それは何も学校教育に限らず

日本の民主主義が

「神の下」でないからだ！

アメリカの名大統領リンカーンは

かの南北戦争で

Gettysburg の決定的勝利の際に

有名な三分間演説をしたが、その終句は

"..... this nation, under God, shall

have a new birth of freedom, a new

government of the people, by the people,

for the people, shall not perish from the

earth." November 19, 1863

「この国民は、神の下に於て

自由の新生を得、民衆の、民衆による、

民衆のための新政治は

地上から滅び去るべからず」

彼は「神の下に於て」と明言している。

リンカーンのデモクラシーは

民主主義の上に神があることを

見そこなっているのが日本の民主主義

* 瞥見しちらと見ること。
* 寒心しぞつとすること。
* 恐ろしいと思ふこと。

* リンカーン =

Abraham Lincoln

一八〇九〜六五。アメリカの政治家。第十六代大統領。開拓農民の子として生まれる。弁護士から政界に入り、共和党結成とともに大統領に当選。南北戦争により国内を統一し、奴隷解放に成功。一八六四年大統領に再選されたが、翌年暗殺。

これでは決して

健全な民主主義ではあり得ない。

十九世紀の三大政治家、米のリンカーン、英のグラッドストーン、独のビスマルクは、いずれも敬神の念深く

聖書を身読してやまざる政治家。

況んや教育者は高次な宗教心を有たずして、
どうして本当の教育ができるか

日本の教育が、公私立校いずれにせよ

教育者自身が道徳心の上に

宗教心なくしては

児童にたましひの教育不可能なこと

火を見るより明らかである。

陽光を遮る木蔭の下

草花はまことにあわれだ。

その如く神の光を身受していない教育者は
小学生の魂を育て得ない。

高慢な自己中心な児童をつくつて何になる。

寒心に耐えぬといったのはそのことだ。

およそいかなる主義にも限界がある。

超主義の世界即ち宗教的絶対界の

靈氣をたましひが呼吸していないと

心魂が枯れてゆく。

二十世紀は人間の心魂が枯れて来たので

文化文明が奇形的になつて来た。

先生や親をなぐつたりするあさましさ！

マルクス主義の大欠陥が

心の世界の枯死に気がついて

ゴルバチョフはペレストロイカをした。

それでおのずから東西ドイツの

鉄のカーテンが崩れ落ちた。

その後、共產主義のソ連が瓦解し

神の下

の民主的新ロシアに復活し

変貌した歴史的大変革

よつてアメリカは新ロシアと
堅い握手を交わした。

* グラッドストーン II
William Ewart Gladstone

一八〇九—一八九八。イギリスの政治家。自由党党首として四回組閣。平和外交と自由主義経済政策を推進。保守党のデイズレーリと対抗し、典型的な二大政党による議会政治を遂行。アイルランド自治問題の解決にも尽力した。

* ビスマルク II
Otto von Bismarck

一八一五—一八九八。ドイツの政治家。ユンカー出身。プロイセン首相として小ドイツ主義を主唱。普墺戦争・普仏戦争に勝つてドイツを統一。一八七一年ドイツ帝国成立とともに宰相に就任。フランスの孤立を図る同盟外交を推進。鉄血宰相。

* 瓦解 II 崩壊。
* ペレストロイカ II 再編・改革・世直し

の意。ソ連のゴルバチョフ政権がある内外政策の基本路線。国内的には民主化・自由化、外交的には緊張緩和を基調とする。

日本は平和平和と叫ぶ。

そうではない。

神と魂の垂直関係が立ち

平安が魂の質となるところに

人間関係の本当の平和がくる。

縦の柱なしに家ができるか

横板を組んでも風で吹き飛ぶ。

何をか言わん

各教員が宗教心をもてば

大いに夫々の教員^{それぞれ}の特色を發揮して

生徒を指導し、いかに学ばんか

いかに考えんか、いかに創造せんか

を指示すべし。

真理に即^{そく}せる權威を以て教えると

それに従つて真の自由を生徒は得る。

全体主義的な特色なき教育は

生徒の心魂をも頭脳をも眠らせてしまう。

学校の中心は校長

校長こそは靈的人格たることを要す。

私がそのような佐々木吉三郎校長に

出会つたことは深い感謝である。

以上が小学校教育の根幹である。

一九一六年の春、高師附属中学入学

この附属も固有名詞の如く通用。

小学校第五、六年は正直勉強

それはしかし所謂受験勉強に非ず

入試第一日は国、数、習字。習字課題は

「りんきおうへん」を漢字で書け

当時は略字なく、「臨機應變」。

数学四問中一問失敗、夕刻の発表を

見に行く気なけれど、恐る懼るでかける。

禿頭の小使さんが梯子に乗つて校舎壁に

大巻紙を繰り展げつつ貼る。

受験番号60がちらつと裏から見えた！

あの瞬間は生涯忘れられぬ。

失敗の数学一問の正解者四人のみの由。

第一日に落とされた受験生は

一八〇名の半数、第二日は英語の試験

英文和訳、和文英訳、書きとり、朗読

きびしい試験だ。友人曰く

「小池君は大丈夫だよ」

長兄政美のおかげで英語の自信はあった。

合格者は三〇名のみ、中学一学年は六〇名

他の三〇名は附属小学第一部から

無試験入学。一学年二クラス六〇名

全校五学年で三〇〇名。

先生たちは優秀だった、楽しく学んだ。

英語には生粋のロンドン子、スキート先生

マクミラン・リーダーによる

充実した内容のものだった。

中学時代に私の心の糧となったのは

英詩と漢詩。例えば次の如きもの。

Longfellow : A Psalm of Life, Rainy Day,

Village Blacksmith, Exelsior.

Tennyson : The Charge of the Light Brigade,

Crossing the Bar, out of "In Memoriam".

Wordsworth : Rainbow, We are Seven.

Whitier : The Mayflowers

詩ではなく小説では

Washington Irving : Sketch Book.

Dien Fallar : The Three Homes,

Conan Doyle : Adventures of Shalock

Holmes.

茲に二つの詩の和訳をかか

當時を偲ばんと欲う。

ロングフェローの「人生の絃歌」一、二、九節

一 言う勿れ悲しき調べに

人生は槿花一朝の夢と。

魂魄まどろみて死に似たるとも

* Henry Wadsworth

Longfellow = ロングフェ

ロウ。一八〇七—一八二

アメリカの詩人。伝統的

で平明な物語詩や詩劇を

書き、広く愛読された。

* Alfred Tennyson = テニ

スン。一八〇九—九二。

イギリス、ビクトリア朝

の代表的詩人。広い題材

を美しい韻律で歌いあげ

た。

* William Wordsworth =

ワーズワース。一七七〇

—一八五〇。イギリスの

詩人。コールリッジとと

もに「叙情民謡集」を著

し、ロマン主義の詩を確

立。自然との共感のもと

に書かれた優しい叙情詩

や瞑想的な詩編が多い。

* Washington Irving =

シントン・アービング。

一七八三—一八五九。ア

メリカの作家。「アメリ

カ文学の父」「短編小説

の創始者」といわれる。

最高傑作は「スケッチ・

ブック」。

見ゆるところは真相に非ざれば。

二 人生は真実なり、人生は厳肅なり。

瑩穴いかで終結ならんや。

塵より出でて塵に還る

そは靈魂の謂にはあらず。

九 いざ我ら起ちて為さむ

万難に耐うる心根をもて。

愈々達しては愈々追求め

働くを学び、待つを学ばん。

ワーズワースの「虹」

わが胸は欣び躍る

大空に虹をし見れば。

人生の曙に然かりき

成人の今も然かあり

老年の暮にも然かあれ。

然らずばわれ死なまほし！

幼兒は成人の父ぞ。

魂極る生涯の日々を

結びてよ生来の虚心。

漢詩では、藤田東湖の「天地正大の氣」

杜甫の「春望」その他

頼山陽の「鞭声肅肅」

乃木希典の「山川草木」、「王師百万」

白居易の「長恨歌」

詩的散文では蘇東坡の「赤壁賦」

論語や孟子や老子等の名句

中学時代のテキスト今は影もなし。

勿論これらの原書はあるが。

要するに詩が好きなのだ。

私は詩魂の人間だ。

中学時代の運動は一年から五年まで

* John Greenleaf Whittier

II ホイツチイア。一八〇七〜九二。アメリカの農民詩人。

* Arthur Conan Doyle II コナン・ドイル。一八五九〜一九三〇。イギリスの小説家。名探偵シャーロック・ホームズが活躍する一連の探偵小説で、本格的推理小説の伝統を確立した。

* 梅花 II ムクゲの花。朝開いて晩にしほむ。はかないことのため。

* 瑩穴 II 墓所。

* 藤田東湖 II 一八〇六〜五五。幕末の儒者。水戸藩士。徳川斉昭（なりあき）を擁立し藩政改革を推進。尊攘派指導者として活躍。安政の大地震で圧死。

* 杜甫 II 七一〜七七〇。中国、盛唐の詩人。李白（りはく）とともに「李杜」と並称され、「詩聖」といわれる中国最高の詩人。放浪のうちに貧窮の生涯を送った。

夏は房州富浦で先輩たちの指導によつて

水泳（水府流）を修得した。

頑強な身体で、私はスポンジ・ボールで

ピッチャーかショートをやつた。

隅田川ではボートを漕いだ。

フォアにもエイトにも

漕者のメンバーに入った。

和船も漕いだ。要するに水泳、野球

ボートが私のスポーツ。

さてこれより先、第一次世界大戦勃発

一九一四年の夏

私が小学三年生のときだった。

新聞に連合国元首とドイツのカイゼルの

写真が大きく載っていた。

タンネンベルクの戦に於ける

ヒンデンブルク將軍の名作戦のこと

ツエッペリン飛行船のロンドン空襲のこと

ドイツ潜水艦の変現出沒のこと等

少年の心をゆり動かししたが

ドイツは終に一九一八年に敗戦を喫した。

時に私は中学三年生。

正にこの戦中、日本の演劇界に

彗星の如く現われた大女優があつた。

松井須磨子その人で、トルストイの

「復活」の一場面カチューシャの

離別の前後を背景として

カチューシャに扮した須磨子が

劇中で歌つた

「カチューシャ可愛や別れのつらさ」

の名歌名曲が日本全土を

風靡すること三、四年

私は今でもなつかしく、時折口吟む。

かくてわが中学時代は、小石川同心町の

門もない、いきなり格子扉の

*頼山陽〓一七八〇—一八三〇。江戸後期の儒者・歴史家。安芸国の人。尊攘派の志士の精神的支柱として大きな影響を与えた。

*乃木希典〓一八四九—一九二二。明治時代の軍人。陸軍大将。長州藩出身。日露戦争で第三軍司令官として旅順攻囲戦を指揮。のち学習院長。明治天皇の大葬の日、妻の静子とともに殉死。

*白居易〓七七二—八四六。中国、中唐の詩人。李白・杜甫・韓愈（かんゆ）と「李杜韓白」と称される。

*蘇東坡〓蘇軾（そしよ）の別名。一〇三六—一一〇一。中国、北宋の文学者。宋代第一の詩人。詞（詩余）も書も一流の古今まれにみる天才。
*房州〓安房（あわ）国。現在の千葉県南部。
*風靡〓なびき従わせること。

借家の二階の室に長兄政美と

机を並べて五年間暮したのだが

この五年間が私にとつては

人間形成のなつかしい樂園で

何年経つても忘れられない印象だ。

それは長兄政美の生きざまが

あまりにも印象深く遺っているからだ。

一高後半と東大三年を彼はすごした。

書架には英文の詩書

小説類と法政の専門書

内村鑑三の著書と「聖書之研究」誌等。

机の右に部厚な旧新約聖書

これを半年で創世記から黙示録まで読破

それを繰り返していた。

夜の九時には必ず廊下の欄干に

両手を置いて祈っていた。

私には宗教のことは何も語らない

尚早しやうそうと思うてだろう。

ただその在り方が無言の伝道。

性格は明朗快活、智は拔群

情は深く意志強固

どうみても私より数段上だ。

読書力は例えばあの大作

「レ・ミゼラブル」の英訳を毎晩読んで

一週間で読破するほどの実力

一高文科の同期生間で小池は英語の代名詞。

運動は水泳、野球、ボート

和船の棹さおさし、何でもござれ。

東大二年の前期で三学年間の内容を修め

行李こうりにぎつしり本とノートをつめこんで

夏休暇中、戸隠とがくしの民家で準備をなして

秋、高等文官試験にトップ級でパス

民法九十八点で鳩山試験官が驚嘆した由。

一緒に銭湯で入浴したあと、ある地点から

「辰さん、ランニングだ！」

と言って、ランニングで帰宅の

*東大Ⅱ当時は帝大（東京帝国大学）。

*「レ・ミゼラブル」ユゴーの小説。一八六二年刊。『暗黒情』の邦訳名で知られる。主人公ジャンバルジャンの運命を描き、社会悪を告発する。

バカげたこともした。

彼は大学卒直ちに大蔵省に採用

その秋ロンドン大使館への内定あり。

ところがサタンの横槍で北京公使館へ急転

晩秋彼を東京駅プラットホームに見送る。

昇降口に立っていた彼の姿は今も眼にある。

これがこの世の生きわかれになったとは！

私は翌大正十年春中学を卒業。

受験勉強手おくれで水戸高校入試失敗

直ちに神田の日土講習会通いで涵養かんよう

藤森良蔵の代数幾何、坂本哲三の国語漢文

いずれも教え方ヴェテラン

学び方考え方の名講

所謂受験のためでなく

実力涵養に大いに益あり

英語は既に自信あり。

その夏、北京同仁病院から電報

母と次兄龍二が急遽北京への旅。

朝鮮半島縦断、南満州横断

山海関を越え天津から北京へ

長兄政美悪性チフスのため高熱

しかしキリストの愛は更に熱く

終に白衣のキリストが現われ給う。

「キリストがお迎えに来られましたので

お母さん、お先に失礼いたします。

おゆるし下さい」

これは今生最後の言。

眠るが如く九月二十二日終に召天。

地上の生涯二十六年一ヶ月、噫！

上司公森太郎氏の弔辞の一節に曰く

「君天資穎敏頭脳明晰……」

其ノ研鑽ノ蹟ヲ見ルニ其ノ方法

理路整然トシテ一糸乱レズ……

支那財界ノ諸問題モ之ヲ組上ニ陳ベテ

利刀ヲ以テ料理スルノ慨アリキ

加フルニ君ハ非凡ノ英文読書ノ

*穎敏＝悟りがはよい。
すぐれて賢い。
*組上＝まないたの上。

能力ヲ備へ赴任以來欧米人ノ手ニ成レル

支那ニ関スル名著數十冊ヲ読破シ

碌々タル儕輩数年ノ造詣ヲ一年ナラズシ

テ贏チ得タルノ想アラシメタリ……」

メイフラワーに乗つて

再び帰國を想わなかつた

清教徒夫妻の如き悲願が

彼は遂げられなかつたので

彼は銀製の十字架を秘かに携へていた。

それには「一九一九 秋」と

英語で浮き刻りが施されてある。

ロンドン赴任を曲げられた官界に

愛想をつかし方向転換

伝道の地図すら既に準備していた。

即ち生涯独身で貫き

ハドソン・テラーの如く

中国伝道に献身せんと地図を準備していた。

荼毘に付し遺骨を携えて

母と次兄龍二は船路黄海を渡つた。

その船上で母は多年の過労と

政美の急死の悲嘆のために

噫、失明の憂き目に遭うとは！

失明の母が、遺骨を抱える次兄に

手をひかれて東京駅頭に降り立つた。

これを迎えた私の全身は涙か火か。

母は井上眼科病院に直行。

緑内障はその頃の医術では

ほどこしやうがなかつたらしい。

眠られぬ夜に襲われた。

やがて、同心町の家を去り

西大久保の武田叔父叔母の

世話になる身と相成つた。

受験勉強に更に全身をうちこんだ。

一高受験の自信が着いていた。

明けて二二年春のこと

*碌々||平凡で、役にた
たないさま。

*儕輩||仲間。同僚。

*造詣||学識。

*贏つ||勝ちあふれる。

勝利を得る。

一高受験票を手にしたが

「叔父の世話の受身で

落ちもせば申しわけなし」

と、母の諫止にやむを得ず

水高受験に切り替えた。

その諫止には蔭の理由があったので

母も私も涙を呑んだ。

柏葉徽章の白線帽子を断念したる

わが胸中には火が燃えていた！

水高文乙にトップ級で合格

一高に入れた筈よ。

白線とは布の白線二本が

丸帽に巻いてあるから。

兄の墓前で

「一高を受けそこねました」

と涙の報告。残念無念、遺恨百年

憧憬の一高を逸したことは。

今にして思う、自信があったのだから

何故押し通さなかったか。

嬉しからざる水高入学、それかあらぬか

その初夏に腸カタルに襲われて

水戸の常盤病院生活一ヶ月

生死の瀬戸際をさ迷うた頃

吉原知子叔母看護に来院

懇ろに重湯お粥を手造り給う。

おかげで癒り帰京はしたが、骨皮筋衛門。

百米も歩けぬ惨めな体力、遂に休学。

秋も更けたるある日

読書せんとて兄の書架から

内村鑑三著『宗教と現世』なる書を

〈Tolle, lege〉（採りて読め！）

と促される如く、採り出して

読むや直ちにわが魂は捕えられた。

政美の引いたサイド・ラインの個所は

とりわけ感謝感激を以て、全巻読破。

月刊誌『聖書之研究』も繙き始め

新約聖書に初めて喰^くいついた。

明けて二三年の春を迎え

体力も増して来たので

内村先生の日曜集会を聴きに行こう

そう決意して大手町の日本衛生会館講堂へ。

「幸福^{さいわい}なるかな心の貧^いしき者

天国はその人の有^あなり」

「幸福なるかな柔和なる者

その人は地を嗣^つが^る」

幟^{のぼり}の如き垂紙に二行の墨書

原稿紙を手にながら、力ある聖書の講義。

直ちに心が打たれ感涙に咽^{ひそ}んだ。

讚美歌「わが魂を愛するイエスよ」

数百名の男女の合唱

何かしら、新しき心境となった。

一高に入らず、身体は病弱。

このマイナスの二乗の中で

私は藁^{わら}をつかんだのではなく

キリストにしがみつくことと相成った。

一高生だったら、亡き兄の如く

内村先生のこの大集會に毎日曜

参じたに相違ない、噫^{あゝ}！

政美は日曜の午後、独りで

校外を散歩していた。

五万分の一の地図に歩みし跡が

赤い線で遺されていたのを

今だになつかしく想い出す。

ともあれ、福音の世界に

このようにして踏み入ったことは

わが生涯の一大転機^{てんき}！

同心町時代の政美の生きざまが

福音への預言的道しるべ。

兄の北京での召天が

死を以てした決定的道案内。

二三年四月一日は復活節

そのとき「美^うわしの白百合^{しらゆり}」の讚美歌を

* 「幸福なるかな心の貧^いしき者」 Ⅱ新約聖書マタイ伝5・3。

* 「幸福なるかな柔和なる者」 Ⅱ新約聖書マタイ伝5・4。

内村先生は女性だけに合唱させた。
聴き惚れたあの時の気持も甦る。

水高第一年をダブル

創立第四期生となった。

水高寮生活にわかれを告げて

高師附属中学同窓の若干名の桐寮に入る。

林不二雄、平山嵩、芳賀檀、近藤駿四郎

従兄の青木四郎等と同居した。

特色ある人物揃いでいつまでも心に遺る。

私だけが病弱でなきなき存在。

ある放課後、柔道場を会場にして

ルター研究の権威佐藤繁彦先生の講演

先生の真正面最前列で聴講した。

感激して、不日ルター聖書を買いにゆく。

水戸の一番大きな本屋の書架の上段に

黒光りの立派な本が目についた。

あな嬉し、それが正しくルター聖書

早速買って、扉に日付を書いた

一三三年十一月十日と。

あとになって正にこの日が

ルターの誕生の月日と知って

冥合の奇しさに感謝の合掌。

その翌年、同じ本屋で

中山昌樹著「詩聖ダンテ」を買った。

年月日を記すのは私の習慣

二四年九月十三日。

この本も感謝して読み

ダンテに強く心を惹かれた。

しかもまたこの日がダンテ帰天の月日とは。

私はどうもそういう靈しき星の下の人間だ。

単なる偶然でない、天の配剤だ。

水高のドイツ語の教授陣は一流の学者揃い

小牧、相良、吹田、実吉の諸教授と

日本学の大家グンデルト博士も在職。

法学士政美は英語、軍人龍二は仏語

私はドイツ語、ふしぎな廻り合わせ

*不日＝日ならず。やがて。

*冥合＝冥々のうちに、知らないうちに合致すること。また、直接目に見えない奥深いところで合致すること。ただし、偶然の合致ではなく、そこに何らかの神仏の意志などの働きが予想される場合に用いられる。

*配剤＝適切に取り合わせるること。

独文の道に使命を感じた。

ゲーテの「ウエルテル」

ヒルティの「幸福論」

ハイネの「詩集」

グリルパルツェルの「辻音楽師」

アンデルセンの「絵のない絵本」等が

ドイツ語授業の主なテキストであった。

ゲーテとヒルティに心を惹かれ

ヒルティの「眠られぬ夜のために」の

上下二巻の原本を福本書院に注文

これが何と九円

一ヶ月の小遣錢が殆ど^{ほとんど}尽きた。

上巻を読み込んだ。後日遂に翻訳する。

下巻も別な特色あり、これは友人が訳した。

ヒルティの「幸福論」の原書もかじった。

これはドイツ語の実力涵養にも役立った。

病弱のため、どの学年も

期末試験のどれかを受けず

見込点で及第の綱渡り。

まことに惨憺^{さんたん}たる水高時代！

薬に捕われていることに気づき

卒業するや

すっかり薬を投げ棄てて帰京した。

さわれ、水高時代に終生^{しゅうせい}忘れられぬ

一つの想い出がある。

しかも単なる想い出ではない。

それを茲^{ここ}に記さざるを得ない。

虹

赤倉^{あかぐら}の夏！ というとも

誰にわかるうや。

そのようにどの人にも

その人でなければ通じない

なつかしい想い出があるものだ。

とかく病弱だった水高時代

母の教え娘^こが嫁^{よめ}いださきの

高師附属中学の大先輩藤力さんが

一夏私を赤倉高原で

保養させてくださった。

あの底ぬけの親心は

わが胸中に生きている。

暑い暑い夏の東京から

赤倉高原に登りついたその日から

俄然食欲が盛りあがった。

ある午さがり、雷雨一過のあと

陽が背後の妙高山に傾きかけた頃

東のかた野尻湖の上空に

鮮やかに大半円を描いて

大虹霓が現われた！

漢語では虹は雄の龍、霓は雌の龍

正に優しき霓が上に逞しき虹が下に

淡濃二重の天弓が現じた。

紫、藍、青、緑、黄、橙、赤の主虹の壮美

その配色をさかしまにした徒霓の妙麗。

感歎、魅了、飽かず眺めること小一時間！

こんな虹はわが生涯にまたとあらうか。

「われは始めなり終りなり」＊

の主の徴なりしかと今にして想う。

超絶の天空を走る陽光は無色の白光

み空に満つる水滴もまた無色透明の玉

無色の玉を貫いて反射する

無色の光が七彩に変現する。

七彩に宿る無限の光彩。

過ぎゆく美にこもる永遠の美。

妙なるかな霊しきかな

天地に架する天弓のすがたよ。

虹をし見れば虹となるわが身かな

キリストに祈り入る我れに我無く

キリストのなかに私の生きる如。

無即無限無量！ 現象即本体！

須臾にして消えゆく不滅の相

霊的福音の真理の象徴

＊虹霓＝虹。

＊「われは始めなり終りなり」＝新約聖書ヨハネ黙示録1・8。

＊須臾＝しばらく。わずかな間。

一切の概念、イデオロギーを超絶するもの
さればこそ一切の概念、一切の現実

一切のイズム、イデオロギーを包摂する
それがキリストだ！

いらくさの谷を涙ながらに渉り
こごしき山路を喘ぎつつよじ登った人は

高峰の花園に歓呼の声を放つ。

艱難を突破した勝利の人生。

雷雨天涙のあとに懸かるは虹霓。

ノアの洪水のあとの契約の虹。

雷雨の最後の審判のあとで

靈虹の終末の大希望が成就する。

一九二三年九月一日の正午に何が来た

関東が大地震に襲われた。

私は母の手をひき

よろめきながら戸外に逃げた。

余震のためにしばし莫塵の上

やがて大東京が火の海に化する。

あな恐ろしや

親戚青木医院も武田邸宅も全焼とは。

神の摂理は此の如きか。

借家住まいのわが家が遺る。

畏るべきかな神の命運。

陸軍士官学校の存在のゆえに

火はのほり来らず加賀町は焼けない。

二四、五年にかけ

従兄青木三弦氏宅に寄寓し

腎臓結石の際は助けられた。

二五年の晩秋、次兄龍二が

武蔵野村吉祥寺に新居を構え、共に移った。

夕靄が垂れると墨絵のような夕景色

縁側から居ながらにして富士を遠望

コスモスの花が小庭辺に咲きみだれ

地主の桑畠がひろがっている。

感謝の念と想い出をふくみ

井の頭の池畔^{ちばん}を散歩した。

二六年の春

惨憺^{さんたん}たりし水高四年の生活をあとにして

東大ドイツ文学科に入學。

東大入試準備の余裕あらなく

ぶっつけ本番の体当り受験。

志願は何か、ドイツ文学科

受験科目は独文和訳、和文独訳

国語は万葉仮名の万葉解釈

漢文は白文^{はくぶん}に符号をつけて解釈

二六年春に角帽大学生。

三月七日、珍しく雪の聖日、駒沢新町なる

藤井武先生の自宅集會に参加した。

『聖書の結婚観』なる著書^{なまわ}を賜る。

先生は愛妻喬子夫人^{のぶ}を数年前に

天界に見送って、五人の遺児との暮らし。

お女中と隣家の小学校の先生がお手つだい。

私はこの聖日以来、三〇年七月十四日

先生の召天時まで無欠席で参會。

先生の講義は先生の生活から

滲み出る言語的再現。

聖書の研究、思索、体験を通し

聖書の真理と渾然^{こんぜん}融合した心境の告白。

藤井武の月刊誌『旧約と新約』は

所謂聖書註解とは異なり

聖書学の推移に拘わりなく

聖書の永遠性を息吹き居る

人間藤井、一キリスト者の告白文学である。

桜新町参會五星霜^{せいそう}を貫いて

心底に根づいたものは

「信賴」の一語であつた。

「江戸っ子に宵越しの金はない」

先生はその気合の神信賴

貯金を思わぬその日暮らし

執筆、著作の神与の財で

*池畔＝池のほとり。

*白文＝送り仮名、返り点などの付いていない漢文。

*星霜＝年月。歲月。

五人の子女を育て貫いた。

先生の仆れたときに

財布の中は空気のみ

借金も貯金も無いあざやかさ。

徹底したこんな神信頼を

身証したのが藤井武。

百千の聖書説教も

この実存の前に黙さざるを得じ。

先生の夕の野べの散歩の相には

天界の夫人の影が映っている

あるとき天使が私に囁いた。

わが眼から雫が降ちた

同じ野べを私が散歩したときに。

見舞るかす丹沢の山波の上に

真白き靈峯富士を仰ぎ

此処武蔵野の丘の上

二本松の並び立つ陰に坐して

深き祈りを祈りしわが師を想った。

寂しさの極みを味わい

五人の子らを愛し

我らを親しく導きし師であつた。

小さき群を愛せし人の

そのなつかしき忘れな草の

葉の片影をうつし出ださん。

ある秋のうらかなる一日

師に伴いて数なき我ら

三浦半島を歩き暮した。

一包みの弁当箱をステッキに

結びつけてやおら肩にかき

おのれも必ず荷を負うべしと

弟子らに一步も譲らざる心

眼眸を遠く海と空とに

指し向けて悠々と歩む姿

今もなおわがまなかにある。

陽は發^{あいた}燦^たたる雲にかくれて
我らの歩みは未だ尽きない。

往き尽きて半島の端に

到りしわれらを月は迎えた。

やがて三崎の岩頭に立つ。

名にし負う城ヶ島^{じょうがしま}なる灯台の

灯火の明滅は夢か現か。

空ゆく雲は月華^{げつか}に映えて

白鳥の飛び渡るにも似たるかな。

時しも懸^かれる天心^{しん}の星座^{しんぐす}

白鳥と奇しき冥^{めい}合^{ごう}。

やがてわれらの喉^{のど}の渴きを

癒^いさんと武蔵野の牧人^{まきじん}は

大いなる美果^{みくち}をとり出し給う。

これ、さきに途^{みち}にて購^{あが}求^ないし品^し

師の愛こもる有^{あり}の果^みの味

ネクターも此の如きか。

夕空に突如流れ渡る声

師の心腸^{しんちやう}より湧きたつ讃歌

「清き岸^{かみ}辺^みにやがて着きて

天^{あま}つ聖^み国^{こく}についに昇らん……

やがて会いなん愛^めでにし者と……」

天界を慕う先生の

声に^{こた}えて我らも歌い

うたい終りていくばくもなく

小さき群のため祈り給う。

岸^{かみ}辺^みの祈りは胸底^{むなぞこ}に沁^しむ！

三崎の波よ、潮風^{かぜ}よ忘るな！

我ら生きて祈りに応えん。

真鶴^{まづる}、蓮光寺、溝^{みぞ}の口

三度^{みたひ}の散歩の想い出は

いずれ深からざるものやある。

聖日の午前集會は

我ら三、四の学生が

交互に司會を承った。

講義の前に聖句の暗誦^{あんじゆ}

隨意の箇所を各自撰^{えら}んで。

不得手^{ふえて}の私は私句交りの聖句。

二七年初は預言書の講義

歴史的な順に預言書を大觀した

名講義に魂は満たされた。

聖日の午後は逐年^{ちくねん}、ミルトン、ダンテ

カントを原文または訳文で

然るべく読み且つ味わった。

更には旧約のヘブライ語

新約のコイナーギリシヤ語を

学んで帰路は街の灯^ひよ。

さて東大ドイツ文学科では

わが心魂にいかなる視野^{ひやう}が拓^{ひら}けてきたか。

ゲーテ研究の権威木村謹治教授の

「若きゲーテ」なる名講を初めて聴いた瞬間

春風駘^{たい}蕩^{とう}たる原野^{やうぎ}がわが眼前に

突然繰り上げられてゆく想いであつた。

木村教授はゲーテの心境環境に

おのれを置いてその現実から

告白する如き態勢を以て講ずる

単に客観的な研究、説明ではない。

そんなことでゲーテが把めるものではない。

さて私は言おう。

所謂道学者^{どうがくしゃ}、一般のキリスト者は

ゲーテの恋愛の事態^{つまず}に躓^{つまず}いている。

そんな眼でゲーテの偉大さが見えるか。

無相の相なる神の相^{すがた}に即して創造^{つくり}られた

人間であるとの根源意識を

ゲーテは有^もつていた。

だから愛は神からのもの

恋愛も夫婦愛も、親子愛も、師弟愛も

兄弟愛も友愛も、犠牲愛も

自然界動植物への愛も、動物の親子愛も

いかなる愛も本来神からのもの

* 逐年 〓 年をおつて。

* 駘蕩 〓 春のけしきの、
のどかなさま。

* 道学者 〓 道学先生。道
徳のことはかりやかまし
くて、世事にくらしい学者
を皮肉つて言う語。

これがゲーテの愛観であつたに相違ない。
ゲーテはそれゆえ

アガペー、フィロス、エロースなどと
神学者の如き愛の区分を

次元低きものとする。換言すれば

謂わばカントの先驗哲学の如く

ゲーテの愛も先驗的^{ゼンケンティック}に彼自身

神の愛を根源的に体感していた。

そのことの美しい告白を知りたい人は

先ず『ウエルテル』の

五月十日のくだりを読むが好い。

『ウエルテル』たる彼は原野に身を投じて

そこに我々をそのみ姿に即して

創造り給うた全能者の現在を体感し

一切を愛する者の息吹を感じている。

また自然の中に恋人の姿を観じ

またおのが魂を神の鏡と内観し

神の中に投身している。

神、大自然、女性、我というものが
神の愛と光と生命に貫かれている。

そういうヨハネ福音書的なのが

ゲーテの内なる本質であつた。

ゲーテの母が正に

そのような本質の女性であつた。

実にゲーテは生涯、聖書を身読し

その文学作品に於て

自由に活用、変用している。

観念的、教条的な読み方では断じてなく

聖書の中の民族的制約を乗り越えて

真に神的なるもの、真に人間的なるものを

確かと捉え、そこに生きまた生きたとした。

彼は、アレオパゴスに於ける

パウロの引用句

「我らは神の中に

生き動きたる在るなり」*

を特愛の聖句としていたことは瞭かである。

*先驗的ニ哲学で認識能力や判断力などが経験に先立ち、先天的に備わっているさま。アブリオリ。

*『ウエルテル』ニゲーテ著『若きウエルテルの悩み』

*「我らは神の中に生き動きたる在るなり」ニ新約聖書使徒行伝17・28。

勿論、情熱豊かなゲートに

躓^{つまず}きはあろうと、磁鉄^{じてつ}の如く

彼は神極を指して生涯を生きた。

彼は成りゆく魂であつた。

成りしものは殻を破つて

新生せぬ限り死と見なした。

無限なるもの永遠なるものを

追求してやまぬ魂であつた。

分析、総合、定義づけでなく

本質、焦点を直視し

全的にものを捉え

全的に生きてゆく気魄に

生命の世界ありとなした。

例えばメフィスト・フェレスをして

次の如く言わしめている。

「これまであなたは仰山らしく

神はどうだ、世界や

その中に動いてゐる物はどうか

人間やその心の中で

考へてゐることはどうだと

定義をお下しになる。

しかもしゃあしゃあとして

大胆にお下しになる。

好く胸に手を置いて

考へて御覧なさいよ。正直のところ

そんな事をシュエルトラインといふ

男の死んだ事より

確かに知つてお出^{いで}になつたのですか」

『ファウスト』三〇四三―四九、鷗外訳

「定義づけ」はゲートにとつて

笑止^{しょうし}の沙汰^{さた}だ。

聖書の解釈づけも彼は御免だ。

信条的^{しんじょうてき}神学も条文的^{じょうてき}法学も

魂^ひを干涸^{ひか}らびさせる。

ゲートは観察、研究はしても

ものやことの本质を内観、共感、体感する。

ものやことを全的に把握はあくせんとする。
 ゲーテの認識はそういう性さがのものだ。
 全的、生命的、活物的把握、認識は
 完全性ではなく

無限無量性を底に有もっている。

ゲーテは正に宇宙的人物である。

瞬間に於て永遠を生きていた人間だ。

ドイツ的にして超ドイツ的世界人だ。

私が大学時代にどれほどゲーテを

把んだかは別問題だが、ゲーテに驚いた。

ゲーテは周知の如く女性を恋愛して生きた。

彼にとって女性はい

魂の生成の道しるべであった。

だから大詩篇の最終句は

「永遠に女性なるもの

我等を引きて往かしむ」

(一一二一一一 鷗外訳)

を以て結んでいる。

どこへ往かしめるのか。

Mit Lieb' und Wonne

Zur heiligen Sonne!

愛と歓びをもて

神聖なる太陽へ!

そう私はゲーテ論の中で後年

靈感を以てつけ加えた。

『ファウスト』の天上の序曲は

「太陽」を以て書き起こしている

だから「太陽」を以て終らしめたい。

ゲーテは余韻をもたせたのだろうか

この二句を天界のゲーテは見

「その通り」と応えているようだ。

「神聖なる太陽」は神のことである。

ゲーテは太陽に於て神の栄光を見ていた。

キリストと太陽には

無条件に拝はいさ*跪するといった。

*拝跪＝ひざをついて拝む。

彼は人生の夫々の時機に

然るべき女性に廻り会っている。

純情のフリーデリケ

美徳的なロッテ

ギリシヤ美女のようなりりー

幻想的なベッティーナ

詩情豊かなマリアンネ

叡智えいち的なフォン・シュタイン夫人

天真な肉体的クリステイアーネ・ヴルピウス

憧憬的哀歌的なウルリーケ

これらの女性をその特質に於て

いつわりなく恋愛し詩の世界の現実とした。

それぞれが永遠に女性なるものの

玉の緒おにつらなる珠玉であった。

彼を天界に導く虹彩の天橋であった。

しかも彼の愛の源泉は

正に母マーヤであった。

ダンテは反これにはんし之

唯一人の女性ベアトリーチェを

詩の現実で愛し抜いて『神曲』を書いた。

その詩道は流浪るろう十九年の難路であった。

ゲーテの女性愛は多即一、一即多であった。

ダンテの恋愛は一即一であったが

ダンテには妻あり男女四人の子らがいた。

その何れいづれもが神への道ゆきであった。

愛の相は異なるが、愛の本質は同然。

神に帰一する恋愛は

神から出ていたからである。

そこではエロースとアガペーが

融合している。

宗教哲学者テイリッツヒも言っている。

「エロースとアガペーの

融合一致なき愛は

真実の愛ではない」

* 叡智えいち!! すぐれた知恵・認識能力。

勿論人間ダンテ、人間ゲーテも

恋愛の現実^に於て

劇的な明闇の相をくぐり抜けた。

霊性も理性も悟性^{こせい}も意志も感情も

両者ともに豊かに有^もつていた詩人である。

これらの諸性を神からのものとして

渾然^{こんぜん}と融合してもつていたが

ダンテは性格上

劇的な戦の相を主流とした。

ゲーテは性格上

自然的調和の相を主流とした。

キリストの弟子で言うなら

ダンテはパウロに近く

ゲーテはヨハネに近い。

ともあれ両者とも

人間性^{メンシュリッヒカイト}が豊かにして深い。

ダンテは『神曲』の

地獄（インフェルノ）

煉獄（プルガトリオ）

天国（パラディソ）。

ゲーテは『ファウスト』の

小宇宙、大宇宙。

いかにも両者らしい大詩篇

イタリヤの第一人者、ドイツ第一人者だ。

大学三年生の学年末の

試験は青木主任教授の「ファウスト」講読。

その詩句三問の訳文

詩の好きな私は素速く書き終え

答案を真先きに提出。

これが学生生活の試験からの解放

何たる快感、あの瞬間が甦る。

而も最後が「ファウスト」であつたことは

わが生涯の課題と冥合。

聖書伝道五十年の峠にて

わが母・わが兄

五十年前の秋のはじめに

コスモスの花咲き初めた頃

長兄政美が北支北京で

一九二一の九月二十二の日

天に帰ったその日を卜して

武蔵野村の東の端の

わが家の一角を会場として

聖書伝道の狼火をあげた。

わが兄政美は一高・東大卒の春

大蔵省の職に就いたが

英語の力拔群に因り

速くもロンドンへ赴任の内定。

こはいかに、サタンの詭計、その晩秋

北京公使館員に急変とは！

彼は火の如く激務に鞅掌。

翌二十一年の夏、青島・大連方面へ

出張の途上悪疫に襲われ

やむなく北京に帰還した。

急を聞いて母と次兄龍二は

その一九九〇年九月二十
二日を記念して

*詭計 けいけい。人をだ
ます計略。

*鞅掌 せわしく働くこ
と。「鞅」は背負う。「掌」
は手にもつ。

朝鮮半島、南満州を経て
北京は同仁病院を見舞う。
高熱の中から彼は告げた

「キリストの愛は更に熱し」

と。畏るべきカイロス（時期）が来て

白衣に輝くキリスト霊現し給う！

「母上よ、キリストさまがお迎えでした。

では、お先きに失礼します

お赦し下さい！」

彼の魂之霊は天に帰った。

何たることぞ、あらしの如き召天。

地上の生、二十六年一ヶ月。

上司公森氏は愛惜して言った

「小池政美君の死は国家の損失」

と。彼は帰国を思わず、時機来たらば

「支那伝道を私はするのだ」

と。伝道の地図すら遺されてあった。

さわれ、われらがために

永年単身勞苦した母から
最優秀の長兄もぎとらる。

母は次兄と共に帰路は船路

その黄海上で永年の過勞と悲嘆のため

母の両眼から光が失せた！

噫、何たる悲劇、何たる無情ぞ。

東京駅に降り立ったのは

遺骨をかかえる次兄に

手を曳かれてゐる母のすがたよ。

……………！

長兄は遺骨に化した

慈母は失明！ 天地晦冥*

私はどん底にたたき落とされた！

この悲劇はわが全身に喰い入り

その後のわが生涯に課題を遺した。

武蔵野聖書伝道集会

臥薪嘗胆、刻苦勉勵二十年

*晦冥は暗いこと。くらやみ。

*臥薪嘗胆は目的をとげようとして、たきぎの上に寝たり、にがいきもをなめたりするような、ひどい苦勞をすること。

時機満ちて一九四〇年は秋九月

長兄政美の命日を期し

失明の母のための涙の心

聖書伝道の火蓋を切った。

この甲合戦は聖名のためいつの日か

仆れるまで貫かんのみ。

聖書講筵は創世記第一章

「神天地を創造し給えり」から

黙示録第二十二章再臨の

「主イエスよ来り給え」に向つて

不退転の歩みを開始した。

平常の来会者はおしなべて

二、三十名の老若男女

来たるも去るも全く自由

私はただ聖書に即して語るのみ。

ただの一度もおざなりの

聖書講筵を営んだ覚えなし。

所謂聖書研究会に非ず

説教めいた日曜礼拝に非ず。

預言書はアモス、ホセアと歴史的に

神の預言を辿り来て

南王国ユダのバビロニア捕囚時の

預言者エレミヤのくだりに来た時

私自身が軽い病の捕囚に遭った。

かくてかれこれ九年が過ぎた。

顧みれば一九三四年の春四月

『旧約知識』なる専門的研究誌が

塚本虎二、植木良佐編輯のもと

隔月発行のスタートを切った。

その同人数名の一人として

私は「詩篇研究」を執筆連載

原典の私訳と解説に魂をうち込んだ。

これに非常に共感した未知の人から

ねんごろな書翰が幾度か来た

熊本の人、手島郁郎氏であった。

熊本で詩篇の講義との依頼であった。

*不退転とどんな苦勞や
さまたげにもまけないこ
と。

私は東大教授、おいそれと動くもならず
時機の到来を祈り待っていた。

滝見荘ペンテコステ集会

頃は美し、一九五〇年晩秋の

十一月三日から五日にかけての

大阿蘇は垂玉温泉滝見荘での

特別聖会に招かれた。

彼は既に聖霊を受けた器であった。

十月十五日に手島兄のしたためた

愚生への書翰のひとくどりに

「十一月三、四、五日の阿蘇集会の

参集者に画期的な恩恵降るべく

先生はそのための神の特選の使者

先生の上に一大印綬が

キリストから授けられ

日本のために起たれる運命を

黙示された」

との言があつた。

私は平伏して祈りつつ阿蘇を待った。

大阿蘇の自然今や紅葉の綾錦もて

我らの集会を祝福せんとし

滝の音齊しく讚美にどよもした。

知らぬ間にみ霊は私にはたらき給ひ

語る詩篇に、祈る私に感応の声

おのずから湧き立つではないか。

十一月五日の祈禱会るとき

突如天来のみ霊の光に貫かれ

からだがその瞬間宙に浮き

全身聖霊に痺れ異言爆發！

平伏した、キリストのみに。

噫、これが聖霊のバプテスマ！

その祈禱会は未曾有のもの

二十名ほどの女性たちが

期せずして霊歌の合唱

天与の異言の調べ何ぞ美しき

*印綬は昔、中国で、官名をはった印と、それ自身につける組ひも。

*未曾有は一度もなかったこと。

天使らがこれに和して歌っていたらう！

手島兄に啓示^{けいじ}されていたことが

この全集会に霊現したのだ。

大阿蘇の自然はいや増しに輝いた

神・キリスト讃美の歌を

我ら声をかぎりに歌いあげた。

熊本駅頭、別れを惜しみ

主に在る兄弟姉妹たち

「小池先生万歳！」

と叫んでくれた。

「熊本幕屋万歳！」

「手島先生万歳！」

と応えれば

汽笛と共に汽車は走り出した。

熱涙は泉と湧き出で

しばらくは夢か現か。

二十六時間の汽車の旅

目醒めては聖書^{みふみ}を開く

どこを読んでも聖言^{みことば}が躍る

聖書のヴェールがとれてしまった！

宜^うべなる哉、み霊^{たま}なくして聖書は読めず

パウロがかくも聖霊^{みたま}に在って

告白していたのかと新しき驚異。

旧約聖書はエホバ神のみ霊のひびき

新約聖書はキリストのみ霊のひびき

預言者も使徒もみ霊について語るに非ず

み霊に捕えられ、その中からの告白だ。

今まで何を讀んでいたのか

うそではなかったが、あたまと心の次元

今や、み霊に在っての魂^{たましひ}之霊の次元！

聖名^{たな}を讀えざるを得ず

アーメン、ハレルヤ！

一九五〇年晩秋の大阿蘇集會は

「原始福音」の「マクヤ」の大軍にとつても

「日本キリスト召團」の

代表小池天海（天弓）にとつても

*啓示は人間の能力によつては知りえない神祕が、神の愛によつてあらわし示されること。天啓黙示。

*宜べし肯定の意を表わす語。いかにもつともなるほど。

歴史的ペンテコステと相成った。
手島も小池も出無教会山脈をなし
大阿蘇山系人となったのだ。

清瀬東京療養所伝道

爾後神じこのみ前に破れを自覚し平伏して

キリストの十字架の碎けを賜たまわつて

聖霊の智慧ちよと力に動かされ

使徒らの次元と同質にされながら

「不思議と力」がこの身を通して現われた。

清瀬は東京療養所に毎月一回訪おとずれて

聖書を語り折り入れば

陰惨なる結核病棟に靈光さして

医術治薬の限界を乗り越えて

希望失せたる患者が幾人も

天来のみ力に助けられ

療養所を立ち出るではないか。

現にそれらの男性女性

嬉々ききとして原始福音の証者らしく
夫々の人生行路で働いている。

平伏して聖名を讃える。東療伝道十年

「愛泉」誌を東療の渕江、峯崎、大垣等の

諸君とガリ版刷りで発行した

あの頃のなつかしさ。

「曠野の愛」誌（前半）

四半世紀の無教会時代に

別れを告げた明けの五十一年年頭に

その名はエレミヤ三一・一二、三に由る

「曠野の愛」誌を創刊し

兎うさぎとなったたり亀となったりの

走りと歩みの発行をした。

第二十五号まで平山勝明君の

見事なガリ版刷りで

創刊号は「三位一体の神」

第二号は「神の栄光」と題して

*爾後Ⅱそののち。それ以後。

*エレミヤ三一・一二、三Ⅲ旧約聖書エレミヤ記31章2、3節「エホバがくいひたまふ、剣をのがれて遣りし民は曠野の中に恩（めぐみ）を獲たり、われ往て彼イスラエルに安息をあたへん。遠方よりエホバ我に顕れていひたまふ、我弱（かぎり）なき愛をもて汝を愛せり、故にわれたえず汝をめぐむなり」

イザヤ書第三十五章

第四第五合併号は

「エレミヤ哀歌」の私訳と解説

第八号は「ルターの結婚とその生活」

第九第十合併号は

「小池政美召天三十年記念号」

詩篇第一二六「涙を流して出で往けり」
に因みたり。

第十三号は「聖書一卷の旅」

これは是れ一九五二年年頭の
九州四国の大伝道の旅である。

第六、七、十五号は

「第三イザヤの本質」の上・中・下

第十六、十七、十九号は「主の祈り」

第二十六号「言い逆らいの徴」^{しえし*}は

一九五六年の降誕節に

東療で語った画期的なもの。

母の召天

第二十七号「ナルドの香油」^{こうゆ}は涙の号だ

「小池光子記念号」で母は一九五七年

正月十九日米寿を以て天に帰った。

失明時代三十八年間に、一度も

失明をかこつことなく、耳で見えていた！

噫、母の心境！ 私の涙は火に化る。

召天の翌日は日曜集会

涙の詩篇第百二を語った。

二十二日の告別式は

次兄龍二の宅を会場とし

兄弟で営み、式辞は私が述べ

母の愛誦歌^{あいしやう}を長女清子に歌ってもらった

「めぐみの光は わがゆきなやむ

闇路^{やみじ}を照らせり 神は愛なり」

母の胸中の涙の泉は誰が見たろう。

キリストだけがこれを見て天界で

直ちに開眼させ給うたにちがいない！

* 「言い逆らいの徴」
ルカ2・34
||

この告別式がわが伝道録音の第一号
爾後延々と集会で私の全身が
福音を証言し終るまで。

「曠野の愛」誌（後半）

第二十八号は旧約の福音、詩篇第一〇三を

「絶対恩寵」と題して書いた。

第二十九号は題して「聖意靈法」

「原始即終末の統一場」たる消息を

霊的神学的に論破した。

第三十号は題して「キリストの原始福音」

超神学の霊的生命の現実を述べた。

第三十一号「福音的完全性」はキリストの

山上の大告白の最高峯マタイ五・四八

「汝らの天父の完全なる如く

汝らも完全なれ」

水をわらず、ずばりとキリストは言う。

誰がこの聖言を満たし得る、一人だに無し。

不可能を要求して何ぞ福音なりや。

不可能を可能ならしむるは発言者

キリストの言には実力の裏づけがある。

「我に來たれ、わが中に投げ身せよ

然らば汝はみ霊の力を体受せん」

かくて質的完全性が我らに臨む、アーメン。

第三十二号、「終末的帰一」詩篇第八七は

五九年の夏、浅間高原第六回夏期特集で

語った極めて特色あるもの。

第三十三号は「無的実存」

内村先生召天三十年を記念しつつ

無教会をアウフヘーベン（超棄）。

第三十四号は「藤井先生召天三十年記念」号

師弟論、天職論の告白ぞ。

第三十五号は「武蔵野伝道二十周年記念」号

「神の羔」と題し「福音の根本構造序説」

六〇年夏、伊香保の福音特集で語りしもの。

第三十六号「サマリヤ人」六一年晩秋号は

* 婦一〇多くの物ごとが
一つになること。

* 夏期特集〇夏期福音特
別集会の略。

* 天職〇天からさすけら
れた神聖な職業。性質に
合っている職務や職業。

在独、ハンブルクの

ルター教会で述べたもの

この夏の箱根特集は

会員たちが善く実施した。

第三十七号は終刊で、東大教授定年の

最終公開講義「宗教と文化」を載せた。

ハンブルク大学とルター派教会

一九六一年から二年にかけて

ハンブルク大学交換教授として

日本宗教史と日本語を講ずるなべに*

ルター派教会で聖書講義を数回実施。

講義を聴いた人々が

どうしてそんな心境になったかと

不思議がるので私は答えた

「洗礼のヨハネの預言の如く

今も活き給うキリストさまから

直接聖霊のバプテスマを受けたからだ」

現代教会の焦眉しょうびの問題は

聖霊のバプテスマを受くるに在りと

教会新聞に投稿もした。

更に私は言った

「なぜ教会員たちが自分の聖書と

讃美歌を持たずに来会するのか

ルターは聖書を生き

キリストを讃美するため

あの全訳と讃美歌を

物ものしたではないか！」

副牧師は一同に告げて言った

「プロフェッサー小池が

聖書讃美歌持参すべしと

忠告したから持参せよ」

けれども彼らは一向実行しなかった。

帰国直前六二年の二月に大学で

公開講演「日本新教史と突破の神学」を

果したときに一ドイツ人感激し

*なべに並べに。一つの事実に伴ってもう一つの事実を認めた意味を表わす。

*焦眉は火がまゆをこがす意。危険が身に迫ること。緊急。

ビーヤ・ハツレに私を招き

「未だ嘗て日本人からかくも

素晴らしき講演を聴きしことなし」

と乾杯してくれた。

こちらでも嬉しく、名刺の交換もうち忘れ

「アウフ・ヴィーダー・ゼーエン」

を交わしはしたが

再会をするすべもなかった。

「曠愛新書」

その後六四年の夏から六七七年の春にかけ

「曠愛新書」を六冊書いた。

第一号「福音の心臓」は

コリント前書の「愛の讃歌」

第二号「桑の木によじ登る」は

ざつくばらんのあの男。

第三号「沙漠はサフランの如く」は

イザヤの三五

第四号「旅に想う」は一年間のドイツ生活
第五号「キリストの福音」は

伝道二十五年の記念書碑

第六号「キリスト道」は靈的神学的告白

第七号「一切の秘訣」はピリピ書だが未刊。

「ハレルヤ」誌

その後一九六九年秋十月

武蔵野キリスト召団誌「ハレルヤ」を創刊

これも非連続の連続よ

大学卒業以来、席のあたたまる連少なく

本はからだの蔭に似て、到る処これ書齋

わが伝道も、非伝道の伝道よ

会員は組織に非ず有機体

聖霊あるところに召団あり

聖霊あるところに愛がある。

十字架の贖罪を体受した人は互いにゆるす。

それができないパリサイ根性は

*ビーヤ・ハツレ・ビヤ・ホール。

*アウフ・ヴィーダー・ゼーエンはまた会いましょう（別れのあいさつ）。さようなら。

*イザヤの三五旧約聖書イザヤ書第35章「荒野とuringはひなき地とはたのしみ、沙漠はよろこびて番紅（さくらん）の花のごとくに咲きかがやかん。……エホバに贖ひすくはれし者うたうたひつ帰してシオンにきたり、その首（こうべ）にとこしへの歡喜をいただき衆とよろこびとをえん。而して悲哀となげきとは逃さるべし」

つまらぬもの別れの起因をなすのだ。

聖霊の愛の呻きを聞かざるや！

「ハレルヤ」もその役割を大方果し

一九七七年の秋九月

第四十四号をもつて終刊とした。

小池辰雄著作集第一巻『無者キリスト』

さてその間、日本キリスト召団の

片井、野中、大槻、高森

京都の奥田の諸君等が相議して

「小池辰雄著作刊行会」が発足した。

聖霊の機関車に水が注がれたので

小池火車、主にある友情有難く受け

爾後は鋭意天の力で石炭を入れ

火を起こし自ら運転士となつて

列車を走らせた。

製本一切は長男小池信雄がこれを負う。

第一巻は『無者キリスト』三千部

イエスを無者と呼びまつる

キリスト告白は未曾有のものなれど

無教会も教会も注目しない。それでよい。

「預言者はおのが家郷に容れられず」

主キリストの聖言だ。

主イエスはおのれを何者ともせず

神一切聖意信従

我意を無となし給うたゆえに

神の無限無量が彼に於て体现された。

それゆえキリストを無者と

私は呼びまつる。

「主さま、あなたの十字架が

この罪びとを無私の根源現実に

入れて下さった。そしたら

そこに聖霊が降り給うて

質的に無限無量の現実が臨みました」

ああこの恩寵！ それは大阿蘇の

ペンテコステで先ず体験し

その翌年の春、マタイ五・三の

「恵福^{さいわい}なる哉、霊の貧しき者

天国はその人のもの也^{なり}」

を祈りを以て読んでいたとき、靈感臨み

「恵福なる哉、汝わが十字架で

霊が無的な貧しさにされた者よ

聖霊の我、汝の中に在り」

と。わが全身はうち震い畳の上に平伏した。

ああ、十字架と聖霊は不可分の恩恵^{カリス}なるぞ

福音の焦点^{こてん}此処^こに在り！

誰が何と謂うとも、この現実、この恩寵

この真理を私は断じて否定し能わ^{あた}ず

死に到るまでこれを叫んで進み往く。

事実イエスは地上ではいかなる弟子にも

聖霊のバプテスマをしなかった。何故か。

彼は叫んだ

「我は火を地に投ぜんために来た

この火が燃えたら何をか望もう

だが我には受くべきバプテスマがある。
念^{おも}い迫ることいかばかりか！」

即ち主はまず十字架の贖罪^{しよくざい}死を遂げて

五旬節^{ごじゆんせつ}に火の聖霊を投じたのである。

パウロがガラテヤ二・二〇で告白した

「我れキリストと偕^{とも}に十字架されたり

我れ生く、されど我に非ず

キリストわが内^{うち}に住み給うなり」

「キリストわが内^{うち}に」とは

キリストのみ霊^{たま}

み霊のキリストに他ならず

キリストの十字架と聖霊不可離一体

それゆえマタイ五・三と

ガラテヤ二・二〇とは

同じ真理内容たることを私は告白する。

聖霊は神の中、キリストの中に在^いますなり

三位一体とは聖霊を媒介とする神秘の現実

げにみ霊を体受したキリスト者は四位一体

*贖罪＝キリスト教で、キリストが十字架にかかり、人類に代わって罪をあがなつたこと。

贖罪は、聖書の中心的思想の一つである。それは贖^{あがな}（あがな）いまたは和解と同じ意味である。

つまり、それぞれの罪を贖うとか、和解して一つ思いになるという意味が含まれている。キリストによる贖罪は、罪の赦し、神の子としての身分、聖霊による自由を与え、罪と死から解放し、完全に救われた状態になるといふ、すぐれて多様な意味内容をもっている。（いのちのことは社「新聖書辞典」）

*五旬節＝五十日目の祭日という意味で、大麦の初穂の束をささげる日から数えて五十日目に行われたことから生れたギリシヤ語訳のペンテコステ^{ペンテ}（五）タ・ヘーメラスの訳語である。ペンテコステともいう。キリストの復活と昇天の後、五旬節の日に

神・キリスト・聖霊・我の一如なる^{いちにちなる*}

絶対恩寵の根源現実の中に在る。

聖劇、大ドラマたる聖書は

人間のあらゆる現実を語りつつ

神・キリストと一如なる

預言者使徒らの実存を伝えて

栄光を聖名に帰している。

されば我らもいかなる運命、環境

対人関係にもみ名の光、み霊の力

キリストの愛をもてこれに耐えて勝ち

人々を荷い助ける。

されば私も、悪口^{あつこう}雑言^{ざうごん}、誤解^{ひぼう}誹謗^{ひぼう}に

親鸞、白隠、良寛ではないが

それらの人々を気の毒に思い

キリストのみふところに投げ身して

み力をもて、それらの事態にうち勝って

祈りを以て執^とり成^なしている。

キリストの義を告白し

キリストの愛を体現せしめられている。

『エン・クリスト』聖書伝道誌

さて一九八〇年春のこと

京都・大阪両召団主催の特集の際

全召団代表者たちの談合で

召団機関誌たる季刊誌の発行決まり

それに「エン・クリスト」と命名す。

そは、み霊に在ってキリストと

一如であつた使徒パウロ

そのみ霊あふるる玉章^{たますぢ}の中で百度あまり

この「エン・クリスト」の

恩恵^{めぐみ}の現実を告げしゆえ。

本誌は聖書の中から告白しながら

おのずから愛の伝道たるべき小誌。

なやみある人、求道^{ぐどう}の徒輩^{ともがら}

その他出遭^{であ}う隣人^{とまりびと}らに頒^{わか}たんと

本誌「エン・クリスト」を外出のとき

弟子たちはエルサレムの家に集まつており、天からのしるしを受けた。聖霊が下り、新しいいのちの力、そして恵みがもたらされた。それゆえ五旬節は聖霊降臨日とも呼ばれる。

*一如＝絶対的に同一である、事物の真実のすがた。一体となつていて、二つでないこと。

*誹謗＝悪口を言うこと。中傷。

*特集＝特別集会の略。

携え持ち歩き折に触れては与えられよ
全召団の兄弟姉妹よ！

「エン・クリスト」第四十五号は

天海（天弓）の聖書伝道五十年の

記念講演号と相成った

聖名に感謝し聖名讃う。

全召団の兄弟姉妹の過、現、未に互る
主に在る友情に、協力に心から感謝！

夏期福音特別集会

さて十字架のステイグマ（焼印）を心に
聖霊の霊泉を魂にいただいている私が
最も棄身でなしたことがある
それは夏期福音特別集会だ。

第一回は一九五四年の夏のこと

浅間高原小諸の草地で、川口、長坂、吉村
その他十名ほどの兄弟姉妹と輪をなして
からだは陽光を浴び魂は靈光に貫かれ

パラダイスの前味だった。

第二回は二階建てなる

川口愛子姉の向日葵荘で。

第三は竹田昊、綾子夫妻のささやき荘で。

此処はりんご林と小川辺に泉湧く

ふしぎな屋敷と思われた。

第四、第五は両宅共に用い

第六はひまわり。

来会者は七、八十名の老若男女

信州、東京その他の地から喜び参じた。

原則として金、土、日、二泊三日

聖書講筵三回、感話・証言独唱詩吟の

懇親会一回、祈禱会一回。

一九六〇年の第七回は伊香保の天溪園で。

三十名の男性群、四十名の女性群の

夏期特集はやがて

百名を超える特集となった。

問題はしかし数ではなく質である。

聖靈のバプテスマにあずかるは

大方夏の特別集會に於てであつた。

第八回は箱根芦ノ湖畔の成蹊寮

集會員たちが開催してくれた。

私はハンブルク大学の交換教授

夏期休暇を利用して西ドイツと

スイスへの旅行中であつた。

(曠愛新書「旅に想う」を参照)

第九回同じく芦ノ湖畔

第十回は御嶽の駒鳥山莊

第十一、十二は清里きよさとの清泉寮で

主さまへの無条件降伏即大勝利の

恵みの現実。

第十三、第十四回は御殿場ごてんばの東山莊とうざんで。

第十五回から第十八回まで浅間山かざねの

西方谷間なる鹿沢温泉かざわの一軒家紅葉館こうようで。

第十五回はエペソ書

第十八回は「無者キリスト」

一九七二、七三年の二夏は伊豆南西海岸の

松崎温泉山光莊、若い會員が大部分。

「我れ火を投ぜんために来れり」

キリストのみ靈の力あざやかなりし

第十九、第二十回、二夏の

海べの特集であつた。

第二十一回は伊豆東岸、伊豆高原浮山莊で

「おのが十字架を負いて我に従え!」

この聖句を主題として、実存の性格を語り

十字架を負うには聖靈の力

絶対に必要なるを語りたり。

信仰にも実存にも

十字架・聖靈不可分なるぞ。

一九七五年第二十二回は鹿沢の紅葉館。

「使徒パウロの伝道生涯」が主題であつた。

第二十三、第二十四は同じく紅葉館で

それぞれ「愛の讃歌」とガラテヤ書を。

二十五は箱根強羅こうらの地塩園

今橋正作氏御一家参加。

第二十六は鹿沢。

第二十七は修善寺ガーデン・ホテル。

第二十八回は梅ヶ島の梅薫楼^{ばいくんろう}で第二イザヤ

第二十九回は箱根湯本芳春荘^{ほうしゅんそう}で第二イザヤ

一九八三年第三十回から

八六年第三十三回までは伊東いづみ荘

宿主は「原始福音」の村上延雄氏。

第三十回第一イザヤ

第三十一回黙示録前半

第三十二回即行の福音マルコ伝

第三十三回心情の福音ルカ伝。

一九八七、八八年は芦ノ湖畔の

箱根高原ホテル。

第三十四回は言葉の福音マタイ伝。

八八年第三十五回夏期福音特別集会は

夏の特集の最終回たることを示された。

全召団の会員に申し訳なきことながら

小池天海人生最後の課題たる
或る詩作に全身的なうちこみを
せざるを得ぬために。

一九八〇年発刊の

「エン・クリスト」季刊誌に

爾後の夏期その他の特集の記事がある。

特にこの最終たる第三十五回は重要。

四福音書の最終たる聖霊の福音ヨハネ伝

これは夏期特集の総括的な

そして余韻果てなき悲願靈願。しかも

小池辰雄著作集最終巻にして総括的な

第十巻「聖書は大ドラマである」も

同じく八八年の晩秋に！

この一巻の成りしとき

わが全身は火と燃えていた。

わが伝道五十年を貫いて

かげで助けしは順子^{*}あるのみ。

夫々の理由で召団を去った兄弟姉妹も

*順子＝小池順子。著者の妻。

夏期特集の靈龍^{れいりゅう}が

その後の力となつてゐるにちがいない。

諸姉姉のなつかしき面影を

時折写真帖を見ては折つてゐる。

「廓然無聖、枯木龍吟」
かくねんむじやう　こくぼくりゆうぎん

の私の心を主は知り給う。

詩の一路

パウロは「われは罪びとの首^{かしら}」と言つた

そのパウロはキリストの

最大の証者となつた。

戦場ヶ原で「我も亦罪びとの首」と語つた

内村鑑三は、この私が救われたから

救われない人はないと

「万人救済論」を唱^{とな}へた。

彼はげに日本が産んだ世界的人物の一人。

彼は史的洞察力ある預言者

科学的頭脳あり詩心あり、雄勁^{ゆうけい}な筆力あり

矛盾を意とせぬ人、さればキリストの

十字架一点張りの魂であつた。

愚者天海は何者か。

小池政美、内村鑑三、藤井武、塚本虎二

そして手島郁郎に相前後して出遭つた

天運は何を約束しているか。

「汝は第三の罪びとの首である」

と大地の霊が私に囁^{ささや}いた。

聖霊が然り、然らずと執り成し給う

キリストこそは十字架で

「罪びとの首」と成り給うた。

大詩人ダンテ、ゲーテは高嶺^{たかね}の花だが

昼は陽光を貫くキリストの靈光を浴び

夜は星影に映ゆる聖霊の愛に浸^{ひた}り

詩の旅を旅路の果てまで私は歩む

「山路越えて独り往けど」の

讚美歌を唱いつつ。

*廓然無聖 心がからりと開けた悟りの境地からすれば、凡・聖の区別はなく、凡として捨てるものも、聖として取るものもないこと。禪における公案の一つ。

*枯木龍吟 枯木裡龍吟。枯木が風に吹かれてなる音から、枯木を死、龍吟を活とらえて、死中に活を得ることや、静中の動をいつたもの。

*雄勁 文章・文字の力強いこと。

京都召団主催

春・秋の特別集会及び講演会

さて忘れてならぬことがある。

それは一九五九年から始めは不定期の

京都における春秋の講演や集会で

京大教授奥田昌道、伝道者市川喜一両君と

私の交友関係に於て展開したもの。

来し方すでに三十年。

最初の私の講演は「無的実存」で

奥田君が過日の

「小池天海聖書伝道五十年記念会」で

その画期的な不滅の印象を証言。

一九七二年年頭から

奥田君は独立の集会を開始した。

京都キリスト召団ここに誕生

西方伝道の拠点となった。

爾来、春また秋の特集に講演に

奥田君を援けつつ福音戦を共にした。

一九八八年の夏を以て夏期特集は幕を閉じ

全召団の集う機会は年に一度の京都の集い。

これは有志の自由参加で

主に在る兄弟姉妹の愛の交りも大切な故。

各召団は夫々の特質に於て

聖名に在って聖書伝道を

日本キリスト召団らしく進み往かれよ！

.....

私が地上を去つたら

天から禱援しよう。

私の雅号にはいつも

天が響いているように。

全召団はみ霊の愛と力でなされたし

聖書伝道集会と

召団各人の自由伝道と

聖霊に在っての愛の交りと

具体的な人助けを。

第二篇

幕末維新の烈士

佐久間象山

— 維新の曙 —

獨協^{どくきょう}中学・高校の校外授業の日
一切^{いっさい}を教頭^{きょうとう}にゆだねて私は
亡き母の故里^{ふるさと}たる信州松代^{まつしろ}を
数十年振りに訪れた。

これぞ校長単独の校外授業。

即ち佐久間象山の記念館見学。

象山は文化八年、一九世紀一二年

建国記念日二月十一日の払暁^{つひきよう}

明星の下に生れ出^あでた。

彼^{かれ}が自ら象山^{ざうざん}と号したのは天保七年

二十六歳のとき。彼は即ち告白して曰く

「予^よが廬^いの西南に巨陵^{きりやう}奮起^{ふんき}す。

其の状^{さう}巖然^{がんぜん}、象に類^るす。

土人^{どじん}目^めして象山と曰^いう。

即ち余も象山を以て自ら号となす」

彼の魂^{たま}が宛然^{えんぜん}象の如く巨大であつたから

象山の号は正に相応^{ふさう}しい。

記念館を見学して然りと^{しか}思った。

父一学は極めて聡明^{そうめい}剛毅^{こうぎ}

文武両道を身につけた人物。

さくま ぞうざん（しょうざん）

一八一一〜六四年。幕末の勤王家。蘭学、砲術に通じ、海防の要を説き、吉田松陰の海外渡航を助けたとして、獄につながれ、攘夷論者に殺される。

*払暁Ⅱ夜明け方。

*象山Ⅱ読みかたは「ぞうざん」ともいう。「しょうざん」説は、宋の陸象山（りくしょうざん）を尊敬していたからという。
*予Ⅱわれ。わたくし。余。

*廬Ⅱ小さな住まい。

*巨陵Ⅱ大きな岡。

*土人Ⅱその土地に生まれ、そこに住んでいる人々。

*宛然Ⅱあたかも。

*剛毅Ⅱ意志が強く、くじけないこと。

文化二年（一八〇五）五十歳の時

足輕荒井六兵衛の娘まんを

身分低きゆえ妾として迎えた。

このまんとの間、啓之助が生れた。

この子が即ち象山である。

まんは記憶力抜群の女性

この優れた父母の資質を受け継いで

この子は幼児にして父が音読の易経を

傍聴して六十四卦の名称を暗誦。

松代藩主の真田幸貴が

一学の道場に立ち寄った際

啓之助の太刀筋に目をとめ

「天晴れなる太刀さばき、感じ入る。

何か褒美を取らそうぞ。

所望の品を申してみよ」

啓之助言下に応えて申すらく

「二つだけお願いを言上仕る。

わが生みの母は父の雇人なるを以て

母の実名を呼び捨てにして居りまする。

こは子として心苦しきことなれば

お殿様のお情けにより

母上とお呼びするを得ますれば

喜びこれにすぐること無之次第！」

爾後、妾まんは一学の正妻となる。

此の如く象山は孝心篤き人物。

我ら明治の人間は朝夕の挨拶のとき

畳の上に両手について

お早ようございます、お休みなさい

行つて参ります、只今帰りました、と

申したものの、今昔の感に堪えず。

敬神孝道なき民主主義は禍なる哉。

宿願成就、天保四年、二十二歳にして

彼は江戸に遊学、大儒佐藤一斎の

門下生と成つた。天下の逸材が同門だ。

その一人たる大槻磐溪がかく言つた

「佐久間の眠れる姿を見しことなし。

*妾として迎えた江戶時代は、家柄、身分が不釣り合いのため正式に結婚できないことがよくあった。

*爾後、そののち。

*易経は五経の一つ。

陰・陽を組み合わせた六十四卦によつて、自然と人事の諸現象をあらわし、宇宙の理法を説く。

*遊学はよその土地・外国へ行つて勉強すること。

*大儒はすぐれた儒者。

大学者。

*逸材はすぐれた人物。

いつも行灯の前に端坐して

一心不乱に読書している。

貴殿はいつ眠るや」

と訊ねれば

「毎夜八ツ時までには寝ねず

毎朝未明に起きあがる」

正にナポレオン、エディソンの類い。

烈々たる精神力かな。

二十九歳にして江戸は神田に

象山書院、五柳精舎なる塾を開いた。

自信自尊心の強い師匠であつた。

例えば彼の漢学の素養拔群たる

かの「桜賦」、かの「望岳賦」という

桜花と富岳を謳歌した二詩文の如き

誰か驚嘆せざる。

彼は和魂洋才の精神を以て

黒川良安の蘭学とおのが漢学の

交換教授をなし、やがて和蘭語を修熟し

細竹を以てペンを作り

草汁を以てインクを製し

オランダ語字典を美事に筆写した。

また僅々二ヶ月にして蘭語文法を暗記した。

多種多様の蘭書を読破して大砲の製作

硝子の製造、日本で最初の電信機の製造

写真機の自製を成し遂げた。

それによる自像が展示してあつた。

医学を学び、医薬の調査

電気治療器の製作

戦術、砲術の研究その他

実に驚くべき知識欲と製作力！

これらはすべて記念館で認識できた。

彼の塾精神は

「東洋の道德、西洋の芸術、学問、科学

精粗遺さず表裏兼該し、因りて以て

民物を沢し国恩に報ぜん」

と。江戸は木挽町の塾で

* 八ツ時〓午前二時。

* 烈々〓勢いが激しくさ
かななさま。

* 富岳〓富士山の別名

* 謳歌〓口々にほめたた
えること。

* 和魂洋才〓日本人固有
の精神をもちつづけなが
ら、西洋の学問・知識を
吸収し、それを活用する
こと。「和魂漢才」をも
じった語。

* 僅々〓わずか。

* 精粗〓くわしいことと
大まかなこと。

* 兼該〓かねそなえる。

* 民物を沢す〓人民に恩
恵を注ぐ。

象山に師事した面々は

吉田松陰、小林虎三郎、勝海舟

坂本龍馬、橋本左内、河井継之助

山本覚馬、加藤弘之等

幕末の志士が綺羅星の如く列なっている。

海外進出を奨励した象山に応えた

吉田松陰の渡米密航の罪に連座し

象山も投獄された、その獄中記

『省侃録』の中に次の如き名号あり

余、年二十以後、乃ち匹夫にして

一国に繋ることあるを知る。

三十以後、乃ち天下に繋ることあるを知る。

四十以後、乃ち五世界に繋ることあるを知る。

彼はおのが存在がいかに故郷

日本国、全世界に関わりあるかと

偉大な使命感に燃えていた。

開国論者なりし彼は上洛の際に

心なき攘夷論者らの兇刃に斃れた。

時に五十四歳、惜しみてあまりある哉！

彼の旺盛なる知的探究、創造的精神

歴史的洞察力、先見の明、強靱なる気魄

彼は国を憂い、開港の国是を祈り

勅諭を草案して、京の山階宮邸へ伺候。

されど宮は参内中にて不在

執事に面談の後、同邸を辞去

五条下ル寺町なる松代藩の宿陣

本覚寺に門人蟻川賢之助を訪ねたが

これまた不在

空しくおのが旅舎に帰らんと

三条上ル木屋町通りに

騎馬にて差しかかった折しも

待ち伏せの刺客に襲われ

非業の最期を遂げた

時に一八六四年。

維新の曙、大先覚象山は

最先きに殉道の死を死した。

*綺羅星は暗夜にキラキラ光る無数の星。美しく輝く星々。

*密航は鎖国政策の中でおとがめがない唯一の渡航法は、万次郎の例から「漂流」することだと言

山は考えだしたという。

*匹夫は道理に暗い者。身分の卑しい男。

*上洛は地方から都・京都へ行くこと。

*攘夷論は幕末の封建的排外思想。外国との通商に反対し、来港する欧米列強を、儒教の華夷思想のもとに打ち払うことを主張。

*気魄は強い精神力。

*国是は国の定めた政治上の方針。

*勅諭は天皇がくだした教えのことば。

*伺候は目上の人の安否をうかがう。ごきげんうかがい。

*辞去は別れを告げて立ち去ること。

*殉道は信ずる道のためにその身を犠牲にする

こと。

天道に従わんと彼の志は

草案の勅諭の中にも明記されてあった。

天道に従わんとする者は

魔道の徒輩に殺さるる頻度は

世界史に流星の如く現じている。

二十世紀末の青年男女よ

天意を畏れざる民主主義の

浅はかさを知らずや

白きサタンの掌中に陥つて

幸福を錯覚せざらんことを。

*天道||超自然の宇宙の道理・真理。神の道。

*魔道||悪魔の道。悪魔の世界。

*天意||神の意志。

*白きサタン||光りの天使を偽装する偽使徒。コリント後書11・13、15

「斯の如きは偽使徒また詭計（たばかり）の労働人（はたらきびと）にして、己をキリストの使徒に扮（よそほ）へる者どもなり。これ珍しき事にあらず、サタンも己を光の使徒（みつかい）に扮へば、その役者（えきしや）らが義の役者のごとく扮ふは大事にはあらず、彼らの終局（おはり）はその業（わざ）に適（かな）ふべし。」

*掌中||てのひらのうち。手中。

吉田松陰

— 烈魂如火 —

古来偉人の母には心魂の
床ゆかしく熱く深き人多く

幼名虎之助こらのすけの母堂杉瀧子は

正に斯かかる名婦であつた。

三男四女をねんごろに育てた

日本婦人の典型であつた。

次男のゆえに寅次郎とらじろうは貧なれど

誠心と愛情の霑あひせん然たる家庭にて

烈々火の如く勉強にいそしんだ。

父百合ゆりのすけ之助恬斎てんさい、厳格にして

男児は使命感を抱けと薰陶くんとうした。

寅次郎十一歳にして藩主慶親よしちかの御前にて
『武教全書ぶきょうぜんしょ』の野法編を講じた。

十三歳を迎えて叔父玉本文之進の
松下村塾しょうかむちゆくに入門し

専門的に『孫子そんし』を習得。

十五歳にして『孫子』虚実編を

藩主に進講し得たとは！

正に拔群の英才たるを実証。

よしだ しょういん
一八三〇—五九年。幕末
の思想家。長州藩士。兵
学を研究し、江戸で佐久
間象山らに学ぶ。ペリ
来航時に海外密航を志し
て失敗、入獄。株で松下
村塾を開き、高杉晋作、
久坂玄瑞ら尊攘運動指導
者を多数教育。安政の大
獄で刑死。

*薰陶 徳の力で人を教
化すること。

*霑然 おだやかなさま。

*進講 貴人に講義する
こと。

一八四八年、嘉永元年正月十九歳にして
山鹿流兵学の師範となった。

昼夜をわかつた文武両道を
身につけることこそ彼の楽しみ。

二十一歳より二十五歳まで

視野を広めんために旅人となり

正に東奔西走、随処に於て

碩学^{せきがく}偉材^{ゐざい}を訪ね

且つは学び且つは論じた。

奇なる哉、東は藤田東湖の

北浦のあたりを訪ね、踵^{かかと}を返して

西すれば長崎港は彼に何を暗示したか。

平戸では葉山佐内、山鹿萬介の許^{もと}で

山鹿流の兵学を受講した。

平戸はザビエルの足跡あるところ

松陰がこの靈的人物の靈に

触れなかつたことは惜しい哉。

島原では天草四郎の靈が

彼に呼びかけはしなかつたか。

熊本城を訪ねたのは清正公に祈らなため

そは生来啞者^{あしや}なる弟敏三郎のため。

旅にあつても彼は父母兄弟姉妹を

露忘れず神明^{しんめい}に祈願した。

彼はしばし萩に帰り

更に東遊の旅に登った。

江戸に上つて最も重要な

関わりを結んだのは佐久間象山^{さくま せんざん}

象山門下には松陰と龍馬^{りゅうま}の如き

超一流の両傑物^{けつぽつ}がいた。

真の愛国精神、政治精神を

この両者に於て深く知るべきである。

松陰は宮部鼎蔵^{みやべていざう}と俱^{とも}に

江戸の藩邸を脱藩して北上する。

常陸^{ひたち}、水戸、白河、若松を歴訪

転じて新潟を経て佐渡に渡った。

順徳天皇御陵^{ごりやう}に詣^{もつ}で、承久^{じやうきう}の変を偲^{しの}び

*碩学Ⅱ 学問が広く深い人。

*神明Ⅱ 神。

尊皇愛國の気魄を新たにした。

更に北上、弘前、盛岡を歴訪

南下して仙台、日光、足利を視察して

江戸に帰ったが、亡命の罪により

藩籍をのぞかれて

爾後、自由の浪人と相成った。

大乘的に国を想う彼は、更に四国に渡り

香川西部なる多度津を訪ね

大坂、奈良を経巡り伊勢に到り

皇大神宮に詣で、神道の足代権大夫と面晤

かくて再び江戸に還った。

松陰の抱負何れにかある。

その脚は日本を巻捲し

その魂は天空を翔ぶが如し。

彼は脱藩の罪科に因り

士籍と世禄を失ったが

理解ある父は十年間の遊学を許した。

時に一八五三年（嘉永六年）

二十四歳であつた。

六月アメリカ軍艦四隻が

浦賀海上に現われたりと聞くや

飛鳥の如く馳せゆき、つぶさに検べ

海防の策をおもいめぐらした。

海外事情を知る要は象山の意向

且つまた彼自らの内的欲求であつた。

秋九月ロシヤの軍艦が長崎港に現われた

これを聞くや即時断行の魂松陰は

直ちに西下、京都に梁川星巖を訪ね

禁闕を奉拝、「奉拝鳳闕詩」を賦した。

尊王攘夷、わが国体は皇位連綿

天皇は国民の父、国民はその赤子

あたかもイスラエルの神が父

民は子らの如くに。

松陰は道念強き人
いたずらに天皇を神格化せず

*尊皇＝尊主。皇室をたつとぶこと。勤皇。

*面晤＝面会して話し合うこと。

*巻捲＝まるめてしまひこむ。

*世禄＝父祖代々与えられる扶持。

*禁闕＝御所。

*奉拝＝謹んでおがむこと。

*攘夷＝外国人を追い払つて、入国・交通を拒否すること。

*赤子＝君主に対して人民をその子にたとえていう言葉。

人格的尊王の思想であつた。

攘夷は彼にとり帝國主義的西洋諸國を

武力を以て撃ち払うの意。

日本を屬國や植民地化せしむるべからず

神國日本の自由獨立を維持すべし

従來の徳川幕府の鎖國は不可

されば三百年の權勢を^{はし}擯にし

諸大名領に^{おんみつ}隱密を派遣して

後の憲兵よりも陰險に^{うかが}窺い

代官を^{くま}隈なく配置して庶民を壓制した。

悪代官のさまざまなる惡事のはたらき

黒を白となす詐欺暴行の惡政に対し

内外両面に斷乎言論を以て戦い

やがては實力を以て戦わんと

毅然^{きぜん}たる魂の人で彼はあつた。

彼が船路を通つて長崎に着いた時は

ロシヤ軍艦既に去りしあと

ああ、彼は露艦に便乗して

ロシヤを訪ねんと^の想いであつた。

そは亡命ではなく相手を^の知るため。

噫松陰は嘉永の五年間、日本全土を

東奔西走^{とうはんせいそう}南船北馬した。

松陰は到る處で有力なる人物と語り合ひ

庶民の實状をつぶさに見聞した。

彼は歴史の大轉換期を洞察していた。

かくて再び江戸へ歸つたのは

嘉永六年（一八五三）の暮であつた。

明くれば安政元年の正月ペリー提督^{ていとく}

軍艦七隻を以て黒煙濛々^{もよう}

寒空を焦がしつ浦賀に再來。

潮騒^{しおさけ}の声わが海國に

開國をうながさんとするが如きか。

春三月二十七日の夜半

艦影は闇に影画の如し。

時にミシシッピ号の當直士官

*毅然||信念が強く動
じないさま。

*東奔西走||あちこち駆
け回ること。

舷側^{げんそく}に何やら人声とおぼしきものを聞き

水兵二人が探見灯を照した。

「ゴー・アット」

と彼らは叫んだ。

はやくも二名の日本人小舟より

舷側^{はじ}の梯をのぼり来るではないか

「フウ・アー・ユー？」

言が通ぜず紙片の文字にて

辛^{から}くも意が通じたので

水夫は旗艦の方を指さして

「ゴー・ツー・ポーハタン！」

強引に旗艦にもものぼったが

軍艦見物と誤認された。

同艦に通訳可能のウィリアムスあり

漢字の筆談にて渡米の意を示す。

そは許されざりしのみならず

この密航の行為が下田奉行所に発覚され

国禁を犯した二人は有罪。

もとより覚悟の吉田松陰と金子重輔^{じゅうすけ}。

しかのみならず、松陰にこの行を教唆^{きょうさく}した

象山も罪に連座と相成った。

噫、大抱負の自由行動なりし嘉永の五年間

つづくは捕囚の身ながら

烈々火の如き安政の五年間

松陰のこの十年は永遠性を実証するもの！

松陰、重輔二人が大胆不敵にも

漕ぎ寄りし漁舟^{さしづな}は旗艦の水兵に突き放たれ

流れ流れて磯に着き

舟^{いかりふね}中の攘夷書の草稿^{そうごう}も象山の激励の詩も

発覚したので、何をか言わん

下田番所^{げんしやう}から平滑^{ひらなめ}の番所の獄に投ぜらる。

畳一枚に松陰と重輔が坐らせられた牢。

されど松陰の魂はいかなるものも

これを縛^{ばく}する能^{あた}わな

彼は堂々と番人どもに

わが皇国^{こうこく}の本質と道德の尊嚴を語り

*舷側^{げんそく}＝ふなべり。船の側面。

*教唆^{きょうさく}＝教えそののかすこと。

*漁舟^{さしづな}＝いさりふね。漁船。

*舟中^{ふねなか}＝ふねのなか。船中。

*草稿^{そうごう}＝下書き。原稿。

*番所^{ばんしやう}＝番人・番兵の詰め所。

*皇国^{こうこく}＝天皇が統治する国。日本国の旧称。

外敵に侮らるべきものに非ざるを説いた。
自由の国アメリカの精神を

未だ知らざる彼が

彼らを夷狄視したのは無理もなし。

ペリーは松陰らの二人の安否を訊ね

処置の寛大なるべきを申入れた。

松陰と重輔は手錠、足桎、捕縄をかけられ
唐丸籠に入れられて江戸に護送

北町奉行所の調べの後、伝馬町の牢獄へ。

その後二人は同じく唐丸籠にて萩へ護送。

秋深み萩に着けば松陰は

自宅蟄居の幕府裁決にも拘らず

常念寺通りの野山獄に入れられた。

何たる藩主慶親の無情ぞや。

烈々たるこの魂は入獄の数日後に

「二十一回猛士の説」を靈血で書いた。

「猛士」とは真理のために

猛然と戦う士の意。

第一は脱藩し浪士となり
全国を自由に旅したこと

第二は攘夷論を藩主に度々上呈したこと

第三は米艦による密航を企てたこと。

今後倒れるまで

皇国のため粉骨碎身の気魄。

彼は詩に曰く

「自非読万巻之書安得為千秋人

自非輕一己勞安得致兆民安」

(万巻の書を読むに非ざるよりは

いづくぞ千秋の人となるを得んや

一己の労を輕んずるに非ざるよりは

いづくぞ兆民の安きを致すを得んや)

と告白し且つ万巻之書を読みしのみでなく

齡三十路に満たぬに膨大なる著作を遺した。

その短命に凡夫百年かけて及ばざる

業績を遺した。

維新の烈士象山、松陰、南洲、龍馬の如き

*夷狄は未開の民、野蠻人。

*蟄居は近世、武士に科した刑の一つ。閉門のうへ、一室に謹慎させること。

*千秋は千年。永遠。

屈指の英傑の一人として*

維新の土台石とやがて成る。

野山獄にて一年間に五百余冊の読書振り

著述は『幽囚録』、『野山獄文稿』

『野山雜著』等九卷。

特に『幽囚録』は漢文七千字の名著。

下田踏海、国内情勢

諸外国の過去と現在、日本史の認識等。

彼は史家であり評論家であり預言者である。

『孟子』の名講義を半歳三十四回営んだ。

下田踏海は歴史的な事件にして

松陰の抱負と棄身の相を現した悲劇的行為。

彼は自ら次の如く詠んでいる

世の人はよしあしこともいはばいへ

賤が誠は神ぞ知るらん

神に知られ、神のみに知られていれば

それにて誠の平安あり

人の毀譽褒貶我に於て何かあらん。

この野山獄は南北二棟

第十三房の狭隘なる独房

十二名の同囚、囚人松陰の存在は

他の囚人たちに光となり力となり

獄の雰囲気は一変したという。

安政二年の年末出獄

父杉百合之助の家に幽囚。

幽囚とは外出禁、他人との面談禁の身。

さわれ父母兄叔父はこの猛士を

あたたかく迎えたので極楽幽囚である。

『孟子』の講義が身内を相手に続けられた。

その全講が即ち『講孟余話』である。

当時黙寡なる浄土真宗の僧あり。

私生児にして聾啞者なりしが

彼は勤王、一君万民の思想

幕政は覇道なるゆえに不可

わが国は王道なるべし王政復古を要すと。

松陰はこの僧の『柳子新論』を読み

*英傑といふすぐれた人物。英雄。

*毀譽褒貶い悪口とほめ言葉。

*幽囚い捕らえられて獄に押し込められること。

*覇道い中国の政治思想。実力者の行う武断政治をいう。
*王道い中国の政治思想。儒家が想定した徳治政治の理念。帝王が行うべき政道。

黙霖に降参して従来の「諫幕」は不徹底なるを悟り「討幕」に転じた。

実は松陰こそ尊王、討幕

開国の預言者であつた。

黙霖、討幕は時期来たるまでとて

黙していたが

時機を迎えずして刺客に仆れた。

野山獄を出で父の家に帰り

松陰三畳半の幽室に籠もる。

この度は「武教全書」の講義にかかる。

時に安政三年（一八五六）八月

聴講者は家族親戚数名のみ

講義は更に「日本外史」「陰徳太平記」

「春秋左氏伝」「資治通鑑」

聴講者の範圍拡まる。

松下村塾は本来叔父玉木文之進が

天保十三年（一八四二）に松本村新道の

自宅に開いた塾の名である。

松陰は塾の目的は塾生をして

進徳と専心の学徒たらしむにあつた。

時に若狭小浜藩を追われた浪人

松下村塾を訪ねた男、雲浜が居た。

彼は画策家にしてやがて安政の大獄の際

検挙されたが、その際松陰のことを語る。

ために松陰が検挙される端緒を作つた。

松陰の表裏なき誠の言が悪の世では

おのれを亡ぼす因となる。

ゲーテがそのことを『ファウスト』の中で

「おろかにもそれを胸に

しまつて置かずに

自分の観た所、感じた所を

世俗に明かした人達もあるが

さういう人達は礫にせられたり

焼き殺されたりした」（五九一―三）

と、ファウストをして語らしめている。

* 画策はかりごとを立てる。

門弟に久坂義助（玄瑞）、高杉晋作あり。

松陰は心親切、言丁寧

飲食起居も、読書著作も、すべて塾にて。

塾生は弁当持参、先生は粗衣粗食。

入門に際して先生の訊問は

「何のために学びに来たか」

「書物が読めるようにならまほし」

と言え

「学者になつてはいかん

人は実行が第一！」

行なき言は虚しとは松陰の本質。

ものすごき智の探究者松陰は

断じてあたまたの学者に非ず

真理探究は真理を生きたためのみ。

実践実存なき人生は彼にとり虚なり。

睡眠時間の短さは師象山に劣らず

万巻の書を読破する楽しみのゆえ。

著述もまた尽くるところを知らず

ために筆持つ指のタコは石の如し。

松陰は酒も飲まず煙草も喫せず

囲碁も将棋もたしなまず

されど戸外で草むしりなどの際

門弟らに史談など

語るをこよなき楽しみとした。

先生の「煙管を折るの記」は

今の若者たちや女性喫煙者に

読ませたき安政四年九月三日の随筆。

松陰は藩士とか平民の差別をつけず

いかなる人の子らも平等に聴講可

これこそ真に人格尊重の道念なれ。

而も両親よりも親身の指導を

少年らの本質洞察で行じた。

天賦の才能資質を引導する

これで教育の原義エデウコー

(educatio, e=out, duco=lead ラテン語)

エデューケーション (英)

*起臥||おきること、
ねること。日常の生活。

*天賦||生まれつきの性
質。天性。

エルツイーウンゲ（独）をなした。

松陰はまことの典型的的教育者であつた。

天下に松下村塾の名ある所以^{ゆゑん}。

松陰は門弟を真に活かす

門弟はこれに感激して勉勵する。

彼は彼らの師であり親である。

松陰の深い愛は母親からのもの

彼自身には妻なく子なし。

古来独身の者にして深い愛の人尠^{すく}なからず

イスラエルの預言者エレミヤ

日本の真言宗の木喰^{もくじき}上人もそうだった。

松陰は博覽強記、灯火^{とうか}乏しき夜には

ぶつつけ本番の自由講義

語る師も聴く門弟も酔えるが如し。

また彼が全国遍歴により見聞した

諸大名の施政、諸藩の教育を

適確に批判したのみならず

失敗の体験なればこそ逆手に

外国語習得を欣^{よろこ}ばず渡航を禁ずる幕政の
短見^{たんけん} 偏狹^{へんけつ}を批判した。

安政四年（一八五七）の晩秋

新講義室完成に際し入塾せし面々の中に

品川弥二郎、伊藤利助（博文）がいた。

安政五年（一八五八）の夏

松下村塾は幕府の正式認可を受けた。

しかし何がこの塾を待っていたか。

尊王攘夷派の大量検挙！

世に謂う安政の大獄という

最も悪^{にく}むべき権力者の暴挙。

これを導火爆発の引火線として

幕末の大動乱期が来たり

明治維新を迎えはしたが

その禍^{わざはひ}の余燼^{よじん}は消えなかつた。

ゲーテが『ファウスト』の中で

ヨハネ福音書の「元始に言ありき」を

「元始に行ありき」と

*短見＝あさはかな考え。
浅見。

*偏狹＝土地や度量のせまいこと。

*余燼＝燃え残りの火。

劇の主人公ファウストをして

訳し直させていることは深い洞察である。

行為に裏づけられざる言は虚しい意である。

神に於ては言即行、行即言の一如。

その心意が松陰にあった。

松陰は幼き頃より

賢明なる父母の訓育により

働きながら学ぶということが

身につけられた。

松陰の村塾は正にその如き実存的教育。

松陰曰く

「松本、ろうせん*陋村なりといえども

誓って神国の幹となさん」

と塾生に期待した。

江戸の風雲あやしと見るや

松陰は品川弥二郎を呼び寄せて

「村塾策問一道」なる檄文げきぶん*を刷らしめた。

これは幕府の設問に対する対抗文。

安政五年春四月

彦根藩主井伊直弼大老となる。

この人物がやがて安政の大獄の黒幕となる。

彼は開港通商貿易を迫るアメリカに対し

時の迫りを感じて勅許ちくしよ*を待つ余裕なしとし

安政五年（一八五八）六月十九日

ポーハタン号の艦上にて

日米通商条約に調印。

徳川の継嗣問題けいしよ*とこの違勅調印問題のため

政状は紛糾の渦中に入った。

松陰は西欧諸国の植民政策は

アメリカも同類と思っていた。

彼の尊皇攘夷は無理からぬが

象山の如く尊皇開国であらまはしかつた。

大義に準じて討幕を企図きと*していたことを

幕府の隠密に洞察されていた。

孝明天皇こうめい*の勅許なしの

日米通商条約は天皇の怒を招く。

*陋村ろうせん＝せまい村。

*檄文げきぶん＝自己の主張をかかげ、大衆に告げ知らせ、また決起をうながす文書。

*勅許ちくしよ＝天皇の許可。勅命による許可。

*継嗣けいしよ＝あとつぎ。

*企図きと＝計画すること。くわだて。もくろみ。

*孝明天皇こうめい＝第二二代天皇。明治天皇の父。

密勅が水戸藩に遣わされた。

この事態が安政の大獄への契機となった。

尊皇の烈士が京都には星の如し

井伊直弼の大老たる権力を

如何にして奪取せんかが謀られる。

はやくもその機運を察知せる

大老は尊皇討幕の志士を

投獄の挙に出でた、そは正に

安政五年（一八五八）秋九月であつた。

萩を訪ねたかの雲浜が

幕吏の取調べに對して

松陰を語つたことが松陰再逮捕の近因

松陰は純真そのもの、雲浜は奸智の人物。

密勅水戸派遣の二十余名の中に

頼三樹三郎あり、皆京都にて検挙

六角の獄に投ぜらる。松陰は奮然

間部老中斬奸物の連判状をものす。

塾生十七名がこれに血判を印した。

その中には品川弥二郎、吉田栄太郎がいた。

水戸、尾州、越前、薩摩の烈士が

江戸で井伊大老を

長州藩の義士は京都で間部老中を襲わん

以て討幕の導火線たらんとの決意であつた。

幕府の大老は巧智あり隱密を使つて

松陰の書きものをさぐらしめていた。

松下村塾長を捕らえ

二年四ヶ月を以て塾を閉鎖せしめ

安政五年の暮、杉家の幽室に蔽囚とされた。

松陰先生は門弟十人を幽室に招き

訣別の宴を開いた。

久保、佐世、岡部、福原、有吉

作間、杉藏、直八、栄太郎

弥二郎の面々であつた。

訣別の辞に曰く

「嗚余自ら視ること恒人の下に非ず

*幕吏＝幕府の役人。

*奸智＝よこしまな知恵。

*斬奸＝悪者を切り殺す。

*訣別＝断乎として別れること。いとまい。

常に言へらく、我れ同志と戮力協心

正義を村塾に唱へ以て国脈を培養し

天下を維持すべしと

自ら信ずること如此、豈はからんや

その忠と為す所以のもの忠に非ず

而して義と為す所以のものの義に非ず

徒に以て国家（長州藩）の

梗害とならんとは。

国家を梗害するは

我れの樂しむ處に非ず

請ふこれより戸を閉じて屏居し

蔽に諸君と絶たん。

諸君各々為さんと欲する處をなせ。

我は即ち静座黙処し

以てその如何を視ん耳

不日再び野山獄に投獄の通知が来た。

かの十名のうち八名が先生を訪ねた。

松陰の心中には次の言があった。

真の勤王が偽の勤王に忌諱されている。

偽の勤王は正に真の賊軍に

なるうとしている。

罪名明白ならば欣然として往かんのみ。

十二月二十六日入獄と決した。

病床の父杉百合之助に御挨拶に参ずる。

「一時の屈は万世の伸じや

くよくよすることはない」

が父の言、いよいよ近親に別れを告げる。

囚人の駕籠の中は真の教育者、愛国の人だ。

時しも雪が降りかかって来た。

道は白い。囚人の心の如くだ。

提灯の光は赤い。囚人の魂の如くだ。

松本橋を渡ると、待っていた面々がある。

吉田栄太郎、品川弥二郎、入江杉藏

岡部兄弟、佐世父子たちである。

彼らは自宅監禁の命を受けた者で

言にならぬ義憤の声が彼らの口から

*戮力＝力を合わせる。

*梗害＝ふさぐ害。

*屏居＝世間から身をひいてひっそりと家にこもる。

*不日＝日ならず。やがて。

*忌諱＝おそれ避けていること。

*欣然＝喜ぶさま。

言にならぬ悲憤の涙が彼らの目から。

松陰とのこの訣別は無念千万！

小田村伊之助は家に留まり

やけ酒を傾けつつ言つた

「これは不平の酒、百杯飲むも酔はじ

義卿松陰こそは忠義の士

上、天勅を奉じ

中、殿の御主旨を仰ぎ

下、胡虜の塵を払はんとせしぞ

それにも拘らず奸吏に睨まれ

投獄さるるとは何たることぞ

我その罪名を奸吏どもに問へど

彼らは答へ得ざりき

義卿よ往け、我は如何せん

大丈夫不平に報ゆる期必ず来たるなり」

かく独語して涕淚滂沱たり。

安政五年（一八五八）秋九月から

安政の大獄という人界の暴風雨が荒れ狂い

歴史にぬぐい得ざる血の痕をのこした。

あらしをまともに受くべきに非ずと

江戸逗留の高杉、久坂、飯田

尾寺、中谷の五人の門下

連署血判して松陰に告げた。

松陰はこれを門弟信頼の裏切りと思つた。

捕囚の身のゆえ、ただ悲憤の涙をのんだ。

隠忍した愛弟子どもは

決して師を裏切つたのではない。

やがて尊皇、討幕、王政復古の期を迎える。

松陰のひたむきの戦は悲劇を自ら招いたが

それが松陰の松陰たる不滅の光である。

神は烈々たる義の血と

深刻なる愛の血を以て

歴史の本流となし給う。

安政六年正月二十四日、松陰絶食に入る。

「われは尊王攘夷に生き

尊王攘夷に死す。

*義卿＝吉田松陰の字

（あさな）。

*胡虜＝北方のえびす。

*奸吏＝よこしまな役人。

*大丈夫＝立派な男。ま

すらお。

*逗留＝滞在。

*隠忍＝じつとがまんすること。

尊王攘夷に非ざればわが事止む。

午後から飲食を絶つ。……」

叔父玉木文之進これを聞き

「獄中の餓死大義に於て何の益ありや」
と諫止した。

特にこのことを驚き悲しんだ母瀧は

「……方一それにてお果てなされ候ては

不孝第一、口惜しき次第に存じ参らせ候

……短慮おやめお永らへのほど祈り参ら

せ候。この品わざわざ整へ差し送り候ま

ま母に對しお食べ頼み参らせ候……」

母の手紙に心動き

干柿を一つ喰い、水を飲む。

その味はネクタールであつたに相違ない。

安政五年末に、土家の岡部、福原

佐世、作間、有吉が

六年正月に足輕級の入江、品川、吉田が

夫々赦免されたことを松陰は欣んだ。

長州の藩主慶親は頼み甲斐なし。

下田港に於ける踏海、水野土佐守襲撃

間部老中要撃等事志とすべて齟齬

獄中の彼「心思錯乱」

次の如く絶望絶交を叫ぶ

「ぼくを狂となし

愚となすは万々の当なり」

「父兄親戚みな狂人もて

遇せらるるも覚悟

絶交の由を明告すべし」

「野山獄囚、姦婦賊子の伍たる

吉田寅次郎の如きは

公ら必ず交友の末におくことなかれ」

義人松陰、ヨブの如くおのれを呪う。

安政六年（一八五九）五月二十五日の未明

その前夜杉家帰還を許された松陰は

野山獄に帰るや、腰縄で縛せられ

網掛けの駕籠に押しこまれ

*大義に人がなすべき道とくに、国家・君主に對して、臣民が踏み行すべき道。
*諫止にさいして思いとどまらせること。

*要撃に敵を待ちふせしで、攻撃すること。
*齟齬に物事がくいちがう。

*賊子に不孝の子。反逆者。

青細引で四面が縛られ

錠前で閉じこめられた重罪人。

護送はもののしくも藩役人五名

中間十五名。道中は夜行を禁じ

夜は不寝番三人という厳重振り。

そは門弟乃至尊攘派の浪士等の

奪取警戒のためであつた。

縄掛駕籠は城下町を南下し

橋本橋を渡つて大屋峠の涙松に來た。

旅する城下の人がこの峠の松蔭で

涙ながらに城下町に別れを惜しむ

ところからかかる涙松の名が生れたが

松陰もこの松蔭で駕籠を停めさせ

扉を開けてもらひ萩の町に

今生の別れの黙礼合掌をした。

時しも天涙に萩の空は霞んでいた。

この松陰の心中を偲び

今は「涙松の遺址」と刻まれた碑がある。

松陰の身は縛せられようと

松陰の魂は天下を呑んでいる。

此の浪士は厳然と端坐している。

禪僧も彼の意気には如かじ。

正に一ヶ月の道中、松陰の心には

漢詩や和歌が迸るのであつた。

筆なき松陰はこれを口授した

中間としてもぐつていた者らに。

その和歌の中には次の如きが！

帰らじと思ひさだめし旅なれば

ひとしほぬるる涙松かな

ふりつづく五月雨霽るる頃はまた

人なやまする暑さなりけり

捕はれて行く身も君の恵なり

報ひでいかに我れおくべきや

夢路にもかへらぬ関を打ち越えて

今をかぎりと渡る小瀬川

安芸の国昔ながらの山川に

*中間 武家の召使の男。

*口授 口で述べ、教えること。こうじゆ。

*五月雨 陰曆五月ごろの長雨。さつきあめ。つゆ。梅雨。

恥づかしからぬますらをの旅

別れては再び淡路島あわじぞとは

知らでや人のあだに過ぐらん

一の谷いちのや討死にとげしますらをを

起して旅の道伴れにせん

こととはん淀の水車昔より

いく廻りして世をば経にしや

(いよいよ六月二十四日品川に到りつき

護送せし人々に別るるとて)

帰るさに雁かりの初音はつねを聞き得なば

わが音づれと思ひそめてよ

噫これらの松陰の歌を見ると

その背後には父の魂と母の愛が

変貌へんぼうして滲みでているのを知る。

正に人間松陰の床ゆかしさである。

六月二十五日

日比谷に当る江戸藩邸に着く。

待ち得たる秋のけしきを今ぞとて

勇ましく鳴くくつわ虫かな

この囚人松陰は、幕府の捕われ人ながら

幕府を審く義の権威者たるの気魄もて

評定所、幕府の最高裁判所に、駕籠に乗り

三十余名の藩士と中間の護送にて

藩の御紋入りの高張提灯たかはりぢようちんを押し立てて

一八五九年安政六年七月九日に到着した。

奉行等の訊問しんもんにいささかも臆せず返答

著書「狂夫の言」、「対策」

「時勢論」、「大義を議す」等

彼は公儀こうぎの忌諱きごに触れることを虞おそれず語り

老獪ろうかいなる石谷いしがや因幡守の誘導訊問に対して

下田踏海以来のことを堂々と告白した。

天下の大法廷にて思う存分

この義士は陳述した。

しかも所信の通り国事をも批判した。

「私には死に値する罪」二つあり

他人に迷惑が及ぶので語らじ」

*公儀＝朝廷や幕府など、
おりおりの政府。

*忌諱＝嫌うこと。恐れ
はばかること。

*老獪＝年久しく世俗の
経験を積んで狡猾なこと。

と死罪を覚悟の告白をした。
彼を死にわたすその死罪は

幕府こそ滅亡だとの逆説的表現である。

幕府の訊問は断罪に決し

下役どもが彼に縄をかけた。

かくて松陰は四年十ヶ月ぶりに

即日、伝馬町の牢獄の門を再びくぐった。

牢中の松陰、同じく捕囚の沼崎に

『孟子』『孫子』の講義をなす。

高杉晋作には獄中から書翰十五通。

九月五日、第二回評定所尋問にて

間部老中要撃のことを質さる。

決死の覚悟にて諫争の旨を告白。

言を左右せざる松陰は

かくて自ら死罪を招く。七日には

頼三樹三郎、橋本左内、飯泉喜内処刑。

徳川幕府の隠密組織は家康以来の伝統

全国諸大名は徳川の謂わば司法権力下。

断じて善政に非ず

代官の悪政これに加わる。

徳川三百年の真相は暗黒時代

封建制の下にいかに無数の人々が

義血を流し悲涙に泣きしや。

井伊大老の懐刀、長野主膳により

吉田寅次郎、梁川星巖、頼三樹三郎

池内大学、梅田源次郎等は

討幕の黒幕としてブラックリストに在り

評定所訊問はこれを確かめんための

表向きの体裁審判に過ぎず。

義人松陰こそはその首魁であつた。

水戸藩の茅根伊予之介、越前の橋本左内

安政の大獄の犠牲の中にあり。

秋十月の半頃より松陰は遺書にとりかかる。

「親思ふところになさる親ごころ

けふの音づれ何ときくらん

位牌と墓碑には『松陰二十一回猛士』と

*諫争||いさめ争う。

*懐刀||知略にすぐれ、
秘密の計画にあずかる腹
心の部下。

*首魁||張本人。

のみを記されたし」

噫烈々国を憶う義人烈士吉田松陰

松陰先生のこの二十一回は無限回なり。

神の国到来までの義戦の悲願なり。

次に証めた「諸友に語る書」には

「下田踏海のとき幕府のために

死すべきの一

幽囚の我に交らぬ恩顧の藩主のために

死すべきの二

天皇のために死すべきの三

これら三つの宜しく死すべきありて死す。

死すとも朽ちず、また何ぞ惜しまん。

橋本左内、頼三樹三郎らの死に

後るべけんや」

と。これら「ために」の意何ぞ床しき。

安政六年十月二十五日から遺言書たる

『留魂録』にとりかかる。その冒頭には

「身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも

留め置かまし大和魂

十月二十五日 二十一回猛士

同書の末尾には最早思い残しなしと結び

「呼び出しの声まつ外に今の世に

待つべき事のなかりけるかな

討たれたる吾れをあはれと見ん人は

君を崇めて夷払へよ

愚かなる吾れをも友と愛づ人は

わがとも友とめでよ人々

七たびも生きかへりつつ夷をぞ

攘はんこころ吾れに忘れめや

十月二十六日黄昏書す 二十一回猛士

松陰はこの『留魂録』を二通作製

一通は失せて現存せず

他の一通は同囚沼崎吉五郎に

「諸友に語る」と共に托す。

沼崎は三宅島へ遠島、明治九年赦免後

神奈川県令になりたる野村靖に手渡せり。

*黄昏＝たそがれ。夕ぐれ。暮れ方。

*遠島＝江戸時代の刑の一つ。伊豆七島・佐渡・五島などの離島に送る刑で、死刑に次ぐ重刑。島流し。流刑。

現に萩市松陰神社に保管されてある。

処刑

安政六年十月二十七日の早朝

いかなる声か松陰を呼びしや

此の程に思ひ定めし出立は

今日きくこそ嬉しかりける

筆跡の乾く間もあらなく

彼は駕籠の中の影

龍ノ口の評定所へと運ばれる。

申しわたしの声は「死罪」

駕籠から引き出されし人は

潜戸くぐりこから獄卒に導かれて被告の座に。

彼は一揖いちゆうして列座の役人らを睥睨へいげい

蓬々たる鬚髯しゆぜん、炯々たる眼光けいげい。

松陰の胸中烈々火の如し。

汝ら何ぞ我を罰するや

天我を知る、汝らに没落ぞ待つ。

彼の無言の言は如此かくのごとくなりしならん

この道義の人に死罪宣告の文！

松陰起立し、立会の長州藩人小幡に一札

彼潜戸を出づるや朗々と吟誦ぎんしやうして曰く

「吾われ今国こくの為に死す

死して君親きみに負かず

悠々ゆうゆうたり天地の事

鑑照は明神めいじんに在り」

座にありし幕吏まくりども

おのずから肅然しやうぜん、襟えりを正して耳傾けぬ

小幡高政肺腑ふくを抉らるるの覚えあり。

噫義人松陰は勝てり

死刑何ぞ彼の魂を絶ち得んや。

義人の駕籠は伝馬町に馳せ帰る。

獄に入るや

松陰同志の面々堀江、長谷川、小林に黙礼

辞世の和歌「身はたとひ」と

漢詩を三度朗唱

*一掛いかりに会釈すること。

*睥睨へいげい横目で見ろ。

*鬚髯しゆぜんあごひげとほおひげ。

*炯々けいげい光りかがやくさま。

*肅然しやうぜんかしこまつて静まるさま。

斬首ざんしゅの場ばへ曳ひかれゆく。役人やくにんどもに一揖いちいつし

「苦くる勞らうさま」

と一言いちごんして端坐たんざした。

その堂々たる態度に幕吏まくりら深く感動。

「何か申し残のこすことありや」

との刑吏けいりの間

「この期きに及およんで

今更申いましめすることござらぬが

某それがしがいざと言いうまで

斬首ざんしゅをお控ひかえ下くだされ」

辞世じせいの和歌と漢詩を三度び朗吟らうぎんし終り

「ござうござうぞ」

と今生最後の一声いっせい

斬首の刑吏の白刃はくじん閃ひらめけは

松陰の魂は武蔵野の天に

遺体は伝馬の地に。

時正に十月二十七日の四ツ時午前十時。

江戸を隔たる三百里の萩の実家では

長兄梅太郎、末弟敏三郎

枕を並べて病床にあり

父百合之助と母瀧これが徹夜の看病

明け方父も母もまどろみ居たり。

母は夢の中で元氣な松陰の帰還に遭い

「まあ、寅次郎」

と歎声をあげて目が覚めた。

父百合之助は夢の中で

おのが首を斬り落された！

然るに心地よし、何故ぞ……目が覚めた。

兩人ともこのことを秘して語らず

二十日程経て

松陰江戸にて刑死すの報せあり。

数えて見れば正に刑死の晨あしたの夢なりし。

松陰が江戸の獄中から寄せた最後の手紙の

末尾に記された予言的な歌

親思ふ心にまさる親心

今日の音づれ何ときくらん

が両親の心耳しんじに現に響くのであった。

長州藩の尾寺新之丞しんのじやう、飯田正伯

桂小五郎かうごろう（木戸孝允）、伊藤利助（伊藤博文）

小塚原の回向院にて遺体引き渡しを受ける。

松陰の遺体は四斗桶しとの中に

生ま生ましき血の痕のまま

乱れ髪が顔にかかったまま

うずくまれる全裸の御姿であるが

その顔色は生ける松陰である！

痛恨やる方なく四人は涙も流れない。

門弟らは然るべく衣をまとわしめ

橋本左内の墓の隣に葬った。

数日の後、飯田と尾寺が師の碑を立てた。

「松陰三十一回猛士」と中央に大書し

「安政己未十月念七日死」と右側に

「吉田寅次郎行年三十歳」と左側に

添え書きし辞世の漢詩を右側面に

「身はたとひ」の和歌を左側面に記した。

「自非読万卷書安得為千秋人

自非輕一己労安得致兆民安」

（万卷の書を読むに非ざるよりは

いづくんぞ千秋せんしゅうの人となるを得んや

一己の労を輕んずるに非ざるよりは

いづくんぞ兆民の安きを致すを得んや）

松陰自身此の詩句を身証しんしやうした。

安政の大獄の犠牲となつた松陰先生の死は

日本国の一大損失であつたが

その生きざまは日本精神史において

第一等星の光輝をはなっている。

西郷隆盛

— 大人物 —

九州南端、薩摩大隅両半島の

抱く鹿児島湾の奥深き

桜島火山の噴煙を

おのがたましひの呼吸の如く

眺めて生くる大の雄の児

彼は桜島西方鹿児島市加治屋町の

賤が屋の士の児

氣宇は広大、外貌悠揚

一切を包摂する如き氣概あり

常人の端倪すべからざる存在である。

幼少の頃から聞かん坊で

寡黙にして体あたりの豪の者

また何ごともしき受ける太っ腹。

誰あらん、これこそ若き西郷さん！

喧嘩は滅法強かったが

右腕を斬られた災難のため

文の道に力を入れ始めた。

先ず福昌寺の無参和尚のもとで

禅の道にたましひをうち込んだ。

朴直にして聡敏、読書を好む。

さいごう たかもり

一八二七―七七年。明治初期の政治家。薩摩藩出身。通称は吉之助。号は南洲。明治維新の指導者として活躍、新政府最高首脳となる。征韓論を唱えて敗れ、鹿児島で私学校を開く。明治一〇年（一八七七）西南戦争を起したが、敗れて自殺。

*氣宇ハ心の広さ。

*悠揚ハゆったり落ち着いているさま。

*端倪ハ推し測ること。

読書多岐に亙り且つ深く

事物の神髓をよく把握する。

而も彼の人格の中心は畏敬の念と

想い遣り深き愛であるので

彼の至言

「敬天愛人」

の言以前にその実存の人であつた。

成人しては貧困者、弱者、農民を深く顧み

何ごとも無げに荷つていた。

彼が二十有六歳の時

嘉永五年長月に父が他界。

ついで霜月に母が身まかつた。

遺児は四男三女であつたが

長男たる隆盛は役人になり

鋭意日夜働いて弟妹を養い

更に亡父の借財を二十五年目には

返済し終り重荷をおろした。

領主島津斉彬は名君

西郷は衷心からの尊敬をもて彼に奉仕した。

人物島津公は、庭方役の身分は低き

このただならぬ男を見抜いていた。

安政元年四月、小石川なる水戸藩邸で

西郷は藤田東湖に初めて面接。

東湖は同行者樺山に向い

「六十余州士気の振わぬこと

今日の如きは未曾有」

と、宛然平成四年の日本の政界の如き

幕府を貶し、義人いずこに在りや

一国の正気は断滅に近しと断じた。

眼光炯々山伏か山賊の如き

東湖の慨嘆に、さすがの西郷も感服し

両者は肝胆照応するのであつた。

西郷は藤田東湖先生といつて

敬意を表したが、東湖はまた

「貴殿の如きが斉彬公を戴いて

ことを計れば外敵何ぞ恐れん」

*長月＝陰暦の九月。

*霜月＝陰暦の十一月。

*宛然＝そっくりそのまま。あたかも。

*慨嘆＝国家・社会のありさま・なりゆきなどについて心を痛めること。

と、大いに鼓舞^{こぶ}激励^{きつ}するのであった。

安政二年十月の大地震に際し

東湖が不運にも仆^{たお}れたと聞き

西郷は男泣きに泣いた。

その後越前の藩士橋本左内が

天下の大勢を滔々^{とうとう}と論じたので

西郷はこれにも敬服した。

然るに安政四年七月十五日に

主君斉彬の他界を知つて

西郷は号泣^{ごうき}した。

幾日も悲哀に沈んだ。

僧月照^{げつしょう}も悲しみの極みであつた。

踵^{かかと}を返せば勤王派の身辺危き京都。

月照を駕籠^{かこ}の鳥の如くし

西郷はこれにつき添^すつて

京都を去りゆくその相^{すがた}は

病者を運ぶが如き歩度^{ほど}。

密偵のたむろする茶店に

故意^{こい}に立ち寄つた。

巨大な西郷すら認め得ぬ

彼らの眼はふし穴か

西郷の豪胆^{ごうたん}の勝ち。

九月二十四日二人は大坂を出帆^{しゅつぱん}。

月照はいずこかと追手はこなた、彼方^{かなた}へ。

船中で月照はこう詠^{えい}じた

難波江^{なんばえ}のあしのさはりは繁くとも

なほ世のために身をつくしてん

六昼夜を経て馬関^{ばかん}の港につき

西郷は月照と別の路を辿つた。

月照もたくみに道を辿^{たど}り薩摩についた。

弓矢とる身にしあらねどひとすじに

立てし心の末はかはらじ

と月照。西郷は

「時来たれり、法華^{はつげ}嶽寺^{かくじ}にお伴せん」

月照と西郷は乗船、薩摩^{さつま}は鏡面^{きやうめん}の如^{ごとし}。

「満月中天に在り、いざ飲まん哉！」

*鼓舞^{こぶ}人^{ひと}を励まし、ふ
るい立たせること。

*豪胆^{ごうたん}ものに動じない
さま。

*馬関^{ばかん}下関の旧称。

夢か現か、船上の笛の妙音に聴き入る二人。

船は花倉の沖にさしかかった。

余人が眠氣に襲われた隙を見て

二人は相抱いてどぶんと龍宮城へ！

その水音に驚いて平野、阪口、重助ら

思い思いの行動をとり、海面を見たが

二人を呑んだ海波はもとのまま。

西郷さん！ 月照和尚さん！

との絶叫も

船頭の漕ぎ回りも空しくあつた。

すると突然、抱き合いの二つの軀が！

急いで船に引きあげ、岸边に漕ぎつけ

最寄りの漁夫を呼び集め

焚火で溺身をあたためた。

月照は膚色白く女体のようだが

既につめたく血の気なし。

西郷は息を吹き返し蘇生した。

その懷中から月照の筆跡とおぼしき歌

曇りなき心の月も薩摩湯

沖の波間にやがて入りぬる

大君のためにはなにか惜しからん

さつまの瀬戸に身は沈むとも

薩摩藩では西郷と月照が

海に投身して果てたと発表。

情の深い西郷は、おのれのみ生き還りしを

長らく苦悶したのみか、その心の痛み

生涯消え去ることはなかった。

月照の十七回忌

明治七年霜月十六日の句に

相約して淵に投ず後先無し

豈図らん波上再生の縁

頭を回せば十有余年の夢

空しく幽明を隔てて墓前に哭す

かくて彼は泣き伏した。

悲歎は悲歎、西郷は悲しみを乗り越えて

相も易らず孜々読書に沈潜した。

*大君＝天皇の敬称。

*幽明＝来世と現世。

*孜々＝熱心に励むさま。

藩命により大島に流された。

時に安政五年の暮。

三十二歳、変名して菊池源吾と名乗った。

島の人々はこの巨漢をはじめは恐れたが情愛深き彼を頼もしき人と親しんだ。

代官の苛政に苦しむ島人のため

西郷は毅然と然るべく抗議した。

かくて流島生活空しからず。

島人佐營志愛子が彼を慕い

彼も孤独を慰められ、おのずから

愛情交い、同棲するうちに

男の子が与えられた。

その名は菊次郎、文久元年正月のこと。

翌年七月には長女菊子が生れた。

西郷は既に鹿児島に帰還。

しかし島庁の島民に対する苛政を視

例えば甘蔗砂糖製造のことにしても

その過酷な呵責に彼は断乎抗議した。

弱者の味方をする、幾種、幾度なるか。

西郷は正に無名の天誅的な大裁判官。

嗚呼此の如き大人物

今の日本にあらまほし。

文久二年三月、九州各地を視察して

下ノ関で、久光公の如き「地ゴロ」に

何ができるかと

小松帶刀との激論中に放言したことが

愚物久光の耳に入るや、激怒して

上京中の西郷を徳之島流しに処した。

八月の末つかた龍郷村から愛妾愛子が

菊次郎と菊子を伴れて訪れた。

在番附役中原万次郎が令書を呈した。

それにより、彼は更に沖永良部島へ。

帶刀は奪われ、流罪人扱いだ。

どんな運命になろうとも

そんなことで動ずる西郷か。

船中も牢屋同然、だが彼の心は大海同然。

*苛政＝悪政。圧政。

*甘蔗＝さとうきび。

*呵責＝むごく責めること。

*天誅＝天に代わって不正を懲らしめること。

*帶刀＝刀を腰につけること。また、その刀。

島に着く

「今からは流罪人でござす」

「どうかこの馬にお乗りやつたもんせ」

「もう二度と土をふむこともなからう」

最後の土を踏ませてくいやつたもんせ」

在番所わじまろの和泊村まで一里の道を

感無量で彼は歩き通した。

西郷の牢獄は二坪ほどの狹隘きようあいさ。

壁も戸もなく、粗末な格子づくり。

風雨の吹き漏れ晒しざらしの中で

西郷は端坐たんざして沈思黙考しんしもくかう、巖いわの如し

ロダンの「考える人」も及ばず。

口に入るは一飯一菜、さすがの

大男も日に日に瘦やせたが

一言の不平もあらなき默然人もくねん。

さわれ、彼の心と魂之靈たましひは

国状政状への洞察に

千里の靈眼あるを誰か知らん。

間切横目の役職の土持政照は

西郷の大人格に感動し

好意を傾けて便宜べんぎをつくした。

獄舎も新造、食事も改良

因つて健康ももとに復した。

「ありがとうござす」

西郷は熱き友情に

繰り返し繰り返し感謝した。

四方山よもやまの談論に政照は感激し

兄弟の好誼よしみの如き心地となつた。

西郷の楽しみは性来の読書

行李こうり三個の書物に読み耽ふける。

彼に接する子供にも大人にも

何くれとなく有益な話を聞かせた。

人の生活は無欲第一、自愛禁物

敬天愛人は天道人道。

他に仔細しさいこれ無しが彼の人生道。

クラークさんのビー・ジェントルマンも

*狹隘||面積や心持が
せまいこと。せま苦しい
こと。

*默然||だまっているさ
ま。

大西郷の「敬天愛人」には及ばない。

政照が飢饉ききんの如き天災には如何せんと訊ねれば西郷の答えはこうだ

「救民のため平生の

穀類甘蔗の貯蔵が大切でござす」

この言を違まちつて事実済民さいみんができた。

西郷の島生活一年八ヶ月

代官の圧制に抗し、島民のため

政状変革を進めてやった。

ゲーテがヨハネ福音書劈頭へきとうの

「元始はじめに言ありき」を

「元始に行為ありき」と改変したが

西郷こそは正にその実践者。

文久三年初夏の頃、生麦事件なまむぎ

即ち薩摩の武士が英国人を斬った事件を

案じて涙もろき西郷は涕淚ていれい滴々。

政照も涙ながらに歎いた。

防戦のため財を投じて造船を企てた。

見よ、鹿児島さつごの武装商船が英艦を撃退した。

因よつて新造船を報恩丸ほうおんと命名した。

流罪の身ながら郷土心の深い西郷。

在都薩藩志士の運動に因り

元治元年二月下旬

丸に十字（⊕）の藩旗の船が

島の伊延港に近づいた。

西郷はこれを見て両眼から涙が溢れた。

赦免しやめん状の使者だが、何の赦免ぞや！

大西郷を島流しにした領主こそ

赦免を乞うべきだ！

だが西郷にはいささかの忿怒ふんごもない。

「獄裡ごくりの仁恩謝するに語無し」

とて、親しんだ島民を愛惜して涙した。

弟の慎吾しんごも迎えに来たので、相擁あいきして感涙。

「天下の臥龍かりゅう」の帰還きかんを待つ

* 済民さいみん 人民の難儀を救う。

* 赦免しやめん 罪・過失をゆるすこと。

* 忿怒ふんご 怒り恨む。

* 臥龍かりゅう 寝ている竜。いつかは雲雨を得て天に上るが、今は伏している龍。機会を得ないで、ひそんでいる英雄。

国情は何を西郷に課せんとするや。

その頃徳川幕府は衰勢そのもの

今や日本は天皇統治を迎えるべき時期

明治元年二月、討幕の詔勅下り

西郷隆盛は官軍の大参謀となる。

幕府最後の人物は勝海舟。

芝高輪の薩摩邸で両雄は相会した。

「勝さん、なかなか、大変でござすなあ」

「わからずやが多いので！ 心配でした

だが、あんたが来られるので

安心しました」

「議論はともかく

私が挺身引き受け申す」

江戸城開城にあたり

大江戸を火にせぬことを

西郷はしかと約し、総攻撃中止命令を

海舟の面前で実施した。

人物同士のあざやかな決断決行。

官軍の兵が門前で海舟を取り巻いた。

しかし西郷を見てさつと囲みを解いた。

明治元年晩秋、薩摩軍鹿児島帰還。

彼は愛犬四、五匹を伴れて

狩猟したり、入湯したり。

悠々自適、自然を愛し、読書に楽しむ。

その日当山温泉生活を中止した。

藩王忠義が薩摩の全政を彼に委ねた。

明治二年六月、彼は維新第一の元勳として

石や位階の賞典に与かるところ

そんなことは戦死者に申し訳なきこと也と

一切辞退する空漠大氣の如き西郷。

大器何をか要せん、これが西郷なのだ。

しかし国家が彼を要するを如何せん

明治五年、彼は陸軍元帥

近衛都督に擁立された。

明治四、五年頃の参与官の月給五百円

西郷はそんな多額は要らんといつて

* 詔勅 天皇が意思を表明する文書。みことのり。

* 悠々自適 世間のわずらわしさを離れて、心静かに暮らすこと。

* 元勳 国家に対する大きな勲功のある人。

* 賞典 ほうびとして与えられるもの。褒賞。

* 空漠 何もなくて広々としたさま。

* 元帥 軍の総大将。

* 擁立 支持し、もりたてること。

受給を拒んだ。

家賃三円、下僕の熊吉、犬二匹

生活万端月十五円以上は不要。

ある日大蔵省の洪沢栄一を訪ねた。

洪沢が

「西郷さん、あなたは月給を

ちつとも受けとらないので

係員が大へん困迷していますよ」

「はあ、お金が余っているので

要りません。上に立つ役人は

質素儉約^{けんやく}を旨^{しね}とせにやなあ

上位の者が立派な家に住み贅沢^{ぜいたく}をしたら

維新の大業は大成しないと思ひます」

洪沢は時の状勢を想うて胸を刺された。

洪沢は彼の忠僕熊吉を呼んで無理に渡した。

西郷は熊吉のもつて来た袋を見て

「そうか、そこへ置いといてくれ！」

青年らが困つて西郷におねだりに来た。

大先生は

「そんな棚のもの、いるだけもつていけ」

みんなは思ひ思ひに要るだけ取り出して

「先生、ありがとうございます」

と低頭！

ああ美しきかな、無慾の大人物。

「生命もいらず、名もいらず

官位も金も要らぬ人は

仕末^{しまつ}に困るものじゃ。

この仕末に困る人ならでは

艱難^{かんなん}を共にして国家の大業は

成し得られぬなり」

の告白を言以上に身証したのは

言うまでもなく大西郷であつた。

法華経の行者日蓮は

「我は日本国の柱なり」

と宣言したが

大西郷こそ明治維新時の大黒柱。

西郷精神こそ不滅の靈柱だ。

昨今の日本の政治家たちよ、御身らは

上野の大西郷銅像を空しく立たしむるや。

さて維新の大改革として必然なすべきは

廃藩置県であつた。

西郷、大山、大久保、山県、井上

木戸の面々が明治四年七月談議を開いた。

諸々の藩勢の根は深い。

おいそれと廃藩の気は起き難い。

「唯断行するのみだと思ひ申す。」

何か不都合が起つたら

みんな私が御引受け申す」

こんな断行のできるのは西郷の他に無い。

彼は何ごとに限らず難局には棄身だ。

明治天皇西郷を宮中に召して問い給うた。

「畏れながら、西郷の在ます限り

御安心いただきますように！」

四年七月十四日、廃藩置県の大令公布。

薩摩では愚公久光が、予告なしとて不機嫌。

西郷は既に国家の大西郷である

薩摩からは文字通り

身を投じ出でた出身者だ。

韓国との国交が思わしくないままに

西郷は単身出向いて

談判をしたいと申出でた。

愛に基づく理性を以て談合するのが

最善と確信していた。

断じて征韓の如きを考へてはいない。

世に西郷の征韓論など称うは大誤解。

敬天愛人は敬天善隣でもある。

明治六年八月

閣議は西郷を遣韓大使と決した。

大久保、木戸、岩倉が相次いで欧米から

帰国、彼らは内政充実を主張して

西郷の遣韓に反対。

會議の結果遂に遣韓中止となった。

明治六年十月二十二日の閣議に於て

西郷は遂に退席、二十四日に辞表呈出^{ていしめつ}。

西郷は議席を棄て行方不明者となった。

数日後、黒田清隆が居所を發見。

「迷惑をかけてすまんなあ」

駿河^{するが}の徳川氏と庄内の酒井氏に後を頼む

と伝言を託した。

かくて西郷は政界からはつきり去った。

鹿児島に帰ったのは明治六年十一月

武村を住居とし、百姓になった

時に四十七歳。馬に桶を荷^にわせて

肥料をもらつて歩いた。

家には長男寅太郎^{とら}（七歳）

次男午次郎^{うま}（三歳）

生れたばかりの三男酉三^{とりぞう}の兄弟三人。

近衛隊の兵士や官吏が西郷を慕つて従行。

西郷は今こそ人材養成と想い立ち

私学校を城山^{しろやま}の麓^{ふもと}に建てた。

構成は銃隊学校と砲隊学校より成る。

篠原国幹^{しのはらくにこと}が前者の、村田新八^{しんぱち}が後者の監督

英人コックス、蘭人スケツフルを

講師に任じた。

校訓は簡潔に次の二項のみ。

一、道を同じうし義相協^{かみ}うを以て暗^{あん}に集合

せり、故に此理^{この}を益^{えき}研究して、道義に

於ては一身を顧みず、必ず踏^{ふみ}行^{かう}うべき事。

一、王を尊^{この}び民を憫^{あわれ}むは学問の本旨^{ほんし}。然ら

ば此天理^{この}を極^{きわ}め、人民の義務^{きむ}にのぞみて

は一向難^{ひたすら}に当り、一同の義^ぎを立つべき事。

他に開墾社^{かいこん}を農村のために作り

昼は耕作、夜は勉強。

出でては農事に精勵^{せいれい}することを青年に求め

入りては読書に専念^{せんねん}することを勧めた。

市内各町に分教場を設け、百二十四の

*本旨＝本来の主旨、目的。

*精勵＝仕事につとめ、はげむこと。

各郷に分教場を設けた。その他に

幼年学校（後の陸軍幼年学校の母体）を

設置し、鍛錬第一を校是となした。

あらゆる教育機関の根本精神は

校規を内面から捉えて

自主的に欣然と果すこと。

即ち、労を愛し、書を愛し

同僚を愛する人物となること。

情愛深き大西郷のおのずからなる

影響は推して知るべしである。

学風は千里を遠しとせず

親しき友人に知れ、東方の雄勝海舟は

東京から二人の青年を派遣した。

庄内（山形）からも

少なからざる学生が来た。

大校長の愛は、一例をあげれば学生どもの

鰻の代金未払にまで無言の中に。

明治七年十一月

武村の西郷を訪ねたある男

それは月照上人のお伴の重助だった。

西郷は忘れもせぬ月照とその十七回忌。

「ようこそ来てくいいやった

ありがとうござす！」

西郷はもう涙、感慨無量。

重助も涕淚滂沱。

「主人に一目でも

念願どおりのこの世を！

あなた様の陸軍大将の御姿も」

「何をいいやつか。

私は御覧の通りの百姓じゃ

生きのびているのが

恥しい位に思つとる」

月照が天界から照覧し加護してくれたのだ

西郷の胸中には感謝の涙が湧いていた。

翌十六日の命日に、二人は月照の墓詣。

*校是は学校の定めた教育上の方針。

*欣然は喜ぶさま。

*涕淚滂沱は涙がとめどなく流れ出るさま。

丁重な法要をなし

墓前で西郷は声を出して泣いた。

南林寺の墓には命日毎に墓参をしている。

重助を案内して、入水した浜辺を歩いた。

重助の所望により、折よくも二、三日前に

この日を憶つて作つた詩を書いてやつた。

月照和尚忌賦

相約して淵に投ず後先無し

豈図らん波上再生の縁

頭を回せば十有余年の夢

空しく幽明を隔てて墓前に哭す

武村 吉

重助これを拝読して涙とまらず。

武村吉こと西郷の家を辞したが

振り返り振り返り、眼も霞んで夢か現か

西郷も

「達者でな、達者でな！」

と眼をうるませて。

これが今生の生きわかれとなるとは！

「月照和尚忌賦」は重助の家玉となつた。

隆盛の弟従道も将軍だが

フランスで従軍もしたフランス軍服で

兄に眼見えての閑談はまことに楽し

彼はまた台湾の軍制にもあづかつた。

性格は兄に似て大度にして思い遣り深き人。

まことに美德の兄弟である。面談三日

ではさよならが生別となつたとは。

当時士分の子弟は百姓を下僕視した。

ある士分の少年が途で鼻緒が切れた。

「こら、そこん百姓

こいつを直せつくれんか」

「はあ、わかりました」

手拭いを裂き、鼻緒をたて直して

「こいで、ようごわすか」

*入水＝川や海などには
いつて自殺すること。身
投げ。にゆうすい。

*閑談＝のんびりと話を
すること。

*大度＝心の広いこと。

*生別＝いきわかれ。

*士分＝武士の身分。

「うん、よか。おいが足にはかせろ！」

少年は礼も言わずに去った。

後になって、あの百姓が西郷先生と知り
ぶつ倒れんばかりの驚愕でお詫びに赴く。

「先生、大変な失礼

赦してくいやったもんせ」

「いやいや、そげんこといわんでもよか」
百姓になりきった気持の先生は微笑だけ。

また一方、私学校の青年教育は

いざ鎌倉というとき生命を投げ出して

国家のため尽さんためである。

その自覚なき青年らは西郷に大喝された。

青年らの中には後の日露戦争時の

將軍山本、上村の如きもいた。

人材を知る西郷は、その一人一人が

無駄死にをせぬように遠謀深慮した。

私情小成に非ず、大愛大義の心情であつた。

明治元年の戊辰の役に際し

庄内藩（今の山形県）は官軍に抗したが

その過誤を悟り、謝罪降伏した。

時の官軍参謀黒田清隆は

庄内藩の誠意を諒承

寛大なる処置をしたので

爾来庄内藩は処置の大本たる

西郷隆盛の大幅度に感激して

薩摩に対して親交を誓った。

西郷は武人の誓を無条件に受諾した。

昨日の敵は今日の友

これが黒白顕然たる人格者同士の

信頼関係というものだ。

庄内の人心の気風は春風の如くなった。

明治三年十一月、庄内藩主酒井忠篤

藩士七十余名を引き具して

鹿兒島に赴き西郷の指導に与かつた。

*驚愕したいへん驚くこと。

*大喝＝大声でしかりとばすこと。だいかつ。

*小成＝小事をなしとげること。少し成功すること。

西郷は天下の師だ。

藩士菅実秀も上京して西郷に面接。

「生命も要らず、名譽も要らず」

官位も爵禄も要らぬ者に非ずんば

共に廟堂に立ちて

天下の大政を論じ能はず」

菅はこの言を聴いて

西郷先生こそその人なりと感じ入り

全身が電光に貫かれる想いであつた。

この世紀末の政界に

斯かる人物何処にありや。

某日、深川の別邸に庄内の重臣らを招いた。

その席上、次の詩を書いて与えた。

「幾びか辛酸を歴て志、始めて堅し」

丈夫玉碎するも顛全を愧づ

一家の遺事人知るや否や

児孫の為に美田を買はず」

明治五年四月

庄内の忠篤は清隆の勧めにより

獨逸留学を志す。

彼、西郷を訪ねて教を乞うた。

西郷の訣別の言の主旨はこうだ。

「黒白を明かにせよ」

白と断ぜば決然と行へ。

道にこの他仔細なし。

風聞によればドイツ人ビスマルクは

豪傑にして技能なき人。

外遊に幸あれ」

「技能なき人」とは「君子器ならず」の意

君子、即ち有徳の人は器ではなく

徳化力ありの意。

即ちビスマルクは大人物だということだ。

因みに言わん、秀吉も家康も

大物ではあるが大人物ではない。

大人物は果して幾人ありや。

*爵禄＝爵位と俸禄。

*廟堂＝朝廷。

*大政＝天下の政治。

*顛全＝なんら世のため

に尽くすことなくむなし

く生き長らえること。瓦

のようにつまらぬものと

なつて生命を全うする意。

*一家の遺事＝わが家の

遺訓。

*黒白を明かにする＝善

悪・正邪など、物事の道

理をはつきりさせる。

*風聞＝うわさ。

古くは空海、法然

近くは象山、松陰、西郷隆盛

大山、乃木、東郷であろう。

西郷の住居は粗末そのもの、門なしだ。

庭池は鹿兒島灣、庭山は桜島

大自然の他に何が要るかというものだ。

室の常客はワシントン、ナポレオン

ペートル大帝、海将ネルソンの四人だ。

彼らは壁から話しかけているのだ。

庄内の菅と西郷の交友は深い

菅への詩に次の如きがある

「相逢うて夢の如く又雲の如し

飛び去り飛び来り悲しみ且つ欣ぶ

一諾半銭季子に恥づ

昼情夜思君を忘れず」

菅は弟子どもと『大西郷遺訓』を出版

そは明治二十三年一月

永く遺る名訓である。

「節義廉恥を失つて

国を維持するの道決して有らず」

「何程制度方法を論ずる共

其人に非ざれば行はれ難し。

人有つて後方法の行はるるものなれば

人は第一の宝にして

己れ其人に成るの心懸け肝要なり」

「道は天地自然の道なるゆゑ

講学の道は敬天愛人を目的とし

身を修するに克己を以て終始せよ」

ここに揚げた最後の一節は千古の名言！

西郷は天を相手として生きた人

天意第一、まことの宗教心である。

天道こそまことの人道

万人は宗教人たるべしと謂うに同じ。

何宗何派などを問題にするは

* 廉恥は心が清らかで、恥じを知ること。

真の宗教に非ずだ。

日々宗教を生きていることが宗教の本義だ。

西郷の私学校の精神を誤解乃至猜疑して

多くの密偵がうろつき出した。

警視庁の探索ちがいは言語道断。

西郷を始め幹部暗殺の謀略は何ごとぞ！

火薬庫を爆破し

騒乱に乗じてこれを果さんとする！

騒然たる情勢に弟子どもは奮然蹶起。

西郷は、天知る、隠忍、自重を促した。

刺客が西郷を外見わからぬが如く訪ねた。

そんなことの洞察できぬ西郷か。

何をか恐れん、彼は悠然として談笑

彼の偉大さに圧倒されて刺客は退散。

大西郷の魂之霊は次元が異う

彼の身边に漂う靈風を犯すものなし。

明治十年一月二十九日夜、草牟田の隆盛院の

火薬庫が襲撃され、弾薬が奪われた。

三十一日夜半には

一千余人が集成館の鉄砲製造所

坂元上之原の火薬庫を襲い

兵器弾薬を奪い

赤龍丸に積んで逃げ去った。

西郷さんが犬を伴れて

狩猟中の出来ごとだった。

事の次第を聞いて

西郷いよいよ時局の重大を知った。

明治十年二月十四日、大降雪、何の前兆か。

十五、十六日薩摩の健児らが出発！

十七日には本隊が出陣。何処に向ってか。

熊本鎮台が目指す相手だ。

何故にかくも薩摩を圧迫するや

西郷は談判を堂々とする魂胆だ。

*猜疑 ねたみうたがうこと。

*密偵 ひとそかに敵情を探る人。スパイ。

*蹶起 思いきって行動を起こすこと。

*隠忍 じつとがまんすること。

*自重 言行を慎むこと。

*鎮台 明治初期の陸軍の軍団。

熊本の背後は無論政府だ。

政府は西郷軍と知つて逆賊と称した。

有栖川宮が征討総督に任ぜられた。

熊本城司令官は谷干城

いよいよ熊本城総攻撃のやむなきに至つた。

だが西郷自らはいずこに在りやだ。

小倉の連隊長乃木希典が

政府軍の援軍として熊本城に向つたので

植木付近で激戦となる。

官軍は兵力も武器も優っているから

薩軍は苦戦。

退却のやむなきに至り

遂に長井村まで後退。

全滅に垂んとしたが可愛嶽突破。

西郷は陸軍大将の制服も重要書類も

全部灰塵に帰せしめた。

天を仰げば月華皎々、西郷の心境だ。

彼に何の怨恨あらんや

政府は大人物西郷を

全然理解し得ぬ馬鹿者揃い。

位階勲等を誇るお偉方が何だ！

残兵五百、九月一日、鹿児島に

西郷の勇姿を見て市民は欣んだが

何ぞ知らん

西郷の帰り往くところは天界である。

西郷は將兵と共に城山に立て籠つた。

その数三百七十余名と伝えられる。

もとより「生命も要らぬ」彼だが

部下の生命を惜しみ、その家族を想い

「若い人を多く死なせて、すみもはん」

と繰り返しくりかえし口ずさんで涙した。

なつかしの桜島！

その噴煙は今や山の怒りだ。

官軍の放火は民家をも焼く、何たることか。

九月二十四日午前三時、官軍の総攻撃。

西郷は退かぬ。島津邸の門前で

*皎々＝月光などの白く
光つて、くもりのないさ
ま。

流弾が西郷に当った。西郷は最期を知った。

彼は明治天皇を想い、東天を拝し

瞑目ののち

「晋介どん、もうここでよかじやろう」

「では御免」

彼は介錯をした。

波瀾万丈、五十年の生涯は

ここに幕を閉じた、深く愛した城山で。

「西郷さん」と呼ぶが如き桜島に

なつかしの眼指で

今生の別れを告げながら。

大西郷の真面目は時がこれを現じ

政府の大錯誤は同じ時がこれを審いた。

「敬天愛人」は大西郷の別名である。

「大人物」とは西郷の別称である。

合掌。

(一九九二年十一月二十三日 攔筆)

*介錯＝切腹する人の首を切り落とすこと。

*面目＝人にあわせる顔。体裁。めんもく。

勝海舟

— まこと的人物 —

幕末の英傑勝海舟よ

貴殿の自伝に因んでここに

詠わせ給え貴殿の生涯。

象山の「海舟書屋」なる額を見て

海舟と自らを号したことは

大海の波濤を蹴つて舟行する如き

貴台の生きざまを表わして遺憾なき

天与のたのしき雅号かな！

彼は一八二三年に生れたが

赤貧洗うが如き幼年時代の麟太郎は

正月の餅も碌に喰えざりし。

結婚當時も、妻に一筋の帯を

三年間も締めさせていたとかや。

彼自身は寒空の下、稽古着と袴のみ。

衣食は乏しけれども哀なる世界は

限りなく豊けくあつた、そは何ぞ。

彼は函館の商人の子だが、読書三昧。

親は書見を禁じたが、隠れては読む。

見つかつて、両手を縛られ、食も断たれた。

ところが彼は散らばれる草双紙を

かつ かいしゅう

一八二三〜九九年。幕

末・明治の政治家。通称

麟太郎。江戸の人。一八

六〇年、咸臨丸で渡米。

軍艦奉行として幕府海軍

整備に尽力。幕府代表と

して西郷隆盛と会見し、

江戸の無血開城に成功。

維新後、新政府に出仕し、

参議、海軍卿などを経て

枢密顧問官。

*貴台〓手紙などで、相
手をいう敬語。

*遺憾〓心のこり。残念。

*雅号〓本名の他に名の

る風雅な名前。文人、画

家などがよく用いる。

*草双紙〓江戸時代の絵
入り読み物。

脚で近寄せ、足先で開いて身を屈め
文字を喰^くつてゐるではないか。

これには親も参つて、紐^{ひも}を解き

家業の余暇なら読書を許すと相成つた。

彼の友洪田は江戸へ旅して珍本を買い漁^{あさ}る。

勝には書籍はあるが金が無い。

破れ畳に脱^ぬけ天井。勝を知る洪田

具体的に勝に書籍の援助。

蘭学研究のため長崎に居つたとき

洪田はおのが死を予感して

頼み甲斐^{かい}ある人物を紹介するのであつた。

その一は、灘の酒屋嘉納治郎右衛門^{かのうじろうえもん}。

この人の息子こそ嘉納治五郎^{かのうじごろう}

講道館柔道の開祖であり

東京高師学長、兼ねて附属小、中学校長で

筆者もその名講演及び勅語^{ちよくご}名朗読を

少年時代に親しく聴き

今も耳^じに響く想い。

天界の治五郎先生は心身の道なる柔道が
国際オリンピックの競技となつた現況を
何と観給うや。日本人は道の民ではないか。

剣道、柔道、茶道、華道、書道、画道
道を離れて人道ありや。

その二は、伊勢の医者竹川竹齋^{たけがわちくさい}

数万巻の蔵書家。

その三は、日本橋の浜口

後の浜口総理の本家。

洪田の曰^{いわ}く、世間が言う大家先生に

感服する人はあまり居らぬと。

後になり勝は情あつき洪田の眼識^{がんしき}に

感服したのであつた。

勝の海軍経歴は安政二年からのこと

安政四年、海軍伝習所の年度変りの

休暇を利用してゴツトル船で遠洋航海。

海洋の天候を懸念^{けねん}した師の言の如く

五島列島の沖にさしかかるや

* 勅語は天皇のことば。

明治憲法下、天皇が大権
によつて国民に直接発し
た意思表示。

* 耳朶^{じだ}をみみたぶ。

暴風巻き起り船は更に沖へと

吹き流されて、遂に暗礁に乗りあげた。

彼は、我れ過てりと

正直に水夫らに陳謝した。

その言に水夫らは却つて士気を鼓舞されて

彼の命令に力を尽して暗礁脱出。

天は幸し、風雨鎮まる。

その間水漏を修復し

翌日長崎に帰帆した。

師に謝して報告すれば

それは好修業、現実に危険に遇つてこそ

航海はわかるもの、十度が十度体験は異う

この上も航海術の体得を積まれたし。

これが師カッテンテーキの

応答の主旨だった。

同じく安政四年の晩秋に

咸臨丸で五島列島、対馬、釜山沖への

航海で、とある小川に艇を浮べ

進みゆくうち、突然岸边から

火縄銃で狙われたので

彼は艇を飛び出でて

馬の鞭で銃をやにわに打ち払った。

彼らは同じ日本人と知り、ひらに詫びた。

安政六年

幕府は使節の海外派遣を議決した。

海舟は正月五日朝陽艦で長崎出帆。

十一日の暁に紀州の大島付近にさしかかる。

吹雪に見舞われて

ボートをすべて投げ棄てた。

艀寄りのマストに体を縛りつけ

彼は指令を降すのであった。

やがて縄が切れて危く海に転落。

こんな難行の揚句やつと下田に入港。

日本は海の国、極東の島国

秀吉が朝鮮半島へ手を伸ばす。

歴史的に大陸へ進軍。

日清、日露、第二次世界大戦の前半で
強引に満州国建設、北支中支への侵略。

これらが大失敗であったことは
無謀極まる暴挙の故。

日本は海国として南方諸島へ
生活圏を伸ばすべきであった。

海舟の心に閃いたのはこうではなかったか。

海舟がオランダの海軍師官

ヘルセレーキに学びしは

幕府の指令ではあったが彼の悲願なりし。

前後六年、軍艦の機関

及び航海一切をつぶさに学んだ

更に天界及び海洋の智識まで。

海舟は正に日本海軍の先覚、先駆者。

勝麟太郎が門下生を引き具して

アメリカ渡航するは日本海軍の榮譽なるぞ

これが正直彼の自覚自信であった。

万延元年、一八六〇年正月に咸臨丸は

江戸を出帆して太平洋を東航。

彼は生憎熱病に襲われていたが

暈の上で大死するより

海上で仆れるに如かずと

腹の中は決死の覚悟。妻には

「ちよつと品川まで船を見に行くよ」

これがアメリカゆきの挨拶だったとは！

咸臨丸は石炭を積みはしたが帆船

太平洋横断は風雨の変転で極めて難航

彼は熱病のため吐血数回

しかし気魄旺盛な彼は遂に

その名の如く舟上で海に勝って

サンフランシスコに着港したとき

熱病は既に逃げ去っていた。

ヒッポクラテース医学の祖の言う如く

人間本来の力と自然の力こそ

病魔に勝つ原動力！

そこに天来の靈力加持せば万難突破。

使徒パウロ

近くは賀川豊彦が之を身証した。

海舟も天の力におのずから護られていた。

幕末の薩長と徳川の紛糾の顛末を

茲に述べるの要はない。

ただ海舟の人物像に触れたいのみだ。

彼は現代の大方の政治家とは異なり

党派や門閥などは眼中にない。

ひたすら国家の安危を一身に負うの気魄！

そのため孤影棄身の奔走をなし

種々の進言をなしたが理解されず

退職を命ぜられ、浪人同然となる。

慶応二年五月、突然軍艦奉行に

將軍から直接の任命。

彼はそのため大坂へ出発。

長州再征の件だが

これは国家のためならずと

彼は建白したが、なかなか埒が開かない。

時は移つて慶応四年

江戸は徳川軍で物情騒然

彼はこれを鎮めるに腐心した。

ある時狙撃され、危く失命するところを

従卒が身代りとなつて仆れた。

所謂壮士振る旗本連中が、軍律を犯して

勝手な振舞をするのを如何にせん。

同年四月の末には、官軍が江戸城下に。

彼が半蔵門外を乗馬で過ぎ行きし時

官兵の狙撃に遭つた。馬は驚いて

立ち上がる、彼は仰向けに落馬した。

彼は氣絶した。

官兵は命中とみて逃げ去つた。

氣がついてみると人影がない。

馬は草を喰べている。

五月のこと、彰義隊の戦乱中

官兵二百が彼の家を包囲し

武器などすべて奪い去つた。

*門閥＝家の格付け。家柄。

*安危＝安全と危険。

*建白＝官庁・政府などに意見を申し立てること。

*腐心＝どうしようかと心を悩ますこと。苦心。

*彰義隊＝戊辰戦争で新政府軍と戦つた旧幕臣の一隊。江戸の上野の寛永寺を拠点に戦うが、慶応四年（一八六八）五月敗北。

若し在宅していたら生命はなかった。

海舟は、九死に一生どころでなく

危険の中を天に護られていた。

彼は私心なき魂、国家安泰の一念だけだ。

これが徳川側の最後の英傑の相であつた。

ここに海舟が長州との前哨戦的な

談判をした一齣を語るとしよう。

徳川慶喜は後見職として参内中に

海舟は京都に呼ばれ長州への使者として

芸州へ往くこととなる。

豪胆にして平明なる海舟は

単身、小倉袴に木綿羽織で広島に着き

宮島での会談に臨む。

彼は旅館の広間に坐りこんで

相手の使者の到来を何日も待つ。

長州の兵士が旅館の周辺に出没している。

彼は老婆に毎日頭髪を整えさせる。

「俺の首はいつ切られるか知れぬので

死に恥をかかぬためにこうするのだ」

これが老婆への解明であつた。

幾日経ったか、長州から広沢兵助

井上聞多（後の井上馨）等

八人の使者が到来。

徳川の使者は海舟一人。

彼は大願寺の大広間に端坐していた。

使者らは縁側に坐して恭々しく頭をさげた。

海舟は招き入れて、談義を始めた。

彼はザクロの如く腹を割って語る。

今日の情勢に於て兄弟喧嘩は徒らである。

相和してただ国家の安泰を念とすべし。

これが、談義の大前提であつた。

更に彼は言った

「私が帰洛したら

直ちに貴藩の国境にある幕兵は

一人残らず引き上げるようにする。

貴藩に於ても、その機に乗じて

*長州＝長門国（ながとのくに）。旧国名。現在の山口県西北部。

*前哨戦＝本格的な活動にはいる前に行われる、予備的な活動。

*参内＝宮中に参上すること。

*芸州＝安藝国（あきのくに）。旧国名。現在の広島県西部。

*帰洛＝みやこ・京都にかえること。

請願などと唱えて多勢で押しかける

ことなど断じてなさらぬように」

相手も文句なしで談判はかくて決着

役割を果たした勝は厳島神社に詣で

佩刀はいとうの護良親王の短刀を奉納した。

いつ落命らくめいするかわからぬ身ゆえ。

江戸城内は鼎かたえを沸かすが如し。

勝家の囲りには官兵がうろつく。

勝は徳川を売る者なりと

誤認ねらして狙う奴あり

危うく飛弾をまぬかれたこと一再ならず

併し彼は護衛も壮士も身辺に置かない。

女中を二、三名侍はべらせるのみ。

徳川の政權奉還、江戸城引き渡しは

国家のため、執るべき道と勝は想い定めた。

徳川三百年の独尊どくせん封建は庶民の地獄

文化文明の閉鎖的窠窟

信長がキリシタンを容した度量を

秀吉、家康が継承せず

迫害して、鎖国政策を固執こしつした

三百年の大誤謬ごびやうから脱すべき

ぎりぎりの歴史的カイロス*が来た。

この転換期にも一流の人物が幾人も

犠牲になった悲劇は天ぞ知る。

今や歴史的必然は討幕でも佐幕さくでもない。

救国済民の正道は

静かに江戸城明け渡しの一途あるのみ。

これを果し得る大人物は

西なる西郷隆盛、東なる勝海舟。

官軍側から西郷が来ると聞いて

心安らかに海舟は寝て待っていた。

大人物は大人物を洞察とうさつできる。

両豪は談判に当り

無血開城、江戸は火にせぬと握手。

誠心を以てする国家救済の道だ。

「ただ幕臣が飢えるのは気の毒だから

*佩刀はいとうは腰に刀をつけること。また、つけた刀。

*落命らくめいは命を落とすこと。死ぬこと。

*鼎かたえを沸かすが如しは鼎の中の湯が煮えかえるようにしたとて、人々や世間が非常にさわぐことをいう。

*誤謬ごびやうはあやまり。まちがひ。

*カイロスとはとき。時期。好機。

*佐幕は江戸幕府を支持した。こと。

それだけは頼むぜ」

これが海舟の親心。

敬天愛人の南洲は「大丈夫」の一言。

大人物の心境は

当代の名利めいり権勢けんせいを事とする

下劣な政治屋とは別世界。

明治維新で高位高官に就いた連中は

二流三流どころだ。

超一流、第一流の人物は犠牲になった。

ただ海舟だけは世棄人よすてびとの如き局外者として

時勢の洞察、人物の批判のできた存在。

海舟はかくて一八九九年に

天寿てんじゆを全うした超人であった。

坂本龍馬

四国は土佐の高知城南面

城郭外本丁筋の町人郷土坂本家に

天保六年（一八三五）十一月十五日

次男が誕生したのだが

彼の生誕に際し母お幸は夢に

黄金の龍が昇天飛翔するを見た。

そこでこの児を龍馬と名づけた。

家は酒造業の商家で、その屋号は才谷家。

坂本家は豪商で而も郷土たる武家。

郷土は土佐藩家臣の輕格の上位。

武家ながら財力豊かなる家柄。

龍馬は十二歳にして楠山塾に通学

十四歳から小栗流の道場で剣道の修業。

彼は感情豊かな少年で

「泣き虫龍馬」の綽名があつた。

嘉永六年（一八五三）三月

江戸遊学に立出に際し

父が十八有余歳の龍馬に与えた訓戒がある

「片時も忠孝を忘れず、修業第一の事。

諸道具に心移り、銀錢ついやとどる事。

さかもと りょうま
一八三五～六七年。幕末期の尊攘派の志士。土佐藩出身。文久二年（一八六二）脱藩して勝海舟の門弟となる。薩長連合の成立を仲介、王政復古に力を尽くしたが、京都で暗殺された。

*郷土は近世、農村に住みついて農業をいとなんだ武士。また、士分の扱いを受けた百姓。

*飛翔は高く舞い上がること。

色情にうつり、国家の大事を忘れ

心得違ひ有間敷事」

父の茲に意味する国家は土佐のこと。

嘉永六年はアメリカのペリーが

東インド艦隊長として下田に来航

開国を迫った年である。

氣宇雄大自由なる龍馬は既に

時勢の推移とその往く先を先見していた。

彼には封建制下の藩などは眼中にない。

今後は君民一体の

一大国家たるべしとの構想。

政治、産業、海防軍備

すべて国家単位なる世界の日本たるべし

との計画とその実践的努力。

一八五八年戊午、安政五年

大老井伊直弼が尊皇攘夷の有為の士を

多数投獄処刑した

安政の大獄に対して龍馬は悲憤に堪えず。

一八六一年（文久元年）

土佐勤王党が結成さる。

土佐藩士瑞山、龍馬を評して曰く

「肝胆元雄大、奇機自湧出

飛潜有誰識、偏不恥龍名」

（肝胆元ヨリ雄大ニシテ

奇機自ラ湧出ス

飛潜誰カ識ル有ラン

偏ニ龍名恥ズ）

正に飛龍で一八六二年三月二十四日夜

脱藩、亡命。

彼は江戸氷川に幕臣第一人者たる

勝海舟を訪れ、これを刺さんとしたが

海舟の人物とその開国海防論に圧倒され

低頭開眼して門下となった。

百八十度の転向である。

その後元治元年十月のこと

薩摩の西郷吉之助に

*氣宇ハ心の広さ。心意

*有為ハ才能があり、役

に立つ見込みのあること。

*肝胆ハ心の中。心底。

勝安房^{あきふさ}の私塾から勝門第一の人物として

龍馬の身柄^{みがら}が托^{たく}された。

龍馬自身は彼より太腹^{ふとつばら}の姉に語りし如く

自らを高く矜持^{きやうじ}しつつも

「しじみ貝の様に

土を鼻先につけ砂を被^かぶる」

謙讓^{けんじやう}に身を処した。

慶応元年五月

龍馬は西郷以下多くの薩藩士に見送られ

鹿児島に訣^{わか}れを告げた。龍馬のはなれ業は

年来の仇敵^{きゆうてき}の間柄^{まがら}なる薩長^{さつちやう}を

日本国家意識のもとに

和解させたことにある。

これは同時に藩意識を超越せしめた。

君民一如の新時代を洞察している龍馬だ。

且つまた海国日本の海軍振興の愛国心だ。

さて龍馬の曰く

「西郷は茫漠^{ぼうばく}たる男、捉えようなし

大きく叩けば大きく響き

小さく叩けば小さく鳴る」

海舟これを聞き、龍馬の人を見る眼に感嘆。

いずれ劣らぬ人物揃いの床しさ哉。

幕臣というも海舟の如きは超幕の人物だ。

尊皇というも龍馬は自由民権の政治意識だ。

彼は既に世界の状勢^{じやうせい}を聞き知り

烈々たる気魄^{きい}と叡智^{えいち}を以て

日本は西欧文化を吸収し

自主的、創造的に事をなす魂胆である。

尊皇開国の明治維新の原動力となつたのは

薩長聯合^{れんごう}に因る尊皇開国の動勢^{どうせい}だが

その源泉は龍馬であり、海舟である。

時勢を認識し且つ大所高所より卓観し

将来を先見洞察する人物に非ずんば

大政治家たることは出来ない。

龍馬はかかる資質ある人物だ。

一段落を見た龍馬は

*矜持したのみとすると

ころがあつて、ほころこ

と。

*謙讓へりくだつてゆ

ずること。けんそん。

*薩長＝薩摩と長州。

*茫漠＝広くて、とりと

めないさま。

慶応二年一月二十三日夜ひそかに

伏見の寺田屋に三吉みよししんせう慎蔵と身を寄せた。

夜も八つを過ぎたが二人の話は尽きず

薩長聯合は成功し

王政復古も目睫もくしやうの間と

欣び合い、一盞いつさんせんかなと待つ時しも

この屋の養女お良が浴衣のままで駆け上り

おもてを指さし、捕吏はりが来たと告げた。

と間もあらせず一捕吏ちんにゆうの闖入！

推問答もそこそこ、龍馬は短銃連発

剣の達人龍馬が刀を身辺に

置かなかったのは失策。

三吉は手槍で乱闘

捕吏達のひるむを見て、素早く二人は

裏屋根づたいに街路へ跳び降り、ひた走り

材木置場の蔭に龍馬は身を隠し

三吉は薩邸に急を告げに走った。

急遽きゅうそん小船に薩藩の旗を掲げて

現場に向い龍馬を扶たすけた。

寺田屋遭難の龍馬の手傷も

安政の大獄で犠牲の病死を遂げた

檜崎將作ならさきしやうさくの長女お龍が

寺田屋に勤めて居たので

彼女の真心こめた看護で日増しに快復かいふく。

江戸遊学のとき見知ったお龍であるので

感謝の気持と共に愛情も互いに萌もした。

折から見舞の西郷に何をか隠そう

「折入つて貴殿に聴いて貰いたい

ことがあるのだが」

「ほ、ん、おいどんで

出来ることでございましょうか」

「実はその、面目ないが……」

西郷は既に察知して

「慥のち気でござすか。わは、は、は、は」

西郷は情の深い男だから

早速媒酌ばいしやくをひきつけた。

*目睫もくしやう＝目とまつげ。

目睫の間もくしやうのま＝すぐ目の前。

*一盞いつさん＝一杯。

*捕吏はり＝容疑者・犯人をつかまえる役人。

*媒酌ばいしやく＝結婚の仲立ちをする。

龍馬とお龍は、雄雌の龍か龍馬、龍子夫妻と相成る。

西郷の勧めで、龍馬夫妻は新婚の旅として

日高山温泉、潮漬温泉に遊び

その他古蹟訪索。

更に脚を伸ばして霧島山温泉

遂に霧島登山

かくて一ヶ月余りの後

慶応二年四月に鹿児島に着く。

龍馬の生涯で

最も楽しい一ヶ月余りであった。

慶応元年三月

幕府は神戸の海軍所を閉鎖した。

ために勝の門弟は四散した。

龍馬は「社中」と称する海員団体を結成。

薩藩の後援によったので

鹿児島と摂津間の航海を以て

島津家の厚誼に酬いることを勿論なした。

龍馬が長州の厚意による糧米を積んで馬関に桜島丸が到着した時

幕軍は既に長州に迫り来っていた。

龍馬は高杉晋作の懇請を受け

幕艦を豊前の沖で撃沈した。

更に赤間ヶ関に迫った幕艦をも敗走させた。

慶応三年六月龍馬は後藤象二郎と共に

長州藩船夕顔丸で上京する。

目的は前土州藩主山内容堂を通して

公儀政体八策を徳川慶喜公に建白し

武力をもちいずして

大政奉還をなさせしめんとするにある。

龍馬は武力倒幕の動きを

未然に妨がんとしたのだ。

上京の船中で更に後藤と審議したので

俗に称う「船中八策」で

その内容を要約すれば

一、天下の政権を朝廷に奉還する。

*厚誼ハ心からの親しいもてなし・つきあい。

*赤間ヶ関ハ山口県下関の旧称。

*土州ハ土佐国（とさのくに）。現在の高知県。

*大政奉還ハ江戸幕府から朝廷へ政権を返上したこと。慶応三年（一八六七）一〇月十四日、十五代将軍徳川慶喜は政権返上を朝廷に申し入れ、翌日これを許されて鎌倉幕府以来の武家政治が終結した。

二、上下の議政局を設け

議員が万機を公議する。

三、有材の公卿、諸侯及天下の人材を

顧問とする。

四、外交は新たに至当の規約を以てする。

五、古来の律令を折衷し

新たに無窮の大典を撰定する。

六、海軍を拡張する。

七、御親兵を置き、京都を守護する。

八、金銀貨物、外国と平均の法を設ける。

伏して願はくは公明正大なる道理に基き

一大英断を以て天下を更始一新せん。

如此龍馬の卓論に後藤は共鳴し

海援隊を後援すると約束する。

かくて龍馬と後藤の意気は投合した。

短絡的な諸批判をもとめせず

龍馬は機知縦横調停に腐心した。

慶応三年六月二十二日

京都三本木の旅亭にて

藩の後藤、福岡、寺村、真辺

薩藩の西郷、小松、大久保

浪士代表として龍馬と中岡が参集。

盟約は

一、玉体を匡正し万世万国に互に

恥じず、是れ第一義。

一、王制復古論なし、宜しく宇内の

形勢を察し参酌協正すべし。

一、国に二帝なし政刑唯一君に帰すべし。

一、将職に居て政柄を執る是れ天地間

有るべからざるの理也。宜しく

侯列に帰し翼戴を主とすべし。

右建白書は紆余曲折の末

將軍慶喜に伝えられた。

同年十月十三日

諸藩の重臣四十余名二条城に参集

*更始〓古いものを改めて新しく始める。更新。

革新。

*卓論〓すぐれた議論・論議。

*玉体〓天子のからだ。

*匡正〓ただす。ただし

*宇内〓天地四方の内天下。

*参酌〓比べ合わせて、よいほうを選ぶこと。

*政刑〓政治と刑罰。

*政柄〓政權。

*翼戴〓主君を助けて、上にいたたく。

*紆余曲折〓事情がこみ

いつていて、何度も変わる

こと。

その席上、慶喜は政權返上を陳述^{ちんじゆつ}。

翌十四日、桑名藩主松平定敬を遣わして

朝廷に大政奉還の上

上奏文^{じようぶん}を朝廷に奉る。

此如、龍馬等が身骨を粉にして悲願した

大政返上は朝廷の御嘉納^{かうな}を以て成就した。

併し、幕府臣中には会津、桑名の諸藩と

相謀つて薩長側に報復せんと

ひそかな動きがあつた。

慶応三年十一月十五日夕刻、龍馬と中岡は

ゆつくり酒を飲んで語ろうと

門弟岡本と小僧の峰吉に

酒と鶏肉を買いに遣^やつた。

待機していた数名の武士が門を叩いた。

力士あがりの藤吉が取り次ぐ

武士らは十津川藩士^{とつがわ}だとの

名刺を受けて藤吉が階上に昇つてゆく

その後を秘かに三名がつける。

龍馬と中岡が行灯^{あんどん}の火影^{はかげ}で

取次の名刺の如き紙切れを

判読しようとした。

その途端に「坂本さん」と

なれなれしく一人が呼びかけた。

龍馬が振り向いた。その瞬間

屏風越しに刺客が肩から首にかけて

横なぐりに斬りつけた。

階段上の藤吉も一刀の下に。

別の三名の刺客が部屋に闖入^{らんにやう}。

致命的重傷の龍馬ながら、床の刀を執り

二の太刀^{たち}を鞘^{さや}のまま受け止めはしたが

初太刀の深手のため最早自由が効^きかず

三の太刀を受け損じ

頭をやられ打ち臥した。

中岡は短刀で斬り合ったが

左右からの斬り込みで

*上奏^{じようそう}は天皇に事情・意見を申し上げること。

*嘉納^{かうな}は進言・進物などを、喜んで受け入れること。

*関人^{かんじん}は無断で、突然はいりこむこと。

全身数ヶ所に傷で流血

止めの袈裟^{けさ}がけで昏倒^{こんとう}。

急を聞いた海援隊士や薩長の同志が

馳^はせつけたが、龍馬は既に彼岸^{よみ}黄泉^{よみ}の人

時に三十三歳！

僅かに氣息^{いき}を吹き返した中岡は悔んで

「刀^{ていとう}を手許^{てもと}に置かなかつたのが

不覺^{ふかく}だった」

そして言った

「土佐の乾退助^{いぬいたいすけ}（板垣退助）に伝えてくれ

油断^{いんたん}するな。

因循^{いんじゆん}姑息^{こそく}な幕吏^{ばくり}の中にも

今度のような刺客^{あせき}がいる

決して油断^{いんたん}するな」

藤吉は翌十六日に

中岡は十七日に龍馬の跡を追った（三十歳）。

龍馬は言わずもがな

中岡も勤皇家第一流の人物、達劍^{たつけん}の人。

刺客^{あせき}らがどの藩の者か竟に不明である由。

悲運の最期だったが

龍馬は大政奉還の大願を果し

且つ彼自身、君民一体の明治政教への

指標となった。偉大なる哉！

龍馬は明治維新の大使徒であり

明治政教の大預言者である。

*昏倒^{こんとう}＝卒倒。

*因循^{いんじゆん}＝因習にとらわれていること。

*姑息^{こそく}＝一時逃れ。まにあわせに行うさま。

第三篇 教育者

新島 襄

— 教育の使徒 —

十九世紀後半に入りアメリカ艦隊は

鎖国日本に開港貿易を迫り始めた。

尊皇攘夷そののうじょうい*か開国か、怪雲渦巻く幕末の空

天保十四年（一八四三）陰暦正月十四日

江戸城門外の上州安中藩主邸内の

新島民治の軒端のきばから呱呱ここの声が響き出た。

祖父辯治が男の児こと知ってシメタと叫ぶ

かくてその児は

「七五三太」と名づけられたとは！

彼の幼年時、仏心篤き祖母が臨終に

感謝と希望に溢れて彼岸に旅立った

その印象が七五三太の胸底に。

一門の神仏に対する敬虔な心根が

この児の魂の根源氣質よ。

教育の根本は教えに非ず

親たちの性と生きざまそのもの。

気魄ある彼は腕白の少年時

荒れが過ぎて前額に消えぬ傷痕を。

爾来、彼は読書少年と打って変った。

彼は一面画才にも恵まれていた。

にいじま じょう
一八四三〜九〇年。教育家。同志社大学の創始者。安中藩出身。アメリカで神学を学びキリスト教精神に基づいた教育事業に貢献。

*尊皇攘夷は天皇の權威の絶対化をめざす尊皇論と、排外主義である攘夷論が結合した政治思想。江戸末期、幕藩体制の矛盾の中で水戸学によって提唱され、反幕運動へと発展。

この少年の環境如何。幕政厳しく
 庄政のため庶民の表は偽善、裏は淫逸。
 憂国の士は倒幕運動を策し始めた。

五三年嘉永六年六月三日

浦賀の沖に米艦影出現

水師提督ペリー、幕府に開港を迫る。

五四年安政元年、米英露と和親条約を締結。

幕下家門の少年七五三太は武人たらんと

剣術、柔術、さては馬術の鍛錬も。

偶々中国の英傑伝でハタと悟ったは

一人を倒す剣に非ず、敵軍撃破の兵法の

孫子を始め兵学の研究なるぞ。

時に安中藩の学者、添川廉斎、山田載飛は

識見卓抜で、経国済民、富国強兵には

洋学洋語を学んで

外国文化を知るに如かずと。

これに啓発されて

十五歳前後の彼は眼界が拡められ

爾後銳意、蘭学中心の勉学にいそしんだ。
 藩主勝明も七五三太に注目愛顧。

五八年安政五年

井伊大老は日米通商条約締結断行。

これが違勅問題となり

尊皇攘夷討幕の気運騒然となるや

尊攘の志士の大検挙となり

安政六年の大獄の犠牲となつたのが

橋本左内、頼三樹三郎、吉田松陰等数十名。

政情乱雲身辺変転の中で、新島七五三太は

蘭学修得にいよいよ打ち込み

その領域は自然科学

特に数学、物理学、医学、薬学と幅広く。

彼は意志、理性、情性のバランスある

自己形成をおのずからなしていた。

安政の大獄がそのままで終るはずなし

果然雪白き桜田門外で水藩浪士のため

井伊大老は雪を紅に染めた。

*水師Ⅱ水上で戦う軍隊。
海軍。

*識見Ⅱ学識と意見。見識。

*卓抜Ⅱ他よりもぬきん
でていること。

*経国済民Ⅱ国をおさめ、
民の難儀を救うこと。

*富国強兵Ⅱ国を豊かに
し、軍事を強化すること。
近代化をめざした明治政府の
スローガン。

*違勅Ⅱ詔（みことり）
にそむくこと。

*果然Ⅱはたして。やはり。
案の定。

*水藩Ⅱ水戸藩の略。

この凶変きようへんのあと

幕下の諸侯は警衛けいゑいを厳げんにしたが

安中藩主はそのため

強豪きやうたうの若者を選ぶ。

七五三太もその一人にされた。

彼はやがて護衛を離れ

蘭学らんがくを続け更には軍艦教授所で

勝麟太郎かつりんたろう（勝海舟）に学んだのは

蒸気船の構造、航海術

その連関として天文学等。

偶々海岸を逍遙せうようし、沖に和蘭おらん

の軍艦を見た。

彼は、海軍力たる軍艦

貿易力たる商船の建造こそ

今後の日本に必須ひつずなるを実感。

そのためには海外へ赴おもむくに如かず。

松陰先生が志して果し得なかつたこと

それを自分はなさねばならぬと決意した。

なお研究を続け、時機を待たと

青年期に入つた七五三太は志を堅うした。

山田三川から航海学をつぶさに学んだ。

勉学たけんの時、偶々麻疹流行し

彼もこれに冒された。

病床三ヶ月、その間彼は代数書を読了。

彼は暫し休養を余儀なくされた。その後

安中板倉家の本家たる備中松山藩主

板倉周防守の持船快風丸に便乗を許され

文久二年（一八六二）十一月十二日

快風丸に乗り、江戸を出帆

大波五百重の海路何百里、太平洋を帆走し

快風丸は遠州灘を過ぎ、紀州の沖に出で

渦巻く波の紀淡海峡を通つて大坂湾に入り

波静かなる瀬戸内海を西進し

翌十二月三日に玉島港に安着。

この航海は彼のやがて企てる大航海を

予表する序曲の如きものであつた。

*逍遙は氣の向くままに
散歩すること。

*備中は現在の岡山県西
部。

蘭学研究中に借覧した

「魯敏遜漂行記略」^{ロビンソン}と漢訳聖書抜粋とが

彼に踏海^{とうかい}の志望を起こした。

「求めよ、さらば与えられる」^{*}

渡航を求むる念願は切実となった。

元治元年（一八六四）春三月街上で

天の配剤^{はいざい}が快風丸の船長に邂逅^{かいこう}した。

船長は彼に函館航行を語り

行きたければ便乗を許すと言った。

好機逸すべからずと思つた彼は

本家松山侯を通して藩主に歎願した

目的は英学研修のためである。

許可を得たので祖父、父母のお許しを切願。

「意志のあるところに道あり」

で、悲願^{ひがん}成就^{じゆうじゆ}と相成^{あいな}つた。

江戸出発に当り

祖父が七五三太に贈った句

「行けるなら行つて見て来よ花の山」

この一句正に光さす希望の花火と喜んだ。

日本のため文明の開拓者たらんとの念願だ。

「武士の思ひ立田^{たつた}の山紅葉^{もみぢ}」

錦衣^{にしき}ずしてなど帰るべき」

「男児^{だんじ}志を立てて郷関^{きやうかん}を出づ

学若^{がくも}し成らずんば死すとも帰らじ」

これが新島七五三太の烈々たる士気。

今や二十年余住み慣れた家郷よさらば

紙鳶^{しえん}を揚げて興じた御火除地の

広場よさらば

時を告げた千代田城の

太太鼓の号音よさらば。

親愛なる骨肉、朋友と別れを交わし

感涙を呑み、今や万波孤客^{ばんばこかく}の身となつて

彼は小舟に乗り

品川沖の快風丸に乗り移った。

*「求めよ、さらば与えられる」⁷ マタイ伝⁷・

*配剤^{はいざい} 適切に取り合わせるること。
*邂逅^{かいこう} 思いがけなく出会うこと。

*紙鳶^{しえん} 凧。

その翌日、元治元年三月十二日の払曉^{うけあけ}、快風丸は拔錨^{はつひょう}し

北の方遙かなる北海の函館港に向う。

彼は暫し舷^{しほ}に立つて

遠ざかりゆく都の空をうち眺めたが

それは言い知れぬ全身的感慨であつた。

逆潮^{さかしほ}、激風になやまされた快風丸が

函館港に着いたのは四月二十一日。

彼は露国領事館付の司祭ニコライ家に

日本語教師として寄寓^{きうう}することになる。

古事記原典を読み始む

日本民族精神の源流を

知らざるべからずと思つて。

これは海外雄飛^{かうがいゆうひ}の彼の魂に

大和心の深い自覚と

愛国愛国の義^{ただ}しき心根^{こころね}を付与した。

時に彼は二十二歳の青年

北海の港市で古事記を身読した新島青年は

正に選ばれた器^{うつわ}であつた。

神の摂理^{せつり}は靈^{たま}しきもののぞ

一外国商会の富士屋宇之吉^{うのきち}なる人と

親しく語らい肝胆^{かんたん}相照^{あてあう}し

宇之吉は生命^{いのち}賭けの助太刀^{すけだち}をもて

七五三太の企図^{きと}を遂行^{すいこう}せしめんと

何を思い立ったのか。

今し碇泊^{ていぱく}中の米船ベルリン号の船長は

昵懇^{じくん}の人、彼なら願いを然諾^{ぜんだく}せんと

新島の志を語ったところ

心得たりとの返答よ。

約束の時、六四年七月十八日夜半十二時

夜陰に乗じ小舟をベルリン号に漕ぎつけた。

宇之吉

「では祈^{いの}っているぞ

元気で、サヨナラ」

函館神社の祭りで賑う夜半に人知れず

* 払曉 〓 夜明け方。
* 拔錨 〓 舟がいかりを上
げて出航すること。

* 寄寓 〓 人の家に世話に
なること。

* 昵懇 〓 ごく親しいこと。
* 然諾 〓 引き受けること。

宇之吉は七五三太のために

大任を果したる哉！

出帆に先だち幕吏の点検があるというので

新島は船長セーヴォリーの命ずるままに

船艙に身を隠して一夜を明かした。

想えば函館着港以来五十五日目。

彼は天を仰いで知られざる命運の神に感謝。

今やベルリン号は渺茫崖^{びやうがき}しなき太平洋を

南々西に進路をとり上海指して航している。

国を愛い象山の卓見^{たっけん}に共感し

踏海の拳に出でた先輩松陰の

安政六年の犠牲の死を偲びつつ

元治元年（一八六四）

即ち五年後のこの密航

貴き先輩の志を嗣ぎたる青年新島の

魂は今や烈々火の如し

史上革新の真の勇魂は百難を突破する

そこには見えざる神の啓示^{けいし}あり神助あり。

旬日^{じゅんじつ}余りで東支那海を航し

八月初めにベルリン号は名市上海^{シヤンハイ}に入港。

然らば函館上海間の十余日の航海は

ただ安泰^{あんたい}なるものであったのか。

船そのものは幸い台風に見舞われず

無事の船路であつた。

だが七五三太の身邊は

明闇、雷鳴閃光の様だった。

それは如何なる事態であつたのか。

船長セーヴォリーは彼を愛し

船長付ボーイとして側近に仕えしめ

懇切に英語の教授をしてくれた。

その補助役をした一外人は短気な男

屢々^{しばしば}七五三太を鉄拳で叱り飛ばした。

耐え忍んでいた彼も最早我慢がならず

日本刀を取り出して立ち向わんとした。

全身火の如き彼に

*渺茫Ⅱ広々と果てしないさま。

*卓見Ⅱすぐれた意見・見識。

*啓示Ⅱ人間の能力によつては知りえない神祕が、神の愛によつてあらわし示されること。天啓。然示。

*旬日Ⅱ十日間。

*安泰Ⅱ安らかなこと。無事なこと。

畏るべし天来の一声「待て！」

それは肉の耳でなく魂の耳を震撼した！

彼は全身深淵の如く鎮まった。

短気な一外人が何だ、次元が異うのだ。

おのれは大使命ある存在だ、忍び貫け

彼の魂はこの体験によつて大きくされた。

より強靱なるものに鍛えられた。

天を相手とするのが第一たることを

沁み沁みと感得した、かの南洲の如く。

上海への航海はこのような雷鳴閃光の故に

天に感謝する青年新島であつた。

彼はベルリン号の船長を信じて

次の渡海がどのようになるかを待つ。

果然、セーヴォリー船長は

米船ワイルド・ロヴァー号の

船長テラーと助役フェリーを紹介し

同船に乗り換えの労をとってくれる。

この船の持主はボストンの実業家ハーディ

新島のセ船長への感謝は言を越えた。

上海滞在旬日を越えずして出帆。

セ船長と彼の離別は美しき一幅の画。

金波銀波もロヴァー号の船尾に

跳るが如くロヴァー号を見送ってくれた。

時は一八六四年八月十三日の夕映えの頃

使命ある一個の存在に天佑臨む哉。

彼の使命は幕府の命令によるに非ず

禁令を越えての天与の使命である。

何びとも知らぬ文字通り生命賭けの使命。

開拓男児新島七五三太

偉なる哉、快なる哉。

印度洋横断のワイルド・ロヴァー号は

三本マストの帆船で材木積載の貨物船

彼はこの船でも船長付ボーイであつたのは

先の船長の伝言によつたにちがいない。

*震撼＝ゆり動かすこと。
驚かし、ふるえ上がらせること。

*天佑＝天の助け。

新船長のテラーは彼の呼び名を

ジョーとした。ジョーはジョセフの略称で邦訳聖書ではヨセフ。

ヨセフは原語の発音通り。

族長系譜で見るならば

アベル、エノク、ノア

アブラハム、イサク、ヤコブ

そして殿しんがりを承るヨセフ、七番目の選びの器

その人と成りキリストの予表の如し。

何たるありがたさぞ。

七五三太は帰国後欣然きんぜんとして

自らジョーを襄もとと書き、本名とした。

正にテラーを通して

神の名づけ給うた霊名である。

その間、日本青年の密航を幫助ほうじょした廉かじで

セーヴォリー船長は解雇された。

これを知ったジョーは

彼の恩義に平伏すと共に

後日必ずやこのつぐのいをなすべく祈った。

ワイルド・ロヴァー号は種々の用あり

一時福州ふくしゅうに航し、上海に再入港

再び出港して香港ホンコンに寄港。

彼は船長から英訳聖書を貰ったが

是非とも漢訳聖書を購もとめんと

残る一刀を船長に提供して八元を受け

香港市街の書店をさがし

恵福さいわいなる哉、漢文新約聖書一卷を得て

虎の子もダイヤモンドも

この一卷に如しかずとなした。

十一月の末香港を出帆し

シンガポールで正月を迎え、再び香港。

かくて一八六五年（慶応元年）四月半

いよいよ印度洋指さして大航海の途に就く。

彼は航海中、特に福音書を愛読身読。

かの有名な一句、約翰ヨハネ伝三章十六節*

「蓋神愛世甚至以其独生之子

*欣然きんぜん喜ぶさま。

*幫助ほうじょよくないことを手伝うこと。

*約翰（ヨハネ）伝三章十六節「それ神はその独子を賜ふほどに世を愛し給へり、すべて彼を信する者の亡びずして永遠の生命を得んためなり」

賜之俾凡信之者免沈淪而得永生」

これはジョーの心魂しんこんを

然り全身を感動せしめた。

彼はこの一句を正に

「新約聖書中の富士山」と仰ぎ見た。

筆者も一九七三年四月半

漢文の旧新約全書を

東京は神田の古書店で発見。

漢文漢詩の好きな愚生

この全四巻をカバンに入れて帰るときの

嬉しさ今も胸中にある。

我らはロヴァー号の航路を

詳しく辿たどるに及ばない。

この帆船は大印度洋を西へ西へと横断。

彼は船長と共に毎日船位を測定するのが

こよなき楽しみであった。

船長は彼を弟の如く愛した。

彼の人物とその抱く大望のゆえに

彼をねんごろにとりあつかった。

彼は船長を父の如く尊敬した。

先のセーヴォリー船長と謂い

今のテラー船長と謂い

何と彼は恵まれたことか

これがまことの師弟の

敬愛信頼関係というものだ。

船は印度洋を大方帆走し

マダガスカル島の東を南下。

彼は大洋の広大さ

星座の無限さに気宇きうおのずから

広大雄渾ゆうこんならざるを得なかった。

帆船はアフリカの南端希望岬そぼだに近づく。

やがてケープ・タウンの北に峙そつ

テーブル・マウンテンが目に入る。

「我は今雪なき富士を眺むれど

父母は雪ある富士を見つらん」

七五三太しめには月日の経過、距離の遠隔

* 気宇＝心の広さ。
* 雄渾＝雄々しいさま。

いかほどであれ、父母への慕情は不変。

帆船は満帆、海流に乗り貿易風に送られて

大西洋を北西に斜断してゆく。

アフリカ中部の西方遙かなる洋上の

かの有名なセント・ヘレナ島を

東に眺めて進む。

十九世紀初葉の大英雄にして大文化人

ナポレオンが地上最後の月日を送った島。

新島青年も次の一事は知るよしもなかった。

即ち彼が愛読した福音書をナポレオンは

この島で繙き次の言葉を遺したと謂う。

「福音書は書物ではない。

行動力をそなえた生きものである。……

キリストは愛の炎を燃え立たせる。

これによって、何よりも強力な利己

自愛は打ち滅ぼされる。……

キリストの最大の奇蹟は

疑うべくもなく、こうした愛の国である」

ナポレオンは最後に

キリストの前に平伏した。

さすがはナポレオンである。彼は天界へ

キリストに迎えられたに相違ない。

帆船はやがて赤道直下、炎熱を忍びつつ

南米ブラジルの東北部沖を進む。

やがてメキシコ湾流に乗って

北アメリカに近づく

六五年七月十九日、目的港ボストンの手前

コッド岬が見えて来た。

船速をゆるめて進むと一漁船近づき

かく報じた

四年に互る南北戦争は

北軍の勝利で終ったが

大統領リンカーンが四月十四日の夕

リッチモンド市のフォード劇場で

奴隷廃止反対の一派優凶漢のため

暗殺された、と。

これ何ごとぞ！ アメリカ入国の直前

世紀の大偉人リンカーンの死報を聞くととは。

真の人間愛を貫いた人の犠牲死。

新島青年も生命賭けの使命で来たのだ。

リンカーンの貴き死が

彼に勇猛心を起こしたのでないか。

帆船は遂にボストン入港、落碇。

時正に一八六五年七月二十日

彼は感無量、熱淚滂沱、士氣無量

函館脱出から正に一ヶ年！

テラー船長は低級船員と新島を船に遺し

長途の船の掃除と雑務を命じた。

彼は馴れぬ仕事に疲労困憊

夢想していたアメリカの現状は

南北戦後の社会的不安動揺期。

かくて果して希望は成就するものか。

彼自身が不安懊悩に一時陥ったが

七月下旬、ボストンに上陸してみれば

整然豪華な市街

文明の次元日本の比に非ざるを直感

一書店に立ち寄ったところ

ダニエル・デフォーの名著

『ロビンソン・クルーソー』を発見。

帰船してその夜から

この原書にかじりついた。

絶海の孤島に漂着したロビンソンが

やがて熱病に冒されたとき

深く神に祈った。

自分も天涯孤独だ、そうだ祈ろう。

彼はロビンソンから

「祈るんだよ」と勧告される想い。

彼は爾后就寝前

全身的な祈りを絶やさない。

我らはロビンソンと七五三太の

靈しき縁を忘れない。

船長はどうしたのか

*落碇＝停泊。

*滂沱＝涙がとめどなく
流れ出るさま。

*困憊＝ぐったりと疲れ
きること。

*懊悩＝悩み苦しむこと。

さっぱり帰船しないではないか。

十月になってやっと船長が帰船した。

疑うなかれ、訝るなかれ

船長テラーは船主ハーディに

新島青年のことを執り成したのだ。

船長テラーも誠意をもった人物。

新島青年の熱禱も神に通じた。

ハーディこそ愛の深いたのもしき人。

ハーディ自ら船を訪ね、新島の志を訊いた。

青年の英語は未だおぼつかぬものながら

その熱意と内容と人物そのものを見て

ハーディは、これは特別な使命ある人物と

洞察し、彼に勉学の道を与え

援助せんと決意した。

彼は新調の衣類を与えられ

三月に近き碇泊船生活と

その帆船ロヴァー号に別れを告げた。

ハーディの救援の意向を聞くや

七五三太は船中で感謝にあふれて

おのが生い立ち、日本国状

渡米の目的を英文で告白した。

未だ拙き英文ではあったが

行間から迸る彼の心意気に

この青年の人格をハーディは

確然と認知した。

いよいよハーディの家に

迎え入れられることになるや

彼は誠心こめて感謝の辞と

特にハーディのための祈りの言を認めた。

敬虔にして恩愛溢るるハーディ夫妻に

息子の如くジョセフと呼ばれての生活は

夢か現か、正に天国そのものである。

清教徒の流れなる、福音的な愛を受け

新島襄自身いよいよ

福音的な魂に化せられる。

起居をゆるされたハーデイの邸宅は

マサチュセッツ州庁近傍の

ジョーイ町四番地。

裏にとり、ハーデイは親切にして品格あり

夫人は温和にして深き思い遣りあり。

おのが故里の家庭と

一脈通ずる想いを抱いた。

ありがたき哉、靈しき哉

神に深く感謝した。

日本を脱出して正に四百五十六日

ハーデイに迎えられた。

顧みれば何たる奇しき神の御導きぞ！

「事實はまことに小説より奇」にして

ノン・フィクションの叙事詩の中にこそ

まことのドラマはある哉

想い見よ

旧新約聖書こそ最大のドラマなり！

ハーデイは一八一六年生れ

新島は四三年生れ。

それゆゑ二十七年の年差あり、親子のようだ。

ハーデイは牧師を志したが

病弱と窮乏のためコースを変更し

鍛錬努力の揚句遂にハーデイ商会を設立

貿易業を営んだ。

彼はしかし魂をマンモンには断じて売らず

神の僕として神の栄光のため

造船業、鉄道事業にも財を投じ

ボストンに於ける第一流の実業家となった。

人情篤く、誠意深く、人々の敬愛の的

それはすべて

神・キリストの恵と力の身証による。

しかも夫人が彼に極めて照応する存在。

こんな美しい夫妻のもとに

寄寓することになった裏は何たる恵福か

彼は信仰を深められ

勉学は加熱し、天来の力が臨んだ。

温泉さながらのハーデイ家の愛に浸り

七五三太は汽車に始めて乗せられて

ボストンから一時間の村里アンドヴァーへ

ハーデイの案内で赴き

フリップ・スクールの校長

サムエル・H・テラー博士に紹介される。

校長はヒッドン姉弟に世話を託した。

その邸宅にはフリップ夫妻も同居。

この夫妻、七五三太の教導に

友愛と興味を以て尽してくれる。

未知の人らを感じさせたは新島の

日本脱出の憂国至誠の手記である。

一八六五年晩秋から六七年初夏までの

約二ヶ年のフリップ・スクール在学中

彼は英語の実力、自然科学、数学等の

修得に力を尽した。ヒッドン姉弟

フリップ夫妻への感謝に溢れ

且つその道を拓いてくれたハーデイ夫妻の
恩愛を胸底に感じつつ

次のコースに向う七五三太の魂の世界に

画然たる前進があった。それは何か。

我らは彼が一八六六年十月二十七日に

ハーデイ夫人に書いた手紙に耳傾けよう。

「只今の私の信仰を申し上げれば

キリストはわれらの罪のために

死に給いました。……

私は何ものにも優つて

キリストを愛するゆえに

キリストに一切を捧げます……

キリストへの私の愛を

引き離すものは何もなきほど

キリストに私自身固く結ばれています。

ですが私の肉は、私の霊より弱いので

私は教会に加入してキリストに結ばれ

いよいよキリストと一体となり

キリストの名のために

わが同胞に大いなる善き事を

なさんと願うものです」

これはまぎれもなく魂の一大革新である。

彼の確然たる入信の経路を願えば

香港で一卷の漢訳新約聖書を買って

これを心を罩めて読みつけ

特にヨハネ福音書三章十六節を

福音の焦点として身につけたこと

而もセーヴォリー、テラー

ハーディ、フリンットの四氏が

福音的な愛の人格で

彼を相繼いで懇切に指導

援助してくれたこと

これらの事態を通して

神・キリストの愛と導きを

全身で体受したことにある。

かくて彼は決定的にキリストの僕たる

自覚を与えられ、いつの日か日本のために

尽すべき使命感にいいよ燃えた。

フィリップ・スクールの勉学は

信仰の骨格に然るべき肉づけと相成った。

六七年（慶応三年）七月

新島はフィリップ・スクール卒。

ハーディ夫妻の後援により

九月にアマースト大学入学。

かのフリントは

同大学のシーリー教授に宛て

誠意あふる紹介状を書いた。

その手紙の中で

如何にジョセフ・ニージマが

聖書を愛読しているか

おのが靈性の修養にいかに向かっているか

此の如き生徒を未だ曾て見たことがない

と言っている。長文の紹介状だが

要するに新島は愛すべき注目すべき

選別の器であることが文意である。

ジュリウス・H・シーリー博士は人格高潔

学殖深く、信仰篤き教授

学の内外に信望厚き人

後に総長となつた人。

此の如き教授の指導を受けた新島は

まことに恵まれた学徒であつた。

彼はしかし、自然科学の諸学に向学心強く

特に日本が山多き鉱産国たることに注目し

鉱物学の研究に力を注いだ。

そのために彼は遠近の諸種の鉱山を見学。

暑中休暇も鉱物採集に活用した。

大学時代も援助を惜しまず

続けてくれたのはハーディ夫妻。

彼の感謝は言を越えた。

アマースト大学在学中

寄宿舎生活ではあつたが

シーリー教授は彼を

家族の一員の如く遇した。

彼は六八年の春、七〇年の春

リウマチに苦しんだが

二回ともシーリー教授の家で

手厚き保養に与かつた。

キリストの愛に生きる

シーリー教授の恩愛に

彼は如何に感謝すべきかを

知らぬのであつた。

彼に生涯不滅の印象を遺したのは

シーリー教授がキリスト愛の

証者たるその相であつた。

アマーストはボストンの西方二百キロ軒

文字通り山紫水明の地、自然環境満点

しかも大学の気風は品格あり、温和なり。

シーリー教授を始めとし

教授陣がこの学風の源泉

*山紫水明は自然の景色が清く美しいこと。

即ち敬虔にして清純

明朗にして温和なる雰囲気が

極めて自然に校風となつていた。

学友が彼を何と見ていたのだろう。

「新島は清潔整頓^{せいとん}の化身^{けしん}のようだ」

これは新島が友人たちのため

室内を見事に整備したからだ。

「新島は明朗快活、信仰は極めて厚い。

晨^{あした}に夕に、聖書は彼の最愛読書」

「新島はクラスの祈禱会で

しばしば司会した。

英語は未熟だが、心は広く愛に充つ。

その人物は光り輝き尊敬^{まじ}的^{てき}」

「礼儀正しく忍耐強く、勇氣あり。

責任感深き人、新島の身辺からは

感化力が流れている」

友人たちの所感を要約すれば以上のようなようだ。

ともあれ、彼が福音以前に接していたもの

孔孟^{こうもう}の教たる仁義^{じんぎ}*

武士道的精神なる信義^{しんぎ}も

彼にとつて生活の指針ではあつたが

真の力を与えるものではなかつた。

東西古今の宗教家の関門たる

自我^{がしやう}、我執^{がしやう}の問題、即ち罪の問題が

未問、未解決のままであつた。

これを解決するには天来の力を要した。

それが即ち十字架の贖罪^{しよくざい}力であつた。

キリストの、罪なき人の、無量の愛！

神の聖意を体現^{たいげん}したキリストの義が

無条件に贖罪愛の中で与えられる。

十字架を信受^{しんじゆ}して

この義この愛を体受^{たいじゆ}すると

そこに同時に来臨するは聖霊^{せいれい}である。

聖霊は、この義この愛を衷^{うち}に有つ霊！

* 孔孟 孔子と孟子。

* 仁義 儒教の道德概念で、孟子の中心的思想。

仁は博愛の徳、義は悪を恥じ是非を判する徳を意味し、いずれも生得のものとして説く。

* 信義 約束を守り、義務を果たすこと。

* 我執 永遠不滅の自我が実在すると考え、執着すること。自分の意見を押し通すこと。我をはること。

* 体現 二からで現すること。

* 信受 信を受け取ること。

* 体受 二からで受け取ること。

ここに真の力あり

「福音は言に非ず力なり」
ふくいん ことば あり

と喝破したパウロの生命の現実である。

新島襄はこれをしも体受體現しつゝあつた。

政府から遣わされた如何なる使者よりも

天来の声に従つて単独生命賭けで渡海した

一青年新島七五三太だけが

遂に真にキリストに捉えられ

パウロ、ルターの如く

キリストの僕となつた。

日本人の魂の救のための

大使命を果さんための先陣として

アマースト大学を後に訪れた

内村鑑三の先輩として。

彼の科学探究の精神も

大自然を神の創造の業として見るところに

一般の科学者と赴きを異にしている。

内村鑑三も彼と同じ精神をもつていた。

旧約の主エホバ神の神靈に対し

信義、信実を以て信仰に生き

且つ殉道した預言者たち

それに類してキリストの聖靈に生き

且つ殉じた使徒たち

その大焦点に立つキリストの

父神への信の極致

そこに旧新約の太い霊線が貫いている。

その如く日本武士道の信義

断じて幸福主義ではなく

信義のためには生命を捧げる

この武士道に天から照応するのは

福音の信義

赤穂義士の主君浅野長矩への忠信の如き

正に宗教性をもつたものであつた。

聖意體現が福音の信義であり

愛の體現となる。

*喝破しまちがいを正し、真理を明らかにすること。

*ロマ書八・三三―三九

九「……録して」汝の

ために我らば、終日、殺

されて屠らるべき羊の如

きものと為られたり」と

あるが如し。然れど凡て

これらの事の中にありて

も、我らを愛したまふ者

に頼り、勝ち得て余あり

われ確く信ず。死も生命

も、御使も、權威ある者

も、今ある者も後あらん

者も、力ある者も、高き

も深きも、此の他の造ら

れたるものも、我らの主

キリスト・イエスにある

神の愛より、我らを離れ

しむるを得ざることを」

*コリント前書第十三

章「たとひ我もろもろ

の国人の言および御使の

言を語るとも、愛なくば

鳴る鐘や響く鐃鈸の如し

……たとひ我わが財産をこ

とごとく施し、又わが体

を焼かるる為に付すとも

愛なくば我に益なし。愛

は寛容にして慈悲あり。

愛は妬まず、愛は誇らず、

愛は妬まず、愛は誇らず、

愛は妬まず、愛は誇らず、

愛は妬まず、愛は誇らず、

日本武士道は然るべき台木ではあるが福音はこれと単なる一貫ではなく

次元的に高く、深く、広い。

まことにパウロが

ロマ書八・三五―三九・

コリント前書第十三章・

エペソ書三・一六―一九・

で叫んでいる如しだ。

新島襄はアマースト大学を三ヶ年在学し

バチエラー・オブ・サイエンスの

称号を授与された。

時に一八七〇年（明治三年）の初夏

祖国を出でて六ヶ年。

新島の最終コースとして

アンドヴァーのハーディ夫人が

フィリップ・スクールと並び立つ

アンドヴァー神学校修学の企画を

既に立案し、勧告するので

これを受けて、彼は同神学校に入学。

組織神学のオースティン・フェルプス校長

新約ギリシヤ語辞典編纂の

パーク・セーヤ教授在任中

理論よりも実践の雰囲気で

カルヴィン主義の流れを掬んだ

この神学校は新島にとり

最終仕上げに恰好と思われた。

同校の「兄弟団」は同神学校創立以来

既に六十余年

伝統由々しき熱烈なる信仰団体。

彼は直ちに加入を申込む

入団許可は簡単ならず

厳しい条項あつて

いかにもカルヴィン主義的だ。

さわれ新島は快く入団を許された。

己の利を求めず、憤はらず、人の悪を念はず、不義を喜ばずして、真理の喜ぶところを喜び、凡そ事忍び、おほよそ事信じ、おほよそ事望み、おほよそ事耐ふるなり。愛は長久までも絶ゆることなし。……今われらは鏡をもて見るごとく見るところ臆なり。然れど、かの時には顔を對せて相見ん。今わが知るところ全からず、然れど、かの時には我が知られたる如く全く知るべし。げに信仰と希望と愛と此の三つの者は限りなく存らん、而して其のうち最も大なるは愛なり。

*エペソ書三・一六―一九
九二「父その栄光の富にしがひて、御霊により力をもて汝らの内なる人を強くし、信仰によりてキリストを汝らの心に住はせ、汝らをして愛に根ざし、愛を基とし、凡ての聖徒とともにキリストの愛の広さ・長さ・高さ・深さのいかにかなるかを悟り、その測り知

時は十一月十四日。

彼の風評は聞こえてもいたし

いちもくりようたふ*

一目瞭然たる彼の風貌が然らしめた。

この「兄弟団」員となったことは

同時に将来伝道実践を

運命的、使命的に約束するもの。

彼は充実した毎日を団員と

厳しく楽しく明け暮れた。

福音の霊の世界の人となった新島は

祖国脱出時の愛国の内容と目的が

質的变化を来たしたことを判然と悟った。

先進国の文明を

その経済力ある物質文明と見

科学の力を優先とし、これに基づく軍事力

そのような先進国と国力を争うところに

愛国の使命ありと意気込んでいた。

ところがここ数年に

個人的に接したアメリカ人は

宗教心深くして真の人間愛をもつ人ばかり

彼らと接して新島は、人種の相違ではなく

宗教心、教養、人間愛に全く感動させられ

聖書を身証している彼らの相に参った。

彼自身、実はそういう霊的世界を

求めずして求めていたことに気がついた。

彼の本質の中に

霊的世界を欣ぶ双葉があつたのだ。

さればこそ余人の及ばぬ

聖書身読を彼はなしたので。

日本に欠けているこの福音の世界を

開示し伝道することがわが愛国なりと

翻然悟ったこの数年の

フィリップ・スクール、アマースト大学

及びアンドヴァー神学校生活であつた。

神学校の兄弟団の精神とその在り方は

帰国してどういう相となつて

現じ展開するか。

る可からざる愛を知ることを得しめ、凡て神に満てる者を汝らに満たしめ給はん事を」

* 掬ふ水を手ですくつて飲む。両手ですくう。

* 一目瞭然Ⅱひと目であきらかであるさま。

* 翻然Ⅱ心を突然に改めるさま。

そこに彼の無量の希望が湧いて来た。
否、真の希望は天から与えられる
祈り待つべし。

さて新島は

神学校二年の歳月も終りに近づき

帰国の準備にとりかからねばならぬ。

徳川幕府政權下

禁令を破って脱国した身である。

幕府が倒れ、明治の新政府とはなったが
果して如何。

一八七一年（明治四年）三月中旬

彼はボストンで米國ワシントン駐割の

初代弁務使森有礼に出会った。

鎖港攘夷のかたくなな叫びは

虚空に消え去り

今や開港貿易使臣駐割の世となった。

森有礼とはその後も再三諸所で面談し

森は彼を理解し、然るべく便宜をはかり
彼の自由独立と彼の愛國心を尊重した。

政府派遣ではないが、海外留学が認められ

帰国の旅券も与えられることになった。

諸交渉の蔭には

ハーディ夫人の執り成しがあった。

キリスト教精神を

教育の根底に有たなければ

日本人の魂の世界は真の光をもたず

真の教育ができないことは新島の確信で

このことを森が然るべく

理解してくれたことはやはり神の助け

新島の信仰の力でもあった。

後日アマーストのクラーク教授が

札幌農学校で

聖書を土台にしなければ教育はしない

と言って貫いたあの信仰と相通ずる。

そのクラークの第二期生に内村鑑三が居て

*駐割官吏が職務上その地に滞在すること。

クラークの精神を受けて

敢然と立ち上がったのであった。

顧みれば、七五三太が

函館を密かに脱出してこの方

祖国は疾風怒濤の政変で

一八六八年春三月、五箇条御誓文發布

秋九月、明治と改元

明治四年には廃藩置県

現代日本の原形が成る。

新島は期せずして歴史的大転換の時期に

彼自らも魂の内的大変革を成していた。

在米正味八年

一八七四年（明治七年）七月二日

彼の学窓生活は終止符を打った。

八月中旬、ハーディ夫妻の好意により

メイン州マウント・テザート島の

フレンチメン湾に臨むハーディ家海浜荘で

楽しき静養の夏を送った。

かくて再びボストンに帰り

マウントバーノン教会で九月二十四日

シーリー教授を紹介してくれた

フリント牧師から按手札を受け

牧師の資格を与えられた。

この按手札式の説教は

シーリー教授であった。

新島は生涯これらの人々に

実存を以て謝恩したのだ。

さて同年十月に

ヴァーモント州のラットランドで

アメリカ伝道協会外国部

第六十五年会が開かれ

その際彼も別辞^{べつじ}を述べる段取りと相成った。

別辞を述べる前日、彼はその稿^{こう}を草^{そう}した。

壇上に立つと準備した草稿^{そうごう}が脳裏から去り

全然別の十分間演説となった。

即ちその瞬間に閃いた天来の告白である。

*按手＝キリスト教で、
聖職者が人の頭に手を置
き、祝福を与えること。

*別辞＝別れのあいさつ。

*草稿＝下書き。原稿。

それは正に新島襄の全身に罩る

烈々火の如き真の教育愛国の悲願であつた。

我々はその内容の精神を

後年彼が発表した

「同志社設立の始末」に於て見る。

彼は幕府の禁令を犯し、生命賭けで

印度洋、大西洋、長程万波

遂に渡米してアメリカの文明文化に接し

その源泉が

キリストの福音にあることを深く認識し

おのれもキリスト信仰を抱くに至り

日本の精神的進展のためには

教育の根底に

キリストの福音なかるべからずと悟り

帰国の暁には必ず

キリスト教精神の大学を創立して

教育愛国に一身を捧げんとする主旨を

満場の聴衆に、言々句々

白熱の火花が散る如く告白した。

彼はこの演説中、悲憤切願の余り

壇上涕淚数行、言辞中絶数秒余

幾回なりしか。

福音を土台とした教育救国の悲願が

新島の全存在の相であつた。

会衆の中から突如一紳士立ち上り

「寄贈一千弗」

忽ち会場の此処彼処より

一千、五百、三百、二百、百、……

寄贈の申込み跡を絶たず。

満場賛同、感激の嵐と化した。

かくて瞬時にして五千弗を超える資金が。

彼自身感激の中に深く感謝し

別れの挨拶をなし

將に演壇を降りんとするや

瘦身にして檻樓の一老農夫

徐ろに進み出で襄の面前で戦慄やまず

懷中より金二弗を出し涙を零し

「私は碧山州の寒貧の一農夫

此の二弗は今日私の帰路の汽車賃
だけれども、今貴殿の演説を聞き
その愛国心に感激しました。

私は老いたるも徒歩で家に帰ります。

これは僅少ですが

大学建設費用の一端として下さるなら

私の悦びこれに過ぎるものは

ありません」

この「レプタ二枚」に感激した襄は
言も出でず、低頭して篤く握手。

襄もロトランド府を出でゆくこと

四料にもならぬ時

背後から彼を呼ぶ声あり

振り向けば一老婦。

彼に近づいて涙ながらに曰く

「嬬は近村の一寡婦です、赤貧ですが

貴方さまの教育の御悲願に感じ入り

僅か二弗ですがさしあげます

会場では恥ずかしかったのです。

私の微志をお受け願います」

と言つて財布を空にした。

これが本当の愛だ、福音だ

と襄は感涙に咽んだ。

ロトランド府の集会での

最後のこの二人こそは

キリストの最も悦び給う全身の愛の体現。

新島の霊も心もこの老農夫老寡婦の

最後の出現に打たれ

彼の教育熱は白熱化した。

いよいよ新島は帰国の段取りと相成つた。

願えば何たる奇遇の連続ぞ

バトン・タッチの如く彼を導いた面々は

函館ゆきの快風丸船長

*奇遇＝思いがけなく巡り合うこと。

米船ベルリン号への

夜陰の案内者富士屋宇之吉

同船長セーヴォリーによる上海ゆき

次の大航海のワイルド・ロヴァー号の

船長テラー

ボストン入港後

その船主ハーディとその夫人

フィリップ・スクールの在学中

ハーディ邸宅での同居者

ヒットン姉弟とフリント夫妻

アマースト大学のシーリー教授

ハーディ夫人幹旋のアンドヴァー神学校と

その「兄弟団」という経路

日々並べて八、九年の歳月が過ぎた。

学窓七年の螢雪

これは新島の人間を神の属とした

福音を土台とした教育の大学を

帰国後必ず創設せんと

不退転の悲願を与えた。

七四年十月十八日

ハーディ夫妻と「エール」大学の教会で

礼拝式へ参列、その日大学街の教会堂で

新島は日本に就いて最後の演説をした

満堂の聴衆に。

ハーディ夫妻はボストンのはるか西南

ニューヘヴンまで同道して

名残^{なごり}尽きせぬ訣別^{わかれ}をなした。

夫人の最後の接吻に彼は熱い涙。

蕭颯^{しょうさつ}たる秋風に紅葉また黄葉が

ハラハラと散っている。

アメリカ大陸を汽車で横断して

サンフランシスコに着いたのは

十月二十九日。

正に宗教改革記念日なる三十一日に

彼の搭乗船コロラド号は解纜^{かいらん}金門を出た。

彼の搭乗船コロラド号は解纜^{かいらん}金門を出た。

* 螢雪 Ⅱ 苦勞して勉強すること。

* 蕭颯 Ⅱ ものさびしく吹く風の音。

* 解纜 Ⅱ 出帆。

印度洋、大西洋を航して

渡米した彼はこの度は太平洋。

船はハワイにも寄らず日本へ直航

三週間を越えた頃

渺茫たる大洋の水平線上に

現われた淡き影は

十年前密かに立ち出でた島影だ。

噫、秋津島日本

やがて霊峰富士が雲波の上に。感無量

房総半島を右に見て浦賀水道に入り

間もなく船は横浜港の波止場に

横づけとなった。

時に一八七四年明治七年十一月二十六日。

東京を通つて腕車を駆つて

上州安中の父母の許へ。

二十八日真夜中に安中に着く。

昔の飛脚のようだ。

翌日両親を始め家族近親知友に

欣び迎えられた。

だが父親はリウマチで不如意の体

言もあらず感涙の面接。

七五三太は心の底からの挨拶を感涙をもて。

幕府は倒れ、明治天皇の御代となり

日本はめざましき変転の真最中

所謂文明開化進展中の日本だ。

しかしキリスト教は未だ公然とは

認められない。

実は西欧文化の根底であり底力である

キリスト教の光も力も内実も

食わずざらいで従来の邪教視が一般である。

欧米使節団員も認識不足。

さればこそ新島襄の使命は重且つ大である。

安中滞在三週間七四年（明治七年）暮

東京の文部省に田中文部大輔を訪ねた。

新島のアンドヴァー神学校時代に

*渺茫＝広々と果てしないさま。

*腕車＝人力車の別称。

明治新日本の欧米使節団が
まずアメリカを訪ねた際に

田中文部理事官が欧州教育事情を

視察するに当り、彼に同道と

視察資料の作成を懇願したので

彼は恩義あるハーディ氏の

賛意と許可を得て随行し

立派な視察報告書を作成。

この内実たるやさすがは新島だ。

新島の訪問の目的は

アメリカで演説した如く

私立大学創設の念願が

田中の理解賛助を得んがため。

次に是非とも会いたかったのは

尊敬する木戸副使。

彼はイギリスで木戸孝允副使と相見え

親しく語らい

欧米教育の内面性を新島が語りたるに対し

木戸は首肯して新島を

「頼もしき友」と見た。

この人が当時既に参議文部卿を辞し

山口に帰郷していたのは残念千万。

彼に好意を寄せてくれた森有礼は

帰京後文部から外務大丞の職に移っていた。

ともあれ、学校設立地物色のため

関西に急いだ。

彼は今やあの印度洋、大西洋の

踏海を共にしたテラー船長に

ジョーと呼ばれた名をおのが本名と

正式に成し、新島襄を名のり

七五三太はうちうちだけのものとした。

我らはこの襄において

キリストの歴史的予表的存在ヨセフを思う。

土地の探索には紆余曲折ありて

容易に定まるものではなかった。

新島が明けて明治八年（一八七五）一月

大阪に來た時、木戸、大久保、井上伊藤、板垣の錚々たるメンバーが所謂「大阪會議」で政務改革

その他を議していた。

好機逸すべからずと木戸の別宅を訪ねた。

ドイツではリウマチス湯治のために

新島はウィースバーデンにいた

そのとき木戸に會つて以來のことである。

木戸孝允は

国策の最重要事は教育にありとした。

その普及と振興もさることながら

大切なのは根本精神。

新島襄の念願とするところは

所謂伝道学校に非ず

高等専門の學問を教授する大学

哲学、文学、法律、政治、経済

数学、物理、化学、工学、医学の

総合大学であり

根底はキリスト教主義にして
學生を人格的に薰陶せんため
學長、教授連は

福音的な宗教心を有つべしというにある。

このような大学は一朝一夕に成らず

十年、二十年、三十年、五十年と

教授陣自身の自己形成を不可欠とし

学校全体が「敬天愛人」の雰囲気

をおのずから有つに至るを要する。

学校の土地撰定には紆余曲折があつた。

それが京都と決定し

キリスト教精神の学校という風聞伝わるや

本来仏教の歴史深き京都のことゆえ

仏僧たちの猛反対の風が吹き荒れた。

木戸はそのため援助の道を備えた。

デーヴィスという南北戦争時に

北軍に挺身し、人道主義のため戦つた

勇士が今は宣教師、この人が応援した。

やぞ
耶蘇教禁制の高札は明治六年早春に
取りのけられた

今は信教の自由への戦のとき

新島は何ものも恐れず

所信一貫で建設のため東奔西走

然るべき人材を訪ねて体当りし

教育報国の内容と真意を訴えたり

説いたりした。

ついに木戸は勿論、田中も彼を容れた。

新島の無私の誠心、堅き信念と高き理想が

要人の賛意を勝ち得ていよいよ実現となる。

明治八年（一八七五）十一月二十九日に

京都市寺町通り丸太町上ル松蔭町

旧高松邸の仮校舎ながら

「官許同志社英学校」という

看板が真新しく掲げられた。

帰国したのが明治七年十一月二十六日

正に一年の苦戦を以て

新島の悲願を神は成就せしめ給うた。

この日新島丸頭町かづすまの新島宅で開校の祈禱会

これに参列の学生は八名

正に選ばれたる八名なる哉

学校は教授学生の数ならず、質たるのみ。

この英学校が同志社大学に

発展、展開するには

何十年かの歳月を要したが

新島襄創始者、初代学長の靈願は

昭々しょうさとして同志社大学の中に貫いている。

新島襄先生こそは

日本新教史の曙あけの明星めいせいである。

天野貞祐

―「わが人生」―

天野貞祐先生天界百歳の日を迎えて

天野先生に捧ぐ 一九八四年九月三十日

1

ああ古典書に親しみし
少年時代のなつかしや
わがたましひの故里よ
ひるは野山を駈けめぐり
夜はわが祖母に書を読み
三つ児だましひ創造られぬ

2

故里鳥屋を離れきて
都は獨協中学に
入りて四年のゆくなべに

3

夢中なりしは野球かな
試合に出でて滑りこみ
そこねてわれは捻挫せり
順天堂に通いしも
湯河原温泉湯治にも
効果あらず里がえり
ときしもチフス流行りたり
母とわれとは感染し
母はみまかり吾は遺る

あまの ていゆう
一八八四―一九八〇年。
哲学者・教育者。神奈川
県生まれ。京大卒。甲南
一高、獨協中学・高等学
校長、獨協大学長、文相
などを歴任。著書「道理
の感覚」など。

一九八四年九月二十九日
夜作詩。天野貞祐の「わ
が人生」の文章を汲んで
作詩した。

4 身代りの如ごと 母去りぬ

ああ断腸のわが想い

天地晦冥くわいめい絶望よ

空ゆく雲に母を呼び

星を仰ぎて母を呼ぶ

かくて月日は流れたり

5 「わが子よ泣くな とりて読め」

母のみ声か 立ち帰り

ひもときし書は内村のうちむら*

『最大遺物いぶつ 後世への』

わがたましひに光さし

力を得たり全身に

6 かくて勉強まなびにうちこみて

捲土重来けんじゅうらい 獨協の

狭き門をば突破して

最上級に入学す

人生道の礎石いしづえを

与えられたる四年よとせなり

7 医師たらんとの路を変え

教育者たる道のため

一高文科を選びたり

授業はドイツ語興味あり

ヒルティーを知りわが道は

いよいよ定さだか 教育者！

8 安息日あんそくにちは寮を出で

風雨にめげず柏木かしわぎへ

徒歩にて通い 内村の

聖書講義を聴きたれば

畏神いしんの心据すえられて

教育心の基礎成りぬ

*内村Ⅱ内村鑑三。

*捲土重来Ⅱ一度失敗した者が、また、もり返すこと。けんどこようらい。
*安息日Ⅱユダヤ教やキリスト教などで、一切の業務を休んで会堂や教会で礼拝をする日。ユダヤ教では金曜の日没から土曜の日没まで。キリスト教では日曜日。あんそくび。あんそくじつ。

9

岩元先生 いわもと われに告ぐ

「教育者たる道ならば

哲学道を往け 天野！」

かくて京大哲学の

道に踏み入り夜も昼も

ひたすらはげむ哲の学

10

七高教授時代には

哲人カントの名著たる

『純粋理性批判』をば

翻訳すべき使命受け

孜々しし営々*えいと夜は専ら*よ

カントカントで暮しけり

11

学習院の時代には

ハイデル往きの旅に出で

九鬼周造に彼の地にて

出会いし幸を忘れめや

12

哲学界の鬼才たる

わが友九鬼は『文芸論』

遺して去りぬ 技巧無き

絶対矛盾の一者たる

彼の生涯いのちぞ 哲学の

自証なりしぞ あな床し

13

時はめぐりて京大の

哲学道へ帰りゆく

時局の危機を憂いたる

『道理の感覚』わが理念！

まことのロゴスを踏みにじり

軍部わが書を寸断す

*孜々＝熱心に励むさま。
*営々＝せっせっせとつとめるさま。

14

甲南校長時代にも

あらしはやまず講堂を

兵器の庫とすべしとの

あらぬ要求を拒みけり

戦時といえど教育を

見棄つることのあるべきか

15

一高校長時代こそ

わが人生の栄光なりし

わが人生の春なりし

一高時代がよみがえる

柏の徽なつかしき

一高学徒と暮しけり

16

しかはあれども時じくぞ

教育界にあらし吹き

容れられざりきわが理念

一高の運命ここに尽き

17

吉田総理の依頼あり

文部大臣になれかしと

われは情なく拒みしが

総理自らおとずれて

もとめたりしが断れば

その袂より置き手紙！

18

愛国の情切々の

その文面はわれを打つ

されどわが意は変らざり

さもあらばあれ意を決し

心を殺しわれ起ちて

文部の長の座につきぬ

19

文部行政まこともて
企画新たにうち出せる
二三の業は遺りしが

「国民実践要領」に

意を尽せしも甲斐ぞなき
ふたとせみつき
二年三月われ去りぬ

20

かくてありしが 羽仁もと子
敬神愛国さながらの

自由学園 われを呼び

理事の長にと請願めたり

その教育の実践に

われは欣び諾しけり

21

時しもあれや わが母校
獨協学園 危機にあり
切なる声にわれ起ちて

22

校長として復興の
わざを進めて十余年
教育愛を貫けり

「心正しく身は強く

知性輝う善意志よ

情操美しく品ありて

天資開発 文化には

創造的なる人ぞ」 是れ

わが教育の理念なる

23

時期は来れり宿願の

獨協大学創立よ

関 湊氏の献身の

協力得たり 草加なる

零線地帯に草わけの

工事を成せり大林

24

わが学徒らよ 「大学は
学問による人間の

形成さるる場にぞある」

学のうちこみ実力を

深く養い 創造の

閃めきのある人と成れ

25

歴史は旧し 獨協は

医学界とのゆかりあり

隠れし素志の実現は

獨協医大の創立よ

ところは何処いずこ 栃木なる

壬生みぶの原野をはく卜したり

26

関理事長と日独の

医の学界の石の橋

石橋博士 欣然きんぜんと

獨協医大の創設に

27

獨協学園 進み往く

ついに成りしは埼玉の

獨協高校 「創造と

信愛・開拓」 校是こうぜなり

わが意を得たり 進めかし

中高目白★と相和して

28

わが事終る 教育に

生涯いのちをかけて悔はなし

天界よりぞわれ祈る

獨協学園百年を

祝してわれは今ここに

百歳ももこせの日に感謝する

*中高目白★獨協中学・
高等学校のこと。東京都
文京区関口町(旧目白台)
に所在。

29

獨協百年 われもまた
彼岸の国に来て見れば

昔なじみの影多し

真理を生きし土井、出射^{いでい}

学園建設^{づくい}の関湊

われら親しく握手せり

30

ああ獨協の人々よ！

君ら知らずや天界に

不滅の獨協成りゆくを

されば乾坤^{けんこん}相呼^{*}びて

獨協氣質^{かたぎ}勇ましく

進み往かなむ永遠^{とこしえ}に

*乾坤Ⅱ対立・対比させられるもの。天地。陰陽。

佐々木吉三郎

教育の本格的な第一段は
小学校なる学童時代。

私は東京高師附属小学の

男女組なる第二部で

六年を飽かず遊び真面に学んだ。

先生は一時限に異科目を

上下二学年生に同一教室で

男女十二名ずつの各学年に

巧みに教えるヴェテラン揃い

かくて六年の全過程を我らは修了。

わが五、六年時の校長は

佐々木吉三郎先生。

毎週月曜第一時限前半は

校長の訓話たる「講堂修身」。

熱烈たる講話にいつも私は全く感動。

校長の全身的な気魄の相が

いつまでもわが心の中に生きている。

七十年も経ったある日

不図思い立ち母校を訪れた。

若い校長さんに、昔々の想い出と

佐々木吉三郎
東京高等師範附属小学校
の校長（一九一六年頃）。

佐々木校長の文献捜しの故を語った。

図書館で『教育研究』なる雑誌の中に

先生の論説を発見！ 驚異と感激。

ことの次第を令嬢に電話した。

私より一年後輩の彼女はいたく驚く。

氷川神社境内に昔ながらの

桜が今し満開、ひらひらと

散りかかる英は桜色の涙と見えた。

このなつかしい昔のわが通学路の

ほとりに彼女の家があつたとは。

彼女も私も今は老境

だが昔の面影がほのかに。

語りゆくにつれ、昔が今に甦る。

学校園で花や野菜の栽培の時

彼女の区画はわが区画の前であつたのだ。

今回初めて言を交すとは。

佐々木先生の著書『青年と人生観』を

唯一の遺品として彼女は有つていた。

この詩の世界で私は今から

その著書の先生と語り合いたい。

瞑目して祈り、聖靈に

天界の先生を呼んで下さいと

おたのみすると間もなく

先生が昔ながらのおすがたで現われた。

「校長先生！ と申し上げても先生は

小学生の私を御存じありません。

私はしかし先生を忘れ得ません。

先生が何を語られたかは憶えていませんが

先生の迫力あふれた御講話振りが

あざやかに私の心鏡に映像されています。

その内容の本質がこの『青年と人生観』に

躍如として叙述されていると思いますので

先生と語らいたくなりました。

ところで一九一六年（大正五年）春の

小学校卒業時の記念写真が

ここにあるので御覧下さい。

かく語る私小池は最上段左端の少年。

ところが今はこの同期生二十四名の

殆ど全員が彼岸で

語る友が見あたりません。

勿論前面に並み居る先生方も彼岸です。

私がこのように遺されていますので

先生の存在を今の教育界に

紹介する義務と光栄を感じます。

先生は、天藉^かするに尚二十年を以てすれば

文部大臣として教育の大指導を

果たすべき存在であられました。

惜しみて余りある千載^{せんざい}の遺恨^{いこん}です」

「いやどうもありがとう。

君のような教え子がいるとは！

して見ると私の娘の淑子と徳子が

君の上と下の学年にいたのだね

ふしぎなめぐり合いというもののだ。

では拙著^{せつしよ}のところどころに触れつつ

語り合おうとしよう。そうだね

大正十三年（一九二四）の元日に

私は伊豆長岡の大和館の

六畳の間で一尺七寸四方の

チャブ台を机としてこれを書いた。

家族の者たちが、お国のために

御奉公^{かんせい}の本をお書き下さいと

閑静^{かんせい}なところを勧めてくれた。

私は何の参考書もなく

ただ五十年間の体験に基づき

思うところを正直に告白した。

私は何々主義だとか

イデオロギー^{わく}の枠^{わく}がきらい。

ただ哲学する精神が大切で

哲学は専門家の独占のことではなく

権兵衛、太郎作、お鍋どんですら

夫々^{それぞれ}然るべき人生観をもつて

*千載〓千年。長い年月。
*遺恨〓忘れられない
らみ。

生活することが大切なのだ」

「先生はまことに痛快なことをおっしゃる。

全くその通りです。自己をいつわらず

おのれ自身、哲学しながら

真理に即せんと努力して生きることこそ

青年の在り方と私も思い

私も教育に前後五十年関つて来ましたが

今の高校生はおろか大学生ですら

哲学する精神が欠けています。

それは青少年を責めるより

我々教師及び両親の問題でしょう。

先ず話を小学の学童教育に

もどして考えたく存じます。

私もがあの「附属」で教育を受けた頃は

日常生活の

「おはようございます」「お休みなさい」

「行つて参ります」「ただ今！」

食事時の「いただきます」「ごちそうさま」

命ぜられたり頼まれた時の

「ハイ」の応答

これらの挨拶を心からはつきりやること

心の姿勢と身体からだの姿勢が基本とされ

「よく学びよく遊べ」でありました。

文明文化が進展し

ラジオ、テレビがゆき渡り、あやしげな

「民主主義」が孝道こうどうを踏みつぶし

社会、社会で、青少年の人間本来の

人間性が歪曲わいきよくされる事態を洞察し

これに敢然かんぜん対処すべき教育者自身が

自覚も権威も大方失っている現状ですよ。

教育の要めは、先生が愛を以て

生徒の個性と才能の特質を掌握しょうあくし

生徒をしておのが天分を中心に

自信と希望を以て

学ぶ意欲をもたせること

平均点の、偏差値のと

成績を問題にせず

如何に考え、如何に学ぶか

自己錬磨れんまが問題。

先生は両親特に母親との語らいで

生徒の天賦てんぷをよく認識し

そこにその子の将来の

使命あることを祈願して

明るく強く楽しく指導することが

極めて大切なことと、私は思つて

私も校長のとき

その方針で先生方に言いました。

ところが入試制度がかかる教育の精神を

横紙破りをするために、誠に遺憾いかにせんはん千万ばんです。

実はもう一つ大切なかくれた根っこが！

それは西郷南洲の名言

敬天愛人が表わしている宗教心です。

これをキリスト教的であれ、仏教的であれ

教育者も両親も有もつていないと

本當の教育は成りゆかぬと

私は確信していますから、校長として

教育の根本理念として

敬天愛人を掲げてやりました。

生徒の本来純真なる心に

神仏に対する先生や両親の生きざまを見て

生徒がおのずから神仏に対する

畏敬いけいと親しみを

有つようになるのが教育の源泉！

その自己修養を教育者自身も両親も

行ずることこそ、学校をも社会をも

あやしげな民主主義をも変えてゆく。

神仏なき民主主義は日本を亡ぼす。

日本人自身がいかなる層の人も

自らペレストロイカを起こすべしです。

ゴルバチョフは二十世紀の末期に当り

自らのペレストロイカで

ドイツの鉄のカーテンを

*天賦てんぷ＝生まれつきの性質。天性。

*遺憾いかにせんはん千万ばん＝非常に残念なさま。

見事にとりはずし、ヨーロッパの様相に大変革を来たしましたね。

佐々木先生、天界でこれを知り快哉をお叫びになったでしょう。
はなしは飛躍しましたが

日本の教育界も大飛躍をすべく

文部省は司法省と同様独立し

文部大臣は佐々木先生のような

宗教・哲学・科学の根本精神をもつ

人がならなければ日本は危ない。

愛も慈悲心も仁もすべて

絶対界から臨むもの

おのれを開け放ち平伏して体受するのみ

かかる心境なきことが日本の教育の

根本欠陥と私は見えています」

「そうだ、その点に私も気づいていた。

昔は今より神仏に対する畏敬の念が

自然にあったと思うから

それほど問題にしなかったが現在君が痛感する通りだろう。

私も学生時代、西洋哲学史や東洋思想史を耽読し思索した揚句

卒論「人生観を論じて教育の将来に及ぶ」を書いた。

爾来その基調で三十余年間を奮戦した。

宇宙論の構成因子等

科学の進展につれ変化するは当然

「万物皆活く」の根本信念は不変。

宮本武蔵の「五輪の書」は

正に武道の聖書と見る」

「地水火風空は万象の根源相と

武蔵は悟り、彼の剣は自由自在に

空を切ることになったのですね。

と同時に人を斬ることを断ち

宗教人の域に入ったわけですね。

私は思うのです、魂が人間存在の

見えざる、顧みて対象化し得ざる
 原^{げん}心^{しん}であるということは

万人は宗教人だということ。

しかもキリストの喝^{かつ}破^ぱした

『ひるがへりて幼児^{おさなご}の如くならずば

天国に入ることあたはず』*

を想うと、学童以前の幼児の中に

天国相、宗教相が現われている。

時^{とき}が経^たち、長^{ちやう}ずるにつれて

樂園喪失の人間に墮^だしてゆく。

だから教育の根底に宗教がなければ

真の教育はできないことを

私も自覚し、その線でやって来ました。

しかしその五十年が結んだ果は

さんたんたるもの、ただ伝道に於て

聖霊の御はたらきが現われ

多くの魂と肉体が救われました」

「そうですか、貴君の使命は

教育よりも伝道にあったのだね」

「そして先生、私の最後の使命は

中学時代から英詩、漢詩が好きで

白線高校、大学時代にはダンテ、ミルトン

ブラウニング、ブレイク、ゲーテ等々

親しんで今日に到っていますので

和歌や短詩や讃美歌や

独^{ドイツ}乙語のソネットなど

優に一卷の『詩歌集』を編むほどに。

ダンテ、ゲーテの如き大詩人の応援の中で

この詩の旅を十二年貫^{つらぬ}き

ある大詩篇を書き貫^ぬくつもりです」

「そうか、それはすばらしいことだ

私も天界でたのしみ待つことにする。

高師附属小学出身に

貴君の如き人が出るとは

私の校長だったことも無駄でなかった」

「先生は驚くべき魂の人

*『ひるがへりて幼児の如くならずば天国に入る
 ことあたはず』Ⅱ
 マルコ伝10・15。

宇宙大のものが先生の中に

原子力となって宿つていたことを

先生のこの御本で私は知り

限りなき敬愛を憶えるのです。

先生は真の魂の教育者であられます。

感謝は無量です。ところでもう少し

おはなしいいをおねがいます。

御本の中の「多即一、一即多」の項で

先生が植物の諸相を見て、根幹枝葉花果は

その差別側から見れば多であるが

その平等側から見れば一で

多即一、一即多の美事な消息。

これは正に、人体も

学校も会社も教会も

社会も国家も世界も宇宙も然り

組織ではなく生命的な有機体であること。

万象の根源相を喝破したもの

わが国の哲人西田先生の

哲学精神でありました。

使徒パウロはエクレシヤ（教会、召団）^{しょうだん*}が

人体の如く有機体であるのが本質だと。

全くそうです。

日本人が何でも大学卒をよしとなし

社会的なランクの基準としている。

そうではない。

ドイツ人はおのが天職を自覚する。

ルターがベルーフ（天職）を重んじた

最初の教育者でした。何としても

日本人は福音をその角度から

わかつてくれて、革命が起きてもいい。

「天賦の才能あるところに天職あり」^{てんぷ*}が

私の教育の根本方針でした。

さて、先生は「生物進化論」の

賛成者ですね。

しかも生物と無生物の差は質的ではないと。

先生はものごとことんまで追求して

*召団＝一般に「教会」と訳されているギリシヤ語の「エクレシヤ」の原意である、神・キリストに呼ばれ「召しだされた団体」という意味からつけられた名称。

*天賦＝生まれつきの性質。天性。

ついに古代のアトムではないアトム
非分離物が更に微細な構造を
もっているから

原子の原もとの構造を掘りさげると

生物も無生物も、要するに

最も微細な原子構造たる

電子、陽子といったものから

成り立っているから

宇宙を構成している無数の星

その元素の構成因子も、要するに

電子、陽子云々うんぬんといったことになる。

生物たる人間も星と共通なものだ。

文学的な表現、あの人はついに

天に昇って星となったといつても

それが単なる空想でないといえますね。

こんどは生物の一つなる人間を顧かえりみると

そのような元素、分子からなる人間の

心とは何か、魂とは何か

この問題の掘りさげに来て
先生も匙さじをなげましたね」

「そうだな、そこは不問にして

人間の人格に飛躍した。

そして、教育の間に転換して

道徳的な在り方に

人間の本質と価値があるとなして

国家社会の完成の目的のためには

犠牲的精神が極めて大切だといったね。

吾人ごじんの願う所は社会進化の大潮流に向つて

一滴にても

より多くの貢献をなし得んことである

そのためには喜んで其身そのみを犠牲に

供せざるべからずと叫んだ」

「先生の烈々たる社会国家世界宇宙の

進化の目的のためには

粉骨碎身せんとの気魄と実践！

そして先生は言即行で、人生五十にして

*吾人ニわれわれ。
わら。わたしたち。われ

強健なる身体をも知らぬ間に酷使^{こくし}して
殉道^{じゆんどう}殉教の死を遂げられました。

ただ合掌瞑目、以て先生の存在に
大なる敬意を表します」

かく私が語って瞑目しているうちに

先生はすがたを消して見えなくなつた。

実に先生は自ら哲学し

そこに生きそこに死んだ。

しかし、かく生きた人は

決して死んだのではない。

天界で生きて

この二十世紀、二十一世紀のため

天界から語りかけ、祈っているのだ。

先生の遺児の一人、徳子さんから

先生の著書を借りて読んだことが

このような先生との会話を可能ならしめた。

然り、小学校時代に私がこの校長に

感動したその波動が

このような叙事詩の一場を成した。

先生の時代の用語「感化^{かんか}」

それは「感化」ではなく

たましひの世界の霊波なのである。

*感化は人に影響を与えて、考え方や行動を変えさせること。

第四篇

藝術家

第一章 詩人

ダンテ

若きダンテの苦悩

"Ecce deus fortior me, qui veniens
dominabitur mihi." -- La Vita Nuova, II
「視よ、我れよりも強き神の我れを順へん
とて来れるを」(新生二、ルカ三・一六)

第一の瞬間

アルノ川のほとり

トスカナの首都フィオレンツァに

春五月のある祝席に、少年少女の中の

一人の乙女^{おとめ}ビーチェ(愛称)が

紅^{くれない}の衣を着て稚い^{おとろな}齡に^{よわい}適わ^{あて}しい

飾^{かざ}りをつけて現われた。

時にこの美^はしき乙女は

「九歳の始めの頃」なりし。

同じく「九歳の終りの頃」なりし

ダンテ アリギエー
リ Dante Alighieri
一二六五―一三二一年。
イタリアの詩人。フィレ
ンツェ市国の政治に参与
したが、政変で追放され、
生涯を流浪の生活に過こ
した。長篇叙事詩『神曲』
で中世神学の精髓を文学
的に統合し、宗教的理想
を呈示した。

*ルカ三・一六ヨハネ
見ての人に答へて言ふ
「我は水にて汝らにバプ
テスマを施す、されど我
よりも能力ある者きたら
ん、我はその鞋の紐を解
くにも足らず。彼は聖霊
と火にて汝らにバプテ
スマを施さん」

少年ダンテがこの少女を一瞥した瞬間

彼の全身の血は顫え心の最奥の室に住む

「生命の霊」(Lo spirito de la vita)が震撼して

「視よ、我れよりも強き神の

我を順へんとて来れるを」

と、私語したと『新生』に記した。

これ正に彼の生涯に於ける

第一のアモールの瞬間であつた。

若きダンテは『新生』に於てこの乙女を

「栄光の淑女」(la gloriosa donna)と

呼んでいる。これ即ち

ベアトリーチェ(Beatrice)である。

ダンテ双眼の「福祉」(Beatitudo)たる

彼女は同時に彼の肉体をも

「惨めな」(misero)ものにする

苦悩の宿命的存在であり

且つ同時に栄光の存在となる。

現世の幸福が偉大なる人物を

創造ることはない。

第二の瞬間

「初(はじめて)の愛」の後この少年は夢多き九年を。

ダンテの衷なるアモレは

この「天女」(angiolina)を求め、垣間見

恋慕しているうちに九年が流れた。

或る日、今や妙齡の処女たる

彼女に邂逅したが

彼は衷なる情感を抑え

「おずおず立っていた」

彼女は彼に目を注ぎ

「得も言われぬ優しき」会釈をした。

その「会釈」はダンテが

「福祉のあらん限りをその時見極めた

と感ずるほど優雅な」

会釈であつた。

これが即ち愛の光の第二の瞬間であつた。

*一瞥〓ちらりと見ること。

*震撼〓ゆれ動くこと。

*福祉〓さいわい。幸福。

*アモレ〓愛。

*邂逅〓思いがけなく出会うこと。めぐり合い。

*払暁〓あかつき。夜明け方。

*頓悟〓あるきつかけで、突然と悟りを開くこと。

*新生七、第二ソネット
トダンテ自らエレミヤ
哀歌一・一二を註記して
いる。

彼女にとっては虹霓の如く

消えゆく瞬間だが

ダンテにとっては不滅の印象を遺す瞬間。

払暁の鳴声一つを聞いて

頓悟した仏僧の如く

偉大な素質を宿す人物は瞬間を遁さない。

第二の瞬間が遺した美人の会釈は

ダンテのアモレに沁み入り

肉体を「養れ」させてゆく。

「ああ、汝ら愛の道行く人よ

たたずみて見よ、わが愛いの如く

深き憂い世にありや。……」

(新生七、第二ソネット)*

ベアトリーチェの結婚

ダンテは他の女たちを愛する如く見せて

おのれを秘めんとしたことが逆効果となり

ベアトリーチェの会釈は拒否の相に変わった。

そのため彼は聖マリヤに

憫みを乞うている。(新生一二)

また、ある婚宴の席で

ベアトリーチェにめぐりあつたが

このときも彼は失敗している。(新生一八)

しかしダンテは常人ではない。

「わが愛人を称える言」の中に

「失うおそれなきもの」を彼は捉える。

即ち彼は「わが主の愛」による

「凡ての福祉」を見た。

ベアトリーチェの「天女」の如き存在が

彼の魂を天に向ける。

それは『神曲』の中でも

しばしば見る彼の眼の向きである。

ダンテはベアトリーチェを

生命賭けで愛した。

彼のソネットもカンツォーネもバルラータも

その一行だに彼の心臓の血を以て

*ソネットトリョロツパの叙情詩における伝統的な詩型の一つ。小曲または十四行詩と訳される。ソネットの形式は、等韻律の詩句を四行詩2連、三行詩2連の順に並べるもので、脚韻はABBA、EABBA、CCD、EDA(またはEED)と配置するのが最も厳密な形とされた。

*カンツォーネ・リタリ・ア語叙情詩型の一つ。ダンテは『俗語論』第二巻の中で、カンツォーネこそ愛を含む崇高な主題を扱うのに最も適した詩型であると述べ、その規則を論じている。

*バルラータ・バラード。中世ラテン語のバラレ(踊る)に由来することが示すように、元来は南仏プロバンスに起源をもつ、ロマンス語圏に広まった舞踏歌、すなわち輪舞の際に踊り手自身によって歌われたリフレインつきの有節歌謡をさした。

書かれなかったものはない。

目に見ゆるベアトリーチェよりも

ベアトリーチェの天女の本質を

捉えたダンテはゲーテの

「永遠に女性的なるもの」を見た。

ダンテとゲーテは愛の極致を

体知体感していた。

断じて美化しているような

浮いたものではない。

ベアトリーチェの「死」の幻影

「愛」かの女に就て曰う「必滅者いかで

かく麗しくかく清くなるをうるや」と

(第一カンツォーネより)

天的な聲を漂わせている愛人の「死」を

幻視してダンテは正気を失う。

陽は暗くなり、星は泣き

翔ぶ鳥は地に落ち、大地は震い動いた。

ダンテはやはり死を想うた。しかし

彼はただ死を悲しみはしない。

死ではない他界するのだ、往生するのだ。

パウロは叫んだ

「この死ぬものは不死を着る。

死は勝利に吞まれた。

死よ汝の勝利は何処にある。

主イエスは我らに勝利を賜った」

(コリント前書十五章)

第三の瞬間

ベアトリーチェは父の死に遭い

痛く悲しみ、既に人妻なりし彼女も

父の跡を追う如く地を去った。

時に一二九〇年六月九日

地上二十四年の幕は降りた。

ダンテは時に壮年期の入口二十五歳。

ダンテにとって彼女の「死」は

エレミヤにとつての失せたるエルサレムだ。
驚くべきカンツォーネが

ダンテのクオレから進^{はし}りつた。

その中の数句を拾うてみるなら

「行きぬベアトリーチェは高き御空^{みそら}に
諸々の天使のやすらう御国^{みくに}に。

かの女を世より奪えるものは
その優れたる徳なりき。

かの女の柔和の光。

なやましき世に在ることの

かかる貴人^{あてびと}に適^ふわしからぬを

主見^{しる}給いたればなり」

地上に咲くにはあまりにも優美なる花

されば天国の花と化した。

雄々しき若者^{しゅうび}、秀美なる女性は

しばしばかく地上では短命である。

私^{わが}ごとで畏^{おそ}れ入るがわが兄政美も

そのような雄々しき青年なりし。

彼女の他界は「永遠の主」の求めに由つた

ダンテは一たびおのが「愛^{アモレ}」を

神に捧げねばならない。

かくて第三の瞬間ベアトリーチェの

「死」の内実は明らかとなつた。

ダンテの決意

「甚^{はなは}だ弱き者」(新生三八) 多感のダンテは

「窓の女」に迷う。「栄光の淑女」への

道を歩むべくおのれと戦う。

若きアウグスティヌス

母の「涙の子」だったが

熱情多感のダンテはおのが「涙の子」

彼は「愛^{アモレ}」の中に生き、泣き、苦しんだ。

悲哀と歎美^{たんび}の交錯^{こうさく}矛盾の渦巻だ。

その結末は『新生』(VITA NUOVA)という

神秘的な希望の文字

神曲への序曲、前奏曲である。

*エレミヤ旧約聖書エ
レミヤ記の著者。紀元前
七世紀の偉大な預言者。
当時、ユダの都エルサレ
ムはバビロン軍に侵入さ
れ、民は連れ去られ、町
は略奪され焼かれた。エ
レミヤはエジプトに連れ
て行かれた。

壮年ダンテの苦闘

"Alma sdegnosa, benedetta colei che in te
s'incinse!" — Inferno VIII 44,45

「義憤の魂よ、汝を孕める女は福なる哉」

(地八ノ四四、四五)

ベアトリーチェの死は彼を深淵に墜した。

彼の天地は今や晦冥^{かいめい}。哀歌的な一年よ。

哀しき叙情詩

憂愁^{ゆうしゅう}が亡霊の如くつきまとう。

さわれ深い慰めを求めて発見したのは

哲人ボエティウスの獄中の記『哲学の慰め』。

死に直面し死を超克^{ちやくこく}したこの哲人の文字は

ダンテの詩魂を激励する。

彼の魂に点ぜられた第一の火

ベアトリーチェへの愛は転じて

第二の火、哲学的真理への愛となった。

彼の『饗宴^{きやうえん}』がそのことを証している。

聖書、アリストテレス、アウグスティヌス

アクイナス、ヴィルジリオは

彼の真理探究に

限りなき力と内実を増大せしめた。

しかし女性なき孤独に耐え兼ねる彼は

迷路を彷徨^{ほうこう}する。

親友グイド・カヴァルカンティは

崇高^{けだか}き魂と卑俗な行為の矛盾の共在の彼に

ソネットを以て忠告したほどであった。

そのような踏み外しの迷路を欺瞞^{ぎまん}なく辿る。

そのことはダンテ自ら

『神曲^{しんきょく}』の冒頭で告白懺悔^{ざんげ}する。

若き日のアウグスティヌスも

フランチェスコも同類だ。

*晦冥^{かいめい}はまっくらであること。

*彷徨^{ほうこう}はあてなくさまよい歩くこと。

*欺瞞^{ぎまん}はだますこと。

一二九五年頃

彼は顯門^{けんもん}ドナティ家のジェムマと結婚。

かくて二男二女が与えられたが

彼は家庭について何ら語らぬ。

第十三世紀後半のイタリヤは

政争の暗闘絶えぬ時世。

ゲルフォ党(Guello)は

教皇(法王)党の代表として

ギベルリーノ党(Ghibellino)は

皇帝党の代表として対立。

この政党争いが

やがて大都市の門閥^{もんぼつ}葛藤^{かつとう}と相混じ

文字通りの暗闘となり

一般市民こそつまらぬ犠牲となる。

ダンテの如き義の魂には堪え難き現象だ。

義、愛、真理に反する事態あらば

彼は傍觀^{ぼうかん}して居られない。

「我若し真理^{しんり}に対して

卑怯^{ひきょう}の友たらんには

今を昔と呼ぶ人々の間に

生命を失うの恐れあり」

と彼は「天国篇」一七曲一一八―一二〇行

で謳^{うた}っている。真理^{しんり}に対して

「然^{しか}り、我汝^{しな}に順^{したが}いて戦わん」

と言つて直ちに行動に出る彼である。

若きダンテの苦悩は愛であつた。

しかもその愛の種子は後日展開して

『神曲』という世界的詩曲に花咲き実つた。

ともあれ壮年ダンテは内に哲学的探究

外に政治的問題との戦が控えていた。

彼に於ては思索と行動は連関している。

いずれも全身的である

火と火炎の如く。

心に燃えているものは

行動に火災となつて現象する。

イギリスの評論家カーライルは

ダンテの相貌を

「世は何故にかくの如くなりや」

と詰問するが如し」

と。現実を直視して

あるべき現実を要求するダンテを

いみじくも捉えた言。

エレミヤの心に通ずるダンテだ。

エレミヤが悖れる者の幸福を

神に訴えた如く。(エレミヤ二・二)

政治批判のダンテは後年

「帝政論」(De Monarchia)を書いた。

「ああ奴隷のイタリアよ、憂いの客舎よ

嵐に水夫なき船よ！」

と煉獄第六曲で歎いている。

道義頹廢の祖国を見て、彼はイタリアを

娼婦の巢窟の如しと慨歎する。

イタリアの黑白両党の確執闘争

内紛擾乱は一世紀間にも互り

ダンテの痛憤鎮まるところなし。

「淫行、好色、偶像崇拜、怨恨、紛争

嫉妬、憤恚、徒党、分離、異端、猜忌

醉酒、宴楽」(ガラテヤ書五・一九、二、コリ

ント後書二・二〇)。

と言わるる如き悪徳不義はイタリアの墮落

フィオレンツアの頹廢を指すに適したもの。

かかる情勢の世にダンテは

同市のプリオレの一人となる。

時に一三〇〇年六月十五日。

こは十字架を負うべき運命。

第二の苦杯が彼を待っていた。

陰謀者三名が教皇ボニファキウスに

身を寄せんとした。

ダンテはこの三者に最終判決を下した。

教皇の使者マッテオが

*詰問 〓 相手をとがめる
気持で、厳しく問いた
すこと。

*エレミヤ二・一 〓

「エホバよわが汝と争ふ
時に汝は義し。ただ我さ
ばきの事につきて汝と言
はん。悪人の途のさかえ
悖れる者のみな福なるは
何故ぞや」

*擾乱 〓 騒ぎみだれるこ
と。

*怨恨 〓 うらむこと。

*憤恚 〓 憤怒。

*猜忌 〓 人の才能などを
そねみきらう。

*ガラテヤ書五・一九、
二一 〓 「それ肉の行為は
あらはなり。即ち淫行・
汚穢(けがれ)・好色・

偶像崇拜・呪術・怨恨・
紛争・嫉妬・憤恚・徒
党・分離・異端・猜忌・

醉酒・宴楽などの如し。
我すでに誓む。斯ることを
行ふ者は神の国を嗣ぐこ
となし」

*コリント後二・二 〓

「わが到りて汝らを見
ん時、わが望の如くな
らず、汝らが我を見んと

フィオレンツァ市に破門の宣言。

ダンテは英断以て黑白両党の首領を追放。

その白党には彼の「第一の友」

ガイド・カヴァルカンティすら居た。

またその黒党には

妻ジェムマの親戚コルソ・ドナティも。

ダンテは私情を棄て、専ら義を貫く。

そは真の秩序、真の平和

真の自由のためだ。

「斯民をその言うに任せよ。

風吹くとも頂頭揺がさる

強き櫓の如く立つべし」

と煉獄五曲に謡う如く、毅然たる彼である。

ローマ教皇庁は

「日毎にキリストの売買される処」

(天一七曲)

後年ルターの

「若し世に地獄あらば

その上にローマあり」

と照応。

一三〇二年一月

ダンテは不当の諸罪名を着せられ

財産没収、二ヶ年の追放

母市フィオレンツァに於ける

公職就任権の永久剥奪等の宣告を受ける。

三月十日にはダンテ外十二、三名に

第二の宣告、即ち

若しフィオレンツァに立ち入るなら

「生きながら火刑」

かくて正に永久追放の人となる。

思い出深きアルノの流れ

妻と四人のあどけなき子女をあとしして

「枕するところなき」

人と彼はなつた。

かくて第二の苦杯を彼は満喫した。

き、亦なんぢらの望の如くならざらんことを恐れ、かつ分争・嫉妬・憤懣・徒党・誹謗・讒言・驕傲・騒乱などの有らんことを恐る」

* 毅然 信念が強くて動かないさま。

* 「枕するところなき」

「マタイ 8・19」

「二人の学をきたりて言ふ」

「師よ何処にゆき給ふとも、我は従はん」

イエス言ひたまふ「狐は穴あり、空の鳥は罅（へぐり）あり、然れど人の子は枕する所なし」

流浪者ダンテの苦難

"E la sua volontate è nostra pace;"

— Paradiso III 85

「かくて彼の意志は我らの平安なり」

(天三ノ八五)

情深きが故に愛に苦しみ

愛人の死に直面して

途方に暮れ迷路に踏み迷い

魂苦しみ、学究思索の峻路を踏破し

祖国を愛するが故に政治の渦中に身を投じ

悪と戦い、終に追放の悲運を刈りとりて

ダンテは流浪の人となる、底光ある孤独だ。

だが彼の最も厭いしものは何か。

「恥もなく、誉もなく、世をおくる者」

「神に逆らえるに非ず」

また忠なりしにも非ず

ただ自己中心に生きるエゴイスト」

かかる卑しき者は

地獄第三曲に記されている如く

「天国も地獄も

これを受くるを恥とする徒輩」

ところがかかる類いは最も多い。

これほどダンテの唾棄したものはない。

「愛も義も彼らを蔑すむ」(地三ノ五〇)

これが生涯十字架を負う所以。

旗幟鮮明に彼は万事に

対処したから(煉一六ノ七六―七八)

彼は流竄十九年の苦杯を

呑みはさねばならなくなる。

「いと深く愛するものを

汝悉く棄て去らん。

*徒輩Ⅱともがら。やから。やつら。

*旗幟Ⅱはたじるし。主義。主張。立場。

*流竄Ⅱ流罪。流刑。放浪。

汝知るべし

他人のパンのいかばかり苦く

他人の階段の昇降の辛きを。

邪惡庸愚、忘恩反逆等の徒輩のゆえ

汝唯一身を一党とするが汝に

最もふさわし」(天一七ノ五五、六九)

追放令を聞くや

ダンテは直ちにローマを去る

流浪の旅路で時折神秘的な異象を見る。

アルノの流れのほとりで

ベアトリーチェの如き

美しき女の異象に出遭う。

愛は彼にとってしばしば靈的な具象である。

愛人が現世を去った靈的啓示現象か。

彼は義の戦のためには

「運命に対して四角」だ。(天一七ノ二三)

運命や環境にめげず

彼は学究、真理探究の鬼だ。

ボロニヤ、パリ、オクスフォードに

雄飛したか。執筆では『饗宴』『俗語論』

などは恐らく一三〇八年以後の数年に。

ダンテは詩人であると同時に

預言者的政治家だ。

つねに国情を想つて、言論風発。

ハインリヒ七世が一三一三年夏戦病死した。

かくてイタリアの統一も平和も

夏の夜の夢と消えた。

ダンテのフィオレンツァ帰還の

希みも絶えた。

イタリアの山野市井を襲う野獸、牝豹

獅子、牝狼の如きを仆す獵犬は

いつ出現するや。(地一ノ一〇〇)

ベアトリーチェの死、ハインリヒの死

おのが身の追放。

地に希望を失った彼の眼は

*庸愚＝平凡で、おろかなさま。

*具象＝形や姿をそなえていて、感覚は氣管で知覚できること。具体。

*風発＝弁論などが勢いよく口をついて出ること。

ある決定的なものに向う。

否、彼は地を放浪しながら

眼は靈的次元から視ている。

心眼を越え神眼を賜つて

現世に光を投ぜんとする。

そこに展開して来たのが

大詩篇『神曲』である。

彼は地獄、煉獄、天国の三界を

霊眼を以て歩く。

「この国語のおよぶ

殆ど凡ての地を巡った旅人

宛ら乞食の如く私は……歴めぐつた。…

こなた彼方の港と海峡と

浜辺とに追いやられる

帆もなく舵もなき船であつた」

(宴一ノ三)

この難航は何のためなのか。

導く星影はないのか。

否、黙示が天界から臨んだ

ベアトリーチエ！

「汝の星に従う限り、汝は栄光を失わじ」

(地一五ノ五六、五七)

幾年前『新生』の結尾に決意せしことが

遥かに深き高き意味内容を以て彼に臨んだ。

一卷の書、名づけて

『喜曲』(La Comedia)(地一六ノ一二八)

そこに彼の苦悩、苦闘

苦難の一切を告白すべく。

そこに神の歴史、宇宙の秩序

人の世の矛盾、神の国

神の愛と義を讃美すべく、おのが罪を

告白すべく(煉三〇、三二の両歌)

「年久しく我を愛れしむるほど」

(天二五ノ二)

天地ともに手を下しつつある

「聖なる詩」である。

*黙示即暗黙のうちに意志を示すこと。キリスト教で、未来に関するできごとへの啓示、とくに世の終わりのできごとの啓示。

ダンテその名は素と

デュランテ(Durante)「耐え忍ぶ者」

何のために耐え忍ぶのか

いのち懸けの詩作のためだ。

ベートーヴェンも

ドナウ河に投身せんとせしほどの

苦難を忍んで竟にかの大曲「第九」*を

創作したのであった。

かく言う愚者も

終りなきこの詩のために

百歳を突破して

書きつづげんと耐え忍んでいる。

その忍耐の力の源泉は何処に。

ダンテにとつては

天界のベアトリッチェであった。

この天弓にとつては二十七歳の悲運を以て

一九二一年九月二十二日に

北京の空に天翔けつた長兄政美だ。

憶、顧えば六十八年前。

だが彼はつねに現然たる存在だ。

『神曲』の一行一節が

血と涙と烈々たる魂魄の文字。

「苦難のときは神も共になやみ給う」

(イザヤ六二・九)

これはダンテにとつて

如何ばかりの慰めなりし。

神の力と憐みなくしては

幾度倒れんとしたか。(天二三ノ六六)

意志の自由の尊厳を持して

何びとへも譲らぬ彼は

その意志を神の意志の前に

投すべきことを暴風の現実の中で

体認した。(天三ノ七九ノ八二)

神・キリストに降参する者が

真の勝利となる。

*第九回ベートーヴェンの「第九交響曲」の略。

*魂魄は人間の身体に宿つてその活動をつかさどる神秘的な力。たましい。魂は人間の精神の働きをつかさどる陽気の神霊、魄は肉体をつかさどる陰気の神霊をいう。

一三二五年五月にフィオレンツアは
追放者らに大赦令を布告した^{しやれい}が

余人^{よじん}はいさ知らず

義人ダンテはこの不遜^{ふそん}なる大赦を一蹴^{いつしゅう}。

同じ年の十一月発布の宣告は

彼を反逆者と決めつけた。

その後一三二六年六月の大赦令に

ダンテは除外者とされた。

そんな令書は彼にとり一片の落書に過ぎぬ。

その後ヴェロナの領主

カン・グランデ・スカーラの扉を叩いた。

この気魄相通^{きよくあふ}う人物にはその後

「天国篇」を献ずる書を寄せた。

世に斥け^{しりぞ}られたダンテは

世のため恵福^{けいふく}を祈っている。

世に苦杯を飲まされた彼は

世に天酒を灑^{そま}ぐ。

義にして愛なる魂の復讐^{ふくしゅう}は

天恵を与えて祝福することなのだ。

ゆくりなく路傍に

腰をおろしているダンテを美女たちが

地獄から出て来た人と見た。

イザヤ書第五十三章の初めに

記^しされている悲哀の人の

面影^{おもかげ}同然のダンテであつたろう。

この地獄の鬼の胸の中は

天国と誰か知らん。ひとに侮^{あなづ}られ

棄てられた塵芥^{じんがい}の如き存在

そういう人が土台となつて世を助け救う。

地上ではその真相がかくれているが

天界に反映して輝いていると誰か知らん。

「我は地に火を投ぜん、^{*}剣を投ぜん^{*}」

と喝破^{かつぱ}したキリストは

平和平和と宣伝しない。

はなし合いや議論の次元とはちがう。

告白と実存、実践、黙々と荊棘^{けいよく}の路^{みち}を往く

*余人^{よじん}はかの人。別人。
*一蹴^{いつしゅう}すげなくはねつけること。

*イザヤ書53・1-5

「われらが宣ふところを
信ぜしものは誰ぞやエホ
バの手はたれにあらはれ
しや。かれは主のまへに
芽えのごとく燥きたる土
よりいづる樹株のごとく
そだちたり。われらが見
るべきうるはしき容なく
うつくしき貌はなくわれ
らがしたふべき艶色なし。
かれは侮られて人にすて
られ、悲哀の人に病
患をしれり。また面をお
ほひて避ることをせらる
る者のごとく侮られたり。
われらも彼をたふとまざ
りき。まことに彼はわれ
らの病患をおひ、我等の
かなしみを担へり。然る
にわれら思へらく彼はせ
められ神にうたれ苦しめ
らるるなりと。彼はわれ
らの愆のために傷けられ
われらの不義のために碎
かれ、みづから懲罰をう
けてわれらに平安をあた
ふ」

ただ独りおのが十字架道を往く。
これが本当の人たるの路である。

ダンテはその如く歩き貫いた、十九年間。

そして世に投じたのは『神曲』一卷である。

しかも彼はその原稿をとある家の

二階の壁の中に閉じこめた。

そして息子にその旨をひそかに告げた。
所謂出版など夢にも思っていない。

彼はその『神曲』（喜曲）が

いつ世にでるか、一切を神にゆだねた。

聖名の讃美のこの一卷。

不朽の大詩篇は彼が地上を去つてから

竟にダンテと謂えば『神曲』

『神曲』と謂えばダンテとなつた。

『ファウスト』と謂えばゲーテ

『レ・ミゼラブル』と謂えばユーゴーも同然。

神と世、光と闇

その接点をダンテは歩いた。

しかしそこに神秘的な虹霓をダンテは見た。
その虹霓が道しるべを為した。

虹霓はしばしばベアトリーチエに化した。

かくてダンテは『神曲』一卷を

苦難の路で書いた。

神曲は預言であり、黙示である。

聖書の審判と恩恵に照応する大文字。

聖書の註解書を読むより

神曲を読むに如かず。

一三二一年の夏のこと

水夫と兵士のつまらぬいさかきを

鎮めんとする使節の途上で熱病に冒され

九月十四日、五十六年を一期として

ダンテは天界に旅立つてしまった。

（附言）拙著作集第二巻「芸術のたましい」

のダンテ論を是非読まれたし。

*「我は地に火を投ぜん」
ルカ伝12・49、51

「我は火を地に投ぜん」と
て来れり。此の火すでに
燃えたらんには、我また
何をか望まん。されど我
には受くべきバプテスマ
あり。その成し遂げらる
るまでは思ひ逼（せま）
ること如何許そや。われ
地に平和を与へんために
来ると思ふか。われ汝ら
に告ぐ、然らず、反つて
分争なり」

*「剣を投ぜん」
イ伝10・34「われ地に平
和を投ぜんために来れり
と思ふな、平和にあらず、
反つて剣を投ぜん為に来
れり」

*荆棘（いばら）いばら
などがはえた荒地。困
難。

*息子にその旨をひそか
に告げた^{ルカ}ウヅォッカチオ
による伝説。それによれ
ば、死後、息子の夢枕に
立つて教えたことになつ
ている。

第五篇

宗教家

第一章 仏教

最澄

京洛の東を限る比叡の東方近江に
稱徳女帝の景雲元年、八世紀末葉
十二歳にして最澄は出家
まず学びしは法相宗
次には鑑真の弟子により
天台修得にとりかかる。
九歳にして具足戒を受け、僧となる。
奈良の僧界も俗界も軽薄なるを見
日枝山に草庵を造り、救世の大願を起す。
桓武天皇側近の僧、最澄の誦經に注目

かくて最澄は天皇と肝胆相照らし
政教相俟つて遂には
国家の精神的革新の機運を約す。
彼は天台の「山川草木、悉皆成仏」に感嘆
延暦二十三年七月、四隻の遣唐使船解纜し
最澄の第二船は九月明州に着港。
彼は天台教学を体系的に体受せんとて
浙江省の天台山に向う。
道邃及び行滿に学び
この両者から正統天台の付法と

さいちよう
七六七―八二三年。平安
初期の僧。天台宗開祖。
伝教大師。近江の人。比
叡山に一乗止観院を建立
して法華一乘思想を宣揚
し、八〇四年入唐。翌年
帰国後は天台と密教・
禪・律・を統合し、大乗
戒壇の建立をめざした。

*具足戒 仏教教団で、
比丘・比丘尼が守るべき
小乗律。律によつて異な
るが、「四分律」では比
丘は二五〇戒、比丘尼は
三四八戒。
*誦經 經典を声をあげ
て読むこと。誦とは文を
そらんじて節をつけて読
むことをいう。じゆきよ
う。
*山川草木悉皆成仏 小さいの生物はすべて成
仏するということ。一切
のものが仏の悟りをうる
ということ。

大乘戒の伝授に与る。

在唐八ヶ月半で帰朝

請来の書籍二三〇部、四六〇巻。

桓武天皇崩御の後

大同五年（八一〇）の春

彼は叡山で金光明・仁王・法華の

三經の講議を開始。

諸法実相、現象即实在認識の

止觀の境に到達し

比叡金山を学山となした。

茲に日本中世文化の源泉は

比叡山と相成った。

顧みれば延暦七年（七八八）

二十二歳のとき彼は草庵に

根本中堂を建立。

これが比叡山延暦寺の創始であり

やがて日本仏教の

根本中堂と称すべき歴史的存在。

さらば伝教大師最澄の

根本中堂の内実は何か。

中堂は中道にして

中道の中心は慈悲心に他ならず。

万物を融合せしむる神秘の力は**大慈大悲**。

これはキリストの天父の**全さ**が

大愛なるに**照応**。

ダンテはその『神曲』の終句を

「日輪も星辰も動かし

廻らしむるものは愛なり」

と謳歌し

ゲーテは『ファウスト』の終句を

「永遠の女性（愛）

我らを引きて往かしむ」

と結んだ。

*大乘Ⅱ後期仏教の二大

流派の一つ。小乗仏教が

修業による個人の解脱を

説いたのに対して、利他

救済の立場から広く人間

全体の平等と成仏を説き、

それが仏の教えの真の大

道であるとする教え。小

乗のように消極的・形式

的でなく、むしろ内的・

精神的であり、その世界

観・人生観も積極的・活

動的であるとされる。大

乗戒Ⅱ大乘仏教徒の持す

る戒の意。

*実相Ⅱ一切のもののあ

りのままの真実のすがた。

生滅・無常を離れた、万

物の真相。真如。一如。

*止觀Ⅱ雑念を止めて心

を一つの対象に集中し、

正しい智慧を起こして対

象を観ること。天台宗が

もつとも重視する修業実

踐法。

*キリストの天父の全

さⅡマタイ5・45、48

「然らば汝らの天の父

の全きが如く、汝らも全

かれ」

空海

空海は宝龜五年讃岐国に生れた。

幼名は真魚。

遠祖は讃岐国造、この地方の名門

官人や学者の血統。

真魚は神童の栄光あり

十五歳のとき伯父と上京。

十八歳にして大学明経道の科試に合格。

大学にて左伝や五経を学修。

しかし在学中

「沙門」に邂逅したのが転機。

農民の苦境、地方豪族の横暴を知悉する故
学問の城に籠る道棄て

救霊済民の道を志す。

真言密教の經典「大日経」

「虚空藏求聞持法」に注目

かくて入唐を画し

延暦二十三年（八〇四）八月

空海の乗った遣唐使第一船は福州に着く。

彼は大使藤原葛野麻呂らと長程万里

当時の世界的大都たる

くうかい
七七四、八三五年。真言
宗の開祖。弘法大師。讃
岐の人。八〇四年入唐し
て惠果から密教の秘法を
授けられた。八一六年高
野山に金剛峰寺を開創。
文化活動・社会事業にも
活躍。能書家で、三筆の
一人。

*讃岐国 現在の香川県。
*明経道 古代の大学寮
の一学科。論語や五経な
どの経書を学んだ。*左
伝 左氏伝の略。「春秋」
の注釈書。春秋三伝の一
つ。
*五経 儒教の基本經典。
「易経」「書経」「詩経」
「礼記」「春秋」の五書。
*沙門 出家し、悟りを
開くために努力する人。
出家。
*邂逅 思いがけなく出
会うこと。
*知悉 知りつくす事。

唐の都長安に到達する。

玄宗以来三代の天子が帰依した大立者

不空三藏(七〇五―七七四)の活躍により

真言密教は長安の人心を魅了していた。

入都の空海、醴泉寺にて般若三藏

牟尼室利三藏の許で

サンスクリットを学習

これ密教修得に不可欠の故。

かくて本師、青龍寺の

惠果阿闍梨に入門、時に八〇五年

惠果曰く

「我れ先より汝の来るを知りて

相待つこと久し。

今日相見ゆること大いに好し。

報命竭きなんとするに、付法に人なし

必ず須く速やかに香花を弁じ

灌頂壇に入るべし」

何たる師弟の親密さぞや。

同年六月十三日、早くも胎藏灌頂を受け

七月上旬には金剛界灌頂を受け

八月十日には伝法灌頂を受け

僅々三ヶ月にして大法を悉く伝受した。

付法終るや、惠果は、前言の如く

十二月に六十歳で示寂。

かくて惠果から正統真言の付法を

受けた空海は真言第八祖となり

日本に之を伝法せんとす。

空海は大同元年(八〇六)八月

太宰府に帰着。

空海は嵯峨天皇と近親、書道も達人の域

また詩魂ゆたかな空海は

「色は匂へど散りぬるを」の

いろは歌を創作

その詩才も天才の実なるぞ。

勅許を得て高野山を

真言密教の本山と定めた。

*真言密教Ⅱ大日如來の秘密真実の教えをいう。

*密教Ⅱ大日如來を本尊とする真言秘密の教え。

一般には、その教えが大菩薩でさえも知り尽くす

ことのできない深遠秘奥なものであるとして、密教という。

*惠果Ⅱえか。七四五(う)―八〇五。中国唐代の僧。真言宗付法第七祖。不空三藏に師事、のち長安の青龍寺に住す。

空海の師として著名。

*阿闍梨Ⅱ密教の秘法を伝授する僧職の称号。

*灌頂Ⅱ密教で仏位の継承を示す作法。頭頂に水をそそぎかける儀式。

*胎藏Ⅱ胎藏界。母親が胎内で子供を慈しみ育てるように、仏の衆生に對する大悲より生まれたものという意味。

*金剛界Ⅱ真言密教では、胎藏界と對をなして、兩部という。胎藏を客体すなわち理とするに對し、金剛界を主体すなわち智とし、真理は主客一体、智と理の不二であると説

如來の靈域に神秘的に信入

即身成仏そくしんじょうぶつの信交しんこうを体得ていとく体現ていげん

謂いわばパウロの信境

「我キリストの中に

キリストわが中に」

に照応。

弘法大師こうぼうだいし空海はその氣魄雄渾ゆゆうこん

その抱擁の相は宇宙的。

承和二年じやうわ（八三五）三月二十一日

桜花おうか綻はなびる頃

高野山たかのやまにて示寂じじやく

入定時にゅうぢよに彼は坐したるままよ！

生死超越の靈境じげんを示現しげんしたと謂いう。

く。

*僅々くわずか。ほんの。たつた。

*示寂じじやく僧が死ぬこと。

*勅許しやく天皇の許可。

*即身成仏そくしんじょうぶつ密教の宗教

理想で、現在生きている

間に、生きているこの身

に即して成仏の境地に到

達しようとする、ある

いはそれが可能である、

とすること。

*信交しんこう神仏を受け取り

それと靈的に交わること。

*雄渾ゆうこん雄々しいさま。

*入定にゅうぢよ僧が死ぬこと。

入滅。

法然

先に最澄、空海の神秘的融合の仏教

これに対して新たに

他力本願の仏道が現われた。

その先覚は法然。彼の出現の時代は如何。

源平擾乱の世で、人心混沌の世相なれば

誰か出でて、帰趨の指標となるを要した。

法然は大衆の貧窮困迷、愚鈍下智こそ

弥陀の本願に救われる人々と看破した。

福音の世界もこれと同質の角度だ。

法然はかくて浄土門こそ

救の道と惟い定めた。

即ち正定の行は

「一心に専ら弥陀の名号を念じ

行住坐臥、時節の久近を問はず

念々に捨てざるものを」

とした。

これを唱道したところ果然

「仏法の怨敵」と非難。

宗教真理は無限無量

時勢と人心に応じて顕現は多様。

ほうねん

一一三三―一二二二年。

日本浄土宗の開祖。源空。

念仏往生の教えを唱えた。

旧仏教の批判をうけ、専

修念仏停止により土佐に

流罪。一二二一年帰洛し

翌年没した。

*擾乱||騒ぎ乱れること。

*帰趨||落ち着くところ。

なりゆき。

*正定||正しい禪定。心

の動揺をはらって、安定

した迷いのない境地には

いること。浄土に生まれ

ると定まっていること。

正定業の略。正定業||浄

土教で、浄土の往生を決

定する行為のこと。阿弥

陀仏の名号を称えること。

*名号||仏・菩薩の名。

特に「阿弥陀仏」の四字、

または「南無阿弥陀仏」

の六字。

*行住坐臥||人の挙止動

作の基本である、歩くこ

法然(はつぜん)は時勢(ときせい)を洞察(とうさつ)、相手(あいかん)を愛観(あいかん)。

救(きう)を求むることすら知らぬ民衆(たみしゆ)は

この新しき本願(ほんがん)他力(たりき)に随喜(ずいき)して

法然(はつぜん)房源空(ぼうげんくう)の念仏(ねんぶつ)名号(なごう)「南無阿弥陀仏(なむあみだぶつ)」が

巷(まち)に洋溢(おういつ)唱(うた)和(わ)した。

念仏(ねんぶつ)名号(なごう)の道(みち)をも悪魔(あくま)はねらう。

後鳥羽(ごともて)上皇(じやうこう)熊野臨幸(くんのりんこう)不在(ふざい)在中(じやうちゆう)に

院(いん)の女(むすめ)どもが念仏(ねんぶつ)に心惹(こひ)かれて

住進(じゆせん)、安楽(あんらく)を御所(ごしよ)に招(まね)き、専修(せんじゆ)念仏(ねんぶつ)を学(まな)び

且つ両僧(りやうそう)に親(お)しんでいたとの

念仏(ねんぶつ)反對(たいひ)の叡山(えいざん)、南都(なんと)の讒訴(ざんそ)を信じ

上皇(じやうこう)は逆鱗(げきりん)烈火(れつか)の如(ごと)く

この二僧(にそう)を死罪(しざい)に処(は)した。

二僧(にそう)は南無阿弥陀仏(なむあみだぶつ)を唱(うた)えつつ

欣然(きんぜん)道(みち)に殉(こ)じた。

しかし上皇(じやうこう)にそんな仕打(しうち)をする資格(しきかく)ありや。

上皇(じやうこう)もまた多くの側室(しやうしつ)更衣(こうい)を侍(はべ)らせて

肉欲(はしきま)を擅(しん)にする王者(おうさ)どもの

類(たぐ)いではないか。

洋(やう)の東西(とうせい)を問(と)わす

思(おも)わしからぬ権力者(けんりきしや)どもが

おのが欲望(よきぼう)を妨(さまた)げる者をわけもなく

弾压(だんあつ)、迫害(はくがい)、処刑(しゆけい)したことは

史上(まいしきやう)枚挙(まいきやう)に遑(いとま)なからう。

そんな権力者(けんりきしや)どもは皆地獄(ぢごく)で

永劫(えいこく)の火(か)になやまされる。

ダンテ『神曲』の

「インフェルノ」(地獄篇)は

詩的表現(しじてきへんげん)を以てした現実(げんじつ)である。

因(よ)みに言うが、地獄(ぢごく)、煉獄(れんごく)、天国(てんこく)を

詩現(しげん)したダンテの『神曲』は

世界最大(せかいさいだい)の宗教詩(しゆきうし)と申(まを)したい。

この二僧(にそう)に連座(れんざ)して、法然(はつぜん)は四国土佐(しこくすさ)へ

親鸞(しんらん)は越後(えちご)へ配流(はいりゆう)となつた。

後鳥羽(ごともて)上皇(じやうこう)も何(なん)たる靈的盲者(れいてきめうしや)かな。

と、止(とど)まること(住)、

すわること(坐)、臥(ふ)せ

ること(臥)をいう。転

じて、日常(にじやう)・不(ふ)断(だん)・始(し)終(しゆう)

などの意(い)に用(もち)いる。

*怨敵(おんてき)かたきとして恨

む相手(あかひ)。

*本願(ほんがん)他力(たりき)阿弥陀仏(あみだぶつ)の

本願(ほんがん)の救(きう)いは衆生(しゆじやう)にとつ

て他力(たりき)の救(きう)であるから

本願(ほんがん)とは他力(たりき)である、本

願(ほんがん)則(すなは)ち他力(たりき)の意(い)をいう。

*随喜(ずいき)心(こころ)からありがた

く思(おも)ふこと。

*念仏(ねんぶつ)念(ねん)念(ねん)すること。

特に阿弥陀仏(あみだぶつ)を念(ねん)ず

ること。通常(つうじやう)、南無阿弥陀

仏(ぶつ)の六字(ろくじ)を口(くち)に唱(うた)える

口称(くしやう)の意(い)。

*洋溢(おういつ)みちあふれるこ

と。

*臨幸(りんこう)天子(てんし)がその場に

出(で)ること。

*讒訴(ざんそ)人(ひと)をおとしいれ

るため目上(めじやう)の人に訴(う)える

こと。陰口(いんぐち)。

*更衣(こうい)天皇(てんかう)の寝室(しんしつ)に奉

仕(し)した女官(にようくわん)。

*配流(はいりゆう)流罪(りゆうざい)にすること。

島流(しまりゅう)し。

法然既に七十五歳、死の近きを自覺して特に門弟親鸞に期するところがあつた。

法然は配流の途次で逢う人毎に

念仏道を説いた。

随伴の信空が法然に

入滅後の遺跡如何と訊ねた。

法然源空曰く

「海人、遊女、漁人、誰であれ

念仏名号のあるところ

そこが皆わが遺跡だ」

建暦二年（一一二二）一月二十三日

源智（勢観）の請願により

念仏の肝要を一紙に認めた。

有名な一枚起請文、是れなるぞ。

「もろこし我がてうに

もろもろの智者達のさたし申さるる

観念の念ニモ非ズ。

又学文をして念の心を悟リテ申

念仏ニモ非ズ。

ただ往生極樂のためニハ

南無阿弥陀仏と申て

疑なく往生スルゾと思とりテ

申外ニハ別ノ子さい候ハズ。……」

という全く無条件の念仏名号だ。

福音の世界で申せば

パウロのガラテヤ書二章後半の*

告白と照応する。

「一枚起請文」は謂わば

法然の公的遺言だ。

本願道を単純簡潔な表現で

ズバリ告白している。

*一枚起請文 法然が臨終の床にあつて、没後に弟子たちの間で異議が生ずることを防ぐために、自己の信仰の神髄を書いたもの。弟子勢観の要請に応じたもので、一枚の紙に書いたところからいう。

*ガラテヤ書二章後半 11
ガラテヤ書 2・16、21
「人の義とせらるるは律法の行為に由らず、唯キリスト・イエスを信ずる信仰に由るを知りて、キリスト・イエスを信じた。我は神に生きたために、律法によりて律法に死にたり。我キリストと偕に十字架せられたり。最早われ生くるにあらず、キリスト我が内にありて生き給うなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給ひし神の子を信するに由りて生くるなり」

親鸞 (一)

親鸞^{しんらん}は藤原の流れ。

承安三年(一一七三)に生れた。

幼名は松若^{まつわか}。弟が三、四名、みな出家。

著名の歌人たる伯父範綱^{はんこう}の扶助^{ふじょ}の許^{もと}

学問^{くもん}薫陶^{くんとう}を受く。

養和元年(一一八二)九歳にして

伯父の引導により

慈円^{じえん}について出家得度^{とくど}した。

時代は源頼朝関東で台頭

西では平清盛^{きよもり}が死没。

松若は四歳にして父に

八歳にして母に死別。

おそらく母の遺言で松若は出家の道を執^とる。

彼の往手^{ゆくで}は比叡山^{ひえいざん}。当然天台^{てんだい}の教を修学。

在叡時代は茲円管領の横川を住所とした。

この比叡山時代の建久九年

親鸞二十六歳の時

京都で正月の儀式に参加した帰路

赤山明神^{あかしのみじん}に詣^もでた。

その時神籬^{ひもろぎ}の蔭^{かげ}から女が現われた。

しんらん

一一七三―一二六二年。
鎌倉初期の僧。浄土真宗
の開祖。日野有範の子と
いわれる。二十九歳のと
き法然の門に入る。専修
念仏停止に連座して越後
に流罪。以後、常陸など
関東各地で教化に務めた。

*得度^{とくど} 迷いの世界から
悟りの世界に渡ること。
悟りを得ること。転じて、
出家し仏道に入ること。

*神籬^{かみろぎ} 古代、神霊が宿
るとされた森・山・老木
の回りに常磐木を植え、
玉垣を巡らした所。

柳裏いつぎぬ*の五衣ふたえに、ねりぬきねりぬきの二重を着ている
気品ある宮女に見えた。

彼女、親鸞に近づき

「日ごろ叡山に参じたく

今日初めて参りました

お会いした御縁に

どうぞ私を伴れてお登り願います」

「叡山は女人禁制の山

伝教大師も女人を斥けました。

法華経にも女人は

けがれあるものとありましょう。

まっすぐお帰りなさい！」

その女、涙を湛たえながらも断じて退かない。

「何と情ない仰せです。

伝教大師ほどのお方が！

それでは一切衆生悉有仏性の

経典に合いません。

比叡山は無数の鳥獸

虫類雌雄の極楽でしょう。

なぜ人間の女だけが立ち入り禁止ですか。

十界皆成じっかいがいじよう*というみましらの

お言をどうなさるのです。

法華経にも

龍女の成仏りゆうによじようぶつ*という話がありました。

仏陀の在世中

弟子の中に女性たちがいましたよ

それなのになぜこの山だけが

だめなのですか」

若年親鸞は絶句ぜつく*。内心降参だ。

女がきらいでない彼女だ。

女は続けて

「この山に登れたら

一切衆生悉有仏性この玉を

上人にさしあげますのに。

本當の仏法の水なら

峰の上だけではだめでしょう。

*五衣 平安時代の男子の朝服。

*ねりぬき 生糸を綴糸、練り糸を横糸として織った絹布。

*伝教大師 最澄の諡（おくりな）。

*一切衆生悉有仏性 生あるものはすべて仏になる可能性を備えているということ。

*十界 迷界と悟界を十に分けたもの。迷界の地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六界と、悟界の声聞・縁覚・菩薩および仏の四界。十界皆成 地獄などの十界すべてが仏に成ると説く「法華経」の特色を示す語。

*龍女成仏 沙伽羅龍王の八歳の娘が、「法華経」によつて悟りを開いたこと。「法華経」「提婆論」には、釈尊の前で身を變えて男子となり、成仏の姿を示したという。

*絶句 ことばにつまづて話を中絶すること。

低く谷底に降りて

求人^{うを}の心を潤すはずでしょう。

女人を入れない叡山なら

もうこの玉は無用です」

玉を地に置いて

彼女は木立^{こたち}のかげに姿を消した。

その瞬間の棄台詞^{すてざいぶ}

「今は解らずとも

千日後にはおわかりになるでしょう」

この奇妙な預言^{うご}が僧親鸞にとり

女犯妻帯^{にょはんさいたい}への正因^{しょういん}となつたろう。

彼は堂僧として二十年勤めたが

当時の叡山に失望

貴族の権勢^{けんせい}、莫大^{ばくだい}な寺領莊園^{しやうりやうえん}

大勢の僧兵を見て。

これでは仏道何処に在りや

奈良仏教も同然。

何処に仏道を求めんか、彼は叡山を下り

京都は六角堂の如意輪觀音に

百日の参籠^{さんろう}を企てて三里半の道を往復

九十五日目の暁^{あけ}、聖徳太子の示現^{しげん}に与る。

六角堂頂法寺（現在の烏丸六角）は

太子の創建。

親鸞は太子を敬仰^{けいよう}していたわけだ。

即ち太子の靈告により

東山吉水に法然の門を叩く。

時に建仁元年（一二〇一）の春

親鸞三十に垂んとする時。

法然の東山吉水は

極めて単純なる専修念仏^{せんじゆねんぶつ}。

弥陀^{みだ}の本願^{ほんがん}に帰依するに

念仏の一途あるのみ。

親鸞は法然の人物とその道に心酔した。

法然は求道^{ぐどう}の人は無条件に迎えた。

比叡山の僧徒らは念仏者集團の解散を迫る。

これと弟子らの求めに応えたのが

*女犯^{にょはん}僧侶が女性と交

わつて邪淫戒を犯すこと

（著者註）「女犯」という

言が何か不義の密通のよ

うな語意に誤解されそう

だが、女性の許諾、合意

のもとに行われるもので

なければならぬ。

*示現^{しげん} 仏や菩薩が衆生

済度のため種々に身をま

えてこの世に現れること、

また広く、神や仏がさま

ざまな靈驗を示し現すこ

と。

*専修念仏 其他の行をさ

しおいて、専ら一行のみ

を修すること。ただ阿弥

陀仏の名を称えることに

専念すること。

*弥陀 阿彌陀の略。

Amitābha 無量光、また

は Amitayus 無量寿を略

した *anita* の音字「阿」

は無、「弥陀」は量の意。

西方浄土にいる教主の名

いっさいの衆生を救うた

めに、四十八の誓いをた

てた仏。

*本願 仏・菩薩が過去

世においてたてた、衆生

救済の誓い。過去または

以前にたてられた誓願。

有名な一枚起請文だ。

いかなる法も教えも

行者によって結果はさまざま。

そんなことを問題にしたら真理が怒る。

真理は一人の行者なくともそれ自体不滅だ。

道を説く行者は殉道の覚悟を要する。

その最たる例証はキリストの十字架である。

創始者、改革者には迫害がつきものだ。

親鸞は法然の念仏道を徹底深化した。

「親鸞におきては、ただ念仏して

弥陀に助けられ参らすべしと

よきひと（法然）の仰せを蒙りて

信ずる他に、別の子細なきなり。

念仏はまことに

浄土に生るるたねにてやはべるらん

また地獄におつべき業にてやはべるらん

総じてもて存知せざるなり。

たとへ法然上人にすかされまゐらせて

念仏して地獄におちたりとも

さらに後悔すべからず候ふ。……

いづれの行も及びがたき身なれば

とても地獄は一定のすみかぞかし」

（歎異鈔）

まことにこれ以上徹底した

信の世界があろうか。

衆人救済の使命ある親鸞自身は

自分の救を問題にせず

念仏も彼には救のためでない。

念仏それ自体が

無即無量の絶対界であるというのだ！

結果が地獄であろうと問うところに非ず。

世界の大神学者バルトが

「歎異鈔」の独訳を読んで

こんな信仰があるかと驚嘆したのだ。

西では宗教改革者ルターが尼僧と婚した。

仏になる以前、すなわち菩薩として修行中のとき立てられた仏の誓願をいう。

*行者→道を行く者。仏道を修行する者。

*浄土→漢訳無量寿經の「清浄国土」を二字につづめた言葉。淨福な永遠の世界のことで、これに對して、現実の世界は穢土（えど）と称された。穢土を凡夫の世界とすれば、浄土は仏の世界となる。

*バルト→Karl Barth

一八八六—一九六八年。

プロテスタント神学者。

スイス生まれ。弁証法神学運動の推進者。ナチズムに反対し、ドイツ告白教会を指導。著書「教会教義学」など。

教会を指導。著書「教会教義学」など。

東では親鸞が僧の妻帯を自証する。
六角堂の救世観音が白い袈裟がけで示現
大いなる白蓮華に端坐して告命する。

行者宿報設女犯

我成玉女身被犯

一生之間能莊嚴

臨終引導生極樂

(行者宿報して設ひ女犯すとも

我は玉女の身と成りて犯せ被む

一生之間能く莊嚴して

臨終に引導して極樂に生ぜしめん)

この夢告は正に僧親鸞の妻帯を

祝福する燦然たる名句ではないか。

生物に雌雄、男女あるは

自然界の祝福である。

特殊な使命ある男性、女性は独身で貫くが

現代の常道は男女一夫一婦の

夫妻関係たるは

文明文化の歴史的な証明の通りだ。

親鸞の時代には

複数の妻帯も何ら不倫でない。

彼も吉水時代に恵信尼と

藤原兼実の女、善変を妻としていた。

さて親鸞は他力本願の念仏道に徹し

法然の第一門弟として尽していたが

件の住蓮、安樂の死罪に連座せしめられ

師法然(七十五歳)は土佐へ

親鸞(三十五歳)は越後へ配流。

その他六僧が流罪に処された。

何たる無道千万な断罪か。

これが後鳥羽上皇の仕打とは。

僧の職柄では処分かなわぬ故に還俗させる。

即ち法然上人は藤井元彦

親鸞上人は藤井善信。

時は建永二年(一二〇七)三月半ば

*他力本願は自己の修業の功德によつて悟りを得るのではなく、阿弥陀仏の本願に救われることをいう。特に真宗では、他力本願の意に用いる。

*南都は奈良の別称。京都に対して言う。奈良の興福寺。延暦寺を「北嶺」というのに対する。
*弘誓は誓願のこと。菩薩が悟りを求め衆生を救おうと誓うこと、またはその誓いのこと。

偉大なる俗人両者は京を去った。

この理不尽な流罪の主謀者は

南都興福寺の僧徒らだ。

越後時代の親鸞は俗人藤井善信だが

彼は自ら愚禿と称した。

頭髮は長からず短からず。

流人ゆえ司官の監視下だが、彼は介意せず

彼を慕う名門出の妻惠信尼は

京を去って越後へ来た。

彼は欣然彼女と自作自給の生活に入る。

彼女との間に信蓮房（明信）、覚信尼

その他二男二女が生れた。

越後は数年。

彼は越後生活中に

「教行信証」にとりかかった。

その総序劈頭に曰く

「ひそかにおもんみれば

難思の弘誓は難度海を度する大船

無礙の光明は無明の闇を破する

慧日なり」

（ひそかに思うに

大いなる請願は生死の海を渡す慈悲の

船であり

さわりなき光明は現世の暗を破る

智慧の日である）

（金子大栄意訳）

「教行信証」は彼の重要な主著で

晩年まで推敲をした。

パウロのロマ書がこれに照応と謂えようか。

この越後滞在中も彼は伝道せざるを得ない。

親鸞自身が救霊愛の源泉滾々たる

存在だからだ。

親鸞は建暦元年（一二二一）

三十九歳にして流罪を解かれたので

惠信尼、信蓮房らを伴れて

*難思の弘誓は難度海を度する大船の本願が、思いはかることのできない広大な誓いであることをいう。

*難度海は生死流転の迷いの世界のこと。深く沈んでわたることのできない海に喩えたもの。

*無礙は無碍とも書く。

物質的に空間を占めて他のものの妨げとなることのないことであるが、自由自在に融通して障りのないこと、無所得とも表す。光り映えていること、もしくは仏の光明は無礙光という。無礙の光明は阿弥陀仏の光明のこと。念仏信心の人をその光のなかに救いとる阿弥陀仏の智慧の光明をいう。

*無明は目が見えない意で、転じて、聡明さに欠ける意。人生や事物の真相に明らかでないこと。すなわち、すべては無常であり固定的なものはない。無我という事実にも無知なこと。この無明がもとで固執の念（我見）をおこし、さらに種々の煩惱の発生とする。

東南の旅路を辿り関東へ。

ところが建暦二年一月二十五日に

法然は還らぬ旅についた。

そのことを彼は上野国(群馬県)で

聞き知るや、師への哀感深く

彼は悶絶し、道辻に倒れ伏し

血の如き涕涙に咽び泣いた。

さて我々は親鸞の愛弟子唯円の

「歎異鈔」を瞥見して

師親鸞の告白に耳傾けようではないか。

「弥陀の本願には

老少善惡のひとをえらばれず

ただ信心を要すとするべし。

そのゆへは

罪惡深重、煩惱熾盛の衆生を

たすけんがための願にてまします。

しかれば本願を信ぜんには

他の善も要にあらず

念仏にまさるべき善なきゆへに。

惡をもおそるべからず

弥陀の本願をさまたぐるほどの

惡なきゆへにと、云々。……

願をおこしたまふ本意

惡人成仏のためなれば

他力をたのみたてまつる惡人

もとも往生の正因なり。

よて善人だにこそ往生すれ

まして惡人はと、おほせさふらひき」

善惡の差別は相對的たるのみ

自らをどうしようもないものと

自覺する魂こそ如来の本願を

(如来とは真如仏の來臨の意、即ち大慈

大悲は天界から降臨すること、ログス・

キリストのイエスとして降臨したことに

照応する)

*無明の闇に無知迷妄の心を闇に喩えていう。

*瞥見 ちらと見ること。

*弥陀の本願 阿彌陀仏の誓願。また、特に第十八番目の誓願をいう。こ

こには、阿彌陀仏を信じて一べんでも念仏を唱え

るものはすべて浄土に迎えることが誓われている。

*煩惱 心を煩わし身を悩ます心のほたらき。心

身を悩ます一切の精神作用の総称。

*熾盛 火のさかんに燃えあがること。煩惱のはげしさなどに例えていう。

*惡人成仏 惡人が仏になるという意。

*往生の正因 極樂往生を可能にするものとも正しい直接的な条件。總括

的には念仏と説かれる。

*如来 真理の世界から來たもの。真理に到達したものの意。仏の尊稱。

仏の十号の一。真宗で、

阿彌陀仏の廻向の真実信

心を仏性とも如来ともい

う。

受くること確かなり。

これも福音の世界でキリストの

十字架の贖罪を受くる救済に照応。

私が照応というのは齊しい意味ではない。

宗教的次元は夫々で

比較さるべきに非ずだ。

キリスト道、仏道（「教」と言いたくない）

の二大宗教は夫々の独自性に於て

認識、尊重さるべきものである。

さてまた「歎異抄」を見ることにする。

「念仏には、無義（はからいなきこと）

をもて義とす、不可称不可説不可思議の

ゆへにとおほせさふらひき。……

一文不通にして

経釈のゆくちもしらざらんひとの

となへやすからんための

名号におはしますゆへに易行といふ。

学問をむねとするは聖道門なり……

上根のひとのためにはいやしくとも

われら（下根の凡夫）がためには

最上の法にてまします。……

聖人のつねのおほせには

弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば

ひとへに親鸞一人がためなりけり。……

聖人のおほせには、善惡のふたつ

總じてもて存知せざるなり。……

煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は

よろづのことみなもてそらごと

たわごと、まことあることなきに

ただ念仏のみぞ

まことにておはしますところそ

おほせはさふらひしか。……」

弥陀の本願が正に親鸞一人のためだ

との告白は

おのれを罪びとの首と告白したパウロが

*無義Ⅱ凡夫のはからい
を離れること。

*経釈Ⅱ經典やその注釈。

*易行Ⅱ易行道。阿弥陀
仏の悟りに至る道をいう。

救いを信じ、その名を称
えて念仏によつて往生す
る他力の考え。

*聖道門Ⅱ大乘・小乗を
含む、自力で悟りを開く
ことを説く教え。

*上根Ⅱ仏道修行にあた
つて素質や能力のすぐれ
た人。

*下根Ⅱ機根の劣つてい
るもの。教えを受けたり
修行する能力に乏しいも
の。

*凡夫Ⅱ煩惱に汚され、
迷つている愚かな者。凡
人。

*火宅Ⅱこの世の煩惱と
苦惱に満ちた姿を、火と
燃える家に喩えた語。

*罪びとの首Ⅱテモテ前
書Ⅱ・15「キリスト・

イエス罪人を救はんため
に世に來り給へり」とは、
信すべく正しく受くべき
言なり、其の罪人の中に
て我は首なり」

キリストの福音は正に

パウロ一人のためだったと

彼は言わなかったが

彼の手紙の言外、行間には

これと同じひびきを感じざるを得ない。

キリストに最も敵していたパウロが

最大の使徒^{しと}となつたのだから。

他人ごとではない

キリストの福音は正に

天弓小池辰雄一人のためだった。

だからこんな詩的告白をしつつあるのだ。

天弓は人間的には

西のアウグスティヌス、東の親鸞に

照応する人間である。

キリスト道界の例外的な存在。

キリストのみが全天弓を知り給う。

平伏^{ひれふ}して合掌。

さて「親鸞」という名の由来は何か。

彼は中国の念仏の行者

「世親^{せしん}」と「曇鸞^{どんらん}」を尊敬していた。

それゆえ両者の名から一字ずつ取って

親鸞とした由。

東国で親鸞集団が

隠然^{いんぜん}*たる底力をもつて来た。

鎌倉幕府は念仏信徒を弾圧し始めた。

念仏者たちはそんなことで動じはせぬ。

親鸞は既に五十余歳、彼らの不動を信じて

帰京の途についた。

いずこへ往くとも迫害は覚悟の上だ。

本願の力は次元がちがう。

嘉祿三年（一二二七）

親鸞五十五歳のとき

比叡山の荒法師たちが東山大谷の

法然の墓堂を襲い、墓をもあばいた。

*隠然^{いんぜん}はつきりとは表面に現れないが、勢いのあるさま。

何たる乱行か。言語道断。^{らんぎやうどうだん}

しかも朝廷は専修念仏集団に

罰を加えたとは。

親鸞の尊敬していた隆寛も鳥流しに遭った。

そのあとで親鸞は京に帰ったのだ。

親鸞は師法然の命日二十五日には毎月法会。^{ほうえ}

法難に遭った住蓮

安楽らのことも同じく憶えて。

如來の本願力に優るものなき故に

親鸞は不動だ。

九十歳の往生の日まで

念仏無礙の一道を貫いた。^{むげいしやう}

敵も多かったが

地道な帰依者が確実に増した。

越後以来、愚禿親鸞と自称していた彼こそ

世界の宗教界の永遠の人間親鸞だ。

弘長二年（一二六二）十一月二十八日

極楽浄土へ彼は迎えられた。

「私が死んだら

賀茂川に入れて魚に与えよ」

賀茂川は幼年時代からの

なつかしい川だ。

賀茂川の流れのように

彼の名もいつまでも

彼を慕う人々の心の中を

流れてやまない。

* 法会Ⅱ広義には、仏事・法要のことで、仏・菩薩を供養したり、追善の法要を営んだりする、佛法に関するあらゆる行事・儀式・集会を意味する。

* 無礙の一道Ⅱ何ものにもまたげられない唯一絶対の自由な大道。

* 極楽Ⅱ阿弥陀仏の浄土。この世界の西方、十億億の仏土を経たかなたにあるという、一切の苦患を離れた、諸事が円満具足している安楽の世界。

親鸞 (二)

平家に非ずんば人に非ずとの

豪勢な平家の天下は

太政大臣清盛に到つて全盛を極めたが

高倉天皇の御宇、承安二年

壬辰 五月二日の夜半のこと

日野有範の妻吉光女は夢路にて

西の方より金色の光明耀い來たり

おのが身を巡ること三度び

あつと驚く間もあらせず

箭の如く口中に入りしと思いきや

西方を見遣れば一人の菩薩

佇みて一尺ほどの五葉の松が枝を

手にしてこれを授けて曰く

「吾れはこれ、如意輪觀音なり

汝奇異の児を生まん」

との夢告であつた。

明くれば承安三年、一一七三年の春

珠玉の如き男児が生れ出でた。

因つてその児は松若丸と名づけられた。

家系を見れば畏るべし天兒屋根尊の苗裔

*御宇 統治期間。

*菩薩 悟りを求めて修業し、衆生済度の誓願を實踐する者。仏に次ぐ聖者。

*如意輪觀音 六觀音または七觀音の一つ。法輪を転じて、一切の願いを成就させるのでその名がある。

*苗裔 子孫。

藤原の姓を賜^{たま}つたわが国仏道の父祖
聖徳太子大織冠^{だいしきくわん}の後胤^{こういん}である。

この幼児はやくも父母を失い

九歳にして出家仏門に入る。

そは奇異の夢告の預言の如く

洛東白川なる叡山^{えいざん}の別院青蓮院に

後に比叡山に籠^{こも}つて天台宗慈田^{じでん}の許で

密教の修業、仏典の身説に

勉勵^{べんれい}すること二十年。

時は源平擾乱^{じようらん}の中

天変地異相繼ぎ世は不安。

堂僧範宴^{はんえん}の心魂は天台真言^{しんごん}に平安^{やすみ}を得ず

竟に決意し下山して、ゆかり浅からぬ

聖徳太子建立^{こんりやう}に成る六角堂の

如意輪観音百日願^{さんちう}の参籠^{さんろう}にとりかかる。

九十五日、建仁元年^{けんにん}（一二〇一）

四月五日、夜は寅^{とら}の刻^く

救世菩薩現われ給い

行者宿報^{しやくほう}設女犯^{せつにょはん}

我成^{われなり}玉女身^{ぎよにょみ}被犯^{へいはん}

一生之間能^{いしやうのあいだに}莊嚴^{しやうげん}

臨終引導^{りんしゅういんどう}生極樂^{しやうごくらく}

（行者宿報^{しやくほう}して設^{たて}ひ女犯^{にょはん}すとも

我は玉女^{ぎよにょ}の身と成りて犯^はせ被^はむ

一生之間能^{いしやうのあいだに}く莊嚴^{しやうげん}して

臨終^{りんしゅう}に引導^{いんどう}して極樂^{ごくらく}に生^{しやう}ぜしめん）

此^{かく}の如き稀代^{きだい}の夢告^{むこく}を賜^{たま}つた。

範宴^{はんえん}が心の煩悶^{はんもん}はアウグステイヌス^{アウグステイヌス}の如く

情愛の深さに加えて肉情の熾盛^{しせい}があつた。

男女本然の肉情そのものは自然^{しぜん}。

救世菩薩は女犯^{にょはん}を肯定して

僧侶の妻帯をここに告げ

我れが玉女^{ぎよにょ}となつて汝の女犯^{にょはん}を受ける。

生涯^{しやうがい}莊嚴^{しやうげん}なる結婚生活^{けっこんしやうふ}をせよ

臨終^{りんしゅう}に引導^{いんどう}、極樂^{ごくらく}往生^{おうじやう}を遂げさせると。

宗教改革者ルターは修道尼^{しやうどうに}と結婚をした。

*大織冠^{だいしきくわん}大化の改新後定められた最高の冠位。

*後胤^{こういん}子孫。

*擾乱^{じようらん}騒ぎみだれる。

*範宴^{はんえん}親鸞。

*寅^{とら}の刻^く午前四時頃。

*救世菩薩^{きうせいぼさつ}救世観世音菩薩。

*「法華經」普門品に、「観音の妙智の力はよく世間の苦を救う」とあるところから、観世音菩薩をたたえた呼び名。

*アウグステイヌス^{Augustinus}三二五

四、四三〇年。初期キリスト教会の教父。北アフリカ生まれ。マニ教・新プラトン主義などを経てキリスト教に回心。ヒツボの司教。新プラトン派の哲学とキリスト教を結合し中世思想の基礎を作った。

*熾盛^{しせい}非常に盛んなこと。しじよう。

*引導^{いんどう}極樂浄土に導くこと。極樂に生まれさせること。

東西二大宗教家が人間の賜りたる自然性を義しく肯定して親鸞は浄土真宗を展開し

ルターは福音新教の創始者となった。

明朗なる情道によって範妄は

心の平安と歓喜の人とはなつたが

魂の問題が未解決。

道を何処に求むべきか。

彼は音に聞きける吉水の

法然上人の門を叩いた。

時に彼は二十九、師は六十九歳。

風雨の状況如何にもあれ

復た百日を期して念仏道を

身につけんものと真劍聴講。

中国の道綽と師源空に因んで

綽空と名乗ることを自らにゆるしたが

夢告を受けて善信と改名。

その意、善く信じて真の菩薩たれ。

法然に接するにつれて善信は

法然の本願心が身に沁みてきた。

法然は無知無分別の愚直な人こそは

必ず往生を遂げると言い

学が鼻についている賢気な人は

往生危うしと言っていた。

東西孰れの国人にしろこれは同然。

智を驕り徳ありと自認する者らは

とかく他人を審く自負心強き徒輩。

「偽善なる学者、パリサイ人」と

「霊の貧しき」平伏しの魂とは

いづれが天国極楽往きとなるか

地獄黄泉往きかは自ら知らんのみ。

源空の門下には住蓮、安樂の二僧あり

念仏専修の優れたる行者であつた。

洛東鹿ヶ谷に庵居、聴衆自ら参集

彼らの哀歎悲喜を親しく体受したところ

発心随喜する者が相繼いだ。

*源空 法然。

*偽善なる学者、パリサイ人 〓 マタイ 23・13。

*霊の貧しき 〓 マタイ 5・5。

*行者 〓 仏道を修業する人。念仏の人を念仏行者、真言を行ずる人を真言行者などという。

*発心 〓 菩提心をおこすこと。出家すること。また、出家を決意すること。

*随喜 〓 他人の善い行為や幸せを見て、共に喜びの心を生ずること。また、転じて、大喜びすること。

偶々後鳥羽院紀州は熊野に赴ける折

御所の官女松虫、鈴虫の両姫

秘かに忍び出でて誦経念仏に

霊幸う日々を迎え竟に決意し

九重の彩黛綺羅の生活を絶ち

妙齡ながらぬばたまの黒髪を断ち斬り

墨染めの法衣に身を糞し

行方も知らに雲隠れした。

女官失踪のこの一件は

忽ち風評の渦を捲き起こし

念仏宗の僧住蓮、安楽が

見目麗しき女官を誘惑し

あらぬ所業を為したるは

ゆるし難きことなれば

念仏宗は邪道なりと

他宗の者ら讒訴の種を詐りあげた。

上皇熊野より帰還して

事の真偽も言問わず

怒りの逆鱗をうち立てた。

詐偽の証言のもとこの二僧は断罪。

噫この殉道の冤罪が逆因となり

建永二年（承元元年）一二〇七年二月

念仏宗禁令發布とは！

かくて宗祖法然は土佐に

善信（親鸞）は越後に

法本は佐渡に、好覚は伊豆に

成覚は阿波に、浄聞は備後に

禅光は伯耆に流刑となつた。

承元二年三月十六日

法然は土佐への船路に。

同じ日に善信は俗名藤井と名づけられ

洛東岡崎を立、越後は国府の配地へ下向。

これが法然、親鸞の生き別れと相成つた。

近江、越前、加賀、越中を経て

噫親不知子不知の險を越えた彼こそは

僧に非ず俗に非ざる本願に生くる真人。

*官女Ⅱ宮中や將軍家に仕えた女性。女官。かんによ。

*彩黛綺羅Ⅱはでやかなさま。

*法衣Ⅱ僧尼の着ける服。僧衣。法服。

*女官Ⅱ昔、宮中に仕えた女の役人。官女。によかん。

*あらぬ所業Ⅱあつてはならぬしわざ。よくない行い。

*讒訴Ⅱかげぐち。

*逆鱗Ⅱ天子の怒り。龍のあごの下のかさはにえたうろこにさわれると、龍は大いに怒つてその者を殺すという伝説に基づき、君主を竜にたとえてい。

*冤罪Ⅱぬれぎぬ。

*逆鱗Ⅱ天子の怒り。龍のあごの下のかさはにえたうろこにさわれると、龍は大いに怒つてその者を殺すという伝説に基づき、君主を竜にたとえてい。

*冤罪Ⅱぬれぎぬ。

*冤罪Ⅱぬれぎぬ。

*冤罪Ⅱぬれぎぬ。

*冤罪Ⅱぬれぎぬ。

*冤罪Ⅱぬれぎぬ。

*冤罪Ⅱぬれぎぬ。

*冤罪Ⅱぬれぎぬ。

*冤罪Ⅱぬれぎぬ。

*冤罪Ⅱぬれぎぬ。

時に彼は「人生の旅路半」と

『神曲』第一行に謂われた年齒

法難は却て布教の天地を供した。

隠忍冥想無言の念仏の中

浄土真宗親鸞の内的充実が成った。

建暦元年、一二二一年に解禁となり

布教の自由を得た親鸞は

天来の本願力に推し出され

存在即使命即布教の生活。

本願の念仏に帰依する者

信濃の河水が田圃に流れいるが如。

念仏の真義を諄々と説く親鸞

万人救済の大悲願が

或は雷雨の如く、或は春雨の如く

民衆老若男女の心に降り濺いだ。

単独自由に布教して已まざる彼は

越中越前を隈なく布教せんとした。

そのある夕

海拔千メートルに近き米山の嶮路を越え

夕陽が日本海の彼方に沈まんとする頃

柏崎と直江津の中間の柿崎村に辿り着いた。

破衣の袖を通して潮風は身に沁み

いずこかの旅宿に一泊せんものと思うが

見当らぬままに、とある家の雨戸を叩いた。

「今晚は」

と叩くこと幾度か

「どなたです」

と老婆が戸を少しく開いた。

見れば乞食同然の姿に、彼女は嫌厭の情。

「済みませんが

一夜の宿をお願い申します」

「お断りします

私の家は宿屋ではありません」

答えるや否やピシヤリと戸を閉じた。

「では軒下に寝かしていただきますましよう」

この乞食坊主の心は念仏そのもの

*「人生の旅路半」ニダ
ンテの「神曲」「地獄篇
第一歌」の劈頭の句。ダ
ンテは三十五歳の年に暗
い森の中へ迷いこむ。

*年齒ニとし。年齢。

*法難ニ仏教、または仏
教を広める者に対する迫
害。また、教義に関する
非難。

*隠忍ニじつとがまんす
ること。

*帰依ニ神仏や高僧を敬
い、その教えに従うこと。

*米山ニ新潟県、柏崎市
南西部にある山。標高九
九三メートル。

*嫌厭ニきらいいやがる。

何を恨もう

彼は軒下の石を枕に眠りに就いた。

親鸞の心に石が石ではなかった。

如来のふところの中であつた。

夜は更けてゆく、老嫗は不図眼覚めた。

また眠ろうとしたが眠れない

さつきの坊主は？

訝し気に雨戸を少しく開けて見た。

さあ驚くの驚かないの！

魂消て腰を抜かさんばかり！

軒下に石を枕の坊さんの鉢から

靈光が燦然と耀うていた！

「噫、お上人さま」

婆さんの声も咽喉もとで消えた。

夜明けまで跪坐き、おのずから合掌。

曙の星も消えかかる頃

坊さん目覚めてみれば

婆さんが平身低頭しているではないか。

「婆さん何うなさいました」

「昨夜は大変申訳ないことを致しまし

お詫びいたします

どうぞお赦し願います！」

坊さんは莞爾とほほ笑み

「おかげさまで美しい夢路を辿りました」

「どうぞお入り下さつて、お茶を……」

婆さんの心は慈光に打たれて改心！

慈光に優る布教があるうか。

親鸞はひきとめる袖を振り放つて

「では御機嫌よう」

あとから老婆は追いかけて黒川べりまで。

小川の浅瀬を靈視して坊さんは既に彼岸だ。

「お上人さま、お願いがございます」

「何か用かね」

「はい、何かこの手拭に

書いて戴きたいのです」

婆さんはふと棒を見つけ、これに結んで

*老嫗 〓年をとった女。
老婆。

*莞爾 〓につこりと笑う
さま。

小川越しにわたした。彼は欣然きんぜんこれに

「南無阿弥陀みなんぶつ仏」の名号みょうごうを書いて返した。

本願念仏の六字に優る贈物のあるべきや！

鬼心を仏心に変貌へんぼうさせる本願の慈念なるぞ。

さて六角堂の夢告の玉女を想わせる

恵信尼こそは親鸞にふさわしき

妻であつたに相違ない。

彼女は恐らく三善みよしため為教の娘

親鸞との愛の果たる恵信尼こそ

本願寺を創立した天晴れの尼僧にそう。

上人は念仏宗の禁制が解かれる前から

恵信尼と結ばれていたであらう。

越前越後の布教が不動の果みを結ぶや

彼は恵信尼と子こらを伴ともなつて

東方関東ひがしの常陸ひたち（茨城県）に向つた。

時は建保二年（一二二四）

氣候も特に寒からず暑からず

家事と子育ては恵信尼

彼は専ら布教と著作。

かくて叡山時代に匹敵する

歳月を実りゆたかにすごし得た

常陸の国の稲田いなだを根拠地ひたけとして。

かく越後、常陸を二焦点ひたけとして

民間に殷盛いんせいなる布教を果した。

恵信尼はその遺した書翰しょかんを見るに

頭腦明晰めいせき、理路整然りろせいぜんたる文ふみのひと。

本願の念仏を軸としたこの夫妻

相互に敬愛し、仏道のためには

協力を楽しみとした夫妻であつた。

互にその姿の奥に観音菩薩かんのんぼさつを拝していた。

高齢となり布教も終幕近きを知るや

京都に單身法然の墓参おもむに赴き

九十歳を迎えて

弘長二年（一二六二）十一月二十八日

善法院で往生。

*稲田は茨城県中西部、笠間市西部の一地区。

*殷盛はさかんなこと。

おのがむくろは賀茂川に、と言ひ遺して。

我らは茲に彼の本願念仏の告白を
直弟子唯円の「歎異鈔」の中から
自由に撰び

親鸞魂で再告白したいと欲う。

弥陀の本願は老少善悪何でもござれ

罪惡深重、煩惱熾盛の衆生を助ける力あり。

こちらは本願の力を信ずる他に道なし。

信即念仏、念仏は至善なる行為

いかなる惡も怖るるに足らず。

弥陀の本願にはいかなる惡も降参するのみ。

念仏は浄土往生の種子か

地獄転落の業か、私は知らぬ。

いずれの行も及び難き身

されば地獄は一定の住家なるぞ。

もともと本願他力の現実

こちらが御利益を願うは道に非ず。

善人の往生も本願によるのみ

況んや惡人こそは本願の手の中。

念仏もし自力ならば疲れ果つ

本願の御力で念仏させられるのみ。

他力本願を頼む惡人こそは

もともと往生の正因なり。

本願往生の本質は現生なり。

一切の有情は皆世々生々の父母兄弟

されば親鸞は父母孝養のため

特に念仏申したることなければ

彼岸の父母の念仏を体受して涙す。

親鸞は法然の言を絶対信頼

唯円は親鸞の言を絶対信頼

そこにまことの師弟あり。

されどもともと弥陀の御もよほしの

本願ゆえの絶対なれば

師弟関係も間接にして

本質的には無関係の關係なるぞ。

*利益Ⅱ仏・菩薩などが
他に対して恵みを与える
こと。恵みを与える種々
の行為。またその恵み幸
せ。ためになること。益
になること。

*自力Ⅱ総じて、自分の
力で修業をして成仏、ま
たは浄土往生を得ようと
すること。自力念仏Ⅱ自
分の力で浄土往生を得よ
うという自力の心で唱え
る念仏。

*他力Ⅱ仏・菩薩の力を
かりること。特に阿弥陀
仏の本願の力によること。
またその本願のはたき。
他力本願Ⅱ自己の修業の
功德によつて悟りを得る
のでなく阿弥陀仏の本願
に救われることをいう。

*正因Ⅱ悟りの直接の
原因。

*現生Ⅱ現在の生の意。
いま生きている現在の世。
*有情Ⅱ生存するものの
意。感情など心のはたら
きを持つている一切のも
の。人や鳥獸などの生き
物。

されば、親鸞は弟子一人も有たずと言った。

念仏者は無礙の一道なり、と喝破した。

何たる痛快の一言なるぞ。

然り、本願他力の念仏の前

いかなる妨害もものの数に非ず。

念仏は行者のために非行非善なり。

自力念仏ならば難行善行なれど

他力念仏のゆえ無行無善と言ふも宜し。

一文不通にせよ、百文通曉にせよ

おのれを顧みず唯だ名号するは

他力本願の易行道。

学智をたのみ精進するは聖道門の難行道。

これ以上揚ぐるに遑なきにより

最後に最重要の一言を再告白せん哉。

弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば

ひとへに親鸞一人がためなりけり。

弥陀は阿弥陀、無量寿、無量光の

如来の五劫長時の深遠なる思惟の

本願を沈思黙考すれば

専ら地獄必定のこの親鸞の

済度のためであつた、合掌。

真の念仏者の感恩の心は

親鸞のこの一言をわが告白とする。

福音の世界での告白ならば

「われは罪びとの首なり」

キリストの十字架の贖罪は

ひとえにこのパウロのためなりけり

これがパウロの自覚であつた。

かくて聖霊の力にあふれて

パウロはあの世界伝道を貫いた。

パウロとその靈子テモテに靈光宿りし如く

法然とその法子親鸞に慈光は輝けり。

*五劫思惟の願は阿弥陀の四十八願は、法蔵菩薩であつたとき、一切の人々を救うために五劫にわたつて考え、選びぬいた念仏往生の願であることをいう。

*済度は衆生を生死の苦海から救つて、悟りの彼岸に導くこと。煩惱を脱して安樂の地に至らせること。

*「罪びとの首」は新約聖書テモテ前書1・15

「キリスト・イエス罪人を救はんために世に來り給へり」とは、信すべく正しく受くべき言なり、其の罪人の中に我は首なり」

栄西

栄西は備中（岡山県）の

吉備津社の神官賀陽氏の人

平安末期、永治元年（一一四二）

四月の生れ。

父親が三井寺出身により

彼も三井寺流の天台密教

略称、台密を学び

受戒して千光法師と称す。

新境地を開拓せんとして

伯耆（鳥根県）の大山に赴き

習禅房、基好に学び

禅道にうちこむ。

仁安三年（一一六八）春四月

決意して天台宗の発祥地なる

中国を訪ねんと商船に便乗して

明州（寧波）に渡航した。

偶々東大寺の重源に出遭い

共に天台山に登る。

また名だたる石橋に赴き

五百大羅漢を見る。

えいさい
一一四一―一二二五年。
鎌倉初期の僧。日本の臨
済宗の開祖。備中の人。
二度にわたって入宋し天
台学、臨済禅を学ぶ。ま
た宋から茶をもち帰り、
喫茶の風を広めた。よう
さい、ともいう。

*知客 禅寺で来客を接
待する役の僧。

更に阿育王山に登り
 仏舍利塔を拝み

明州の広慧禪寺の知客に学んだ。

かくて訪ね廻った江南は

禪宗遍きを知った。

正に南宋禪の世界であつた。

半歳にして帰国。

探究勃々たる栄西は

文治三年（一一八七）

またもや西航して天台山万年寺

更には天童山に登って

虚庵懷敏に就き

三年余り、禪道修行

かくて南宋禪臨濟宗を身につけた。

しかのみならず栄西は

造営術をも会得した。

四年間に互る入宋参学を全うし

建久二年（一一九二）帰国。

建久六年（一一九五）

博多の聖福寺の開山となる。

栄西は天台教学復興のため

これに南宋禪を導入し

以て『興禪護国論』全三巻を著した。

正治二年（一二〇〇）

栄西は北条政子を本願として

寿福寺を鎌倉亀谷に創建した。

建保二年（一二一四）二月

実朝に良薬と称して茶を献じ

茶の効能について

『喫茶養生記』二巻を著した

かくて後世は栄西を

茶祖と仰ぐに到った。

建仁二年（一二〇二）

將軍頼家は幕府の直轄領

六波羅に建仁寺を創建し

栄西をその開山に迎える。

*大千沙界 三千大千世界。宇宙についての単位

ともいえるもので、大千世界の別称。全宇宙は無数の三千大千世界からなるとする。

*太虚 空無なこと。絶対の空無。

*元氣 天地間に広がり万物が生まれ育つ根本となる精氣。活動のみなもとになる氣力。

*覆載 上おつて包むことと受けて載せること。

*四時 春・夏・秋・冬の四季。一日の朝・昼・夕方・夜中。

*最上乘 最もすぐれた教え。この上ないすぐれた教え。

*第一義 この上もない妙義。最上眞実の道理。

*不二の境地 無二絶対の境界。

*般若 一切の事物・道理を明らかに捉える、悟りの智慧。

*真相 一切のもののありのままの眞実のすがた。

生滅・無常を離れた、万物の眞相。眞如。一如。

彼は再度入宋して禪を深めて来た。
 ともかく栄西は禪宗展開の
 基礎的存在であつた。

彼の禪の心は「大いなるかな心や」の
 一節句に告白。

「大いなるかな心や。」

天の高き極むべからず
 而るに心は天の上に出づ。

地の厚さ測るべからず

而るに心は地の下に出づ。

日月の光は踰ゆべからず

而るに心は日月光明の表に出づ。

大千沙界は窮むべからず

而るに心は大千沙界の外に出づ。

それ太虚か、それ元氣か。

心は即ち太虚を包んで

元氣を孕むものなり。

天地我を待つて覆載し

日月我を待つて運行し
 四時我を待つて変化し
 万物我を待つて發生す。

大いなるかな心や。

吾已むことを得ずして

強ひて之に名づく。

是を最上乘と名づけ

また第一義と名づけ

亦般若実相と名づけ

また一真法界と名づけ

亦楞嚴三昧と名づけ

亦正法眼蔵と名づけ

亦涅槃妙心と名づく。

教外別伝と号す。……」

……

*一真法界||唯一絶対にして真実そのもの。いつさいの時々物々、ことごとくがそのまま絶対真実と説くもの。

*楞嚴三昧||首楞嚴三昧の略。第十地に住する菩薩が得る三昧。將軍が兵を率いるように、一切の三昧がこれに随従し、また、天輪聖王が強敵を平伏させるような、悪魔を調伏する勇猛で堅固な三昧。

*正法眼蔵||一切を照らし、包んで、あますところがない無上の法、すなわち仏法のこと。

*涅槃妙心||仏の悟りの境地に入つた、その心は言葉では表現できない玄妙な心であることをいふ言葉。涅槃も妙心も共に仏心をさす。

*教外別伝||禪宗の要諦を示す言葉の一つ。經典などの文字や言葉によらないで、仏の悟りの神髓を心から心へと直接伝えること。また、その深奥の教義。

道元

道元どうげんの父は内大臣久我通親こがみちちか

母は摂政大臣藤原基房もとむらさきの娘で

彼は貴族の出身だ。

正治二年しょうじに（一二〇〇）正月に

京都郊外木幡こはたに生れた。

だが三歳のとき父を失い

八歳のとき母に死別。

父が承久じやうきうの乱の首謀者しゅぼうであつたので

近親の者ら相次いで非業の最後を遂げる。

九歳にして世親せしんの「俱舍論くしやろん」を

読む程の才あり。

十三歳のとき母方の兄良観法印を訪ね

仏門に入りたき旨を語つたが、反対された。

しかし、道元は決意堅く

横川の般若谷の千光房に入る。

建保元年けんぽう（一二二三）

天台座主ざう公円僧正につき

得度を受けて出家し

仏法房道元と名のる。

天台僧として仏道を修行し始めた。

どうげん
一二〇〇、五三年。鎌倉時代の僧。日本曹洞宗の開祖。京都の人。比叡山で出家し、建仁寺の榮西に師事。入宋し天童山で如浄より法を受けた。帰国後、越前に大仏寺（のち永平寺）を開いた。

*世親は五世紀ごろのインドの僧。初め小乗仏教に属し「俱舍論」を著した。のち兄の無著（むちやく）の教えで大乘仏教に帰依。唯識説を發展させ、瑜伽行（ゆがぎやう）派の基礎を築いた。

だが釈尊しやくそんの正法は何ぞやと
究めきうめゆく彼が発見せしは禪道なりし。

道元二十四歳のとき

宿願の宋の明州みんしゅう（寧波）に

着いた折しもある老僧が

日本船に椎茸しいたけを買いに來た。

この僧は阿育王山の典座てんざであつた。

道元は彼との話題に花が咲き

一泊を勧めたところ

老僧は

「俺わしが居ないと供養くように支障あり」

とて辞退した。

道元曰く

「貴殿不在なりとも誰か代らん

貴台きだいは典座をやめて

坐禪修行に専念されるに如くはなし」

老僧これを聞き、呵々大笑して

「貴下きかは弁道べんどうを解せぬぞ。

いつの日か阿育王山に往つて

修行するが宜よろしからん」

典座即ち炊事の責任者たる勤めに

うちこむこと

それが即ち禪道窮行たることを

この道元は解さなかつた。

この老典座の一言は

道元へのお面めん一本の痛撃だつた。

南宋禪の先鞭せんべんをつけたのは栄西だつたが

道元は建保五年（一二二七）

栄西の門弟明全みんぜんについて

臨済宗の禪を学び

貞応二年（一二二三）明全と宋に往く。

南宋の仏教界の巨匠無際むさいや

浙翁せつおうの臨済禪を学ぶ。

しかし、道元は

俗化している大恵派に失望した。

彼は天童山で

*典座＝禪家で衆僧の臥具、食事などのことを掌ささぐる僧。
*弁道＝仏道を修行すること。

*先鞭＝他に先んじて着手すること。

曹洞宗の如浄にめぐり遭う。

如浄の枯淡なしかもきびしい禅風に

心を惹かれ、本格的に学ぶこと三年

ここに「仏祖単伝の正法」を認めた。

安貞元年（一二二七）

五年間の南宋滞在の目的を果して帰国

建仁寺にたて籠り

仏法の正門は禅なりと確信し

坐禅に打ち込む只管打坐に力を尽した。

坐禅は難行道でも易行道でもない

大安楽の法門なりとなし

遍く衆生に説法するに

『普勧坐禅儀』を著して

坐禅の在り方仕方を説いた。

やがて説法の集大成として

『正法眼蔵』なる主著を書いた。

彼は所謂公案禅ではなく

如浄に学んだ如く

黙々として無心悟入の坐禅を指示した。

道元は固定した禅諸派の

宗派根性を否定し

彼はとらわれなき

至純無拘束の禅道を往く。

末法思想をも否定して

謂わば仏祖の正門に還れである。

開祖たる天台宗の

根本聖典たる法華経を評価した。

「仏祖単伝の正法」は法華経に

その真髓ありとなした。

ところが叡山衆徒が

道元を洛中から追放にとりかかった。

道元は法難を避けんとて

洛南深草の興聖宝林寺に居を移し

当時の天台宗を批判した。

道元は『護国正法義』を書いて

禅道こそは国家護持の

*単伝ある僧一人だけに教えを相伝すること。仏の教法をことごとく、正しく相統すること。

*只管打坐 余念をまじえず、ただひたすらに坐禅を行うこと。坐禅に意義や条件をもとめず、無所得の立場に立つて坐禅を實踐するもので、道元が強調した禅。

*公案 禅宗で、参禅者に出す課題。仏祖の言行のうち、修行者にとって意義深いものや、暗示に富むものを選んで課題としたもの。

*悟入 さとりをひらいて、真実の世界に入ること。

*末法思想 仏教の歴史観。釈迦入滅後、正法、像法に次ぐ末法の時期には仏教がすたれ、教えのみあって行ずる人・悟りを得る人がないとする思想。

正しょうほう法ほうなりと力説した。

叡山と中国禪宗の別派えんに円爾えんにの

東福寺教団の圧力を避けて

道元は十余年に互わたる深草の道場を解散して

越前かんげん（福井県）志比庄の谷間に隱棲いんせいしたが

寛元二年永平寺をその地に開門した。

少数の同志精銳主義を以て

坐禪道をきびしく鍛えた。

彼は勿論行住坐臥ぎょうじゅうざがを

禪の精神を以てするを本道とし

「普勸坐禪儀」の精神を以て

貴賤男女の別なく

出家在家の別なきを

根本精神としてはいるのだが

晩年ばんねんに俗塵ぞくじんを避けて

山間隱棲いんせいの禪道を以て

純粹性を保たんとした

氣持はわかるが、残念である。

宝治元年（一二四七）

執権しつけん北条時頼はうじょうときよりの懇望こんもうで

道元は鎌倉へ往つたが

権勢に近づくことの非を覚え

帰山してしまつた。

併し、権勢何か有らんと

宗教人の高次元性の權威を

示すべかりしものを！

道元は越前に帰つて

禪道精神更に十余年

永平寺を二代孤雲懷辨えいへいじに譲つて上洛じやうらくし

一介の黒衣の平僧として

建長五年（一二五三）八月二十八日に

五十四年の禪道の生涯を閉じた。

道元の流派は後に

曹洞宗と称せられることになった。

*正法しょうほう正しょうしい真理。正しょうしい教法。仏法にかなつたもの。

*行住坐臥ぎょうじゅうざが歩くこと、止まること、坐ること、

臥すること、この四つはすべての動作の基本である

ところから、これを四威儀しゐいという。日常の立ち居振る舞い。

*隱棲いんせい世間をさけて、静かにくらすこと。

*懇望こんもう人に対して心からぞむこと。

*上洛じやうらく地方から都・京都へ行くこと。

*孤雲懷辨こううんゑいへん

日蓮

平安貴族政治から鎌倉武家政治に

変転を齎した承久の乱（一二三二）

この戦に敗れた後鳥羽、土御門、順徳の

三上皇は夫れ夫れ流罪に処せられた。

政状の変革、社会体制の異変に加えて

天変地異頻発の十三世紀初葉は

本格的な末法時代到来を思わせた。

時しも安房の國小湊なる漁村の一女性

梅菊は毎朝旭日に向って拝跪していたが

ある日の未明

太陽が蓮華に乗って懐中に入る

不思議な夢のもと懐胎した胎児こそは

わが日蓮、正にこの夢告に因る名を

後年に賜った。

これ釈尊の予言なる上行菩薩の

出現とかや。

その誕生は貞応元年（一二三二）

二月十六日、海面に蓮華の花の異象が生じ

庭からは清水が湧き立った由である。

父、貫名重忠は遠州の

にちれん

一二三二、八二年。鎌倉

時代の僧。日蓮宗の開祖。

安房の漁師の子。比叡山

などで修行し、一二五三

年『法華経』により開宗。

『立正安国論』を著して

幕府や他宗を批判し、伊

豆・佐渡へ流罪。のち許

されて身延山で教えを説

いた。

＊承久の乱 一二三二年、

後鳥羽上皇が鎌倉幕府を

倒そうとして、かえって

北条義時に敗れた戦乱。

＊旭日 朝日。

＊拝跪 びざをついて拝

む。

＊上行菩薩 釈尊が『法

華経』を説いたとき、仏

の寿命の永遠を開顯する

ために現れ、末法の世に

この経を広めることを付

嘱された四大菩薩の一人。

＊遠州 遠江国（とおと

うみのくに）。現在の静

岡県西部。

領主だが敗訴のため

母梅菊同伴で小湊に流された由。

日蓮は後年佐渡に流された際

おのが生い立ちを

「今生には貧窮下賤の者と生まれ

施陀羅より出でたり」

と証言している。

名僧には高貴の身分の者少なからずだが

日蓮は庶民のただ中の生れであつた。

彼の幼名は善日麿、漁師の子らしく

小魚を追つたり蟹と戯れていたが

才智才能は神童的なもの。

十二歳、天福元年（一二三三）五月

清澄寺の道善房の弟子となり

薬王麿と改名され、仏教、法要に精進。

十六歳にして仏僧となり

名を是生房蓮長と改める。

本格的な出家得度により

厳格な修行が始まる。

当時の仏教界は衰微廢退

正に仏教革新を要する時運にあつた。

蓮長は清澄寺に祀られてある虚空藏菩薩に

「われ日本第一の智者となさしめ給え」

と毎日祈願。満願の日に

明星の如き智恵の大宝珠を賜つた。

ところが堂を退く時

蓮長意識を失つて卒倒し、吐血夥しく

あたりの笹の葉が血染めとなつた。

これが一種の身心脱落なのであろう。

暦仁元年（一二三八）

十七歳を迎えた蓮長は

当時の政治と文化の中心鎌倉に赴いた。

四年間の研鑽徒しく

浄土宗、禪宗に失望して帰省。

二十二歳から三十二歳まで比叡山、京都

奈良の諸大寺を歴訪し研究したが

*施陀羅 Ⅱ 印度の四姓外の最下級の種族。屠殺などを業とする賤民。

*得度 Ⅱ 迷いの世界から悟りの世界に渡ること。悟りを得ること。転じて、出家し仏道に入ること。

*虚空藏菩薩 Ⅱ 「虚空蔵」は、虚空がすべてを蔵するように、無量の智慧と福德をそなえるの意で、人々にこれらを与え、願いを満たし救うという菩薩。

*身心脱落 Ⅱ 身も心も一切の束縛から解放されて、悟りの境界にいたること。また、妄念を離れた境地。

結局のところ法華經を

釈尊の教えの中心と見る天台宗こそわが意に合致すると感得。

この末法時代の救は法華經に在りとの自信を深めて比叡山を降りて帰郷した。

法華經の行者は

迫害、法難に遭うと記されてある。

法のために生命を棄てるは

蓮長固より覚悟の上。

本當のキリスト者が

福音のためには十字架を負う

殉道の魂の靈であるのと照応。

但だみだりに生命を棄てようとはしない。

使命のある限り

神仏はふしぎな援けをなし給う。

建長五年（一二五三）四月二十八日

朝まだき清澄山の旭の森へ登り

持仏堂の南面に立ち

太平洋の水分の涯からさし昇る旭日に向い

「南無妙法蓮華經」と題目を高唱した。

これ正に立教開宗宣言の第一声。

蓮長はこの日を期して、日蓮と改名。

正法開顯の初説法をなした。

そこには地頭東条景信、恩師道善房を始め

念仏や禪の徒輩が多数参集していた。

ところが日蓮は

念仏無間、禪天魔、真言亡国、律国賊、

と忌憚なく説破した。

言うまでもなく、法座は大混乱に陥った。

地頭景信は清澄寺の大壇越、念仏篤信の人

安房の国の頭領、鎌倉幕府直属の輩

怒って太刀に手をかけたが

道善らの執成しで鎮つたが

景信は日蓮逮捕を下命した。

日蓮はかくて追放と成つたが

彼はもとより覚悟の上。

*開顯Ⅱとらわれを開き
除いて真実を顕し示すこ
と。解き明かすこと。

*地頭Ⅱ鎌倉室町幕府の
職名。源頼朝が治安維持
の名目で全国に設置、盗
賊の逮捕、年貢の徴収や
大番役にあたった。

*念仏無間Ⅱ律国賊Ⅱ日
蓮が説いた四箇格言とい
われるもの。念仏は無間
地獄に墮ちるわざ、禪は
天魔の所為、真言は国を
亡ぼすもと、律を辱する
う意。
*壇越Ⅱ僧に布施する信
者。

蓮華寺で説法し、小湊の両親を訪ねて

懇切に理路整然と法華經を語った。

両親は感嘆帰依したので、父に妙日

母に妙蓮の法名を贈ってお邊乞い。

父とは今生の生き別れと相成った。

彼は布教のため鎌倉に向った。

松葉ヶ谷に草庵を設置した。

建長五年（一二五三）から

文永八年（一二七一）まで十八年間

鎌倉を中心に布教活動を展開。

当時の鎌倉は何の因果か、天変地異

火災頻発、疫病跋扈蔓延。

浄土宗も禅宗も政権に迎合する惨めさ。

日蓮は敢然として法華經弘通。

愚衆の憎悪と投石、他宗の陰謀に遭うが

法華經の真理に即して

布教は却て熱烈となり

信奉者は増しゆくのであった。

頼もしき弟子の第一号は日昭。

やがて日昭の甥日朗が弟子となる。

武人富木常忍、四条金吾、池上宗仲等

有力な弟子が相継いでできた。

ところが天変地異は各地に頻発

飢饉、暴風雨、洪水、大地震。

正嘉二年（一二五八）二月

日蓮は静岡県岩本の実相寺で

経藏に籠って仏典を閲読したところ

天災の根元は仏法の取り違いに在りと知り

「立正安国論」の構想を練った。

即ち実相寺で一切経を調べた日蓮は

国に正しい信仰がないと

諸災害が振りかかることを

経文の上からも祈禱の上からも覚知した。

文応元年（一二六〇）七月十六日に

最明寺入道時頼に献上した

* 今生は今の世。現世。

* 跋扈は勢力をふるうこと。

* 弘通は教えを広めること。

「立正安国論」によると

「一切の三災七難の根源は

国主も国民もみな法華経以外の邪法

邪師に帰依するから、善神は国を去り

悪鬼闖入のため起りしもの

一刻も早く国主も国民も

信仰の寸心を改めずんば

二つの大災難、自界叛逆難と

他国侵逼難に悩まされるぞ」

このような警告であつた。

然るに幕府はこの重大な書を黙殺した。

この「立正安国論」を誹謗する

念仏信徒中心の暴徒が八月二十七日の夜半

松葉ヶ谷の草庵を破砕し、焼き払う。

日蓮は闇の中に遁れて事なきを得た。

帝釈天の使者白猿が彼を避難させたという。

松葉ヶ谷の変を聞いた下総の富木常忍は

幕府の役人だが、法華堂を邸内に建立し

日蓮を丁重に供養したが、日蓮はそこで

百日間にわたる「百座の説法」を行った。

富木常忍は入道して日常と号し

日蓮の御書保存に尽力し

法華経寺の初祖となつた。

弘長元年（一二六二）富木や四条の力により

松葉ヶ谷の草庵再建、日蓮鎌倉に戻り

いよいよ激烈に他宗を破折するのであつた。

それがため日蓮は逮捕され

由比ヶ浜から船で伊豆の伊東へ流罪。

急を聞いた日朗は由比ヶ浜に駆けつけ

解纜寸前にとりすがつたが

役人に櫓で殴打され右肩骨をへし折られた。

日蓮と日朗の血涙の別れとなつた。

聖人を乗せた船が伊東に近づくと

一天かき曇り風波はげしく

役人は伊東の東端の俎岩に

* 闖入 〓 無断で突然入りこむこと。

* 自界叛逆難 〓 七難の一つ。自国における反乱、謀反による内乱という災厄。

* 他国侵逼難 〓 外国の侵略をうけて苦しめられる災難。

* 誹謗 〓 悪口を言うこと。中傷。

* 下総 〓 下総国（しもうさのくに）。現在の千葉県北部と茨城県南西部。

日蓮聖人を置き去りにして引き返した。

この組岩は干潮時には波上だあみじょうが

満潮時には波間に没する暗礁である。

日蓮は死を覚悟の唱題しょうだいにとりかかる。

時と共に潮が満ちて絶望状態に

追い込まれた。折しも忽然こつぜん

帰帆急なる一隻の漁船現われ、その漁師

船守弥三郎、日蓮の危き相すがたに気づき

彼を船に救い上げた

小船に乗るや間もなく波は岩を呑んだ。

殉道の覚悟の人は

使命の終るまで神仏に守られる哉。

流罪人をかくまうと

罪に処されることを知りながら

船守弥三郎は岩屋に日蓮をかくまい

一ヶ月に互たりねんごろに供養し

法華経を信じた。

日蓮はこの生命がけの援助を

釈尊の手か父母の手かと

全身の感謝感激で受けたのであった。

船守は伊東の川奈かわなの漁師だが

時しも伊東の地頭伊東八郎左衛門が

得え体の知れぬ重病で

苦悶の日夜をすごしていた。

たまたま日蓮聖人が川奈にいと

仄聞そくぶんしたので

重病治癒の祈願を懇請こんせいしたところ

日蓮これに応え、祈るや重病が直ちに快癒かいゆ。

驚き欣よろこんだ八郎左衛門は一族郎党と共に

法華経に深く帰依きえするに至った。

伊東は釈尊の持仏じぶつを捧げたので

日蓮は生涯この持仏を身辺に持っていた。

彼は一年九ヶ月流罪解放まで伊東で暮した。

その間「四恩鈔」「教機時国鈔」などの

貴重な著作を成したのみならず

数多くの人々を教化きょう化した。

*唱題Ⅱ経の題名を唱えること。とくに、日蓮示で、「南無妙法蓮華経」と「南無」の二字を加えて唱えること。

*仄聞Ⅱそれとなく聞く。

*持仏Ⅱ常日頃、礼拝している仏像。守り本尊として常に自分の居堂に安置し、または身近に置いて信仰する仏像。

*教化Ⅱ仏法を説いて衆生をみちびくこと。

身は囚われ人であらうとも
法華経は囚われず、人を動かす。

パウロがローマに囚われたが
彼の告白書翰の聖なる言句は
永遠に活きて人を回心させる。

文永元年（一二六四）七月五日

大慧星出現、日蓮はこれを自界叛逆難
他国侵逼難の前兆と見た。

秋になると母の重病のしらせあり
急遽帰郷した。

十二年ぶりの帰省、父は既に亡し。

帰宅してみると今しがた息絶えたとのこと

日蓮は全身で祈った。

悲願天に通じ母は蘇生した！

かくて爾来四年間寿命は延長された。

日蓮上人は正に仏界の靈性深き僧である。

文永元年（一二六四）十一月十一日

天津の工藤吉隆の招きにより

弟子鏡忍房、信徒十名を伴れて出かけた。

一行が小松原にさしかかるや

東条景信の一群に襲われ

日蓮眉間に三寸の傷を受けたが

危うく難をきり抜けた。

それは横の木に突如鬼子母神降り来たり
閃光を放ったので

景信の馬が驚いて景信を振り落したに因る。

当時蒙古は天下無敵の隆盛を誇っていた。

文永五年（一二六八）一月十八日

国書を携えた使節が鎌倉に来た。

それは威圧的な内容で

聴き入れぬ時は大軍を遣るという

無礼千万なもの。

日蓮の予言通り「他国侵逼難」の現われだ。

我が国は朝野^{ちやうや}一体国難に当る闘志烈々

二、三次に互る使節を

或は斬り或は追い返す。

北条時宗断乎たる態度を以て

北条宗政を九州探題として

入寇に備えしめた。

弘安四年（一二八二）元の大軍来寇したが

大暴風雨に襲われ、艦船沈没、全軍壊滅。

日蓮から受戒した久本坊日元は

その子も出家得度させたが

日蓮はこの少年の素質を欣び

日蓮と号せしめた。

日蓮は日元の故里甲州^{こうしゅう}を巡教し

平内を教化した。

そこには後年吉祥山上行寺が建てられた。

国土の安泰と法華経広布祈念のため

日本の靈山富士に入山、弟子数名を伴って。

法華経の写本を山腹に埋藏^{まいざう}。

五合目の経ヶ岳がその古跡とされている。

文永八年（一二七一）

二月下旬から六月まで

大旱魃^{かんばつ}で万物生氣喪失、飢饉の恐異来る。

執権時宗この自然の恐異に対して

良観和尚に祈禱を命ずる。

良観百余名の弟子らと雨乞をしたが徒然^{とぜん}。

更に七日の祈禱をしたが

雨は一滴も降らない。

日蓮は二人の弟子と共に祈禱せんとし

極楽寺谷の田辺が池の龍神に祈り

経文を板書して投入したら慈雨が沛然^{はいぜん}。

雨乞に敗北した良観は卑劣にも

幕府の権力者平左衛門尉頼綱に取り入り

日蓮を亡き者にせんと陰謀をたくらむ。

文永八年九月半、平左衛門

*朝野||朝廷・政府と民間。

*探題||鎌倉・室町幕府の職名。地方の要地におかれ、政治・軍事・裁判などを管掌。

*入寇||外敵が攻めて来ること。来寇。

*甲州||甲斐国（かいのくに）。現在の山梨県。

*教化||教導化育する意。人々を教育・訓練することにより、あるいは仏教徒と成らしめ、あるいは仏と成る資格を持つよう導くこと。

*徒然||なすこともなく退屈なこと。いたずら。

*沛然||雨がさかんに降るさま。

数百の兵を引率して松葉ヶ谷の庵居を襲撃。

これより先、文永八年幕府は

日蓮上人を龍の口で処刑せんとした。

太刀取り役の依智の三郎直重が抜刀し

合掌唱題する日蓮聖人を斬らんとした途端

かき曇れる空の下

江ノ島の方より鞠の如き光の丸が

飛来して刀を三段に折り、飛び散らした。

この霊的現象に兵どもは畏怖し

この天に逆らう死刑は吹き飛んだ。

法難何ぞ恐れん、正は邪を制した。

自己を無とし平伏して

靈法を身に体する者に勝利あり。

龍の口に於ける日蓮処刑に失敗した幕府は

本間六郎左衛門邸に彼を預けた。

庭前に出た日蓮は月に向つて

「名月天子は法華經の行者を守護すると

誓っているのに、靈驗なきは何ぞ」

これに応ずる如く

天より明星光を梅の木枝に投ず

その星光に役人ども畏れ戦き

平伏したり、逃げたり。

その間、鎌倉では火事や殺人頻発で混乱

これは良觀らの謀略で

日蓮一味の仕業と偽伝。

日蓮は捕えられ

日朗、日進は土牢に投入された。

日蓮は慰めの書を送つて曰く

「自分は明日佐渡へ行くことになった。

今夜の寒さ、牢中の様子が思いやられて

不憫でならない……

出牢を許されたら

明春必ず来られたし……」

これが「土籠御書」のひとつだりである。

文永八年（一二七二）十月十日

依智を出発した日蓮十二日間の難路を歩き

*靈驗は祈願などに対し
て神仏があらわす不思議
なしるし。神秘的な利益

寺泊^{てらどまり}に着き日本海を望む。

二十八日に出帆

やがて西空の黒雲が暴風を捲^まき起した。

船は転覆せんばかり

船頭も警護の武士どもも

生きた心地なきに、日蓮は何か懼^{おそ}れん

念珠を押しもみ、経文を身読^{しんどく}して

水竿^{さお}を執^とつて海面に

「南無妙法蓮華經」と書いた。

暴風にも心あり

日蓮の靈筆に直ちに從つて風波静まる。

文永八年十一月一日

日蓮は地頭本間重連^{しげつら}の所領塚原^{つかはら}に送られ

一間四面^{けんめん}の吹きさらしの荒屋^{あはらや}

三昧堂に入れられる。

塚原は文字通り死者を捨てる共同墓地

まことに苛酷^{かこく}な配所^{はいしょ}生活だ。

衣食は語るに落ちたものの、火の気なし。

人間の住む状況に非ず^{あら}。

然るに日蓮の気魄は壯絶^{しき}

「開目鈔」「佐渡御書」の著述をしている。

日蓮の配流^{はいりゅう}を知った念仏の信者

阿仏房^{あぶつぼう}彼を訪れ

「法華經で成仏ができて

念仏無間地獄とは何ごとか」

と抜刀して問い詰めたが

説法されて法華宗に帰依した。

さてまた阿仏房遠藤左衛門尉^{さむらいのじやうなめもり}為盛は

承久の乱で順徳上皇の

佐渡配流に供奉^{くが}した武士

上皇崩御^{けうぎ}の後には夫妻とも仏門に入り

真野御陵^{まのりやう}を看守^{かんしゆ}るべく近傍^{きんぱう}に住み

上皇の菩提^{ぼだい}を弔^{とむら}つていたが

法華經に帰依^{きえ}して毎晩交代で

百日間食糧を供して日蓮を助けていた。

日蓮は阿仏房に日得、妻に千日尼^{せんにちあま}の法号を。

*配所＝刑罰として流された所。

*供奉＝天皇などの、供の行列にくわわること。

その間日蓮はその著「開目鈔」の中で
自信に満ちて曰く

「われ日本の柱たらん

我れ日本の眼目たらん

我日本の大船たらん」

佐渡は念仏や禪の盛んなところ

天台、真言、浄土、禪各宗の僧侶たち

動員して日蓮とわたりあつた塚原問答あり

ところが大方日蓮に論破され

改宗する者も出た。

日蓮は三上皇を流罪にした幕府は

下克上なりと断じて悲憤した。

順徳帝の陵前で法華經を誦誦して

回向供養を丁重に行じた。

佐渡の配流生活二年数ヶ月

文永十一年（一二七四）二月

執権北条時宗、日蓮を赦免する。

だが何の赦免か

時宗こそが日蓮に赦を乞うべきところだ。

日蓮は在島中に供養を受けた人々や信徒に

特に阿仏房夫妻には別れを惜しんで涙した。

時宗は礼儀を以て日蓮を遇したが

それでも念仏宗の加賀法印に

祈禱をたのんだ。

そこで日蓮は鎌倉を去った。

ときに五十三歳。

彼の行く先は身延山。

日蓮を迎えたのは山麓の波木井実長。

「今生の世話はこの実長にお委せ下さい」

西谷に草庵が建ち

門弟と信徒の指導に意をそそぐ。

庵室造営工事の間

弘経のため甲斐一円を遊化した。

五月二十八日、日蓮は

日朗と日興を伴れて小室山に着いた。

弟子を伴れた善智法印が

*下克上⇨下位の者が上位の者をおしのけ、權力をふるうこと。

*誦誦⇨声を出して經を讀むこと。誦經。

*赦免⇨罪・過失をゆるすこと。

*弘経⇨經文を世に広めること。

*遊化⇨僧が諸國をめぐり歩き、人を教化し善に導くこと。

法力はうりき比べを申入れた。

この人氣合をこめて

大石を地上一丈余に揚げた。

とその瞬間、日蓮は

その石を空中に止めてしまった。

「あの石を下おちしてみなさい」

と日蓮が言った。

ところが善智法印いくら祈っても

石は空中にあるまま。

そこで日蓮は法華經を唱えた。

すると忽然こつぜん石は落ちた。

その他、色々な奇蹟が日蓮の念力で起き

また彼の眼力がんりき*で邪念は見破られたりした。

日蓮の靈的次元は極めて高度なものである。

日蓮は孝養を充分に果たせなかったと言ひ

身延山けんじに建治二年（一二七六）に

弟子らと初入山をしたが

それ以来この山から東方の空を仰いで

両親と師匠の道善房に回向えこう*して涕淚ているいした。

またそこに杉の若木を植えて

祈念きねん*の徴しるしとした。

身延山で日蓮が高座說法をしていると

美女が時折参席した。

一同は不審に思っていたが

日蓮は既に見抜いて

「本体を現わしなさい」

すると

「私は釈尊の使命を受けて

大法守護のため遣わされた七面天女です。

これから七面山しちめんざんに住んで

お力になりましょう。

一滴の水を授けて下さい」

花瓶かびんの水をそそぐと

その美女は龍となつて

七面山の頂きに向つて飛び去つた。

彼女は八大龍王はちだいりゅうおう*の孫娘の一人と言われた。

*眼力＝物事のよしあしを見ぬく力。がんりよく。

*回向＝仏事を営み、死者を供養すること。

*祈念＝心の中で神仏に祈ること。祈願。

*八大龍王＝『法華經』に説く仏法を守る八種の龍王。

佐渡の阿仏房は日蓮の身延入山を知り

妻の千日尼の励めにより

佐渡から供養品を携えて訪れること三度。

弘安二年（一二七九）七月

阿仏房の子盛綱は父の遺言の如く

父の遺骨箱を首にかけて身延を訪ね

日蓮の身邊の一箇所に埋葬。

日蓮は佐渡の友情を偲び手厚く回向をした。

蒙古軍の襲来

文永十一年（一二七四）に

九州北の玄界灘を渡航中

台風に襲われて蒙古の船群は海に没した。

その後も使者が何回か来たが

幕府は使者を斬った。

その行為は明らかに不当であると

日蓮は厳しく批判した。

弘安四年（一二八二）五月

蒙古の大軍来襲

その報せを受けるや六月中旬

国恩に報ぜんとて

日蓮は国難退散の祈りに入る。

そして月と日を両面にしたため

四方に四大天王、八方に八大龍王を

記した旗曼荼羅を書いた。

この旗曼荼羅を宇都宮貞綱に預け

博多湾に向わせた七月三十日の晩

突如神風が起こり

蒙古の大軍は海に吞まれた。

日蓮が身延に入山したとき作られた草庵は

三間四面の粗庵であつたが

来訪の人次第に増すので

晩秋には十間四面の大坊となつた。

日蓮はこれを久遠寺と名づけた。

*曼陀羅＝密教で、仏の悟りの世界を表現するために、多くの仏や菩薩などを体系的に描いた図。

彼は此處でも広宣流布と

門弟養成に力を灑いだ。

長年に亙る多難と法難、困苦欠乏に

日蓮は闘志と法華經の力で耐えて来たが

弘安四年（一二八二）五月には

重体状況となり

さしもの健体も衰弱甚だしくなった。

弘安五年（一二八二）九月八日

波木井公による栗鹿毛の馬に乗り

警護の者と門弟に護られ

九年間の身延に離別した。

病身を常陸の温泉に養い

池上に九月十八日に着く。

日蓮聖人の波木井公への

絶筆となった手紙のいくだりに

「つけていただいた栗鹿毛の馬は

あまりにいとしく

いつまでも失いたくありません。……

帰るまで同じ馬方をつけて

おきたいと思い、特にこのことを

念のため申し上げます」

強権の徒輩に屈せぬ日蓮は重病身ながら

馬に此のような情けの心をもっていた。

池上家の館で病臥の日蓮は

定命と覚悟する。

十月十日、生き形見として

肉づきの齒二枚を日昭に

「この肉牙は日蓮説法の

功德が具足しています。

この肉牙を私と思つて接してください」

との添状と共に贈った。

日昭は日蓮亡きあとの

後継者と定められていた。

日昭は日蓮より年長者で

無二の援助者であった。

しかも日昭は百三歳の長寿を以て

*広宣流布に広く教えを説いて世にひろめること。

*定命に前世の因縁によつて決まっている寿命。

*功德に善行の結果として受けるよい果報。神仏のめぐみ。慈悲。
*具足に物が十分に備わっていること。

入寂した希代の継承者だ。

池上到着後

少しく体力が回復したので日蓮は

池上家寄進の本門寺の開堂供養を行じ

「立正安国論」の講義を門弟や信徒になし

再び床に臥し、十月八日に

日昭、日朗、日興、日向、日頂、日持の

六人に法華經の布教を命じた。

これが後に六老僧と称せられる

門弟等である。

十月十一日、十三歳の經一磨を

枕元に呼び寄せて、京都布教を命じた。

彼は日朗のもとで行学を学び

永仁二年（一二九四）に上洛

法難を三度受けながら

元亨元年（一二三二）妙顕寺を京都に建立。

後の名を日像。彼は京都から

近畿、四国、九州へと法華經を拡めた。

日蓮は、おのが死に際しては

地震が起きると予言。

病床の限界が迫った。

自筆の曼荼羅を懸けさせ北枕にして横臥

静かな声で法華經を誦誦

それが途切れと共にこと切れた。

時正に弘安五年（一二八二）

十月十三日の朝。

彼の預言の如く突如地震が起きた。

日昭鐘を鳴らして急を告げた。

六十一年の波瀾万丈

不滅の足跡を遺して

茲に南無妙法蓮華經の

大行者は大往生を遂げた。

聖人の遺命の如く

遺骨は身延山の廟所に納められた。

*行学 教えの実践修行をいう。修行と学問。

*遺命 死に際しての言いつけ。死後にのこした命令。

一遍

他力たりのきほんがん本願浄土門しんがらの殿にに

驚くべき人物が現われた。

彼こそは他力あらしりきに非ず自力じりきに非ず

宗教の極致の徴たる存在。

それはどういふ事態ことなのだろう。

四国いよは伊予ごうやくの豪族の生れ

而も栄誉ある武門の出身しか。

だが一族離散のため

父は道仏と号して出家

一遍いつべん十歳のとき母に死に別れ

父の意志で出家、随縁と号し

三年後には九州に度りわた

在太宰府の浄土門人聖達次いで華台けだいに学ぶ。

弘長三年（一二六三）一遍二十五歳のとき

父道仏の寂滅じやくめつにより、故里伊予ふるさとに帰る。

文永八年（一二七二）の春

彼は遙か東方へ旅し信濃の善光寺に参詣さんけい。

参籠さんろうして「二河白道」の図に感得。

踵かかとを返して郷里窪野に幽棲ゆうせいし

この図を牀とこに掲げて祈念思索

いつべん
一二三九、八九年。鎌倉
中期の僧。時宗の開祖。
伊予の人。踊り念仏を説
いて全国を遊行した。遊
行上人。捨聖。

*参詣 神社・寺におま
いりすること。参拜。

*参籠 一定期間、社寺
にこもって祈ること。

*二河白道 水の川と火
の川を貪りと怒りに喰え、
その二河にはさまれた一
筋の白い道を彼岸に至る
往生の信心に喰えたもの。
煩惱にまみれた凡夫も、
釈迦如来の勧めと阿弥陀
仏の招きを信じて念仏一
筋につとめるとき、悟り
の彼岸に至るとする。

更に三年岩窟に籠り

文永十一年（一二七四）

出里して念仏勸化の旅につく。

天王寺、高野詣、熊野に於て

一遍俄然従来の領解瓦解の

衝撃的体験をなす。

そは、念仏勸進の際

相手の「信不信」を問題とするのだが

熊野への途上、一僧に遭つたのでその僧に

「一念の信を起こして、南無を唱え

この札を受け給ふべし」

と、六字名号の札を差し出したところ

この僧は返答して曰く

「今一念の信心起こり侍らず

受くれば妄語なるべし」

一遍はこの言に参り

勧進の主観性にハタと気付き

熊野証誠殿に参籠し

神前冥慮に身をゆだねた。

夢告に曰く

「御房の勧めによりて

衆生往生するに非ず

阿弥陀仏の十劫正覚に

一切衆生の往生は

南無阿弥陀仏と

決定するところ也。

信不信をえらばず

浄不浄をきらわず

その札を配るべし」

一遍はこの夢告により

他力の絶対的徹底を見た。

即ち人の往生は

念仏を信じ唱えることによるに非ず

信も唱も自力介在のもの

往生は此岸の何ものにもよらず

衆生の往生はすでに十劫の昔

*勸化〓仏道修業をすすめること。

*瓦解〓崩壊。

*勸進〓勧め、さそうこと。とくに人々に勧めて仏道に導き、善に向かわること。

*六字名号〓「南無阿弥陀仏」の六字のこと。

*妄語〓うそをつくこと。うそつき。

*冥慮〓測り知り得ぬ神仏のみこころ。

正覚〓正しい仏の悟り。

一切衆生〓この世のすべての生あるもの。

*決定〓決まること。定まること。きっぱり心が決まって動揺しないこと。

また、信じて疑わないこと。*

往生決定〓または「信心決定」の意。往生決定〓極楽往生が決定していること。信心決定〓阿弥陀仏の本願の救いを信じて、一切の疑心がなくなること。

*此岸〓こちら側の岸。迷いの世界。

弥陀正覚しやうがくの瞬間に

南無阿弥陀仏と決定している。

往生の主体は名号みやうごうそのもので

人の側になし。

「信」も「浄」も人間側の条件。

往生の当体とうたいは唯名号ただのみ。

信不信、浄不浄、人智、人力の

介在かいざいの余地なし。

これが一遍の悟入させられた

絶対他力本願であつた。

法然も親鸞も往生を

まだ念仏の功德くどくに関わらしめていた。

たましひの救済を弥陀への

「信」を基軸きじくとしていた。

これと思うと

キリスト教界に於ても未だに殆どほとん

キリストの十字架の贖罪への

信仰に重みがかかっている。

私が平常、絶信の信と申して

おのれの信仰に絶して

キリストの主体的恵信に圧倒されよ

それだけだ、と告白していることが

一遍と符合ふごう！ 快なる哉！

されば一遍は言つた

「決定往生の信たらずとて

人ごとに歎くは、謂いれなき事なり

凡夫はんぷの心には決定なし

決定は名号なり……

往生は心品しんぽんによらず

名号によりて往生するなり」

一遍は被救済者の念仏の

「信」をも否定し去る。

それゆえ、いかなる民衆も救済可能。

本願の力は万人救済の力であるのだ。

一遍は

「六字名号一遍法いっぺんぽう

* 当体とうたいは其のものの自体、その本体。そのもの自身。

* 決定往生はかならず往生すること。往生が決まること。

* 凡夫はんぷは凡庸、煩惱に汚され、迷っている愚かな者。凡人。

* 心品しんぽんは心のはたらき。心のはからい。

* 一遍は其のものの一つだけですべてであること。すべてをその一つに収めていること。

十界依正一遍体
じゅうかい いせい いっぽうたい

万行離念一遍証
まんぎょう りねん いっぽうしやう

人中上々妙好華
にんちゅう じやうじやう せうこうけ

如此一頌に新機軸を成した。
かくのこごとく

一遍は断言する

「名号の外は皆幻化の法なるべし

一切頼むべからず

一切真実といふは南無阿弥陀仏なり」

「よろづ生きとし生けるもの

山河草木、吹く風、たつ浪の音までも

念仏ならずといふことなし」

それゆえ森羅万象 悉く
しんらかうぶつ ことごとく

六字の名号に包摂される。

聖書の詩篇第十九篇の

「諸々の天は神の栄光を現はし
もろもろ おおぜい

穹蒼はそのみ手のわざを示す。

この日言をかの日に伝へ
ことば

この夜知識をかの夜におくる。

語らず言はず

その声聞こえざるに

その響きは全地に遍く
あまね

その言は地の極にまで及ぶ」
はて

これと一遍の悟道とは相照応する。
ごどう

即ち我執を捨て
がしやく

信を捨てた無我無心の念仏道。

だがこの捨てることが能動でなく

本願力の受動である。

あるがままであることが

棄てられたおのれである。

それはどこまでも本願力による。

「名号に心を入れるとも

心に名号を入れるべからず」
しやうみまう

「念々の称名は念仏が念仏を申すなり」
しやうみまう

こちら側の一切を棄ててかかる一遍は

僧を棄て、恩愛を棄て

心を棄て、住む庵をも棄て
いおり

*十界依正 過去の業因
によって受けた地獄などの
十の国土とそこに生まれ
た人。依正 依正 二報
の略。依報と正報。生を
うけたものが、まさしく
過去の業の報いとして得
た身体そのものを正報と
いい、その身のより所で
ある一切の環境を依報と
いう。

*離念 一切の想念を離
れること。妄念を離れる
こと。

*妙好華 白蓮華。念仏
者に喻える。

ひたすら独一なる名号に捧げつくした。

かくて生涯を「捨聖」として

念仏勸化の廻国の旅人となる。

「遊行の捨聖」という名称

はこの相からおのずから生じた。

一遍は武門の出であるので

諸々の危機も何かはである。

遊行中に三百名に垂んとする

僧尼が同行したとは。

弘安二年（一二七八）の春

一行は京都に入る。

その夏、近江路、木曾路を辿って

信濃の善光寺へ。その途次

歳末の別時念仏を営んでいると

空に紫雲がたなびき、奇瑞が起こった。

爾来、一遍の遊行賦算に奇瑞が必ず起きた。

ある時は花英が降り

ある時は紫雲がたなびく。

弥陀一点張の本願力の

一遍の無実存の実存のため

彼のしと（尿）が霊的な妙薬で

これを飲む病者は皆癒されたという。

いろいろな摩訶不思議が起きるので

一遍に訊くと

「華の事は華に問へ」

紫雲のことは紫雲に問へ

一遍知らず」

これが無我の一遍の真骨頂だ、真髓だ。

往生の当体は人に非ず名号に在り

名号は機（人）と法（弥陀）の

未分不二の境涯、それゆえ

念仏三昧は弥陀と人とが一如、一体。

人はもはや人間に非ず

三昧とは見仏させられている相

念仏三昧に浸り

名号に入心させられた人は

*遊行||僧が衆生教化や修業のために諸国をめぐり歩くこと。

*紫雲||紫色の雲。よい

ことの予兆としての瑞雲。仏が来迎するときに乗ってくるという、めでたい雲。

*奇瑞||めでたいことの前兆。

*賦算||時宗で行う念仏布教のための独自の方法「おたぐばり」ともいう。

その念仏札には「南無阿彌陀仏決定往生六十万人」と記されたもの。

*不二||対立を越えた絶対平等をいう。同じ一つのものであること。同一。

*念仏三昧||念仏をただ専ら唱え、一心不乱に称名念仏すること。

*三昧||雑念を離れて心が一つの対象に集中し、散乱しない状態をいう。

この状態に入るとき、正しい智慧が起り、対象が正しくとらえられるとする。

すでに弥陀正覺の位置にあり
生きたままの弥陀化である。

福音の世界で言うところ

キリストに祈入して

十字架され聖霊を体受して

「我れもはや生くるに非ず

キリストわが中に生き給うなり」*

である。

そこからキリストの愛と生命があふれて

信行の伝道と按手あんしゅで人を助ける力が湧く。

一遍は弥陀と人との未分の

天地根命の世界に帰命きみょうさせ

仏と人をつつになし

「念仏が念仏を申す」称名により

仏も人も名号の中に摂受しやくじゆされ

統一不二となる。

かくて人は弥陀と化る。

これが一遍の時宗の本質。

没我ぼつがのこの法悦ほうえつを以て一遍は遊行ぎやうぎやうした。

到る処ところで信徒が法悦のため踊り出し

念仏踊が始まった。

一遍は弘安三年（一二八〇）

信濃から碓井うすいをくだり

白河しろかわの関を越えて陸奥みちのくを遊行した。

松島、平泉、常陸、武蔵石浜を経て

弘安五年（一二八二）

鎌倉を避けて片瀬に留まること数ヶ月。

東海道を遊行し

弘安七年（一二八四）の春

四条京極きやうごくの釈迦堂に入る。

一遍は「僧衆」と「尼衆」の

二冊の過去帳を作った。

一遍は空也上人くわやの遺跡市屋いちのやに道場を建てた。

一遍は過世とんせいの始めから

「空也はわが先達せんたつなり」と言っていた。

弘安七年（一二八四）から

*見仏けんぶつの姿、その光明、その浄土の莊嚴のさまをまのあたりに見ること。一遍では、名号が見仏といわれる。名号を称えること。

*「我れもはや生くるに非ず」
「我キリストと偕に十字架せられたり。最早われ生くるにあらず、キリスト我が内にありて生き給うなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給ひし神の子を信するに由りて生くるなり」
*婦命ふみことの身を捧げて心からのまことを表すこと
一切をなげうって仏の救いをたのむこと。真宗では、阿弥陀仏がたてた本願の救いを信じて一切をまかせ、極楽浄土にやつてこいという命令と解する。
*摂受しやくじゆを受けいれること。仏道を成就させる方法として、寛大な心で、他を受け入れること。

山陰特に山陽を遊行し

翌八年（一二八五）には讃岐さぬきに入り

善通寺、曼陀羅寺巡礼

阿波あわから淡路島に渡ったが

多年の大遊行で身体を用いつくし

今生の終り近きを予見し

兵庫和田岬の観音堂に入る。

所持の聖教の一部を書写山に奉納

残部を

「二代聖教皆つきて

南無阿弥陀仏となりはてぬ」

と言ひ、自ら焼き捨てた。

かくて事畢おわれりとなし

八月二十八日、不帰の客となった。

時に地上の生涯五十一年

日本中を遊行した文字通りの

捨聖すてひじりであつた。

一遍こそは本願道の大成者

最終最大の僧である。

但しその真価が

一般に知られないのは当然だ。

彼は寺も建てず

文字通り捨身で歩いていたから。

結果も効果も何も求めない

遊行聖ひじりの真すがたの相は

天の法界に燦然と輝いているだろう。

否！ それすらも棄てて

道ばたの石か草の中に

一遍すがたの相が隠れているだろう

天界に於ても地界に於ても。

*通世Ⅱ世間を避けて仏門に入ること。中世、寺院での榮達を避けて、ひとり、いおりに住むこと。
*先達Ⅱせんだち。修行・学問などで、その道の先輩。

一休

一休は応永元年（一二三九）の元旦に

人皇第百代、北朝の後小松天皇が

南朝奉仕の藤原氏の娘伊予の局を寵愛して

生れた児であるが、母は宮中を追われて

洛西嵯峨の民家に住まった。

即ち一休は天皇の落胤というわけだ。

幼名は千菊丸と名づけられた。

乳母玉江は色が黒かったので

幼児千菊丸は玉江を「おくろ」と呼んだ。

六歳のとき雪の銀世界を見て

「降る雪が白粉なれば手にためて

おくろの顔にぬりたくぞ思う」

と詠んだ由。

一休が敏感な頭脳で

頓智縦横無尽であったことは

世に知られたものだが、それというのも

母伊予の局が優逸な

女性であったにちがいない。

優れた人物の母親はまず例外なしに

優れた資質の女性である。

いつきゆう
一三九四—一四八一年。

室町中期の臨濟宗の僧。
後小松天皇の子。当時の
墮落した禪宗界を鋭く風
刺した。奇行に富み多く
の逸話で知られる。

*頓智＝即座の智慧。機
転。

*優逸＝他より特にすぐ
れていること。

當時は一応禪宗が盛んであった。

足利尊氏は天龍寺を建てて

夢窓国師を迎える。

直義は諸国に安国寺を建てる。

母は六歳の千菊丸の手を引いて

安国寺の門を叩いた

おのが身柄の自覚から。

一休はかくて幼児ながら

禪門修業と相成った。

母も若き一休の在り方により

禪即ち仏心宗に没入。

母は多分五十歳前後に遺言して曰く

「我今娑婆の縁つき

無為の都におもむき候。

御身よき出家に成り玉ひ

仏性の見をみかき……

我ら地獄に落ちるか落ちざるか

不断に添うか添はざるかを見玉うべし。

釈迦達磨を奴となし玉ふ程の

人になり玉ひ候はば

俗にても苦しからず候。

仏四十余年説法し玉ひ

ついに一字不説とのたまひし上は

我と見我と悟るがかんやうに候。

何事も莫妄想。あなかしこ。

五月中旬

千菊丸殿へ

不生不死身」

釈迦や達磨と禪的に

一如となつてゐる心境の

この母ありてこその一休と想わせられる。

生涯の浮沈がどうであろうと

現世を終るときに浄土、天国に

おのずから迎え入れられる在り方こそ

人生のドラマの美しさかなと沁み沁み想う。

十八歳にして一休は既に

*娑婆にさまよふ煩悩から離脱できない衆生が、苦しみに堪えて生きているところ。

*無為の都に極楽浄土。または悟りの世界。

*仏性。仏の性質。仏としての本性。

*奴にしもべ、召使。

*一字不説。仏の悟りの内容はことばや文字では表せないほど深いものであるから、釈迦は仏の悟りについて一字も説いてないということ。禪宗では、これによってただ実践修行するほかはないとする。

禪道の權威を身につけていた。

例えば時の將軍足利義持よしもちが弊風へいふう打開のため心を宗教に寄せて

一休の草庵を抜打ぬきうち的に訪ねた。

義持よしもちが砌下なみり（上り口の階段下）に

立っていると

一休は將軍より高い所に立つて

帷子かたびらを以て出迎えた。

將軍の部下が「無礼者」と叱って

自分が取ろうとした。

一休は、おまえに渡せるかとばかり拒んだ。

宗教を身につけた十八歳の一休の權威は

何者も恐れない。

現世の權勢が何だ、財力が何だ

そういう無的な魂でなければ

誠の宗教人ではないのだ。

二十歳の頃から

一休は詩人たるの面も顕あらわれてきた。

洒脱しゃだつにしてしかも滑稽こっけいの妙味あり

ひとに親しまれるのも

たくまざる自然さのゆえである。

さて一休の生涯八十八年の

所謂修業時代いわゆるレールヤールは十七歳頃まで

あとの大半の生涯は

正に遍歴時代ワンデルヤールということになる。

我々はこの遍歴時代の一休を

確しかと見ることにしよう。

「或る時は孤峰頂上に立つて

雲霄うんしやうを望み

或る時は十字街頭に出でて

和泥わでい合水がつすいす」

この禪宗の言を体現する一休である。

彼が尊敬していた華叟かそう禪師の許もとを辞じして

彼独自の道を遊歩ゆうぽしだしたのは二十八歳。

それは周知の如く

*砌＝軒下・階下などの石畳。

*帷子＝掛物。

*洒脱＝さっぱりして俗氣がないさま。あかぬけ。

*雲霄＝そら

*和泥合水＝泥にまみれ、水にぬれるように、わが身を忘れて慈悲心をもつて教え導くこと。

滋賀の湖面に小波かそけき

闇の夜に鴉からすの一声を耳にして

忽然大悟だいごしたによる。

その後師匠のたれ流しの世話を一休は

手指を以て始末するのであった。

この解け込んだ人間愛に

禅僧一休の相すがたがあつた。

大悟したとて

それで安堵あんどの腰を卸おろす一休ではない。

悟りたればこそ悟後の精進しやうじんは更に厳しく

禅宗の祖師そしたちの語録等の研究に入る。

特に支那の虚堂きどうと日本の大応だいおう、大灯だいとうの

三師さんしから深甚なる影響に浴した。

当時の禅僧、墮落の徴あり

そんな者らの相手にならず

彼は一所不住いっしょむぢゆう、広く民衆にも接し

人間性の幅を拡めた。

往くとして可ならざるなし

皇族あり、武人あり

町民あり、農家あり

平和あり、戦乱あり

栄華と困窮こんきやうの社会矛盾あり

暗黒と光明の交錯あり

一休はこれらに処して自由、自在、自主。

優れた才智芸術能力のゆえに

おのずから弟子があつまる。

弟子の中には優れた者すぐからず

彼自身新鮮な刺激を受ける。

かくて彼の後半生は光彩陸離こうさいりくり。

かくて一休は初祖達磨だるまより

かがなべて第三十三代の法孫。

禅宗の流れは五家七流ごかしちりゅうと言われる。

五家とは瀟仰しょうよう、臨濟りんじ、曹洞そうとう

雲門うんもん、法眼ほうげんの五宗

七流とはこの五宗に

黄龍わうりゅうと楊岐ようぎの二宗を加えた名称。

*大悟||迷妄を脱却して
悟りの境界を得ること。

*一所不住||きまつた住
所をもたないこと。一ヶ
所に住みつかず、あちこ
ち修行して歩くこと。

*光彩陸離||まばゆいほ
どひときわ美しいさま。

*五家七流||五家七宗。
中国禅宗の代表的な七つ
の宗派の総称。

わが国では臨済、曹洞、黄檗の三宗。
一休は臨済宗の楊岐派に属していた。

さて一休が敬仰していた

虚堂和尚というのは

一一八五年から一二六九年の

生涯を送った中国の禅僧で

智愚禅師と称し

日本の大応国師は入宋してこの僧に

指導をうけた。

一休は自分をこの虚堂七世の孫と称す。

虚堂は、当時仏教の衰頹甚だしく

仏祖の恵命懸系の如きを歎じ

世の因習に拘われないで

超然自ら規矩準繩を定め

幾多の嶮路難関を踏破して

当時の禅道を刷新した人。

わが国の臨済宗は

この大応国師の法系
一休も沢庵も白隠も
挙つて国師の法孫である。

国師は帰国後「妙勝寺」を建てたが

戦禍のため荒廃した。

一休はこれを復興し

その側に「酬恩庵」を立てて晩年を送る。

今日通称一休寺とはこれである。

さて一休は大悟の直後

師匠華叟が印書を授けんとした時

これを投げ捨てた。

師匠はその粗暴を咎めずして

これを拾いあげ

京の宗橋夫人を訪ね、自分の没後

これを一休に渡してくれとたのむ。

橋夫人は一休と同門の弟子であった。

師華叟は一休の人材を評価し、鍾愛し

*規矩準繩 物事の基準となるべき法則。

*印書 印可証。印可状。弟子が悟りを開いたことを師僧が証明して認可する証明書。

*鍾愛 非常にかわいがること。

禪道のあとを彼に囑望^{しよくぼう}していた。

一休は後に人手からこの印書を渡された。

師の添書^{てんしよ}を読んで

師の温情に改めて感涙。

あの時の御無礼お許し下さいと

心の中で詫^わびた。

情は情、しかし印書は今や却て

禪道を亡はず手段に陥^{おちい}つているとなし

禅界革新の任務は我に在りと

彼は涙を吞んで

その印書を裂いて炉に投じた。

添書にはこのような句があった

「汝は我が一子也……」

正法若し地に堕^おちなば

汝出世^{きた}し来^{これ}つて之を扶起^{ふき}せよ……」

護法の大任を托された師の信愛は

一休の胸に迫った。

彼は「自賛」と題して

次の如き漢詩をものした。

「華叟子孫不知禪

狂雲面前誰說禪

三十年來肩重

一人荷担松源禪」

（華叟の子孫、禪を知らず

狂雲（一休）の面前、誰か禪を説く。

三十年來、肩重し

一人荷担す、松源の禪）

臨濟、楊岐、松源、虚堂

大応、大灯、徹翁、華叟

このように伝承され来つた松源の禪を

今や一休独りで担^{にな}うことになった

まことにその任や重し。

だが彼の後半生は閑雲野鶴^{かんうんやかく}が

天空をゆくが如く放曠^{ほうくわう}漫遊^{まんゆう}＊

貴顕^{きけん}＊を避け、大伽藍^{がらん}を素通りし

権勢無視、一蓑一笠の行脚僧^{いっさいちりゆうあんさや}だ。

＊扶起＝抱き起こすこと。

＊閑雲野鶴＝のんびりと
していられる境遇。

＊放曠＝きままで物事に
こだわらない。

＊漫遊＝当てもなく諸方
を遊び回ること。

＊貴顕＝身分が高く、名
を広く知られている人。

ところが一休の存在は重いので

八十一歳のとき勅請によつて

大徳寺の住持となり

賀客の祝辞を受けたときも

「大灯の門弟、残灯を滅す

解け難き吟懐、一夜の水

五十年來、蓑笠の客

愧慚す今日、紫衣の僧」

かく吟じて自分の本質本相は

一蓑一笠の一寒僧で

淡如たる在り方こそ一休であるとの告白

紫衣など是有りがた迷惑だというわけだ。

東西の宗教法事を見るに

法冠法衣金襴緞子の絢爛たるが

立派でありがたいと一般者は感じている。

そんな外見は虚しいとなし

素朴な相で

たましひをこめた遣り方が本当だ。

筆者もそれを貫いて七十年に垂んとす。

一休の足跡を辿ることはやめとする。

彼の巡錫は京を中心に

江州、和泉、大和、摂津、伊勢あたりまで

正に無一物、行雲流水の旅で

庶民と交り禪を談笑の中に語る。

四十五歳のとき

京の銅駝坊北（今の二条通りのあたり）の

小廬を住所としたが、荒屋同然だ。

雨は飲水、星々は無言の相手

禅席も多勢は御免

熱意ある少数者を相手とした。

四十九歳の時閑静の地讓羽山に入る。

その後転々と住所を変えた。

草庵を泉州石津に結んでいた

一路居士を訪ね、一休卒然として

「万法道有り、如何なるか是一路」

*住持しゅうし寺の主の僧。住職。

*賀客がかく祝いのために来る客。

*愧慚くわいさん心から恥ずかしく思うこと。

*淡如たんじょあつさりしたさま。

*紫衣むらさきぎ紫色の袈裟。

*絢爛けんらんきらびやかに美しいさま。

*巡錫じゆんせき僧が諸国を回つて布教すること。

*江州かうしゅう近江国（おうみのくに）。現在の滋賀県。

*和泉わいせん和泉国。現在の大阪府南西部。

*大和たいわ大和国。現在の奈良県。

*摂津せつしん摂津国。現在の大阪府北部と兵庫県南東部。

*伊勢いせ伊勢国。現在の三重県の大部分。

*無一物むいつぶつなに一つ持っていないこと。

*行雲流水ぎんうんりゅうすいあちこち転々すること。

*小廬せうりふ小さいそまつな住まい。

*卒然そつぜん突然として。だしぬけに。

と問うた。

一路応えて曰く

「万事休すべし、如何なるか是れ一休」

正に禪問答だ。

両者はたのしく道交を深めた。

この一路居士の歌

「身を隠すいほりの軒の朽ちぬれば
生きても苔の下にこそ住め」

彼は草庵の側に藁作りの物入れ器をつるし

道ゆく人の志を受け

手取鍋に粥を煮て露命をつなぐのだった。

悪童がこれに馬の沓を入れたので

ひとがものを入れようがない。

一路は

「わが糧すでに尽き果てぬ」

と言ひ、断食して入寂した。

徹底的な無の道だ。

この庵の跡に寺が建ち

一路山禪寺と号せらる。

とて一休は文明六年八十一歳のとき

勅旨によつて大徳寺の住持にされる

迷惑千万のことだがやむなく受けた。

僧衣最高の紫の袈裟などは

およそ一休の本質に合わぬ。

一休の俗伝には

洒脱滑稽の逸話がたくさんあるが

一休の正伝には彼の洞察力、批判精神

反抗、改革、創造力の烈々たるを見る。

足利幕府の暗黒政治下の賈坊主どもに對し

一休が敢然戦つた相は闇を貫く靈光である。

そのかみ、行基菩薩は

當時の上流社会の仏教

即ち奈良仏教の無力墮落を慨嘆して

一蓑一笠の托鉢民間伝道に乗り出した。

一休も正にその如く

一休も正にその如く

一休も正にその如く

*勅旨＝天子の意思。

*托鉢＝出家が鉢を持つて食のほどこしを受けること。禪宗ではとくに厳重な規律を定め修行の一環とするが、諸宗でも広く行つ。僧尼が鉢を持つて経文を唱えながら、各戸をまわり米や錢などの施与を鉢に受ける。

法盗人^{ぬすびと}、狐つきの当時の仏教とは無縁。彼は八十八歳になつても

なお伝道をやめることがなかつた。

文明十三年（一四八一）、十一月二十一日

酬恩庵で八十八歳を以て入寂^{にゅうじやく}した。

一休禪の真相

「釈迦といふいたずら者が世に出でて

多くの人を迷はするかな」

一休でなければ言えない妙句。

宇宙の根本實在と完全に不離一体となる

そこに禪道の徹底的なつきぬけがある。

無に徹する禪道無

釈迦に南無^{なむ}する要はない

釈迦の言や歴代師祖の語録に

振り廻^{まわ}されて何になる。

禪は超智、絶言であるから

説明できる世界ではない。

禪は智的作用を絶し

自己自身を無き者として参究^{さんくう}する。

一切勦絶^{しつせつ}、即ち何もかも切り捨てる。

禪道無は厳しい境地だから

野狐禪^{やこぜん}、相似禪^{そどうじ}にまどうな。

「大方の世捨人には心せよ

僧衣を着ても狐なりけり」

とは大綱和尚の歌の由。

日常生活そのものが坐禪であるべし

即ち無が有を動かしている力ある無だ。

「無というも可惜^{あたら}心の迷^{まよひ}かな

無とも思はぬ時ぞ無となる」

無一物無尽蔵と謂^いわれる如く

無即無限無量なのである。

「つくり置く罪の須弥^{しゆみ}はどこあるならば

閻魔^{えんま}の帳につけどころなし」

善悪を気にするな、あるがままで往け

といった心根であらう。

*参究^{さんくう} 参禪して真理を探究すること。

*勦絶^{しつせつ} 絶つ。絶やす。滅ぼす。

*野狐禪 禪の奥義をきわめてもないのに、自分では悟ったとうぬぼれること。

*相似^{そどうじ} 似ていること。似ているがほんとうのものではないこと。にせもの。

*須弥 須弥山（しゆみせん）。仏教の世界観で、世界の中心にそびえるという高山。

*閻魔 死者の靈魂を支配し、生前の行いを審判して、賞罰を与えるという地獄の王。

一休は自らを狂雲と号した。

その『狂雲集』の一句は

「狂雲誰か識る、狂風に属するを

朝には山中に在り、暮には市中

我若し機に当って棒喝を行ぜば

徳山、臨済、面紅を通ぜん」

この徳山と臨済の両禪師はいずれも大猛者

徳山の棒、臨済の喝の前には

修行中の僧たちは震えあがり

身の毛がよだつほどであった。

この両猛者も一休の前には

乙女のように顔を赤らめるぞ

一休の禪はほのかに煙する

沈黙の火山の如しで

一度爆発すれば天地鳴動するぞ

といった意気込みである。

禅道の出発且つ目的は

「衆生本来仏なり」で

直指人心、見性成仏だが

それには無（我）に徹しなければならぬ。

浄土宗、真宗はその不可能を自覚して

本願道を啓いた。

一休は当時の禅宗の腐敗堕落を

嘆き怒って孤影力戦。

彼はよくぞ禅道を本来の相に於て体现した。

*直指人心、見性成仏
教文などによらないで、
坐禅によって心の本性を
見きわめ、人の心と仏と
は本来同一であることを
悟って成道すること。

良寛

良寛は宝暦八年（一七五八）十二月

日本海沿岸佐渡ヶ島を

海のかなたに望む出雲崎の

名主橋屋山本伊織の長男として生れた。

母は佐渡相川の出身、父も母も両養子。

父伊織は芭蕉の流れの俳人

俳号は以南、経世の才に乏しく

橋屋は衰退の兆候瞭然。

良寛の名は栄蔵

十一、二歳の頃から

漢学を大森子陽という儒者に学んだ。

十六歳のとき元服して文孝と名のり

名主の見習を始めたが、性に合わず

十八歳のとき曹洞宗光照寺に入り

玄乗破了和尚について得度を受け

良寛と称し、大愚と号した。

二十二歳のとき

北陸巡錫の名僧大忍国仙に出会い

彼に従いて信濃路を歩き善光寺に詣でた。

大忍禪師に勧められて

りようかん

一七五七／八—一八三一年。江戸後期の禪僧・歌人。号は大愚。越後の人。出家して諸国行脚ののち、郷里に住み托鉢生活を続けた。万葉調の和歌や、禪によって到達した気品の高い漢詩・書を残す。

*経世Ⅱ世をおさめること。政治。

*瞭然Ⅱ明らかで、疑いのないさま。歴然。

*巡錫Ⅱ僧が各地をめぐって教えを広めること。

遙か西方備中（岡山県）玉島の
円通寺に赴き弟子入りして
禪の修行に就く。

長男たる彼の弟妹らも宗教性強く

三男の宥澄は真言僧

次女むら子は法華宗に帰依

三女みか子は真宗の妙現尼

次男由之が良寛の代りに橘屋を継いだ
後に庵居生活に入る。

さて良寛は天賦の才能豊かで

多読且つ身読

愛情は太陽の如く

誰にでも遍ねしというもの。

人間性豊かな彼は

若き日には脱線なきに非ずだ。

それは西のアウトグステイヌスも

フランチェスコも同然だ。

はなしは遡るが

曹洞宗は江戸時代に入つて

隠元らの明代の禪宗と関わりをもち

加賀に月舟宗胡出で

宗統復古運動起こり

道元への復帰の趨勢が高揚し始めた。

この月舟の許で

円山と並び称された徳翁良高があり

その門統から高外全国出で

良寛の師大忍国仙

はこの高外の高弟。

良寛はこの大忍和尚から

高潔にして端嚴な禪風を体受し

十余年に互る指導を受けた。

大忍和尚のもとには

多くの弟子がいたが

その中の仙桂という者

默然として坐禅せず経も読まず

*趨勢||世の中のみなりゆき、時勢。

*端嚴||正しくおこそかなこと。

菜園を耕すことに専念。

良寛はその相こそすがた

禪の体現、一典型と視

無言の中に禪道を学ぶ。

後年、「ああかの仙桂和尚こそは

真の道者であつた」と絶賛。

良寛は一般の寺院仏教界の状況の

偽善、皮相、腐敗を見て

教団組織や階級制度に束縛されると

信仰道が枯死することを確かと認識

我はわが道を独往せんと心魂に感入。

これは東西古今

信仰道の生死に関わる現象だ。

改革者は皆、それらの埒外に出た。

パウロ、ルター、清教徒

アッシジのフランチェスコ等々

わが国では内村鑑三、手島郁郎

言うをゆるされるなら筆者。

しかし埒内にいながら

埒を越えている人物に賀川豊彦あり。

人間存在は皆相対的であるから

埒の有無を問題とせず

根源的自由に生きているか否かだけが

本当の問題だ。

埒なきに執すれば

それはまた見えざる埒を

作っていることになる。

良寛はおのが禪道を深めんために

諸方の禪林に名僧知識を訪ねる

乞食行脚の旅にのぼる。

即ち行雲流水の如き

無心托鉢の旅である。

人間的思惟の旅でないから

どこをどう歩いたかは不明

神仏のみぞ知る見えざる

無案内の案内による。

*独往||ひとりで行くこと。自主的に進むこと。

*埒||かこい。低いかさね。

*知識||知人・朋友。善知識の略で仏法を説いて、人々を救済し教え導く高僧・師の意。

*乞食||仏道修行のため僧が人家を訪れて、鉢をささげ、食物などの供養を求めて歩くこと。托鉢。

*無心||とらわれのない心。一切の妄念から解放された心。

寛政七年（一七九五）京都の

勤王の志士と交っていた父の以南は

皇室の式微しきびを嘆じて「天真録てんしんろく」を書き

悲憤のあまり洛西の桂川かつらに投身

一命を悲願とした。

これを耳にして京都で法要をなし

高野山で父の冥福めいふくを祈った。

同年三十八歳の良寛は

十七年ぶりに風の如く越後に帰った。

爾来数年、出雲崎を中心に

中山の草庵、国上山くがみの五合庵ごごうあん

（これは筆者も親しく合掌して見た）

寺泊の密蔵院等転々と移り歩いて

一所不住の乞食漂泊ひきしょくひょうぱく。

かくて五合庵に定住するようになる。

時に良寛四十七歳。

それは文化元年（一八〇四）のこと

筆者の誕生百年前だ。

この五合庵に十余年住まっていたが

行脚あんきやして日没に帰庵すると炉辺に独座

雨天には庵に籠いおりつて

歌を詠えいじ詩を賦ふするのであった。

良寛の魂は自然と一如、村童を友とした。

年齢に関わりなく

相手が童わらべなら自分も童心となり

相手が老人なら

自分も老人となる心境自在。

人であれ、木の葉であれ

動物であれ、融け合える人だ。

山川草木悉く仏性ありというが

良寛は仏心そのものだから

そのように自在だ。

万物万人を愛し、愛されている

西のアッシジのフランチエスコと

照応する心の人だ。

とある家の女中およしさんと

*式微Ⅱ王室が非常にお
とろえること。

仲よしになつたり

出雲崎の遊女とおはじきをしたり

美醜、善悪、真偽の相對判斷を超越。

一切を包むのが絶対界的現實なのである。

それは大氣が万象を包み

万象に接觸しているのと同然。

これを絶対次元と称わん哉

三世三界を呑んでゐる

永遠の現實なのだ。

無即無限無量なのである。

無量の愛であり慈悲である。

良寛も人間だから心の小波も立つ。

禪的な無は

悟り澄ましたものではないはずだ。

慈愛の本質は一つだが

表現面は相手によって

靈妙な変化をする。

しかし、良寛自身は

そんなことを意識していない。

すべてが本然自然であつたに相違ない。

一般常識の耳や目には

いろいろに映つたろう。

しかし、ひとの毀譽褒貶などは

馬耳東風だ。

彼の禪道無を土台とした

靈然たる在り方には

おのずから敬愛の念を

覚えさせたに相違ない。

彼は禪僧だが

説法やお経の解釈などは全くしない。

ひとはよく平常心というが

私は本然心と申したい。

そは本然の次元は

所謂平常ではないからである。

表現面では同様に見えても

次元が異うのである。

*三世Ⅱ過去・現在・未來。前世・現世・來世。
*三界Ⅱ生死流轉する迷いの世界。欲界・色界・無色界。

*本然Ⅱ本來、身に具わつてゐること。また、本來のままにあること。

*自然Ⅱすこしも人為の加わらないこと。天然のままであること。おのずからそうであること。本來そうであること。仏教そのものの真理を表す言葉として用ゐられる。
*毀譽褒貶Ⅱそしりけなし又ははめること。

無を根源現実としてゐる無者は

その愛に力がある。

その愛に接すると

相手はふしぎな力を

生命を知らずに受ける。

ある人が良寛の風貌をこう言つた

「師、神氣内に充ちて秀発す。

其の形容神仙の如し。

長大にして清癯*

隆準にして鳳眼*

温良にして嚴正

一点香火の氣なし」

一点香火の氣なしとは僧だが

抹香臭くないこと。

宗教が鼻に寸毫もかかつていない。

本當の宗教人はそうだ

親鸞もその通りだったという。

「喜怒哀色をなさず

疾言するを聞かず

その飲食起居舒にして

愚なるが如し」

こんな言もよく良寛を語っている。

彼は家具らしきものなく

一つの鉢で何でも。

文化十三年（一八一六）

良寛は五合庵を跡にして

国上山の麓の乙子神社境内の

草庵に移つて十余年。

文政九年（一八二七）

六十九歳になると托鉢に堪えられなくなり

島崎の能登屋木村元右衛門の

屋敷内の庵室に移つた。

かの貞心尼という若い尼僧が

良寛の高風を慕つて

彼の許をしばしば訪ねるようになり

和歌のとり交わしを師弟愛を以て始めた。

*神仙 道教で、神秘的な力を身につけた仙人。

不老長寿を求め、深山に隠れて修行した。

*清癯 きれいさやかにやせていること。

*隆準 高い鼻ばしら。

*鳳眼 貴相をいう。

*疾言 口はやくち。早口にいうこと。

*舒 ゆっくりしているさま。

それを後年貞心尼が

『蓮の露』と題した歌集となした。

良寛は生来愛の深い人だから

貞心尼で愛の花が咲いたわけだ。

かくて天保二年（一八三一）正月六日

貞心尼や元右衛門らにみとられつつ

良寛は帰らぬ旅についた。

時に七十四歳。

彼は遺言で、自分の墓碑は母の故里なる

佐渡ヶ島に向けて建ててくれと。

良寛は歌人であり詩人（漢詩）であつた。

その歌集、詩集から左に掲げて見よう。

冬ごもり 春さり来れば

飯乞ふと 草の庵を

立ち出でて 里にい行けば

たまほこの 道のちまたに

子どもらに 今を春べと

手毬つく ひふみよいむな

汝がつけば 吾はうたひ

吾がつけば 汝はうたひ

つきて唄ひて 霞立つ

永き春日を 暮らしつるかも

子どもらと手まりつきつつこの里に

あそぶ春日は暮れずともよし

昼出城市行乞食

夜帰唄下坐安禪

蕭然一衲与一鉢

西天風流実可憐

（昼は城市に出でて行き食を乞い

夜は唄下に帰り坐して禪に安んず

蕭然たり一衲と一鉢と

西天の風流実可憐むべし）

*別の引用に

「この里に手まりつきつ

つ子どもらとあそぶ春日は暮れずともよし」とある。

*蕭然ほそい竹。しのだけ。ふえ。

*衲は古衣をつづつた袈裟。

*西天は西の空。西のほうの天然。すなわち、インドのこと。

時流に超然たる良寛は

その歌もその詩も彼らしき

風格歴然、風韻独特。

勿論「万葉」「古今」「西行」等の

古典を学び

西は唐、宋の古典、わけても陶淵明

寒山の詩風を愛した由。

五合庵で暮していたときの句だろう

盗人の残しおきたる窓の月*

良寛はまことに無即無限無量の

人格であつた、才幹であつた。

ひとを一人一人愛し

ひとに夫れ夫れ愛された。

万象を愛を以て見聞し

万象に融合していた人。

良寛は死の床の枕頭に

たまたま侍していた愛弟子の貞心尼に

謂わば末期の絶句を詠み与えた。

うらを見せおもてを見せてちるもみぢ

表裏あるがままの人間性を肯定した

混然ではなく渾然たる

心境の告白ではないか。

*別の引用に

「盗人にとり残されし窓の月」とある。

*末期＝一生の終わり。最期。臨終。

*渾然＝溶け合つて一体であるさま。

白隠

白隠は貞享二年師走二十五日

駿河の原で生れた。

芭蕉や西鶴、伊藤仁斎や

新井白石もその頃の出。

一六八五年は西欧では

楽聖バッハが生れてゐる。

「駿河には過ぎたるものが二つある。

富士のお山に原の白隠」

これは鑽仰的な言だ。

「白隠」は白雪を着て山膚の見えぬ山

その富士に因んだすばらしい道号である。
僧名は慧鶴、風雅な名ではないか。

白隠の本質はこれらの名号に相應しいか。

父は西伊豆西浦の杉山氏、母は長沢氏

母は優しい慈悲深い人、ある晩のこと

母は伊勢神宮の御幣を手にした白衣の

神人が自宅の屋根の上に立った夢をみた。

正にその夜、白隠をみごもつたと称う。

分娩の夜も同じ夢を見て白隠を生んだ。

乳児は丑年の丑の日の

はくいん
一六八五―一七六八年。
江戸中期の臨済宗の僧。
臨済宗中興の祖、駿河の
人。諸国を遊歴、教化に
つとめ、禪の民衆化に尽
くした。

*師走＝陰曆十二月の異
称。

*鑽仰＝聖人の学徳を尊
ぶこと。

*御幣＝幣束（へいそく）
の敬称。紙または布を串
にとりつけた神祭用具。

丑うしの刻こくに呱呱ここの声をあげた。

幼名わらわなは岩次郎いわじろう、ところが三歳まで立てない。

一心いっしんに立つ努力どりふをしたら

ある日突然立ちあがった。

四歳を迎えたと生来博覽強記性はくらんきやうきせうが現じ

「狭夜さよの中山なかやま」という

村歌三百余言を暗誦あんしやうした。

五歳のとき、海辺で坐し、海のかなたに

浮雲うきぐもが見えつ隠れつする変幻へんげんをながめて

無常むじやうを子供心に感じ、わつと泣き出した。

子守の娘たちが「どうしたのです」と訊く。

彼は哀感を説明はしない、できない。

彼の胸にあるは無常の概念でなく、実感だ。

七歳になると、お寺が慕わしく

出かけてゆく。或る日

『法華経ほけきやう』の「提婆舎だいばしゃ」の講義を聞いて

これを完全に憶えた。

近所の爺さん婆さん達に名講義をした

これを聴いて驚いたり感涙かんだいに咽むせんだり。

休心房きゆしんぼうというふしぎな念仏行者が村に居た。

円成寺に住まうこと百年、山中村に数十年。

尺八を吹くを常とする。源義経よしみつねの臣よしの由。

奥州で仙人に逢つて仙術を会得えとくした。

この変人を白隠の父は尊重して

供養につとめた。

この人、子供白隠の背中を撫でて

「お前は奇骨きこつがある。

必ず世を救う大人物になるぞ。

お釈迦しやくかさまはヒマラヤ山で六年

達磨大師だるまは少林寺で九年。

お前もよく身を護つて修行せよ」

休心房は「地限り場限り」と言つた

一事に念を集中し

その正念を持続するの謂い。

白隠は十一歳のある日、村の昌源教寺で

「摩訶止観まかしかん」の講義を聴き

*丑の刻うしのこく午前二時頃。

*呱呱ここ乳飲み児の泣く声。呱呱の声をあげるここ産声をあげる。生まれる。

*無常むじやう一切万物が生滅

変転して、常住でないこと。

現世におけるすべてのものが速やかに移り変わつて、暫時も同じ状態

にとどまらないこと。特に、生命のはかないこと。

*奇骨きこつ独自のすぐれた性格。

*摩訶止観まかしかん天台宗の観心修業を説く書。

*昌源教寺しやうげんきやうじ近所の爺さん婆さん達に名講義をした

地獄が恐くなる。

蜻蛉を殺したり

蝶々ちょうちょうの羽根をむしったりしたから

自分も地獄に落とされて

苦界から出られない

地獄の釜で煮られたら大変

大声で泣き出した。

母親もほとほと困り、彼をなだめて

西念寺さいねんじの天神さまが救って下さるから

天神様にお祈りしなさい、大丈夫だよ。

そこで白隠はくおんは天満天神参りを始める。

毎朝釣瓶つるべで三杯水をかぶって祈り

天神さまの感応を待つのであった。

翌年十二歳の或る日

天神様の画像の前に香こうを焚たき

「地獄からの救の祈願に

応えて下さるなら

香の煙を真直まつすぐに

天に昇らせて下さい」

こういつて黙禱し

眼を開けたら、煙が真直だった。

ところが風が吹いたら煙は乱れた。

同じく十二歳の時

観世音菩薩に念願せんとて

「普門ふもん品」や「大悲呪だいひしゆ」を毎日読誦した。

どうも靈験れいげんさやかならずで

俗界を離れんと両親に出家を願ったが

両親は許さない。

求道不屈の白隠は柳沢山に

一丈余の大磐石だいばんじやくを見つけた。

その奇怪な石に鎚のみで観音像を彫り

その前に坐禅して

「金剛經」「普門品」「大悲呪」を読誦。

これを朝から夕暮まで幾日も修行した。

或る日帰路で大雨に襲われた。

彼は着物を肩にかけ

*靈験Ⅱ祈願などに対し
て神仏があらわす不思議
なし。神秘的な利益
れいけん。

右手に拔劍をもち

河の流れを巧みに渡った。

その川には怪物が出ると聞いていたから
もしや現われたら

一刀両断せんと思つたわけだ。

十四歳のとき、徳源寺とくげんじの僧に漢文を学ぶ

「句雙紙」という禪林句集を

三ヶ月で暗記した。

後日參禪問答に際し

これらの文句が役立った。

十五歳のとき

両親は出家の願を聞き入れた。

元禄十二年二月二十五日

松蔭寺三世単嶺祖伝を

本師として得度し、慧鶴えかくと命名された。

単嶺は越格の力量の師

白隠をたのしと見た。

白隠は、火も焼く能わず

水も漂わす能わざる肉身とならずんば

死すともやめじ、と誓った。

十六歳の白隠は

「法華經」を借りて読んでみた。

その中の

「唯一乗ゆいいういちじやう、諸法寂滅しよほうじやくめつ」

には感じたが、あとは因縁話や譬喩話で

バカバカしいと感ずる。

そこで禪宗の教外別伝きやうがいべつでんに

喰いつかばやと思う。

息道師そどうしは白隠の意氣に感じて、愛をそそぐ。

十九歳の春

清水町の禪叢寺ぜんそうじの衆寮に入寮する。

修行僧ら文字に拘泥こうでい

白隠は礼拝と読經に精進。

青年白隠は唐の天才的禪僧巖頭全豁がんとうぜんかつが

法難を避けて渡し守をしていたが

盜賊に首を斬られ

*越格こつかく並はずれているさま。

*唯一乗ゆいいういちじやう唯一乗法。
「法華經」一方便品に説く偈のなかの一句。仏の教えはただ一乘眞実の教えだけであるというもの。
「法華經」のみが眞実であることをいう。

*寂滅じやくめつ迷いの世界を離脱している境界。無明・煩惱の境界を離れた悟りの境地。

*教外別伝きやうがいべつでん「不立文字、教外別伝、直指人心、見性成仏」の四句より成る。禪の宗義をあらわす代表的なことば。教説の外に、体験よって別に伝えるものこそ禪の神髓であり、經緯の文字をはなれて、ひたすら坐禅によって釈尊のさとりに直入する意。

あわれな死にざまをしたことを聞き
 仏海の蛟龍すら如此ぶつかいこうりゆう* かくのごとき

況んや我の如き

地獄の苦報免れ難しと身心懊惱おうのう*する。

白隠は棄鉢すてばちとなつて修行をやめ

詩文に耽ふける。

即ち、李杜りど*、韓柳かんりゅう*を繙ひもとき

書道は尊円そんえん、養拙ようせつを学び

更に絵画に彫刻にと漫步する。

二十歳にして

美濃みのの瑞雲寺の馬翁宗竹ばおうそうちくに隨身ずいしん*。

彼は詩文にかけては

天下無双と称いわれている。

時に熊沢蕃山くまざわばんざんの子、穩上座も学んでいたが

白隠は彼と意気投合いし

断金だんきん*の盟いを結んで詩文を攻究する。

ところがある日

虫干しの書物をながめ、お堂で祈った

「儒教、仏教、老莊らうそう*、諸家
 何を以てわが師となさんか
 願わくは護法の天龍よ

我れに正路を示せよかし」

瞑目めいもくして黙禱の後

手に任せて一冊の本を抜き取る

それは「禪関策進ぜんかんさくしん」

開いたところは「慈明引錐じみょういんすい*」の話だ。

これを読んで白隠は求道心ぐどうしんを新たに起こし

従来の迷いを懺悔ざんげして

この書を「日新の銘めい」とした。

師の馬翁は「美濃みのの荒馬」という

綽名あだなの如く意地悪な辛辣しんろう*な人間だが

博覧強記の才覚

得難い人物と見て白隠は喰くいさがり

夏げ（三ヶ月の禁足修行期間）が果てて

皆が分散したが、白隠は留まり

ある日、井戸端で大根を洗っていると

*蛟龍きょうりゅう 水中にいて、雲や雨に会うと、天にのぼる、という想像上の動物。
 *懊惱おうのう 悩みや苦しむこと。苦惱。

*李杜りど 李白（りはく）と杜甫（とほ）の略。

*韓柳かんりゅう 韓愈（かんゆ）と柳宗元（りゅうそうげん）の略。

*隨身ずいしん 仕え従うこと。

*断金だんきん 金属をも切るほどの固い友情。

*老莊らうそう 老子と莊子の略。

*慈明引錐じみょういんすい 慈明は股に錐を刺して眠気をさまし修業を怠らなかつたという。

*日新の銘めい 日に新たな心で生きるための座右の銘。

*辛辣しんろう 手厳しいこと。

馬翁は白隠を顧みて

「鶴や、起つ鳥は勇むのう」

慧鶴が大成する人物と見てくれた言である。

二十三歳の春、正宗寺を辞し渡海して

備後の正寿寺に赴き、道友と共に東へ帰る。

道々、一步一步

「狗子仏性」の公案を拈提す。

趙州和尚の応答「無」は何の謂ぞや。

これは有無の無に非ず、絶対無だが

白隠は三百六十の骨節

八万四千の毛穴もて

全身ただこの「無」に成り切らんとした。

途次、備前の岡山城下を通るさに

同行の僧ら城や風光を論議し合う。

白隠はひたすら「無」に参じて瞑目無言。

参禅は須らく祖師の関を透るべし

妙悟は窮身、以て心路を絶せんことを要す。

「無」字は宗門の一関

目けて「禪宗無門関」

この関を透得過する者

趙州に見ゆるのみならず

歴代の祖師と手を把つて同行

同一眼同一耳となる。

轟然打発せば、驚天動地をなし

遊戲三昧ならん。

白隠、播磨のある山寺で一泊

谷川の流れを聞き

「山下の流水、滾々とし止む時なし

禅心もし是くの如くなれば

見性豈それ遅からんや」

と詩をものした。

ある夜、彼は坐忘、即ち坐禅中に忘我した

身心脱落の境地である。

忽然空に舞いあがり、南へ数十里

紀州の海辺に來た。大喝一声した

すると元にもどり、蒲団の上に坐っていた。

* 狗子仏性 犬に仏性（仏になる因子）があるかないかという、禪の公案。

* 拈提 禪宗で、古則公案を出して学人に提唱すること。

* 妙悟 すぐれた悟り。まことの悟り。また、仏の悟り。

* 心路 すじみちを立てて考える心のはたらき。

* 轟然打発 爆発すること。まっしぐらに進みぬけること。

* 遊戲三昧 仏の境地に遊んで、何物にもとらわれないこと。

* 見性 身に備わる仏としての本性を見抜き、悟ること。

* 坐忘 静坐して雑念を去り、われを忘れること。

* 身心脱落 身も心も一切の束縛から解放されて、悟りの境界にいたること。

宝永四年（一七〇七）

富士山南東部の一角が噴火

かくて宝永山が寄り添う子の如く生じた。

白隠時に二十三歳の年末。

二十八歳のとき

師の息道和尚の遷化のため

松蔭寺に帰る。

その後、諸方の名師を訪ねて遍参修行

享保二年正月

三十三歳で松蔭寺の住職となる。

翌年、白隠と号す。

四十二歳の秋、ある夜

蟋が雨垂れ石の上でしきりに鳴く

これを聞いて白隠豁然と

法華の妙理に契当

声を放って号泣し

正受聖人の受用底を徹見し

境涯、大自在を得るに至った。

かくて彼は東奔西走

衆生済度の月日を送り

多くの道俗を教化した。

生涯黒衣して

破屋に住み、粗食し

八十四歳を以て

地上の生涯を果てた。

*遷化〓この世の教化を

終えて、その教化を他の

世に移すの意から、高僧

隠者の死のこと。

*遍参〓禅僧が諸国を歩

きまわり、各地の高僧に

教えを受けること。

*豁然〓迷い・疑問など

が急に解けるさま。かつ

ぜん。

*妙理〓思慮分別を越え

た深遠な真理。不思議な

理法。

*契当〓一が他とびつた

り一致対応すること。

*受用〓悟りを聞いて、

その悟りを享受している

こと。

*道俗〓出家と在家。

*黒衣〓墨染めの衣。僧

衣。こく。

第二章 キリスト教（福音）

アッシジのフランチェスコ

或る巡礼者、門を叩いて

「もしもし。産婦が産室を去り

厩の片隅に藁を布き

そこに臥すれば嬰兒産まれん」

この不思議な勧告に従うて

そのようにしたら男の子が生れた。

イエスの秣槽のような産れ方

これは事実か伝説か、疑うなかれ

選びの器に伝説めいた事実あり。

時は一一八二年春のこと

処はイタリア中部スパジオ山麓のアッシジ

母の名はピカ

父はピエトロ・デイ・ベルナルド・ネ

織物商で貴族に次ぐ職柄。

母はこの児をジョヴァンニと名づけたが

旅から帰った父はフランス好きで

フランチェスコと改名させた。

母は気品あり敬虔な魂の人

公文書にはドミニ即ち貴婦人呼ばわり

フランチェスコの本質は母に通ずる。

Francesco Assisi

一一八二頃―一二二六年。
フランシスコ会の創立者。
イタリア中部のアッシジに
生まれ。愛と清貧に生き、
人々の尊敬を集める。十
三世紀初めの教会改革運
動を指導。フランシスコ。

*臥す＝寝る。横になる。
*嬰兒＝あかんぼう。あ
かこ。

*敬虔＝神に帰依して、
つつしみつかえること。

当時のイタリア宗教界は低落腐敗。

さて青年フランチェスコは時代の潮に

棹さす舟の荒武者の如く

享樂の旗を掲げて遊蕩三昧

同類の無頼の徒の旗頭然として

金をばら撒く親分はだの俠客よ

不幸の徒を一瞥するや持てる金錢を

残らず与えてしまう奴

檻樓を纏う者あらば、惜し気なく

おのが美服を脱いでやり

そのぼろを自分が着るといふ

聖者のひらめきある男

一見放蕩ながらこの息子に

マドンナ・ピカは大度の美質を洞察。

わが子の行く末を期待して

「妾はあの子に希望をかけています

祈りの中で神の愛顧を聴きました」

当時は皇帝对教皇、公侯对王者

民衆对貴族の抗争の渦巻く時勢。

さればアッシジの邑も安泰でない。

独逸王室支配下にあつたアッシジ市民は

終にその隷属解放の火蓋を切つた。

それは平民と貴族の角逐とも言えるもの。

フランチェスコも従軍兵として戦い

城壁構築に際し槌の使用法を体得した。

戦乱は貴族の味方ペルージャ軍の勝利

かくてアッシジ市民軍は捕虜となる。

フランチェスコもその一人。

一二〇三年、市民と貴族の平和協約が成り

市民は全員解放された。

俘囚から帰還した彼の生活は

従来 of 如く遊蕩饗応の態たらく。

こは天譴か、熱病に襲われる。

病床でおのが過去と現世の儚さ

死への怖れとコーヘレスの

*遊蕩＝遊興にふけること。放蕩。道楽。

*無頼＝定職がなく、無法なことをする者。

*俠客＝任俠をたてまえとした遊び人。おとこだて。

*一瞥＝ちらりと見ること。一見。

*愛顧＝ひいき。ひきたて。

*角逐＝せりあうこと。競争。

*天譴＝天の下すこがめ。

*天罰＝天の下すこがめ。

*コーヘレス＝伝道者。

旧約聖書の「伝道の書」にてでくる言葉。集会で

語る者という意味。

「一切空」を感じ

自暴自棄の衝動に陥り

病後再び享樂の巷に身を投ぜんとした。

さわれ彼の魂に別の声が聞えた

「天的崇高なるものを求めよ」

と。かつてアウグステイヌス*

母モニカの祈りと

「トレ・レゲ」の天声に目醒めた如く

このフランチェスコも聖なるもののため

おのがすべてを献げんと決意した。

アッシジを立ち出でんとしたときに

彼はある憐れな貴族のまじめな相を瞥見

彼は直ちにおのが華美な服装をこれに与え

その貴族の貧しい武具を身につけた。

彼は欣然アプリアへの征討の

合唱団に加わる。

スパジオ山の麓の道を通つて

スポレートに着くや

再び熱病に囚われ床に臥すや天来の声あり

「フランチェスコよ

汝は何処へ行くや。

我は主の使なり。

汝は虚しき者に仕うべからず

汝は主の僕となるべき者ぞ！」

「主の僕に。然らば我は何をなすべきか」

「汝速かに故郷に還れ

其処にて啓示を受けよ」

み使の姿は消えた。この神秘的訪れに

彼のアプリアへの志は挫かれ

飛ぶが如く帰つた。

彼は郊外の森や洞窟で黙想し祈つた。

彼は終に旧き生活を断ち切るべく

宴席を催した。

一二〇五年夏の夜のことだった。

蜩集したあまたの友は徹夜の騒ぎ

稀代の友に称讃と感謝を浴びせかけた。

*「一切空」＝伝道の書1章2節に「伝道者いわく、空の空、空の空なるかな、すべて空なり」とある。

*享樂＝快樂にひたること。

*アウグステイヌス＝三五四、四三〇年。初期キリスト教会の教父。北アフリカ生まれ。マニ教・新プラトン主義などを経てキリスト教に回心。新プラトン派の哲学とキリスト教を総合し、中世思想の基礎を作つた。

*「トレ・レゲ」＝「取りて、読め」という意味のラテン語。

*瞥見＝ちらと見ること。

*啓示＝人間の能力によつては知りえない神秘が神の愛によつてあらわし示されること。天啓。然示。

*蜩集＝一時に群がり集まること。

*稀代＝世にまれなこと。

酒に酔い痴れて痴態を暴露し
友らは街上に踊り出て舞えや歌えや。

「赤きに躍る青春よ」

酔えや歌えや春は今

春は花なれ花なる乙女

微笑む春の時は今

我らが春を歌え君」

「諸君見給え、オムブリアの蒼空を」

おお、明星が光ってる、歌え歌え」

更けゆくアッシジの邑に歌声が鳴りひびく。

「酒宴の王者はどこに居る

おい！ フランチェスコ

馬鹿に情じやないか

ハハア、恋の捕虜になったのか……」

「そうだよ、気高い純潔な

乙女を貰おうと思ってる」

この告白の内実は友らには全然わからない。

彼はもう世の属ではないのだ

彼は彼を創造り給いし聖者に全托。

彼と友らの間には

超ゆべからざる溝ができた。

噫、フランチェスコは今や

新しき船出の解纜！

旧き我及び友らとの絆は断ち切られた。

光栄ある約束をもつ孤舟の船出と相成った。

アッシジの郊外ガルチェリ (Garcetti) 洞窟に

彼は瞑想と祈りに赴くのであった。

マタイ福音書十三章四十四の天国の宝に

因んで彼は相対界の儂き物を棄て

絶対界の無一物無尽蔵を追求した。

神との靈交に没入した。

天来の靈油が灑がれ

マリヤからの愛の火が点った。

「静けき祈りの時はいと楽し」の讃歌を

そのまま彼は味わっていた。

*痴態 〓 たけたふるまひ。醜態。

*蒼空 〓 あおぞら。

*解纜 〓 船出すること。

*マタイ福音書十三章四十四節 〓 「天国は畑に隠れたる宝のごとし。人、見出さば之を隠しおきて、喜びゆき、有てる物をこゝとこゝと充りてその畑を買ふなり」

*天来の靈油 〓 聖靈のこと。

*「静けき祈りの時はいと楽し」 〓 賛美歌 310 番。

*詩篇 〓 「旧約聖書」の中の一書。五卷一五〇編。

父なる神に祈入^{きこやう}して神人合一^{しんじんごういつ}の心境

地上の相對界のどん底の無私なる彼

聖意^{せいい}體現^{たいげん}が彼の全念願

詩篇の祈りがそのままのが祈りとなる。

新約のキリストの心が彼の心に沁^しみ込む。

貧しき者、虐^{しいた}げられた者

侮^{あやど}られた者、ひとに棄てられた可哀^{かわい}相^{そう}な人

悲しむ人、悩む人、そういう人々と

同じどん底に自分を置いて

助けることが本当の愛。

彼の胸はこの愛に燃えて

具体的な愛を體現、身証^{しんしやう}せんと

燃えてやまぬフランチェスコであつた。

彼のは所謂^{いわゆる}信仰ではなく

正に神交^{しんこう}、神との靈交が彼の現実だ。

時は熟^{じゆく}した。彼はローマを訪ねる。

しかもそれは貧しさの極み

乞食の姿で乞食の群の一人となつて

道往く人に恵みのパンを乞うのであつた。

腹は減る、慈悲の銅貨で一片のパンを

托鉢^{たくはつ}僧も及ばぬ惨めさよ。

だが、どん底心の彼は神に欣然感謝。

「恵福^{さいわい}なる哉^{かな}、貧しき者^{*}」

とはこの身境なりとキリストにも感謝。

詩五^{*}一にある如く

神の受け給うは碎けた魂だ。

彼は富めるおのれに勝ち

神の僕を自覺^{しもべ}した。

富者の神の国に入るよりは

らくだの「針の穴」という

狭き門に入る方易^{やす}しだ^{*}。

彼はかくて神と交^{まじわ}り、十字架像を仰ぎ

罪びとの自覺のありがたさを知つた。

彼は神一切に生き

おのれは乞食然^{ひしや}たる無者^{むしや}たるの自覺に入る。

*新約Ⅱ「新約聖書」の略。

*神交Ⅱ神・キリストとの靈的な交わり。「信仰」

の深い消息を信行、信交、神交と表現した。(著者の新造語)

*托鉢Ⅱ僧がはちを持つて、家ごとに米・銭の布施を受けて歩くこと。こ

つじき。

*「恵福なる哉、貧しき者」Ⅱルカ伝6・20「幸

福なるかな、貧しき者よ、神の国は汝らの有なり」

マタイ5・3。

*詩五一Ⅱ旧約聖書の詩篇51篇17節「神のもとめ

たまふ祭物(そなへもの)はくだけたる靈魂(たましひ)なり。神よなんぢ

は碎けたる悔しころを藐(かる)しめたまふまじ」

*らくだの……狭き門に入る方易し」Ⅱマタイ伝

19・24「復なんぢらに告ぐ、富める者の神の国に

入るよりは、駱駝(らくだ)の針の孔(あな)を

通るかた反つて易し」

を

通るかた反つて易し」

徒しく還^{かえ}つてくると門前にはかの癩患者^{しかんげ}が

依然として坐し居り、彼を見るや

かの時と同じ言^{ことば}で歎願した。

彼は今は以前の彼ではない

馬から降りた、懷中には一片のパンのみ

これを与え、小川の清水を掬^くんで飲ませた。

その刹^{せつ}那^な

癩者は輝くキリストの相^{すがた}に変じた。

彼は驚いて跪^{ひざまず}いた。

キリストは語り給う

「見よ、盃^{ふし}は其^{そこ}処^こにあり

清水を掬^くみし柄杓^{ひしやく}なり。

さきに与えしそのパンは

裂かれしわが体なり。

その冷水は十字架^{ちしお}上より

流れしわが血潮^{ちしお}なり。

貧しき人と偕^{とも}にする

食こそげにや聖餐^{せいさん}なれ！」

ある日、馬に乗つて

フランチエスコは郊外に出た。

すると路傍^{ろばう}に臭気^{けんき}甚^{はなは}だしき癩患者^{しかんげ}。

これを一瞥^{いちべつ}するや

たまりかね馬首^{ばしう}を別の道へ。

次の瞬間、權威あるみ声が

「フランチエスコよ！」

汝はわが心を

心とするはずではなかつたか」

彼は馬の手綱^{たづな}を停^{とど}め、ひらりと飛び降りた。

彼は恭^{うやうや}しく癩患者^{しかんげ}の手に熱く接吻^{せつぶん}して

「兄弟よ、赦^{ゆる}しておくれ！」

彼の双眼^{そうがん}から熱い涙が頬を伝った。

「私が悪かつた

今日からお前は私の兄弟だ」

癩患者^{しかんげ}は呆氣^{あつき}にとられ、不思議に思った。

フランチエスコは

* 掬ぶ水を手ですくつて飲む。

* 聖餐はキリスト教で、キリストの血と肉を象徵する葡萄酒とパンを信徒に分けたえること。

* 呆氣はおどろき、あきれること。

財布を逆まにして全部与えた。

金銭を全部やったのは

おのれ自身を与えたことだ。

彼自身が乞食の貧しさとなつたので

逆にキリストが彼の中に入つて来た。

彼は貧者、弱者、病人の兄弟となる。

要するに社会の最底辺の人たちの兄弟だ。

かくて癩病院を訪ねて病者に接すれば

癩患者は何かしら彼から力を受ける。

キリストは祈りの人

彼の三年の活動には

二十年の祈りの静寂があつた。

父なる神に深く祈入して

力を体受していた。

フランチェスコも

祈りの沈潜を何より貴んだ。

ひとに何と言われようと

祈りは彼の生命。

サン・ダミアアーノという

見棄てられた草庵に入る。

其処のキリストの聖像が彼に

「我に来よ」

と。彼はこの柔和な聖像と語つた。

「おお、偉大なる栄光の主よ

御身の僕、此処にあり」

彼は合掌し、跪いて聖言に聴き入つた。

「わが子よ、汝おのれを脱却すること

いよいよ繁ければ

益々わが内に入ることを得る。

世の空虚を斥ければ

我は汝の心に住む。

フランチェスコよ

汝おのれを棄て、一切を棄てて

汝我に来よ、我に従え。

我は道なり、真理なり、生命なり*。

*御身||あなた。

*「我は道なり、真理なり、生命なり」||ヨハネ 14・6。

さらば往け、貧しきわが家をたてよ」

「主よ、僕は欣然御身の命に従います」

かくて聖像との神秘的交霊は

彼の全的回心となり

一粒の麦が地に落ちて

自我の殻が全く破れ、爾後この天的生命

この原種を通して

多くの実が結ぶことになる。

彼は草堂修築に際して

財布ごと堂守の牧師に献ず。

彼は言った

「どうぞこの金で油を買って

あの聖像の灯火を

不滅のものにして下さい」

フランチェスコは日々

サン・ダミアノで暮した。

しかも彼はほろを着

涙をながして歩いた。

彼の涙はキリストの涙
惨めな人々のための。

一二〇七年春弥生*

「旦那様、大変でございます

若旦那フランチェスコさまが……」

「何つ、フランチェスコがどうしたのだ」

「まあ、乞食のようなお姿で……」

そこへ乱髪のフランチェスコがぼろを着て

腰には麻縄を帯び、托鉢僧の姿である。

これが光榮有る彼の凱旋と誰が知る。

父ベルナルド・ネは憤怒、群衆は嘲笑。

父は阿修羅の如く彼の頸筋を掴んで

家の中へ引きずり込み、閉じこめた。

父は威嚇、虐待して翻意させんとした。

そんなことで翻る彼ではない。

今やキリストの愛敵

忍辱を衣っている彼だ。

*爾後||そののち。それ以来。

*弥生||陰曆三月の異称。

*阿修羅||形相のすさまじいことのとえ。

*威嚇||おどすこと。

*翻意||意志を変えること。

*忍辱||恥をしのぶ。はずかしめをがまんする。

「おお主よ！」

何もわからぬ父を救させ給え！」

父は折檻に疲れ、息子に絶望、旅に出た。

母ピカは優しく翻意を促したがこれもだめ。

母は負けた

「野の自由へ」と彼を見送った。

彼は合掌、父母のため言い知れぬ涙が光る。

彼の脚は再びサン・ダミアノへと

恰も野に放たれた小鳥が巣へ還る如く。

父は旅から還り

家督相続権を奪い、廃嫡。

此処はサンタ・マリア・マッヂオーレ法廷だ。

フランチェスコが欣然として現われた。

アッシジの僧正が眩い法服で着座。

群衆が鳴りを静める。開廷となる。

フランチェスコが

一切を父に返還すべく命ぜられる。

彼は忽ち衣を脱ぎ、裸となる。

着物に金を添えて、監督の前に差し出す。

「皆様、今日からは

私は神にのみ仕える身

地上の父から受けた一切をお還しします。

以後私の呼ぶ父は天の父なる神です。」

父ピエトロ・ディ・ベルナルドーネは息子の

衣と金を奪うが如く掴んで法廷を去った。

フランチェスコの恭しく且つ厳然たる姿に

列席のすべての者が深い感動を覚えた。

彼がサン・ダミアノに於ける

聖像との交霊は

フランチェスコの一生を画した重大な事態。

「どうぞその金で油を買ってあの聖像の

灯火をいつも灯るようにして下さい」

との言は

キリストにおのが霊火で応えているのだ。

フランチェスコはいつもボロを衣

麻縄を帯び涙を浮べていた。

*折檻 〓 きびしくしかること。肉体を苦しめて、こらすこと。

*廃嫡 〓 相続人の相続権を喪失させること。

*ロマ書八・三五―三九 〓 「我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、患難か、苦難か、迫害か、飢か、裸か、危険か、剣か。録して『汝のために我らは、終日、殺されて居らるべき羊の如きものと為られたり』とあるが如し。然れど凡てこれらの事の中にありても、我らを愛したまふ者に頼り、勝り得て余あり。われ確く信ず、死も生命も、御使も、權威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざること。」

その時代の宗教的墮落だらくに対する

キリストの涙だ。

母はフランチェスコのため

毎日食物をサン・ダミアーノへ送った。

彼はロマ書八・三五―三九の聖句さながら

キリストのあつき護りまもの中にあつた。

おのれを棄て、ひとにも棄てられ

十字架を負った彼は

キリストに確しかと掴つかまれた。

「我に従え！」

主のみ言は実力すいりきに裏づけられている。

裸形はだかぎよう、素足すあし、無一物むいちぶつの彼に山賊が現われた。

彼は捉とらえられたが

無一物なので残雪の谷底へ放り込まれた。

彼はどんな目に遭つても

聖名みよなを讃美さんびしている。

辛うじてベネディクト派べねでいクトの

修道院しやうどういんに辿りつく。

いかなる人をもキリストの化身けしんと見て
合掌する彼だ

「敵を愛せよ」と言われても

彼には敵が居ないのだ。

いかなる虐待さやかくも迫害も無効だ。

彼は相手を詛のろわない、ただ忍受にんじゆ

しかも莞爾かんじとして。

彼は一切の事態をただ愛を以て体受たいじゆ。

愛は最大の力、すべてに勝つ。

相手を大きく包む、アトラスアトラスの如く荷になう。

修道院で働き、飢えをまぬがれた。

恵まれると彼は癲病院を訪ね

愛を以て力を与える。

しかも彼は乞食こつじきであり、托鉢たくはつである。

久しぶりでアッシジへ戻った

御堂修築みどうのために。

彼は広場で聖歌を唱うたう。

群衆にダミアーノ修築を熱烈に語る

*ベネディクト派Ⅱカトリック教会の修道会の一つ。五二九年前、ベネディクトウスが創立。祈りと労働を標語とし、もっぱら教育と伝道に従事。

*莞爾Ⅱにつこり笑うさま。

*アトラスⅡギリシア神話のティタン神族の一人。オリンポスの神々との争いに敗れ、西方で天空を支える苦業を課せられる。

*呪詛Ⅱ神仏の力によつて相手に災難の起こるやうに祈ること。のろい。

「アッシジの人々よ、我に石を与えよ」

彼は石を運んで、修築に取りかかる。

聖霊は彼に力を与え給う。

神のために働かん者は托鉢を恥じる勿れ

主キリストは無一物で

ひとを助け救い給うた。

力は神から来て、奇蹟が無数に起きた。

一二〇八年の春、彼二十七歳にして

終にサン・ダミアノ修築は完成した。

にも拘らず父ベルナルド^{ミカド}ネは

息子の惨めな相を見て

呪詛と叱責の暴言を浴せた。

彼の熱誠にはアッシジの町民も

竟に心服した。

彼は多くの寺院を修復した。

ポルチンクーラの聖ペテロ会堂と

サンタ・マリア会堂の修復は

彼の深く感謝したもの。

勿論彼はその中で祈り瞑想に耽った。

フランチェスコには弥撒は魂の生活の中心

キリストの十字架の死を念ぜしめる故に。

莊重な聖樂が堂内に流れる

神秘的雰囲気の中で合掌

紫色の法衣の司祭の香炉の馨

合掌、祈念、女声合唱

「これわが肉なり、これわが血なり」

と唱える司祭

これを耳にしてキリストへの愛の殉道心

司祭のマタイ十章七、十三の朗読

これを聴いたフランチェスコは

わが往くべき道を決意

即ち殉道の旅路！ どん底の愛の路

そこに天国が築かれるのだ、靈感が全身に。

褐色の上衣を着、腰には縄帯を締めた

アッシジの広場で辻説法だ。

* 弥撒はカトリック教会で典礼の中心をなす祭儀。司祭の司式により、キリストの体と血を表すパンとぶどう酒を神に奉獻した後に拝領する。

* マタイ十章七、十三

「往きて宣べつたへ」「天国は近づけり」と言へ。病める者をいやし、死にたる者を甦へらせ、癩病人をきよめ、悪鬼を逐ひいだせ。裸なしに受けたれば裸なしに与へよ。帯をもつな。旅の囊（ふくろ）も、二枚の下衣も、鞋も、杖ももつな。労働人の、その食物を得るは相応（ふさわ）しきなり。何れの町、いづれの村に入るとも、その中にて相応しき者を尋ねいだして、立ち去るまでは其処に留れ。人の家に入らば平安を祈れ。その家もし之に相応しければ、汝らの祈る平安は、その上に臨まん。もし相応しからずば、その平安は、なんぢらに帰らん」

「路ゆく人々よ

主は皆さんに平安を賜う！」

全身の叫びに人々は深い感動を享けた。

フランチェスコの

棄身の生活そのものが救の徴。

彼に倣い、同じ生活に入る者が増えて来た。

十字架、復活のキリストが堂から街頭に！

宗教的革新が茲に始まった。

聴衆の中に富める青年ベルナードがいた

フランチェスコの生活を見た彼は

まことの「聖者の境涯を慕う心」が湧いた

福音的貧困、その如く生きんと。

「フランチェスコよ

あなたは今夜何処に宿るや」

「私は宿なし

大空がわが屋根、大地が寢床」

「ともあれ

今夜はわが家に泊って下さい！」

ベルナードはその夜眠れず

出家の決意となる。

フランチェスコは

「わが神よ、わが主よ、わが凡てよ！」

とくりかえし心に唱えた。

その祈りが隠れた力となった。

ベルナードはおのが決意を打ちあげた。

フランチェスコはキリストの言

「往きて汝の所有を売りて

貧しき者に施せ」

人もし我に従わんと欲わば

己れを棄て

おのが十字架を負いて我に従え……」

を読みあげて、これが我らの道だと言った。

ベルナードは即座に貧者を訪ね始め

おのが財を全部頒ち始めた。

フランチェスコはこれを見て

涙ながらに感激した。

*「往きて…施せ」Ⅱマタイ19・21「イエス言ひたまふ「なんぢ若し全(まった)からんと思はば、往きて汝の所有(もの)を売りて貧しき者に施せ、さらば財宝(たから)を天に得ん。かつ来りて我に従へ」
*「人もし…我に従え」Ⅱマタイ16・24・25「爰にイエス弟子たちに言ひたまふ「人もし我に従ひ来らんとせば、己を捨て、己が十字架を負ひて、我に従へ。己が生命を救はんと思ふ者は、己が生命をうしなふ者は、是を得べし」

有即無の無心こそ

願^{わか}ちて尽きぬ天心である。

キリストも使徒^{しと}らも天来の力のほか

何をも求めなかつた無者^{むじや}たちだ。

我もなく世もなく

ただ神・キリストに祈入する

そこに宇宙的な妙心が与えられる。

フランチェスコは

この托鉢道の行者であつた。

彼はボルチンクーラに幾人かを伴^つれてゆき

みすばらしい小屋を編んで夜を明かした。

富めるエジディオはフランチェスコを慕い

彼に自分も貴殿の団員の一人にと願つた。

「慈^{いじ}しい兄弟よ!

神は貴方^{あなた}を選び給うた。

あなたは皇帝の騎士たるべき人なるに

神の騎士、下僕^{しもべ}となり

聖なる福音の行者^{きんぎやうしや}とされたのだ」

初代のフランチェスカンは清貧^{せいひん}を

魂^{たま}の呼吸とする神の歌人^{うたびと}、愛の大道芸人。

しかも彼らは百姓をみれば共に働き

病院を見れば患者の友となり

愛の祈りを捧げた

人助けが彼らの悲願であり法悦^{ほうえつ}だ。

わが国の宿なし聖人^{しょうにん}親鸞もこれに類した。

まこと宗教は寺院になく

人助けの生活にある。

活^いける寺院、歩く寺院となることだ。

まことの恵福^{きふく}は人助けに臨む神の慰樂^{いらく}だ。

金もなく、住居もなく

衣服もない裸一貫の

どん底で人のため尽くすところに

神の力と恵みが臨むのだ。

「わが主よ、わが思いに非^{あら}ず

*清貧＝富貴であることより潔白であることをのぞんで、貧乏に安んじること。

*法悦＝うつとりするよ
うな喜び。

*恵福＝天からの恵みに
よるさいわい。(著者の
新造語)

み旨のままになさしめ給え」

山に籠^{こも}つて隠^{いんじや}者となるか

巷^{ちやうた}に降りて塵^{じん}寰^{かん}の人たらんか彼は祈^{いの}つた

そして山を蹴^いつて雑^ざ踏^{たふ}に降^おり

人間苦の中で神の聖^ふ姿に接した。

悩む人々に奉仕して神の愛を体得した

現実苦の中でキリストの愛を撒^まいた

すべてを抱^はき荷^にう苦^{はつさつ}薩^{さつ}行^{ぎやう}。

罪人、苦悩の人、淫婦等の間に身を置き

キリストの愛を体得した。

また他面、彼は寂^{さび}しき処^{ところ}を探^{たづ}つて

深く神に祈入して魂の平安と力を得た

それはキリストに倣^{なら}う在^あり方であつた。

彼は巷^{ちやうかん}間で声高らかに説法した

その内容の自由さは、人間各自の

自由をおのずから悟らしめた。

各人は神の前に平等

懺悔^{ざんげ}と告白^{とくはつ}と執^とり成^なしの信者たれ。

彼によりヒヤラルヒー（教階制度）は

本質的に否定されていた。

彼は正に宗教改革前の改革実践者だ

正に使徒^{しと}らの継承者だ。

市民の間に憎^{にく}悪^お、嫉^い妬^ど、嫌^{けん}悪^おが消えた

平安、和合^{わがは}、謙^{けん}譲^{じやう}の相が現われ

感謝^{しやうさん}、頌^{しょう}讃^{さん}の歌声、街^{まち}に流れる。

聖霊の愛が靈風となつて来た。

その源泉的人物こそ

フランチェスコであつた。

フランチェスコを慕^もうた女性に

ローマの貴婦人ヤコバがあつた。

彼は彼女を恰^{あた}も母の如く敬愛した

靈的な心魂の愛には天的な花が咲く。

そしてまたフランチェスコとクララの

師弟愛は心魂の抱^{ほう}擁^{よう}であり接吻^{せつぶん}であつた。

そこにはパラダイスの花が咲いていた。

*塵寰^{じんかん}＝汚れた世界。人間世界。

*苦薩行^{くさぎやう}＝自ら悟り、他を救済するために行う実践修業。

*巷間^{ちやうかん}＝まちの中。世間。ちまた。

*懺悔^{ざんげ}＝神仏に罪・過ちを告白し、くいあらためること。

*使徒^{しと}＝イエス・キリストが福音を伝えるために選んだ十二の弟子。

*謙譲^{けんじやう}＝へりくだつてゆずること。

*頌讃^{しょうさん}＝人の功業や徳行をはめたたえる。

クララはおのが草庵に彼を招き

幾人かの友らと彼の説法を聴いた。

法王グレゴリオが後に寺院での

フランチェスカン（女性）の説教を

禁止せんとしたとき

クララは毅然として法王に抗議した。

フランチェスコとクララの師弟愛は

不滅の美で、彼の亡きあと

クララの魂にフランチェスコが内住し

クララは優しき女性ながら

魂は不屈であつた。

ある日、彼は二人の弟子を伴つて旅した。

彼らが歩いていると俄に無数の小鳥が

彼の前に降りて来たので、彼は言った

「わが姉妹なる小鳥たちよ！……

神さまはお前たちに

何処へでも行けるように

自由自在な翼をくださつた……

神さまの御恩を忘れないように

讃美しなさい」

フランチェスコの言葉がわかつたように

小鳥たちは一斉に嘴をひらき羽を打ち

頸を伸ばして恭しく地に垂れた。

彼が祝福すると

小鳥たちは囀りながら舞い去つた。

彼がアルビアーノという町に来て

説教をしていた。

すると空に無数の燕が来て囀りだした。

彼は手を振つて

「わが姉妹なる燕どもよ！……

暫らく黙しておくれ

静かに神様の話を聴くが好い」

燕たちは直ぐ声を潜めて、聴くのであつた。

フランチェスコには鳥も草も花も

みな友だちだ。

彼の靈感靈力は愛の言となつて

いかなるものにも通ずるのであつた。

彼はすべてのものに神讚美を促す。

わけても悩む人、苦しむ人、棄てられた人

貧しき人、虐げられた者、病める人

特に癩病人、凡そ不運な人たち

更には、盜賊、追剥の類いまで

彼らを不憫に想い、包み抱く

どん底の愛を以て接するので

彼らはその不思議な愛に力を得たり

心が碎かれたり。

フランチエスコは眼疾になやまされた。

ある日、クララとの歓談のあとで

忽然と詩泉が湧き溢れ

かの有名な「太陽の讃歌」を詠った。

その抜粋を左に記そう。

「いと崇だかき全能の善なる主よ！

……………

讚美せよ、わが主を

被造物凡ての故に

とりわけ兄弟太陽の君のゆえに

彼はすべてを照らし

地の子らに光あらしむ。

……………

わが主を讚めよ

姉妹なる月と、星々の故に。

主は頌えられん、兄弟風のゆえに。

空氣と雲と、霽れた蒼穹と

そして季節の故に、わが主を讚美せよ。

主を讚め頌えよ、水なる姉妹のゆえに。

……………

わが主を讚美せよ、兄弟火のゆえに。

主を讚美せよ

姉妹われらの母なる地のゆえに。

* 忽然Ⅱにわかに。ふつと。

* 蒼穹Ⅱそうきゆう。あおぞら。天空。

主を讃美せよ、我らの姉妹肉体の故に。
恵福なる哉

いとも崇だかき聖旨を悟る者は
そは、第二の死彼を冒さざればなり。

……………

この讃歌は爾後

伝道の序曲として合唱された。

彼の影の存在クララはいかなる時にも

彼の隠れた愛の力であつたことは

後のペアトリーチエの

ダンテに於けるが如くであつた。

フランチェスコは病に罹つた、險悪だ。

弟子どもは彼を故里のポルチンクラーへと。

展望のきく地点で

フランチェスコは駕籠を留め

「私の顔をアッシジの方へ向けてくれ」

彼は、両手をあげ十字を切つて

「主よ！ アッシジの人々を

祝福して下さい」

嘗てローマの貴婦人

ヂャコーミア・ディ・セッティゾーリが

彼に帰依したが、恩師の危篤を聞き

急ぎ馳せつけた。

マゲダレーナがキリストの臨終に

蠟燭や香料をもたらしただ如くした

彼女は涙ながら彼の枕許に平伏した。

彼は彼女の来訪を悦んだ。

十月一日、彼は死期の迫りを感じし

兄弟たちにおのが身を大地に置かしめた。

彼は裸形となつて大地に跪いた

これは淑女「聖貧」に抱かれんため。

二十余年「聖貧」と一つになつて

今日を迎えた。

今や彼女に抱かれて

＊詩篇百四十二篇Ⅱ「われ声をいだしエホバによばはり、声をい出してエホバにこひもとむ。われはその聖前にわが歎息をそそぎだし、そのまえへにわが患難をあらはす。わが靈魂わがうちにきえうせんとするときも、汝わがみちを識（しり）たまへり。人われをとらへんとてわがゆくみちに罌（わな）をかくせり。願くはわがみぎの手に目をそそぎて見たまへ。一人だに我をしるものなし。われには避所なくまたわが靈魂をかへりみる人なし。エホバよわれ汝をよばふ、我いへらく汝はわがさけどころ有生（いけるもの）の地にてわがうべき分（もの）なりと。ねがはくはわが号呼（さけび）にみこころをとめたまへ。われいたく卑（ひく）くせられたればなり。我をせむる者より助けいだしたまへ。彼等はわれにまさりて強ければなり。願くはわがたましひを囿（ひと）やよ

父のみもとに還^{かえ}らんとする。

「我^なは為すべきを果^{はた}せり」

と並み居る弟子らに言い

彼らを祝福して横臥^{おうが}した。

彼の願^{ねが}ひの如く彼らは「太陽讃歌」を歌った。

彼も微^{かす}かな声で唱和した。歌い終ると

詩篇百四十二篇^{*}を口吟^{くちん}んだ。

「レオよ、灰をわしの体に撒^まいておくれ

間もなくわしの体は灰と塵^{ちり}になる……

おお、神さまの恵み

聖靈^{せいれい}の交わり、キリストの愛

遣^{のこ}れるこれらの子らの上に、アーメン

私は召^よされる……おお、天のみ使^がが……」

雲雀^{ひばり}の一群が飛来した

彼の霊を迎えに来て囀^{さえず}っていた。

時に一二二六年十月三日、秋の夕暮。

かくて四十五年の地上の生涯を

神愛に生きたアッシジの聖者は

聖国^{みくに}へ召^よされた。

爾来^{じらい}、彼の霊は彼を慕^{した}う

無数の人々と共に生きている。

りいだし、われに聖名を
感謝せしめたまへ。なん
ぢ豊かにわれを待(あし
ら)ひたまふべければ、
義者(ただしきもの)わ
れをめぐらん」

聖書の人ルター — 宗教改革者 —

ルターの幼少年時代
アイスレーベン

ドイツが生んだ

偉大な人物の第一人者。

それは十六世紀に出現の

マルティン・ルター。

彼は原始福音に回帰せんとの

念願のもと期せずして

宗教改革をなし遂げた。

彼は十五世紀の末葉

近世への曙^{あけぼの}を告げる鳥の声が
此処^{ここ}彼処^{かしこ}に聞こえ始めた頃

ドイツ中部の一寒村アイスレーベンに
偶々^{たまたま}鋤夫の子として生れた。

しかし父ハンスの家系は元来農業

それゆえ本質的には農民の子である。

「ドイツ」という語は「民衆的」の意で

ドイツ民衆の根幹は農夫。

農業は人間生活の土台

農民から福音の器が出現したのは

Martin Luther マルチン・ルター。一四八三—一五四六年。ドイツの宗教改革者。一五二七年、ローマ・カトリック教会の贖宥状発行を批判した「九五か条の提題」を発表し、宗教改革の口火を切る。二二年破門。二三年「新約聖書」、三四年に全聖書のドイツ語訳を完成。賛美歌の作詞・作曲なども行った。

まことに摂理^{せつり}というべきことだ。

マンスフェルト

父は剛健^{ごうけん}で実務^{じぶつ}的で勤勉^{きんべん}な人

ルター誕生一年後

父はマンスフェルトで鉱山業に従事。

母は「婦徳の典型」と言うべき婦人

而も神秘的な宗教性と詩人的情熱の人

ラテン的の聖歌^{せいカ}を歌う祈り深き人。

ルターは父母の資質を体受

とりわけ母のを。

偉人の母は優れた素質の女性たるは

歴史の証明する原則とも言うべきもの。

父は真の神奉仕は

平民生活の中に在りとなし

僧侶^{そうりよ}の介在^{かいざい}は余計なこととなした。

この氣質はルターの宗教改革の

胚珠^{はいしゆ}となっている。

かくの如き父母のもとで彼は
幼少年時代を暮した。

だが当時の神もキリストも義につよく
愛の面^{おもて}が乏^{おそ}しいので彼は畏^{おそ}れていた。

信仰よりも行為の善悪が問題。

これでは救^{いすこ}は何処にありやだ。

マグデブルク

満十三歳で父母の膝下^{しつか}を離れて

遍歴書生^{へんれき}としてこの地のラテン語学校生

そこで見たのはある王族が魂の救のために

乞食僧となつて難行苦行している姿。

もう一つは

天国ゆきの船に乗っている面々は

教皇^{きやうかう}、枢機卿^{すうききやう}、司教^{しきやう}、僧侶^{しやうりよ}だけ

平民どもはみな泳いでいる。

聖霊は教皇の頭上にだけ徘徊^{はいかい}

これはルターに問題を投じた。

*摂理＝自然や世の中を支配している理法。

*介在＝間にはさまって存在すること。

*胚珠＝成熟して種子となるもの。

*天国ゆきの……泳いでいる＝これはルターの見たある教会の祭壇画のこと。

*徘徊＝当てもなく歩き回ること。うろつくこと。

アイゼナハ

此処は母の故里^{ふるさと}

その聖ゲオルク高校に入学

時に一四九八年

ワルトブルク城が目の前だ。

少年マルティンは

将来のワルトブルクのルターを

夢想だにせぬが、神のみぞ想い知る^{おも}。

少年マルティンは学資稼^{かせ}ぎのため

街^{まち}から街へと歌い歩く貧乏学生。

この少年の歌声に心を留^とめておのが家に

招き入れ家庭の一員としたのは

情け深き教養あるコツタ夫人

ルターはここに初めて美^うわしき愛を知る。

この町の聖ゲオルク会堂の

聖女エリザベツ画像とこの二つが

多感にして瞑想的な彼の心を深く捉^とえた。

エルフルト

一五〇一年の夏

中欧第一のエルフルト大学に入学。

彼の父は彼を法律家にせんと支援した。

父の願は名譽と財産に在った。

修道院入り

一五〇五年、彼は学士の資格を得た。

父は多年の囑望^{しよくぼう}成就^{じゆうじゆ}近きを欣^{よろこ}んだ。

その七月二日

マンスフェルトの両親を訪ねた

その帰るさに

シュトゥテルンハイムの村の辺^へで

突如雷雨に襲われ、身近かに落雷。

その爆風で二、三米すつとばされた。

その怖^{おそ}しさで彼は

「聖アンナよ、助けて下さい

*囑望のぞみをかけること。

*成就なしとげること。達成

私は修道僧になります！」

と叫んだ。聖アンナとは

鉱夫仲間の守護聖女のこと。

この悲願の叫びに斥くまじく彼は決意した。

この一件を秘して誰にも語らない。

七月十六日の晩

男女の知友と音楽会を催し

彼は快活に歌い且つ琵琶を弾いた。

終りに彼は「再会を期して(サヨナラ)」

と挨拶するわけにゆかぬので

長期のお別れのわけを語った。

一同は彼がその翌朝修道院入り

と聞いて驚き悲しんだが……。

即ち一五〇五年七月十七日の朝

数名の親友に見送られつつ

彼はアウグスティヌス派の

修道院の門の中に姿を消した。

時に彼は二十一歳の青年。

彼を襲った雷雨は神の大きな招きであつた

魂の問題ととつ組み、真理探究、勉学に

非凡な精進を成した彼への。

真剣な魂を鍛え導く神様の遣り方だ。

父は驚き、「悪魔の誑かし」と言つて失望。

神の次元は人間常識や

理性を越えたものなのだ。

ルターの内的苦闘

父母の恩愛に眼を閉じ

師友の囑望に背を向けた彼

今や見習僧としての生活に入る。

厳格な規約、煩瑣な戒律や儀式

祈禱、聖歌、断食等

これらを厳しく遡つたが

一向に魂の平安も喜びもないのみか

苦しくなるばかりだ

独房にぶつ倒れんばかりだ。

*煩瑣＝細かくてわずらわしいこと。

神に対して仰ぐ顔もない

この内的苦悩を如何せん。

パウロがロマ書七章の終りで

告白している苦悩

正にこの死の身体より

我を救わん者は誰ぞだ。

ルターは未だキリストに叫び求めなかった。

彼にはキリストは義を以て救うのではなく

義を以て審く怖るべき神であつた。

彼の苦しみは、神を相手の良心問題

即ち、律法を神の前に

心から実践できない苦しみ。

彼は三日三晩飲まず食わず

祈り且つおのれを鞭打った。

彼はついに僧房に悶倒した。

地獄的な苦しみだ。

ルターは模範僧だが

そんな外的評価が何になる。

「修道僧がその真面目な生活で

天国に入り得るとすれば

自分が入っていたはずだ」

これは、後に彼が修道院的敬虔を

きびしく批判した言である。

彼は院内図書室で

鎖に繋がれている本をみつけた。それは

VULGATA(ラテン語の聖書)であつた。

彼はその聖書に喰いつく如く、身読した。

しかし、神の義は相変わらず自分を審く

と読んだ。

ある時一人の老僧が彼に詰問して言った

「君はダビデやペテロの

またあの十字架上の

盗賊などの罪の赦しを信するだろう。

だが君自身に対する

罪のゆるしを信受していない。

聖ベルナルドの言うように

*ロマ書七章の終り「ロ
マ書7・18、25」我はわ
が中、すなはち我が肉の
うちに善の宿らぬを知る
善を欲すること我にあれ
ど、之を行ふ事なければ
なり。わが欲する所の善
は之をなさず、反つて欲
せぬ所の惡は之をなすな
り。我もし欲せぬ所の事
をなさば、之を行ふは我
にあらざる、我が中に宿る
罪なり。然れば善をなさ
んと欲する我に惡ありと
の法を、われ見出せり。
われ中なる人にては神の
律法を悦べど、わが肢体
のうちに他の法ありて我
が心の法と戦ひ、我を肢
体の中にある罪の法の下
に虜とするを見る。噫わ
れ惱める人なるかな、此
の死の体より我を救はん
者は誰ぞ。我らの主イエ
ス・キリストに頼りて神
に感謝す、然れば我みづ
から心にては神の律法に
つかへ、肉にては罪の法
に事(つか)ふるなり」

聖書は「汝の罪、汝に赦さる」と

君自身の魂に向つて告げているのだ!

ルターは一時心を安んじたが

またダメである。

その後ある時

教団管区副長シユタウピッツが

エルフルトのこの修道院を訪ねた。

彼はルターに

「十字架のキリストが君のために……」

といつてつぶさに語った。

ルターの魂は動いた。

しかし、福音の与える義の恩恵を

身直かに体感体受するには

尚三年の月日を要した。

ルターが福音の義を全身で体受したとき

宗教改革の種火が燃えたのである。

救を求めるときも

人間は我執が棄てられていない

そういう自我心を徹底的に棄てるには

キリストの十字架の圧倒的な愛の前に

降参させられることを要する。

「神の義が福音の中に現われた」*

というパウロの 로마書 の告白に

目がさめたときルターは

何ものにも替えられないものをつかんだ。

ザクセンの選帝侯フリードリヒは自領内に

一五〇二年、ヴィッテンベルクの

大学を創設した。

シユタウピッツの推薦により

ルターは教授陣に加わる。

それは一五〇八年十一月であつた。

はじめは哲学を

一五〇九年春からは神学も。

一五一一年秋、ルターはローマに使した。

ローマ滞留中

スカラ・サンタの二十八階段を膝行中

*身説||頭(觀念)で読むのではなく、自分の身体(全存在、体験体现)で読むこと。

*詰問||相手をとがめる気持ちで、厳しく問いたですこと。

*「神の義が……」|| 로마 1:17「神の義はその福音のうちに顕れ、信仰より出でて信仰に進ましむ。録して「義人は信仰によりて生くべし」とある如し」

*選帝侯||中世ドイツで、神聖ローマ皇帝を選挙し、帝国の重要事項を決定する特権をもつ諸侯。

*膝行||立ち上がらずひざで進むこと。

預言者ハバククの言に因るロマ書の

「義人は信仰によつて生くべし」*

を思い出し、突如立ちあがつて降段した。

彼はローマに失望し

次の俚諺を認めざるを得なかつた

「世の中に若し地獄があるなら

ローマはその上に建っている」

一五二二年のこと、ヴィッテンベルクの

アウグスティヌス派修道院の塔の一室で

キリストの贖罪愛を絶対恩寵として

体受できたという信仰上の決定的な事態を

塔の体験(TURMERLEBNIS)という。

同年秋ルターは神学の正教授に任ぜられた。

ルター研究の大家カルル・ホルは

ルターの信仰を

「良心宗教」と呼んでいるが

ドイツの内面性の最も健全なものを

ルターは具有していた。

その精神を哲学界ではカントが継いでいる。

ルターにとり、旧約の預言と新約の福音の

二焦点がキリストに於て一如となつてゐる。

然り、彼にとり

全聖書の中心はキリストである。

キリスト抜きにしてはルターに聖書は無い。

使徒パウロ精神の後継者はルターである。

カルヴァン神学は組織だが

ルターのは生命的だ。

「神学は胡桃の核、小麦の芯であり

骨の髄を究明する学問なり」

と彼は言う。本質的なもの

根源的なものを追求してやまぬ

ドイツ魂はルターに於て

遺憾なく發揮されている。

彼はヴィッテンベルクの教会では

大衆を相手に深遠な真理を平易に語つた。

それはキリストの説教に学んだわけである。

*「義人は信仰によつて生くべし」Ⅱロマ書1・17。

*俚諺Ⅱ民間に行き渡つてゐる通俗なことわざ。

*贖罪Ⅱキリストが十字架にかかり、人類に代わつて罪をあがなつたこと。
*恩寵Ⅱ神が特別のおぼしめしで人間に与える愛。

*具有Ⅱそなへ持つこと。
何かをその本質として持つてゐること。

坊主くさい説教はルターはきらいであつた。

彼のドイツ訳福音書は平易で滋味あり

炉辺で読まれるに極めてふさわしい。

それはまた詩的であり歌調ありだ。

ルターはドイツの福音的讚美歌の創始者だ。

最も有名なのはあの

「EIN FESTE BURG」だ。

免罪符 (ABLASBRIEF)

ルターが大学で福音を講じていたとき

紅十字架を押し立てた奇怪な行列が

ヴィッテンベルクに近づいて来た。

金ピカの布に免罪宣言の令書が。

僧テツエルがこの行列の立役者

これにつらなるは司祭、僧侶、議員

教師、学生、その他さまざま男女

彼らは旗と蠟燭とをかかげ持ち

歌いながら街道を練りゆく。

諸所の寺院の鐘

オルガン伴奏というもののものしさ。

燦然たる教皇旗が翻る。

令書に曰く

「すべて免罪符を購う者は

あらゆる罪と罰から免れる」

「凡そ神の賜物の中で最も高貴なものは

免罪符に他ならぬ」

と冒瀆千萬な宣告だ。

「買った金が箱の中でチリンと

鳴るや否や、靈魂は煉獄から跳り出る。

さあ買った買った！

貴君らの両親や愛人たちが下界から

われらの苦しみを見よ

はやく買って下さい……」

この馬鹿々々しい御利益宣伝に

マンマと乗ぜられて愚衆の眼は昏み

老若男女が先を争って買ったとは！

* 滋味〓感じのよい、豊かな印象。

* 「EIN FESTE BURG (IST UNSER GOTT)」

「我らの神は堅き城なり」
日本語現行賛美歌第267番「神はわがやぐら」抄訳。

* 令書〓命令の文書、書類。

* 免罪符〓贖宥状。キリスト教で、中世末から近世初期、自己の犯した罪の償いが免除されるといふ護符。ローマ教皇が発行権をもち、教会の有力な財源とされた。

* 煉獄〓ローマカトリック教会の教理で、死者が天国に入る前に、罪のつくないを果たすまで苦しみを受け、浄化されるといふ場所。

ところで「免罪符」とは元来教会法規を

犯した罪過に対する刑罰を

免れしむるお符で

第十一世紀頃から設けられたものだが

それは不純なものを孕み悪用された。

即ち教皇の資金獲得の機関と化した。

ヴィツテンベルクの良民がこんなものに

惑わされたのでルターは憤激した。

キリストの十字架の贖罪を

冒瀆するものだからである。

ついに時みちてルターは立ち上った。

一五一七年十月三十一日に

ヴィツテンベルクの城教会の門扉に

一枚の大紙片が貼り出された。

これはラテン語で記された論題で

二十五箇条のものが三箇に

二十箇条のものが一箇

即ち九十五箇条を以てする

免罪符への学問的公開状だ。

「真理に対する愛と真理を

明かにせんとする意志に由る……」

と書き出し

「我らの主イエス・キリストの名に於て

アーメン」

と結んでいる立派な神学的論争である。

やがてこれはルター对教皇の

全面的対立へと展開する必然性を有ち

期せずして宗教改革へと

展開することになる。

1 我らの主にして師なるイエス・キリス

トが「汝ら回帰せよ」と言い給うとき、

彼は信徒の全生涯が回帰たることを欲し

た。

32 免罪の文書によっておのが救を確かと

信ずる者はその宣教者と共に永遠に断罪

される。

62 教会の眞の宝は、神の栄光と恩恵たる最も聖なる福音である。

95 かくてキリスト者は多くの試練を通じて天国に入ることに信頼をおくべきである。

要するにルターはキリストの福音のほか何ものにも拘とどわれず拒否していた。

九十五箇条提題は

ルター自ら独逸語に訳した。

四週間にして全欧に羽を伸ばした。

しかし

「偽善なる学者パリサイ」は同調しない。

ルターが眞の預言者たる証した。

彼はエルフルトの修道院長ランクへの手紙の末尾に

「これが神の聖業なら、誰が妨げ得よう。

人の業なら誰が進め得よう。

おお聖なる神よ!

わが意志でもなく

彼らの意志でもなく

貴神の聖意みことばの成らんことを。

マルティヌス・自由人」

マインツの大司教アルブレヒトと

悪僧テツツエルはルターに反対し

後者はルターの宣言書を焼いた。

真理はそれ自らの力で勝つ

ルターは諍あらそわぬ。

ハイデルベルク総会で

ルターは福音に根ざして

堂々と信仰の根本問題を論じた。

免罪符問題の如きは問題に価しない。

一五一八年八月、教皇から召喚状しやうかんが来た。

十月にアウグスブルクで

ルター対カイエタヌスの

アウグスブルク論争が行われた。

要するにルターに所説を取り消せという

* 召喚し裁判所が被告人・証人・鑑定人などに對し、指定の日時・場所に出頭を命ずること。

教皇の黒幕によるものだから

そんなことは見破っているルターが

聖書に反して何がとり消せるかである。

ルターの身辺が危険になつて来たので

友人たちの忠告により

彼は十月二十日の未明ひそかに町を去つて

ヴィッテンベルクへ歸つた。

果然、^{かぜん*}教皇の召喚がアウグスブルクの

大寺院に告知されたが、それはあとの祭。

教皇のルター破門と殺害の毒手が

待っていたが、ことはそう旨くは運ばない。

ルターは既にヴィッテンベルクで

使徒信經^{しとせんきやう}、ニカヤ信条及び

アタナシウス信条の三大信条を

ドイツ語に訳し

これをおのが信仰告白の

裏づけとして公表していた。

正統の公同教会信徒の規範^{きはん}を知つたわけだ。

聖書を唯一の規範とし

聖靈に唯一の權威を見る

そのようなエクレシア^{*}の成るには

教会史は幾變転を経るわけだ。

世界の教会史はつねに新たに

原始の使徒的信仰に立ち帰ることが

不可欠の信仰の戦である。

ライプツィツヒ論戦

アウグスブルク論争の結果

ルターが知つたのは

ローマ教皇庁には非キリストが

支配していること。

ザクセン侯フリードリヒはいよいよもつて

聖書の人ルターの支援者となつた。

侯の城壁はルターの味方たる

ドイツ民衆であるので

ローマ側の高圧も懷柔^{かいじやう*}も無効となつた。

*果然IIはたして。やはり。案の定。

*エクレシアII新約聖書で「教会」と訳される、「召集する」という意味のギリシア語。(神の前に召しだされた集団という意味なので、著者は「召団」と称している)

*懷柔II手なすけて思うようにすること。だきこむこと。

大酒飲で法螺吹のミルティツツ嘆じて曰く

「一人のルターを拉致するには

もはや二万五千の精兵も無力だ」

そこでミルティツツはルターに言を弄して
免罪符問題を「教会平和のために」

トリエルとヴェルツブルクの監督らの

審議に委ねるべく約束した。

ルターがこの「ユダの接吻と鰐の涙」に
欺かれたことは

サタンの「平和」に一指を委ねた失敗だ。

ともあれルターは

ヴィッテンベルク大学で講義に没頭

ますます多くの学生が彼を慕って蟬集した。

時に一人の少壮学者が

ヴィッテンベルク大学に招かれた。

それはフィリップ・メランヒトン

ギリシヤ語の大家。ルターは彼に学び

新約原典で講義可能となった。

一方メランヒトンは

ルターから信仰の秘訣を伝受。

宗教改革に然るべき助力をなした。

ルターの提題に反対した者に

インゴルシュタット大学教授

ヨハン・エックが居た。

このエック対ヴィッテンベルク大学の

カールシュタット及びルターの論争が

即ちライプツィヒ論戦である。

一五一九年六月二十四日

ルター、カールシュタット、メランヒトン

その他数名の教授団一行は馬車に分乗して

二百名の学生団は槍と戟とを携えて

幹部を囲ってヴィッテンベルクを出発した。

ものものしいことだ。

討論会場はザクセンの

プライセンブルク城内

六月二十七日、論戦の幕は開かれた。

*拉致＝無理に連れて行くこと。

四日間に互る^{わた}

カールシユタット対エック論争。

論戦は主として自由意志論だった。

エックが優勢であつたが

七月四日にルターが壇上に立つた。

彼の音声は明朗透徹、氣風は温厚丁寧^{ていじやう}。

エックの論調は恐喝^{きやうかつ}的な野卑なもの

エックはキリストが

ペテロとそのすべての後継者に

ヒヤラルヒーの至上権を与えたのだと言う。

ルターは勿論^{もちろん}

そんなことは信仰の世界でないとした。

エックはフスやウイクリフの弾劾^{だんがい}は

コンスタンツ会議の内容に反するゆえだ

ルターの主張はフスに酷似するものだ

と決めつける。

ルターは、これに対して

フスやボヘミヤの信徒は

キリストの福音に即したものと主張。

エックは

「最も神聖なコンスタンツ会議の権威」を

侵害するものとルターに迫る。

ルターは厳然として言い放った

「神の言の外、何ものも誤りなきを得ぬ

宗教会議の結論もあてにならぬ」

ルターのこの断然たる言は隅の首石^{すみ おやし}だ。

神の立場たる聖書がルターの根拠。

教会の権威か、神の権威か。

畏るべき権威は聖言^{みことば}にあり、教会に非ず。

これがルターの不屈の無立場の立場だ。

聖書が城たるルターは聖書の前に平伏^{ひれふ}す。

神の言の外にルターには権威がない。

これがライプツィヒ論戦の骨子^{こっし}であつた。

破門

良心の声を正直に聴き

*丁寧＝手厚いこと。ていねい。

*恐喝＝おどしつけること。強迫。

*ヒヤラルヒー＝教階制度。「神聖な者の支配」を意味するギリシア語ヒエラルキアからきた語。

キリスト教で神聖な者とは教職者であり、従って教職者が社会の支配的な地位をもつことを主張するローマ・カトリック教会の在り方をいう。

*フス＝Johannes Hus。一三七〇頃～一四一五年。ボヘミヤの宗教改革者。プラハ大学総長。ウイクリフに共鳴して教会の世俗化を非難。コンスタンツ会議に召喚され、火刑に処せられた。

*ウイクリフ＝John Wycliffe。一三二〇頃～一三八四年。イギリスの神学者。宗教改革の先駆者。聖書主義を唱え、教皇権からの独立を主張。英訳聖書の最初の完成者。

真理の所在を明かにせんとしたルターは表面上論戦に負けて勝った。

教権宗教が公然と彼の敵となった。

本當の勝敗は真理と時が断をくだす。

教権に擁護ようごされている封建制度の重税

そのための窮乏きゆうぼうを不當の運命と感じた。

一五二〇年六月十五日、教皇の令書

即ちルターに対する破門状が發布

これを落手後六十日以内に

自説を翻ひんがえさぬ場合

破門の効力が發生して

ルターは危険にさらされる。

宗教改革の三大著

ルターは逆に熱烈な論戦展開！

即ち真理擁護ようごの著述に没頭だ。

「善きわざについて」

「教皇庁について」

「キリスト教貴族に与うるの書」

「教会のバビロン捕囚はしゅうについて」

「キリスト者の自由について」

以上の五書を矢継ぎ速やに発表。

就中なかんずく、後の三著は宗教改革の

三大論述として有名である。

彼は政治運動、宗教運動をやらぬ。

彼は飽くまでも真理の戦士

福音の信徒として

魂の世界の改革の一線を貫く。

彼は正にパウロ

アウグスティヌスの後継者

キリスト直結の信徒である。

ルターの著書が焼かれる

ローマ側ではルターの著書を

目に触れ次第しだい悉く焼き棄てた。

ドイツ国内では逆にルターの信望高まる。

*弾劾罪を調べて責任を追及すること。

*コンスタツ会議一四一四―一八。十五世紀前半に開かれた改革會議と呼ばれる一連の宗教會議の第二番目のもの。コンスタンツは南ドイツの都市。ピサの宗教會議（一四〇九）が法王權の分裂を解決しようとして失敗した後をうけ、召集された中世最大の宗教會議。法王も信仰、教會改革の問題については會議の決定に服すべきであるという、いわゆる監督主義を声明し、新統一法王としてマルティヌス五世を選んだ。ベーメンのフスを異端と決定して火刑に処し、フス戦争の因をつくった。

*擁護Ⅱ危害や侵害の動きから、かばい守ること。

*窮乏Ⅱお金がなくて、生活に困ること。

*就中Ⅱ中でも。とりわけ。とくに。

フリードリヒ賢侯はルターを護る。

九月下旬マイスネル教会の扉に

破門状がエックによつて掲げられる。

ローマの特使ミルティッツは

フリードリヒ侯にルターの身柄引渡しと

著書の焼棄を要求

同侯は勿論これを拒否した。

ルターが破門状を焚く

一五二〇年十二月十日早朝

令書落手つくしゆ後六十日の満期と共に

ルターは破門状焼き払いの告白を

ヴィッテンベルク大学の掲示板に掲げた。

この朝九時

ヴィッテンベルク大学教授、学生

市民等はエステル門前の広場に集まる。

寒空の下、焚火たきびの用意がなされる。

ルターは火中に先ず教皇の令書を投ずる。

彼はラテン語で

「汝が神の聖徒を苦しむる如く

今や尽きざる火汝を苦しめん」

と叫んで破門状を炎に投入した。

ヴィッテンベルク大学の学生らは教皇側の

エックその他の著書を荷車に満載し

市中を練り廻り、再びエステル門前で

焚火の余燼の中にこれを投じ、焼き払った。

彼らはルターの讚美歌を歌つて解散した。

中世世界の最大の権勢者教皇の令書を

一介の僧侶が焼いた行為は当時の人々には

狂気か暴挙でゆるし難き行為である。

しかし、神の真理のため

棄身で戦うルターだ。

ゆるし難きは神の真理に逆らうローマだ。

ルターの信仰の火は

何ものもこれを消し難い。

權威は神の言、聖書にあるからだ。

*落手＝受け取ること。
入手。

ルターの戦はこの焚書ふんしょの一挙と共に
本格的段階に踏み入った

時に三十七歳。真理の貴とうとさよ

これに殉じゆんぜんとする魂の厳おごそかさよ。

ヴォルムスへ

ルターはヴォルムスへの旅の前日

一五二二年四月一日に

友人リンクに書いて曰く

「私の確知は

キリストが生きて在ますことだ

教皇が幾千あるとも怖おそれない。

キリストは無比だ」

四月二日にはメランヒトンに彼は言った

「……仮令僕が不帰ふきの客となろうと

君は真理を護たもつて前進してくれ給え……」

真理、これはルターの感激の泉、平安の根拠。

彼のガイスト、ロゴス、パトス、エートス＊は

「真理」だ。真理の主体はキリスト
これが彼の力だ。

このローマの異端者は沿道の市邑まちで

敬意を以て迎えられた。

ヴァイマールに來たとき

ルターは著書の没収という

勅令ちくれい發布を知った。

カルル五世はローマ側の傀儡かいらいに過ぎぬ

民衆はルターを心から送迎した。

見栄なき幌馬車ほろばぐるまは宛然えんぜん既に凱旋將軍的だ。

エルフルトの歡迎は非常なもの。

彼はフランクフルトから

親友スパラティンに書いた手紙の終りに

「キリストは生きて在ます。

地獄のあらゆる門が開かれ

空中に蔓はびこる悪靈どもが阻はばむとも

我らはヴォルムスへ入って往く！」

＊焚書＝学問・思想を弾
圧するため、書物を焼き
捨てること。

＊不帰＝二度と帰らない
こと。不帰の客となる＝
死ぬ。

＊「ガイスト、ロゴス、
パトス、エートス」＝
霊・智・情・意。

＊傀儡＝他にあやつられ、
利用される者。

＊宛然＝あたかも。

ヴォルムス国会

一五二二年四月十六日の朝十時

ルターがヴォルムス市に乗り込むと

教会の望楼^{ばうろう*}からラッパが鳴り響いた。

彼の幌馬車は八騎の騎士に警護^{けいご}されつつ

「聖ヨハネ騎士館」の前で止まった。

彼は車から降り立ったとき群衆に向かつて

「神は私と偕^{とも}に居て下さるだろう」

と。翌十七日の朝

彼は一人の貴族をその病床に見舞った。

彼は病める者、弱者をつねに顧みる魂^{かえり}だ。

同じ朝、一方ではアレアンデルが首班で

教皇党や皇帝一派と

対ルターの画策^{かくさく*}を凝^こらしていた。

午後四時頃ルターは議場に入る。

そこには皇帝カルル、諸侯伯^{こうはく}、貴族

教皇の使節、司教達^{しきょう}、諸州及び

自由市の代表者、外国使臣^{ししん}らが

煌星^{こうせい*}の如く居並んでいた。

破門された異端者ルターに視線が集注。

ルターは毅然^{きぜん*}として犯すべからずだ。

被告席につく。机上には著書が堆積^{たいせき}。

トリエルの大司教エックが

左の訊問にとりかかる。

机上の著書は彼のもののか

その内容を固執^{こしつ}するか

一部又は全部を取り消すか。

ルターは、著書が信仰上の重大問題だから

予め熟慮^{あつじ}したき旨^{しめ}を述べ、慎重にも

ルカ伝九・二六^{*}の聖句を引用した。

ルターは猶予^{ゆうよ}を与えられ宿舎に戻る。

その晩は知友の訪問や準備のため徹夜。

四月十八日は参集が暇どり、夕となる。

議場に篝火^{かがりび}が点る。

彼は連年の苦闘のため瘦身^{そうしん}で蒼白^{そうはく}。

ただ眼光炯々^{けいげい}、態度毅然^{きぜん}。

*望楼Ⅱ遠くを見るための、高いやぐら。

*画策Ⅱたらくむこと。

*煌星Ⅱきらきら光る星。

*毅然Ⅱ信念が強く動じないさま。

*ルカ伝九・二六Ⅱ「我と我が言とを恥づる者をば、人の子もまた己と父と聖なる御使たちとの栄光をもて来らん時に恥づべし」

彼は著書を三別し

第一は信仰告白のもの

第二は教皇庁の現実を攻撃したもの

第三は教皇党との個人的論戦のもの。

第一、第二は無論取り消す能わず。

第三はもしや誤謬^{ごびやう*}あらば

改めるに悋^{やぶさ*}かならず。

ルターの偉大な「否^{ナイン}！」

「……私は聖書の証言によってか

明瞭な道理によって

説破されない限り取り消さぬ。

私は、すでに引用した如く

聖書に打ち勝たれた者であり

私の良心は神の言に捕えられています。

それゆえ、私は何ごと

も取り消し得ません。

私はここに立っている。

私はかく「告白」するほかはない。

神私を助け給わんことを、アーメン」

(Hier stehe ich, ich kann nicht anders!

Gott helfe mir, amen!)

この終りの二行、一句は有名である。

エックは言下にルターを呪^{のろ}つた。

スペイン人らはルターを罵^{のの}つた。

火刑か投獄か、ルターを待つものは。

群衆はルターを囲んで護^{まも}つた。

宿舎に帰りつくと

スパラティンらが待つていた。

ルターは迎えられるや^{そうしゆ*}双手を揚げて

「やったぞ、やったぞ」

(Ich bin hindurch! Ich bin hindurch!)

と叫んだ。

キリストの護り、聖霊のみ力で勝った。

噫、一五二二年四月十八日の夕

ヴォルムスのルターにより

*誤謬 || あやまり。まちがひ。

*悋 || ためらわずに、喜んで、気持ちよく……するの意。

*双手 || 両手。もろて。

中世はその夕暮の幕を閉じ
近世がその自由の星を点じた。

ワルトブルク城

ルターはヴォルムスで「あまりにも大胆に」
(老選帝侯フリードリヒの言) 語った。

神に捕えられた福音の戦士ルターの面目だ。
パウロと同じくルターは天的必然に因った。

「雲烟は已むを得ざるに聚まり

風雨已むを得ざるに洩れ

雷霆は已むを得ざるに震う」(「言志録」)

神の必然に因って動く言動が真の自由だ。

一般の人はこの自由を知らぬ

一般に謂う自由は人間的主観だ。

自我に拘われぬ無私に神の必然が動く。

天的な已むを得ずが自由である。

日本の民主主義の自由は我執に曇る。

UNDER GOD (神の下に) の

平伏し(脱我)を要する。

ルターの自由を想って筆が走った。

ルターはキリストに倣って

「剣を投ぜんために」*

遣わされた預言者の使徒的人物だ。

敵味方の誤解誤認の渦何かあらん。

天的真理に殉ずる魂は孤独である。

ルターの旅はフランクフルトから

テューリンゲン地方へ。

五月一日には慕わしいアイゼナハに着いた。

その翌朝は大方の友人と別れて

唯二人の同伴者と共にメーラに

四日にメーラを辞してシユヴィナを過ぎ

アルテンシュタイン城の傍を通って

グラーズバッハ草原への林間の隘路に。

すると突然森の中から四名の騎士が。

飛箭一矢、馭者の頬を掠めた。

馬車は立往生

*「剣を投ぜんために」
に「マタイ10・34」
「われ地に平和を投ぜんために来れりと思ふな、平和にあらず、反つて剣を投ぜん為に来れり」

*隘路にせまくてかわしい道。

*飛箭に飛んでくる矢。ながれ矢。

同伴者をルターは去らしめる。

荒武者らが大声疾呼して彼に襲いかかり

彼を騎馬に乗せた。もう一人の同伴者は

馭者と共に難を避けた。

騎士の一隊は森林を九十九折れに登つて

跡を晦ました、追跡者を予想して。

夜更けにこの「山賊」の一行は

山頂の城に着く。桔橋が卸される

一行の影は深夜に消える。

ワルトブルク城は何ごともなかりし如し。

正に五月四日の極秘裏の失跡事件だ。

ルターは「神はわが避け所」に感謝した。

ワルトブルク城、二十年前

ルターはこの山麓アイゼナハの町で

聖ゲオルク学校時代を送った

そのかみを回想してすずろに感無量の彼だ。

朝に夕に望み見し慕わしのこの城に

今は奇しき幽閉の身となろうとは。

あの当時、コッタ婦人の愛に浴したことを
いかで忘れ得ん。

後年彼が聖書を独訳したとき

「誰か美德の婦人を与えられん

その貴さは真珠より遥かに優る」

と訳した聖句（箴言三一・一〇）に

註記して

「この世にて婦人の愛にも優つて

甘美しきものなし、誰かこれを得ん」

と書いた。

ところでルターは此処で何をなすべく

捕えられたのか。

これもまた聖手の業よ。

画壇の巨匠アルブレヒト・デューラーは

ルターの失踪を喪失と想つていたく嘆いた。

世の嘆きや呪い、騒ぎや跟えをよそに

捕囚のルターに何が待っていたのか。

筆者もかつてワルトブルク城を訪ね

*疾呼し激しく呼ぶ。し
きりに叫ぶ。

*失跡し人がどこにいる
か、わからなくなること。
失踪。

*箴言「旧約聖書」中
の一書。伝統的にソロモ
ン王の作とされ、古代イ
スラエルの伝統的経験知
に基づく教訓・格言などを
収録。

*巨匠は芸術界で大家。

一夜はその城内の旅舎に明かしたときにルターを夢見たことが忘れられない。

さてルターのワルトブルク籠城ろうじゆうを謀はかつた善意の黒幕は誰あらん

ザクセン老侯である

畏るべきありがたさよ。

ルターは僧衣を脱ぎ、頭髮鬚髯ひげ伸び放題

かくてドクトル・ルターは

騎士イェルクユンケル(Jörg)。

時折城門を出て自由に平民らと快談をした。

城内に蟄居ちつぎ中、サタンと彼は戦った。

インク壺つぼを投げつけたのも

本當にちがいない。

彼は新約原典を熟読した。

旧約は詩篇さみふくしか所有もつていなかっただ

これも暗誦あんしやうするほど熟読した。

聖書とは一体どういう書か

神の根源語こんげんはヘブライ語でも

ギリシア語でもない。

神の靈言れいげんが、旧約はヘブライ語を通し

新約はギリシア語を通して啓示けいじされた。

ルターはそのような気持で

神の根源語を聴くことが

根本の態度だったろう。

それゆえ彼がドイツ語に翻訳するとき

神の靈言に聴き入りつつ

訳したにちがいない。

単にヘブライ語、ギリシア語を

訳したのではない。

彼が熟読した新約聖書を訳すのは

決河けつがの勢、三ヶ月を出でずして

一五二二年の早春には訳了した。

推敲すいこうを重ねてその初版が上梓じやうしされたのは

一五二二年九月二十一日のこと

時にルターは三十八歳。その聖書には

“Das Neue Testament Deutsch, Vultenberg”

*籠城ろうじゆう閉じこもつて外

出しないこと。

*鬚髯ひげしゆぜん。あこ

ひげとおひげ。

*蟄居ちつぎ家にとじこもつ

て外出しないこと。

*旧約きうやく旧約聖書の略。

「旧約」はイエス・キリ

ストの出現を預言した古

い契約の意。キリスト教

の經典の一つ。全二九卷。

モーセ五書・歴史・詩

歌・教訓・預言の書から

なる。元來はユダヤ教の

正典で、ユダヤ教では単

に「聖書」「タナッハ」

と呼ばれ、律法・預言

者・諸書の順に配列され

ている。

*新約しんやく新約聖書の略。

旧約聖書と並ぶキリスト

教の基本教典。全二七卷。

イエス・キリストが神と

人間のあいだに立てた

「新しい契約の書」の意

で、福音書・使徒行伝・

書簡・黙示録からなる。

*決河けつが堤防を切つて河

水が流出するような猛烈

な勢い。

*上梓じやうし書物を出版する

こと。

「独^{ドイツ}乙語新約聖書、ヴィッテンベルク」

とのみ銘^{めい}打たれ、訳者ルターの名は無い。

ルターの意志は、聖書は神が原著者
キリストが聖書の主人公

他に名は要らぬというわけである。

一五二二年の九月に出版されたので
世にこれを

「九月聖書」<sup>(ゼフテンバービーベル
September-Bibel)</sup>と謂^いう。

太陽の光は遍照^{へんしょう}して同光だが

これを受ける花は千差万別の色香^{いろか}だ。

そのように聖書は万国万人の書だが

これを読むには万国夫々の国語に訳す。

そのとき夫々国民性の色香をもつ。

決して観念的統一があるべきでない。

ルターのドイツ語聖書でドイツ語の

根源的な色調がおのずから成った。

ドイツ語史の上からも重要な事件だ。

新約聖書の完成の後十二年にして

一五三四年に

旧新約全書の初版が出版された。

余談だが、筆者はワルトブルク城の
ルターが新約を訳した部屋に入った。

簡素な机と椅子^{いす}が昔ながらにあった。

瞑目してそのかみ^{*}を偲^{*}んだ。

(註 拙著作集第七卷「聖書の人ルター」

一二五頁にその部屋の写真がある)

ルターは一五二一年の暮に城を出た。

なつかしのヴィッテンベルクを訪ねた。

二二年の三月には

ライプツィヒの近傍^{きんぼう}にいた。

次にはザーレ河畔^{かはん}のイエーナに来た。

騎士すがたのルターである。

スイスから来た二人の青年との挿話^{そうわ}は略す。

一五二二年三月九日から連続八日間

ヴィッテンベルクで内容ゆたかな伝道講演。

*遍照^{へんしょう}いたらぬところ
なく広く照らすこと。

*そのかみ^い昔。

農民戦争

顛末は略すこととする。
*顛末は略すこととする。

要するに使用者側、支配階級が精神的にも物質的にも

雇用者側に対し、愛と理性を以てせず

非人格的に不当な労役を要求するからだ。

労資の問題は東西古今要するに

そういう不当が紛争のパターンである。

ルターが「貴族」に要望したのもこの一点。

農民が提訴した

「シュワーベン要求十二箇条」は

穏当なもので、理性的、民主的である。

特に第十二条で

「聖書に照して不当な場合

いつにても是を撤回する」

といって、福音を土台としている

態度は立派なものだ。

ルターのかの「九十五箇条提題」の精神と

相通する正当なものである。

ルターは「諸侯貴族に寄す」という文書を

また公然と書いて注意を促した。

また暴動を起さぬために

「農民階級に寄す」という文書も書いた。

しかし、いずれの側も

ルターの諫言を受けず農民戦争が勃発した。

一五二五年晩夏になって

やつと戦火が消えた。

だが支配階級は権勢増大をはかる。

庶民階級は民主主義的自由を

福音に根ざして正当に主張しつつけた。

ルターの結婚

修道院への道は必然独身への道。

ひたすら神に仕え、人に奉仕する特別道。

ところが修道院の中で

福音を把んだルターは

*顛末は物事の始終、いきさつ。一部始終。

*諫言は人のあやまちを告げ正すこと。
*勃発は突然、事が起こること。

福音が結婚の自由と祝福を語っているので農民戦火を背景としながら

結婚を願う彼であつた。どんな道ゆきか。

一五二二年のことであつた。

グリーンマの修道院主が数名の修道僧と共に誓約を破棄して還俗した。

この行為は僧尼たちにも影響し

脱走したくなつた。救をルターに求めた。

一五三三年四月のある晩夜陰に

僧房の窓からあやめもわかぬ袖衣の影が

かがなべて十と二つ

相繼いで庭さきに降りた。

彼女らは屈強な男に助けられて

次ぎ次ぎと塀を乗り越えた。

塀の外に待ち構えていた田舎馬車は

十二の空樽に鰯ならぬ人魚を満たして

動き出した。三日路の後に

この人魚とその食糧を与えた車は

ヴィッテンベルクに着く。

この車を迎えたのはルター

尼僧たちを伴れ出したのはルターに

依頼されたトルガウの評議員コツペだつた。

墨染の衣の十二人のなかには

ルターの恩師シュタウピッツの妹もいた。

またやがてルターの生涯の道伴れとなる

カタリーナ・フォン・ボーラもいた。

しかしその時は

神ならぬルターは夢思わぬわけだ。

ルターは確信していた

修道院的敬虔生活よりも

市民としての健全な家庭生活を

神は悦び給うと。

彼は農民戦争の戦禍のおさまらぬ

一五二五年六月十三日

ヴィッテンベルク修道院で突如

結婚式を極めて内輪に挙げた。

*還俗＝僧や尼が俗人に
戻ること。

修道僧ルターと

修道尼カタリーナとの結婚は

極めて福音的な潔きものであったに拘らず

敵側の悪宣伝の好資料となり

あらぬ忌まわしき風評が醸された。

彼にはそんな馬鹿げた風評は馬耳東風だ。

ルターの私生活

ワルトブルク城から

ヴィッテンベルク市に降りて来た。

彼の棲った処は修道院

それがやがて家庭の場。

彼はヴィッテンベルク市の大学教授

初めて俸給を受ける。

彼の著書を出版した者らは巨額の

富を作った。だが印税は僅少だ。

ルターは併し問題にしない。

彼の身なりはまことに粗野だ。

困つてゐる者を見れば

金銭でも衣類でも器具でも

惜しみなく与える。

ある時学生が病身の親を

見舞いたい金が無い。

ルターは助けてやりたいが、金銭が無い。

贈られた銀盃があつたので

「こんな立派なものには要らない。

君、これを金細工師に買ってもらつて

旅費をつくり給え」

ルターの在り方は凡そこの類で

隣人のために惜しげなく何でも与える。

人情に厚い彼は

人の喜ぶのを見るのが楽しい。

お人よしだから欺かれもする。

彼は笑っているだけだ。

光の子だから悪魔的なものには

敢然と戦う。彼が怒れば鬼も振える。

*馬耳東風、人の意見や批評などを聞き流すこと。

*印税、出版社・レコード会社などが著作権者に支払う著作権使用料。

*敢然、思いきつてするさま。

彼の書齋は書籍、原稿用紙、書類で

狼藉として足の踏み場もありやなしやだ。

独身時代の彼は万年床で、全く無頓着。

彼にとっては聖書の真理を探究し

そこに生きることが一切であり

無限無量のゆたかさであった。

「醒めて想い、寝ねて夢みる」ものは

唯だこれ「神の国と神の義」だ。

敵はサタンとローマでその他は問題でない。

仕事に熱中するとしばしば徹夜だ。

食事も忘れてしまうこと稀ならず。

ルターは少なからぬ尼僧たちを

修道院から解放させ

神の祝福たる結婚を勧めていた。

その一人に

カタリーナ・フォン・ボーラがいる。

彼女と二五年六月十三日

農民戦の余燼の中で

ルターは極内輪の人に囲まれて結婚。

その中にはルカス・クラナツハがいた。

彼は画才豊かだからその名画を遺した。

ルターは世ばなれの

修道院的敬虔の否定から

庶民的家庭生活に於ける福音の実践に

まことの宗教生活ありとの身証を旨とした。

その原動力の二焦点は十字架と聖霊である。

十字架・聖霊の不可離の現実に

生きんとする者にパリサイ根性は生じない。

そこには聖霊の愛が

人をゆるし、包んでゆく。

彼は神讚美の音楽を特愛し

自らも作詞作曲して

キタラを弾きながら歌った。

福音的讚美歌の創始者とおのずから成った。

サタンと戦うには

*狼藉 〓 乱雑なさま。散乱したさま。

*「神の国と神の義」 〓 マタイ 6・33「まづ神の国と神の義とを求めよ、然らば凡てこれらの物は汝らに加へらるべし」

*余燼 〓 燃え残りの火。

*身証 〓 自分の全存在で身をもって実証すること。

魂をこめて讚美歌を歌うにある。

彼の家はなやめる者困窮^{こんきやう}せる者らの宿舍^{しやくしやう}だ。

立ち去るときは皆

福音的歡喜の人となつてゐる。

彼の家は正に神・キリストの幕屋^{まくや}だ。

ルターは正に聖書を生きた聖書の人だ。

エレミヤの如く神の言に酔つた人である。

彼は庭さきに薔薇^{ばら}と百合^{ゆり}を栽培した。

紅白のこの二花は特愛の草花^{くさな}だった。

友人たちにこの二花の花環^{はなわ}を土産^{みやげ}にする

それが彼の清朗^{せいろう}なたのしみだった。

彼は旅人、知友、学生、どんな人とも

胸襟^{きようしん}を開いて語り合つた。

それがやがて編集されて

「卓上談話」^{テイシヨウレーデン} (Tischreden) となつた。

一五二六年六月、長男ハンスが産れた。

四十三歳にして初めて子供が与えられた。

一五二七年にルターは重症に陥^{おち}つた。

愛妻ケーテ (愛称) の身の上を案じたが

ケーテは応^{こた}えていつた

「もし召天^{しやうてん}がみ旨^{しめ}なら

貴方は私と一緒より

み許^{もと}の方が宜^{よろ}しいのです。

貴方は家族の者より

多くのキリスト者に

大切な人なのです。

ご心配に及びません」

ケーテの愛の看護でルターは再起した。

同じ秋にベストが流行し

ヴィッテンベルク市も襲^{おそ}われた。

選帝侯^{ていこう}廷も大学もイエーナに避難した。

ルターは市のキリスト者たちのため

踏み止つた。

病魔^{しやま}は猖獗^{しやうけつ}を極めたが

彼は人命救助に尽力。

*幕屋⇨天幕。テント。

遊牧の民が張つてはたみ、たたんでは張つて旅をした住居。モーセがシナイ山で十誡を授与された後、神の命令に従つて作つたテントの札押所。イスラエルの民族の荒れ野の旅に伴つて移動した。

*胸襟⇨心。胸中。胸襟を開く⇨心の中を打ち明けて話す。

*猖獗⇨たけり狂うこと。病氣など、悪いものの勢いが盛んなこと。

市長夫人その他知人たちが次から次と仆れた。

ルターはケーテと共に

おのが家を避難所にした。

知人たちが幾人も来た。

感染者が生じた。

そんな混乱の中で

長女エリーザベツが生れた。

ルターにとり

ケーテはフランスとヴェニスとも

替え難い存在であると告白している。

彼は言う

「神の言の次に貴いのは

聖なる結婚生活だ。

神の最上の賜は敬虔にして快活

よく家を整える妻だ」

一五二八年の夏、疫病の余波のため

エリーザベツは早くも世を去った。

その後次女マグダレーネ

次男マルティンが与えられた。

長男との三人の子らは

「三王国」だと言った。

「幼児の如く神の国を受くる者」*

とのキリストの言がルターの身に沁みだ。

一五三三年には第三男が与えられた。

三四年には第三女マルガレーテが生れた。

かくて「黒い修道院」であつた建物は

天国的な家族の家

旅人の宿、学生の宿舍！

ケーテの叔母マグダレーネも来て

よく助力した。

可憐な次女マグダレーネ

(愛称レーンヒエン)が

十三歳のとき重病に罹った。

ルターは深く折った。

彼はレーンヒエンに言った

*「幼児の如く」ルコ10・14、16「イエス之を見、いきどほりて言ひたまふ」「幼児らの我に來るを許せ、止むな、神の国は斯のごとき者の国なり。誠に汝らに告ぐ、凡そ幼児の如くに神の國をうくる者ならずば、之に入ることはせず」斯で幼児を抱き、手をその上におきて祝し給へり。」

「お前はお父さんの

傍にいつまでも居たいね

でも、あのお父さまのみ許へも

欣んで往くね」

「ハイ、好いお父さん

神さまのお思いになる通りに！」

“Ja, lieber Vater, wie Gott will.”

ルターはこれを聴いて感動した。

間もなく彼女はみ許に召された。

ルターは彼女のベッドの傍で祈ったが

涙がしげく滴つて止まらない。

娘をしかと抱いた。埋葬のとき

ルターは信仰の霊と愛情の心の

渦の中でどうにもならなかった。

内村鑑三先生が亡きルツ子さんを

偲んだ和歌

「その霊は父の聖國に安しとは

知れども尽きぬ我が涙かな」

を想うと、いずれの親も同じ心情だ。

「私も子供のとき死にたかったと思う。

そのためには此の世の名誉などは

すべて棄ててよい」

マグダレーネを愛惜してやまぬルターの

この一言に、人生のやりきれない悲哀を

感ずると共に、天国の虹が映える。

さてアウグスブルク国会は

一五三〇年九月二十二日に

次の如き一方的決議をなした。

「新教徒は来年四月十五日までの

猶予期間内に旧教に復帰すべし。……」

こんな決議を新教側が受け入れるはずなし。

新教諸侯と十四の自由市の代表者らは

袂をつらねて退場し、各々自国に帰った。

この報をコーブルク城で

聞き及んだルターは言った

「神のものは神に

カイザルのものはカイザルに帰した」

と。彼は詩篇百十八篇十七節を書いて

壁に貼った。

「Ich werde nicht sterben, sondern leben

Und des Herrn Werke verkündigen.

—— Psalm 118, 17

「われは死ぬことあらじ、ながらえて

主のみわざを言いあらわさん」

病床でこの句を仰ぎみて

慰めと力にあずかった。

この句は筆者もコーブルクを訪ねたとき

親しく見て

ルターのの昔をしみじみと偲んだ。

ディートリヒはメランヒトンへの

手紙の中で

「こういう恐怖と苦難の時代に……

彼は快活で信仰と希望に満ちあふれて……

まことに驚異です。

ルターは少なくとも三時間を

祈りに費やさぬ日はありません」

彼は窓辺で天の父神に

大声で堂々と祈るのであった。

祈ったことは必ず聴かれると

確信していた、キリストのみ言ことばの如く。

アウグスブルクでは

ヴォルムスの勅令ちよくれいの如く

ルターのの処刑の実施方針

寺領じりょうの返還が確認され

十一月十九日に閉会された。

一五三〇年の暮、新教諸侯と自由都市の

代表者たちは相互防衛の必要上

シュマルカルデン市で凝議きやうぎし同盟を結ぶ。

アウグスブルクの協締きやうていに対抗せんため

福音主義諸侯の団結はこれで強化された。

*「神のものは神にカイザルのものはカイザルに」II マタイ 22・21

*凝議II心をこらして相談すること。

これに由り、カトリック側から改宗する者が尠^{すくな}からず生じた。

ルターの晩年

コーブルク城を出たのが一五三〇年

それ以後をルターの晩年と見る。

彼はコーブルクを出てみると

新教への改宗者が多いので

勝利感^{きんりかん}もて欣然^{きんぜん}、感謝。

ケルンの大司教兼選挙侯

ヘルマン・フォン・ヴィートは

かつてルター破門の令書発布の際

従行して、ルターの著書を焚^やいた人だが

今やプロテスタントに改宗し

一五四三年ブツアーと

メラnhitonを招いたので

教皇から破門されたが、物怪^{ものけ}の幸^{さいわい}。

これより先、一五三〇年には

デンマークの王フリードリヒ治下の国会は福音主義を宣言。

スエーデンの独立を成し遂げた

グスターフ・ヴァザは一五二七年に

新教国たる旗を掲げた。

かくて北ドイツ及び北欧の大勢^{たいせい}は

プロテスタントと相成った。

実に内外多事多端^{たじたん}*

力戦奮闘の劇的事態のさなか

大学の講義は続け

聖書翻訳の大業を続行

新約聖書の完訳の一五二二年から

十二年にして旧約聖書を完訳した

噫^あ驚くべきかな。

彼ほど神の言に酔い、神言化身^{しんげん}の人物は

教会史上第一と言って過言^{かごん}でなからう。

ルター聖書はその霊的迫力、詩的格調

*欣然||喜ぶさま。

*物怪||思いがけないこと。意外。

*大勢||おおよその形勢。世のなりゆき。

*多事多端||仕事・用件などが多くて忙しいこと。

真理的内実性に於て

その後のどんな訳書も

これに匹敵ひつてきすべくも非ず。

ルター訳ドイツ語聖書全巻の初版は

実に一五三四年で、その原本の一つは

ライプツィヒ大学所蔵。

その写本（限定版）を不思議にも

私は手に入れた、天来のプレゼントだ。

さて小学から大学に到るまで

教育の根底は聖書

換言かんげんすれば宗教たるべし。

これがルターのおのずからなる教育意識。

恵福けいふくなるかな

聖書を土台とする欧米の教育は！

我が国の教育には

このような宗教的土台がない。

単なる民主主義では

真の人間形成はできない。

日本ではミッシヨン・スクールは

特種なものと見なされている。

宗教心の深い校長を伝統とする

私立学校こそ最も本質的な教育がなされる。

私は全国校長会議で

すべからく校長は山に籠こもつて瞑想めいそうして

たましひの教育の土台を自ら形成して

教育をなすべきなりと

三度叫んだことを憶えている。

ルターは一五二四年に

「キリスト教諸校の設立及維持および」

一五三〇年に

「児童就学に関する説教」の二論説を。

これらは国民教育の土台

人生登山の道標を形成したものと

言うべきである。この土台あれば

ギリシヤ・ラテンの古典を重んじる

文芸復興ぶんぎふくしゅう的教養を

自由に採り入るべしとなした。

それは歴史的にみても

ヘブライ精神とギリシア精神の

正しい融合あるところに

真の文化の発展がなされた。

拔山ばつざん蓋世がいせいの信仰の英雄ルターも

多年の超人的な激務たんだん多端と

劇的な悪戦苦闘で

彼の肉体が蝕むしばまれた。

即ち腎臓病じんぞうびょうでなやまされた。

常用多年のビールやワインで

肥大にもなっていた。

しかし彼は病をものともせず

福音の戦を続行。

ヴィッテンベルク大学の講義で

学生の魂を鍛きたえた。

一五四五年十一月十七日は

大学最終講義となり

正に創世記を講義し終った。

ルターの「信仰義認」を楯たてに

過あやまつた自由が市民や学生間に

跋扈ばつこしたので、ルターは嘆いて

「私はもう現世に倦あきた

旅人が宿を去る如くこの世を去る」

内村鑑三も、世を去るに当り

「こんな日本に愛想あいさくをつかせた」

と嘆なげじたのも

これと照応する信仰の勇者の嘆なげきだ。

一五四六年二月七日

彼の故里アイスレーベンから

愛妻ケーテ（Käthe 愛称）への

手紙の終りに

「悪魔がみんな、私のために

このアイスレーベンに集まっている。

*拔山蓋世 力山を抜き、気は世をおおうほど強く大きいという、気宇の壮大さの形容。

*跋扈 思うままにのさばること。勢力をふるうこと。

*愛想をつかす 嫌になつて見放す。

みんなで祈り、祈って……

助けてもらいたい」

地上の絶筆の終りの部分はラテン語で

「エリヤ、エリシヤ、バプテスマの

ヨハネ、キリスト及びその使徒らと

百年間業を共にせずんば

神の聖詩聖書は決して解し得べからず。

一五四六年二月十六日記之^{これをしるす}

肉体の力、絶無的なルターの

烈々たる文字だ。

彼こそはキリスト一点張りで

戦い抜いた改革者だ。

右の大文字は実に臨終の凱歌である。

一五四六年二月十八日の晨^{あした}

ルターは祈った

「ああ主イエスよ

哀れなるわが魂を汝に委ね奉る。

在天の神よ、私はこの世を去りますが

み許に永遠に……」

詩篇やヨハネ福音書の聖句を

最後の祈りとして

彼はキリストのみ許に召された。

原始の福音への

改革者ルターの凱旋的往生だ。

私は死という表現を厭う

彼の地上は六十三年。

親友メラnhitonは叫んだ

「嗚呼、神よ

イスラエルの戦車と騎士は逝けり*」

と。エリヤの昇天の如き

ルターの凱旋を直覺して。

ルター訳ドイツ語聖書の中には

ルターの祈りと告白が

おのずから沁みこんでいる。

正に聖書の人ルターだ。

*「嗚呼、神よ……」¹¹旧約聖書の列王記略下2・11・12「彼ら進みながら語れる時、火の車と火の馬あらはれて二人を隔てたり。エリヤは大風にのりて天に昇れり。エリシヤ見て、わが父わが父イスラエルの兵卒よその騎車よと叫びしが、再びかれを見ざりき」

内村鑑三

— 愛国預言者 —

白線高校時代にわが魂の扉を開いて

福音の世界に入れた内村鑑三が

一九三〇年春三月

明治、大正、昭和に互^{わた}り

その巨大な足跡

筆跡を遺^{のこ}して地を去った。

彼の生涯を茲^{こゝ}に

聖名^{みな}に在^あって謳^{うた}いつつ

近代日本精神史の

角^{すみ}の首石^{おやし}を偲^{しの}ばねばならぬ。

1

武門内村^{むか}四方^{よも}の神を
拝^{おろ}がみ暮す信の人ぞ

農校生に説き伏せられ

唯一の神に平安^{やすみ}を得ぬ。

2

北の農校学徒七名

安息日^{あんそくじち}をよく遵^{まも}りて

学^{まな}に励めばみな挙^{こぞ}りて

優秀なりき信の証し。

3

意志は根強く情は深く

頭脳^{めいぜき}明晰^{めいせき}選^{せん}びの人

うちむら かんぞう
一八六一—一九三〇年。
キリスト者・評論家。江
戸生まれ。札幌農学校卒。
アメリカへ留学。無教会
主義キリスト教の創始者。
雑誌「聖書之研究」を創
刊。足尾銅山鉱毒事件に
かわり、日露開戦時に
非戦論を唱えた。

1、9節は、讚美歌21
4「北の極なる氷の山」
の歌調で歌い得る。

*安息日ユダヤ教やキ
リスト教などで、一切の
業務を休んで会堂や教会
で礼拝をする日。キリス
ト教では日曜。

彼はヨナタン、フランシスなる

宮部金吾と無比の友情。

校^{こうぜ}是^{*}は何ぞ唯だ一言

ただ在れよかし「ジェントルマン」

その内実はされど深し

福音による馨^{かお}り床^{ゆか}し。

5 ああ天然は内村の愛

詩と科学との両眼もて

是^これを味わい何を見しや

神の心とみ業^{わざ}なりし。

6 首席卒業の鑑三帰省

儒学^{マコ}の化身父君^{ちんぎみ}にぞ

漢訳馬可^{マコ}を捧げたれど

屑籠^{くすこ}の中へ父は投ず。

7 孝心^{こうしん}熱き祈りの人

彼は屈^なせず尚^{なお}も呈^{てい}す

緋^ひくなべに父の心

聖書^{みふみ}に動き入信せり。

8 安中^{あんなか}教会、伊香保温泉^{いであ}

縁^{えんじ}となりて咲きし花も

徒花^{あだばな}なりし春の雨に

罪のなやみか国を出でぬ。

9 「音に聞きたる未知の国へ

神^{まも}し護れば勇みて往け」

父のはげましあなうれしや

北アメリカへ舟路^{ふなじ}を往く。

10 道を求めて修道院へ

身を隠したるルターの如く

エルヴィン村の白痴^{はくち}院ゆき。

11 身を粉にしてよく勤めたり

子らに貶^{けな}されなお愛せしも

心の中に平安^{やすき}はあらず。

12 院長ケルリン内村を伴^つれ

フィラデルフィアの慈善事業の

会に招きて一席せしむ。

*校是^二学校の定めた基本準則。

*馬可^二新約聖書のマルコ伝。

*孝心^二親をいたわり、親につくす気持。

10、25節は、讚美歌260「ちとせのいわよ」の歌調にて。

- 13 行手は更にワシントンなる
聾啞の学舎その馬車の中
出合いし人はD・C・ベルよ！
- 14 グロースター漁港食を断ちてぞ
祈りけるととき心の扉
行より信へ奇しくも開く。
- 15 「大志を抱け少年たちよ」
音に聞きたるクラーク先生！
ついに訪ねぬ旅の内村。
- 16 ゆかりは深しああアマースト
学長シーリーいとねんごろに
迎え入れたりこの旅人を。
- 17 全身は是れ感激の彼れ
学にいそしみ道を求めて
内村はげに火の如くなり。
- 18 シーリーは言う「おのれを見るな！
君が罪をば贖いし主の
十字架を見よただ十字架を！」
- 19 学長シーリー彼そのものが
贖われたる人の身証よ
ああその愛に彼は打たれぬ。
- 20 「札幌農校わが乳母校よ
アマーストこそはわが母校なり
十字架により新生したり」
- 21 たぐいもあらぬ主の十字架を
胸に抱きて帰途に着きたり
三年の旅に聖名を讃えて。
- 22 真実一路独立精神
貫きたるはこの旅人ぞ
神は随所に愛を遣れり。
- 23 終始易らぬモリス夫妻の
愛もそれなり苦難の路に
主の愛尽きずありがたき哉。
- 24 十九世紀八八年
復活の春太平洋を
渡りて望む富士の霊峯！

*聾啞＝聴力障害があつて聞こえないために、話すことができなくなる状態。

25 「愛しまつる主！ 君がためにぞ

愛する日本！ 汝のために
わが生涯を燃やし尽さん」

26 彼れ赴任せり北越学館

彼は語れり「人物養成

宣教師には任すべからず

校風は是れ自由独立！

27 真理の基は主なるキリスト

されば仏教自由にこなせ

拘われのなき大なる心

青年自ら学びとるべし」

28 されど教派の色彩のある

成瀬その他と意見の齟齬を

来たせし彼は北陸の地に

その年の暮離別を告げぬ。

29 その翌年の夏の光は

幼な友だち横浜加寿を

30

慰め人にえらびたるかな
内村二八かず子は二十。

明けて明治は二四の睦月に

噫、起りしは「不敬事件」ぞ

喧々囂々 不忠国賊！

彼は追放 石の枕か。

病に臥して死線さまよう

彼の看護に身も心をも

つかい尽せし愛妻かず子

遂に仆れぬ噫々無情。

32

「愛する者は失われたり

吾れ自らの失われなり

星も光を失われたり

夜啼鳥はも哀歌を弾す」

33

「悪鬼襲えり信の土台は

揺ぐに似たりいずこにか在る

わが信仰は地にか天にか

いずこに置かんこのうつせ身を」

26、37節は、讚美歌27
3B「わが魂を愛するイ
エスよ」の歌調で。

*齟齬＝食い違ふこと。

行き違い。

*喧々囂々＝口々にやか
ましくさわぎたてるさま。

わいわいがやがや。

*国賊＝国に害を与える
者。

*落魄＝おちぶれること。
零落。

*エレミヤ＝南王国ユダ

の滅亡期を体験した、前

七、六世紀ごろの大預言

者。旧約聖書「エレミヤ

書」の著者。

38

日本の随一 弓の巨匠たくみ

37

キリスト教界新神学なる
波紋に揺れしが正統派なりし
内村、植村、山路動ぜず
使徒信条こそは福音の基準。
かたみにゆずらず勝利は内村。

36

告白の如く深く講ぜり。
不敬事件を導火線として
教育と宗教の關係如何
井上、内村論戰熾烈。
彼を迎え入れ講壇に立たしむ
どん底の彼エレミヤ慕い

35

本郷教会 横井時雄は
親しき市に噫あゝ此処も無情。
海路を渡り辿りつきけり
独りとほとと山越え野越え
落魄の彼れ盛岡駅ゆ

34

42

英文記者にぞ成りたる彼れ
薩長政治を鋭く視て
黒岩涙香 万朝報
英書にまどめし内村なり。

41

内村語れり「後の世への
最大遺物」の名演説。
世界に日本を知らしむべく
日蓮、西郷、中江藤樹
鷹山、尊徳、偉人五人

40

「HOW I BECAME」三名著ぞ。
芦ノ湖畔なる夏期学校
日清戦争の直前時に
苦難の月日の血の文字は
「信徒のなぐさめ」「求安録」

39

熊本、大阪更に京都
内村のために道伴れたり。
岡田透師の愛娘は
健気なる乙女その名静子

*熾烈しりてつ勢いがさかんで、激しいさま。激烈。
*使徒信条しとくしんじょうキリスト教会の最古の信条で、普遍的に受け入れられ、告白される。
38、45節は、讃美歌370「めざめよわが魂」の歌詞にて。
*「HOW I BECAME (A CHRISTIAN)」余は如何にして基督信徒となりし乎。
*遺物いぶつ前の時代から残っているもの。
*中江藤樹なかつかとうじゅ一六〇八、四八年。江戸初期の儒者。陽明学派の祖。近江聖人と称された。
*鷹山ようざん上杉鷹山。一七五一一八二三。江戸中期の米沢藩主。当時米沢藩は極度の財政窮乏のため、大検約令の実施、農村支配機構の改革等、藩政改革を断行した。
*尊徳そんとく二宮尊徳。一七八七、一八五六年。江戸後期の農政家。通称金次。

- 46 日本教会史に新たな事態ここに生まれ「無教会」ぞぞ
派なく形なし群はあれど
独立自由のキリスト者ぞ。
- 45 日露の關係暗澹たり
日清戦争の主戦論者
内村前非を悔い改め
今や絶対の非戦論者。
- 44 〔聖書之研究〕創刊号
世紀のあけぼの千九百！
転じていよいよ福音戦
- 43 筆勢縦横時局批判。
足尾銅山の鉅毒事件
ゆるすべからざる人道無視
三十村民死生関頭
内村烈しく論難せり。
- 47 二つのJあり内村には
JESUSとJAPAN これを愛す
「キリストのために祖国のため」
我は在るなりと彼は叫ぶ。
二にして一つなり二つのJは
神と隣人のアナロギアぞ
義と愛に燃えて日本のため
彼は生涯を貫きたり。
- 49 内村の道は武士の道に
接木となりたるキリスト教
地方伝道の道に就きて
やまざる歲月流れゆけり。
- 50 熊本バンドは「日本組合」
横浜バンドは「日本基督」
札幌バンドは「無教会」に
夫れ夫れ展開聖名に栄光！
- 51 聖書の講義は今井館よ
秀れたる学徒 道を求む

郎。相模の人。独特の仕法で各地の農村復興を指導。節儉・陰徳を説き、報徳社運動として全国に展開。

*黒岩涙香 一八六二—一九二〇年。ジャーナリスト・翻訳家。土佐の人。『万朝報』を創刊し新聞の大衆化に成功。社会改革運動や「廢帝王」「噫無情」などの翻訳小説でも知られる。

*関頭 別れ目。

*論難 不正や誤りを論じ立てて非難し攻撃すること。

*暗澹 見通しのつかない、じめなさ。

46・70節は、讚美歌239「さまよう人々」の歌調にて。

*無教会 無教会主義。内村鑑三が創唱した、日本独特のキリスト教。教會的な諸制度を認めず、聖書中心の福音主義的信仰に立つ。

*アナロギア アナロジイ。似ている点から他をおしはかること。

52 内村慕いてドイツからは
若きグンデルト隣人たり。
男体女峯の山の裾野

戦場ヶ原に語らいける

「われは罪びとの首なれば

万人救済必定なり」

53 高橋ツサ子は家出をなし

内村を慕い良くかしく

信仰もあつく学を好む

されど病を得 遂に召さる。

54 彼女の故里花巻にて

葬儀に当りて噫内村は

言葉途絶えて十五分間

落涙するのみ空前絶後！

55 愛娘ルツ子ときに病みて

高熱半歳明治の終末

睦月十二日氣息絶えて

半時間を経て「もう行きます」

56 聖国を慕いて旅に立ちし

彼女を偲びて父内村

「今日は娘の天国への

嫁入りの式よ ルツ子万歳！」

57 彼女をみ国へ送りしのち

復活の信仰彼に目醒め

新たなる力胸に湧きて

歓喜と希望の歌となりぬ。

58 世界の大戦勃発せり

キリスト教国あてにならず

人類の罪は終末時まで

戦争また戦争果つるなからん。

59 キリストの再臨待ち望まん

再臨運動とみに起こり

内村さきがけ陣頭にて

烈しく獅子吼す審判の日を。

60 再臨運動東西へ

東京大阪京都神戸

*睦月＝陰暦正月の異称。

*勃発＝突然、事が起こること。

*獅子吼＝熱弁をふるうこと。

61

半歳あまりは火の内村
世界は何処へ往かんとする。
都の中央大手町に

聖日講演うち開けば

五、六百名の聴講者

内村全盛時代なりし。

噫誰か測らん大震災

62

全都の大半火に包まれ

流言蜚語飛び此処彼処に

鮮人虐殺数千名。

63

何たる混乱あさましさよ

何ゆゑ天譴臨みたるや

他人ごとに非ずただ平伏す

我ら立ち帰り神を畏る。

爾来福音は柏木なる

64

今井館にてぞ説かれたりし

此処に立て籠りイザヤの如

選びの人らに聖書講ず。

65

噫古希を迎え叫びて言う

福音万歳！更に叫ぶ

日本国万歳！時に弥生

二十三日ぞあな奇すしや。

66

床に正坐して「宇宙万物

人生みな可し言外無量

人類の幸と祖国の隆盛

宇宙の完成切に祈る」

67

内村鑑三 まことの人間

まことの預言者詩人なる哉

矛盾にみつれどいつわりなし

劇的性格 生涯然り。

68

彼は信ぜり唯一の神

十字架のイエス 復活の主を

再臨の主を生命賭けて

すべては体験いつわりなし。

69

内村鑑三 明治大正

昭和に互りて日本国の

*蜚語||根のないうわさ。
*天譴||天の下すのがめ。
天罰。

*古希||数え年七十歳の
こと。

*弥生||陰暦三月の異称。

福音の戦士 預言者なり

噫世界的なるたましひなり。

70

「吾は祖国のため 祖国は何ぞ

世界のためなり 世界は何ぞ

キリストのためぞ さてすべては

御神のためなり」

永遠の墓碑銘

"I for Japan, Japan for the world,

The world for Christ and all for God."

一九三〇年三月二十八日

内村鑑三は地上の生涯七十年を跡にして

キリストのみ許へ去った。

「宇宙万物人生ごとく可なり。

言わんと欲する事尽きず。

人類の幸福と日本国の隆盛と

宇宙の完成を祈る」

これが彼の辞世の遺言。

まことに偉大なる預言者魂。

彼は心魂の内なる世界に於て

またおのが環境たる社会、国家に對して

劇的な戦、矛盾、葛藤の生涯を

いつわりなく演じた巨人であつた。

しかしそれに耐えた力の秘訣は何か。

キリストの十字架である。

十字架の贖罪なしには

やりきれない魂であつた。

キリストの十字架で救われつつ

おのれの十字架を負つた生涯。

さりながら、使徒パウロの道う

ロマ書八章の聖霊の現実を

身証する使徒的信仰の課題を

あとに遺して彼は去つた。

*葛藤は互いに相反するいくつかの要求を同時に満足させることができないときに生じる心理的狀態。

藤井 武

— 精神史的詩人 —

日本憲法を明治大帝が發布した前年

一八八八年一月十五日、藤井武は

加賀^{かが}百万石^{ごく}の城下町金沢に誕生。

父はもと藩兵、後に陸軍に転じ

佐賀の乱、西南の役^{えき}

日清、日露の両戦に参じた生粋^{きんすい}の軍人

さればその男児は武と命名。

然るに武は生来不肖^{ふせう}の子^し

文字通りの「臆病者」

杞憂^{きゆう}に少年時代を脅え暮した。

その反面は虚栄心と告白している。

このマイナスを救うもう一つの心があった。

それは自然を愛する自然の心。

卯辰山と浅野川は彼の心を慰め

体を鍛えてくれる友だった。

学校では最優秀の生徒。

金沢の宗教は何か、北陸地方の浄土真宗。

だが加州藩祖前田利家は

吉利支丹宗徒の味方

ふじい たけし

一八八八—一九三〇年。

無教会主義キリスト教の伝道者。内村鑑三門下の一人。一九一五年内村の助手となり、二〇年、聖書研究会を組織して独立伝道に投じる。清純な人柄と熱烈な福音信仰によって、無教会運動二世代の指導的人物として多くの感化を及ぼした。

*加賀⇨加賀国。現在の石川県の南半分。

*不肖⇨親や師に似ず、劣ること。

*杞憂⇨将来のことについて、あれこれといらない心配をすること。とり越し苦労。

*加州⇨加賀国。

秀吉に斥けられた高山右近と

その同志を厚く庇護した。

二代利長も父の建立の神護寺で礼拝。

然るに徳川幕府は右近等を処刑せんとて

京都に送らしめたが

死一等を減じて国外追放。

フィリッピンの首都マニラに

葬られてある右近等の墓所に

彼ら殉教の魂は不滅の靈灯となっている。

吉利支丹武士高山右近の靈統は

金沢に絶えた。

彼は中学を卒業して直ちに旧制一高に入学。

そは一九〇四年（明治三十七年）

日露戦争最中。

虚栄心の奮ならぬ彼は外交官志望。

反之、彼の腹の底には

或る「総合的根元的意識」が。それは

「さびしみ！ 何かしら無限の空虚が

全宇宙を以てするも満たし能わぬ

地の極から、隣りの宇宙から

深刻なる悲歌が聞えてくる如き

或る偉大なる寂寥の感じ」

であつた。

彼はカーライル、テニスン

トルストイ等をかじつた。

しかし、問題は解決しなかつた。

彼の「自己」への目醒めは

この底なき悩ましさ」

あの時代の旧制高校生の優れた魂が有つ

深刻な個人意識を彼も体験した。

偉大な人物が青年期に陥りがちな

憂鬱の一つ。

彼はその「さびしみ」を

何で満たそうとしたか。

心は心を求め、魂は魂を慕つ。

*高山右近一五五二—一六〇四年。安土桃山時代の武将。キリシタン大名。キリシタン禁教令により所領没収。のち追放されてマニラで没。
*庇護。だいじにかばつてやること。保護。
*寂寥。ものさびしい感じのさま。

その志向は正しい向きであつたが求めたのは友情、信頼できる友。

彼の心魂は友に飢え渴いた。

刎頸かみけいの交りの友は居らぬか。

友は居なくてはなかつた。

しかし友も我も「根元のさびしみ」を

互に満たすことはできなかつた。

相対界に絶対的な「さびしみ」を

満たすものはない。

旧制一高の岩元禎先生は

哲学とドイツ語の名物教授。

この教授の授業でダンテ、プラトン

スピノザスピノザが何によつて

生きていたかを知らしめられた。

岩元先生は学生の愚問に対して

「馬鹿！」と大喝たいかくする。

それは高次元から来る

畏るべき權威であつた。

藤井はこの靈的な權威に降参。

生ける真理の世界は

わかるわからないではない。

降参するとその世界に吸い込まれる。

筆者は伝道で言う

聖書を読んで降参するまでは

聖書の世界に入れない。

「聖書研究会」で

聖書の世界に入れるものか。

私も、岩元先生ではないが

男性には「馬鹿！」と怒鳴りたくなる。

女性にはしずかに深くだ

おのずから涙を流すだろう。

藤井は「卓拔たくはつなる靈的水先案内」を

岩元先生に見た。

岩元先生はヒルティーヒルティーの

「幸福論」をテキストにした。

*プラトン II Plato

BC四二七〜BC三四七年。

古代ギリシアの哲学者。

ソクラテスの哲子を継承、

發展させて観念論哲学を

創始。靈魂二元論に立つ

て靈魂の不滅性を主張し

た。

*スピノザ II Baruch de

Spinoza 一六三二〜一七七

年。オランダの哲学者。

無神論者としてユダヤ教

団より破門される。デカ

ルト哲学の強い影響を受

け、神を唯一の実体とす

る一元論と、神はすなわ

ち自然であるとする汎神

論に立ち、最高の幸福は

神の知的愛にあずかるこ

ととした。無神論者とい

うより神に酔える人であ

つた。

*卓抜たくはつすぐれてぬけ出

ていること。

*ヒルティー II Wilhelm

一八三二〜一九〇九年。

スイスの法律家・哲学

者・政治家。著書「幸福

論」「眠られぬ夜のため

このヒルティーの『幸福論』が
藤井に聖書を繙か^{ひもと}しめた。

ヒルティーの福音による人生観に

藤井は感激。

次に宗教哲学的な網島梁川の書を読み

彼の生活態度に感激。一面識もない

梁川先生病に仆れるや、藤井は慟哭^{しうく}。

藤井はかくて聖潔^{せいけつ}を目指し

道德戦を自己に対して開始した。

精進^{しやうじん}すればするほど

おのれの弱さ、見にくさに、戦は敗北。

東西古今の宗教の戦士が

必ず突破すべき関門がこの戦。

「噫^{あゐ}われ悩める人なる哉

この死の身体^{からだ}より我を救わん者は誰ぞ^{*}」

キリストの最高最深の使徒

パウロは此^かく叫んだのであった。

藤井はかかる時しも柏木^{かしわざ}の

「野に呼^よわる声^{*}」を仄聞^{そくぶん}し

友らと共に怖^{おそ}る畏^{おそ}る門を叩いた

神を畏るる内村鑑三^二の。

部屋に通さるるや藤井は先生の

真前^{まへ}に座を占めた、体当りの求め心で。

先生は信仰迫害の体験を語る

藤井の心は燃えた

「見よ、この人なり^{*}」

と。かくて数日の後弟子入りし

爾来^{じらい}日曜聖書講筵出参。

ここに初めて本ものの「先生」を彼は得た。

内村はガラテヤ書のパウロの如く

信仰のみを叫ぶ無教會的信仰の元祖。

その告白は

「見よ、世の罪を負う神の羔^{こひつじ}を^{*}」

だが、洗礼もせぬ内村の福音を

藤井は体受^{わた}してヨルダン^{*}を涉った

聖書一卷を身読^{しんじく}し始めた。

* 慟哭^{しうく} 声をあけて泣くこと。

* 「噫^{あゐ}われ悩める人なる哉^二」 Ⅱ ロマ書 7・24。

* 「野に呼^よわる声^{*}」 Ⅱ マタイ 3・3。

* 仄聞^{そくぶん} いうわさに聞く。ほのかに聞く。

* 「見よ、この人なり^{*}」 Ⅱ ヨハネ 19・5 「愛^ここ」にイエス茨の冠冕^{かんむり}をかむり、

紫色の上衣をきて出で給へば、ピラト言ふ「視よ、この人なり」

* 見よ、世の罪を…… Ⅱ ヨハネ 1・29 「明くる日

ヨハネ、イエスの己が許にきたり給ふを見ていふ

「視よ、これぞ世の罪を除く神の羔羊^{*}」

* ヨルダン Ⅱ ヨルダン川、バレスチナ最大の川。

ヨルダンを渉る Ⅱ ヤコブは最初自分の杖一本だけ

を持ってヨルダンを渡った(創世記 32・10)。モ

ーセはヨルダンを渡ることを許されなかった(申

命記 3・27)。モーセの

イザヤ書第五十三章の

キリスト預言に彼は圧倒され

キリストはわが救主！

み前に無条件に平伏した。

と同時に大いなる平安が彼に臨んだ。

魂の曇天は晴天となった。

永き暗中模索の者に神は

キリストに在って自現し給うた。

彼の結婚は夫々の両親が予定していた。

その現世的考慮の奥に

神秘的な神の予定を感得し

神の定め給うた神聖を彼は体受した。

結婚生活は東京から

京都での官界生活に移行した。

一三年二月愛妻はチフスに襲われ

高熱四十度がつづくシユヴェーレ・克蘭ケ

(schwere Kranke)となった。

彼は熱禱を捧げつづけたが

高熱は四週間！

彼女の肉体は注射の跡だらけ

しかし彼女は神の声を聞き

キリストの力に満ちていた。

齡二十に満たざる喬子夫人は

入信後二年に満たざるに死線を越えて

病にうち勝ち

キリストに在るパラダイス！

果然、病床を彼女は出でた。

茲に武と喬子は死の波を乗り越えた。

全くキリストの愛の力だ！

爾後の生涯を神に捧げん

キリストの属らしく生き貫かん

これがこのエポック・メイキングな病の

齎らした恩恵の現実また約束であった。

彼は東北山形に転勤となったので

日本社会の健全な発展のため

後継者ヨシユアは奇蹟によつてヨルダン川を渡つた(ヨシユア記3・14

・17)。イエスがバプテ

スマのヨハネからバプテ

スマを受けたのはヨルダ

ン川である(マタイ3・

13・17)。ペテロの信仰

告白はヨルダン川の水源地のピリポ・カイザリヤでなされた(マルコ8・

27)。

*暗中模索は手がかりもなしに、さがし求めること。

*シユヴェーレ・克蘭ケはドイツ語で重病患者の意。

*エポック・メイキングは新しい時代をひらくさま。画期的。

地方の人材養成に着目し

新機軸を生みつつあったが

かねてより感じていた官界の

弊風^{へいふう}に耐えかねて

宿志^{しゆくし}たる著述伝道に踏み切らんと

一五年暮に辞表を呈^{てい}し

雪のホワイトクリスマス^の夜

二十八歳の彼は二十二歳の妻と共に

幼児二人を伴れて

山形の山々よさらばと立ち去った。

柏木の内村先生は親しく彼を迎えた。

内村先生の助手として諸般の業務

『聖書之研究』誌への寄稿^{きこう}にも参与^{さんよ}した。

さはれ一六年春の寄稿「単純なる福音」が

先生の贖罪^{しゆくざい}観に抵触^{ていしよく}し、差し止められた。

即ちロマ書三章のパウロの贖罪信仰を

義しく受けとつていないからである。

やがて彼の処女作『新生』の出版を

友人岩波が引き受けた。

爾来^{じらい}藤井の著訳書の出版は

すべて岩波が欣然と果した。

一七年の暮には

『聖書之研究』への寄稿も赦^{ゆる}された。

然るに彼の執筆生活を脅かしたものは

親譲りの弱点胃潰瘍^{かいよう}であつた。

一八年、第一次世界大戦の終局に際し

内村鑑三^{さといりん}は再臨運動講演の烽火^{のうし}を挙げた。

二年間に互^{むた}るこの運動に

藤井武は強力に参与した。

東京、大阪、岡山、その他諸市に於て。

藤井のその講演集が

二〇年暮『永遠の希望』となつた。

時に内村は五十八、九歳、藤井は三十二、三歳。

「末の世に信を見んや」

のキリストの預言の如く

第二次世界大戦、その後の核文明の

*機軸〓活動の中心。くふう。やりかた。

*弊風〓悪い習わし・風俗。悪風。

*宿志〓まえまえから心に定めた目的。かねてからの希望。

*贖罪〓キリスト教で、キリストが十字架にかかり、人類に代わつて罪をあがなつたこと。

*抵触〓食い違ふこと。矛盾すること。

*再臨〓キリストが世の終わりにふたたび現れて救いを完成すること。

*「末の世に信を見んや」〓ルカ18・8「我なんぢらに告ぐ、速かに審き給はん。然れど人の子の来るとき地上に信仰を見んや」

齋らしつつある大自然の危害と共に

人類の危機は迫りつつある。

再臨は質的に高まりつつある。

その後ある友の結婚問題を動因として

藤井は先生の許を離れざるを得なくなつた。

結婚観の相違のみなら忍び得るのだが

人格的信頼を裏切られた藤井は

これを忍ぶわけにはゆかぬ魂である。

彼は先生に反逆したのではない。

先生はこれを解し得ずして反抗と思つた。

冷たい関係は解けなかつたが

藤井の態度を誤解していたとの一閃が

先生の心に萌し、会いたいとの意向が

友人を通して彼に伝わるや

彼は直ちに先生を訪ねた。

和解は忽然と成り立った。

それは何によつてか

キリストの十字架である。

十字架のゆるしによらねば

生きられぬ内村は

あらゆる問題の解決を究極的に

十字架の下で果した。

十字架でゆるされ救われた者は

おのれをも他人をも

十字架の下でゆるすことができれば

十字架の贖罪を

真に受けとつていふことにならぬ。藤井は

「実に地上の経験とは思われない」

と回想している。この事件は

一九二〇年三月のことであつたが

これが契機となつて、先生の了解のもと

六月に藤井は月刊誌『旧約と新約』を創刊。

時に三十三歳、独立独往の路に着いた。

霊しき哉、神の召命の天道は！

福音の道は各人が已むを得ずして

執らしめられるアナンケーの路である。

*一閃Ⅱぴかりと光ること。その光。

*忽然Ⅱふつと。にわか。

*契機Ⅱきっかけ。動機。

*召命Ⅱ神が特定の人を選んで一定の仕事をする。

*アナンケーⅡ「せざるを得ず」というギリシア語。

天道に即した地路である。

『旧約と新約』の藤井は主筆ではない全く彼独りの個人誌に徹している。

宗教雑誌ではない、著述伝道誌である。

聖書註解誌ではない

即聖書真理告白誌である。

各号は或る主題中心の全人的信仰誌

かかる独一の性格をもった藤井武誌である。

執筆者は彼、諸般の業務は喬子夫人。

『旧約と新約社』は全く単純そのもの

何ら外的支援によらず、発足した。

二二年（大正十年）駒沢新町に新築移転。

二二年三月から神田基督教青年会館で

聖書公開講演を毎日曜日に開催

妻であり、三男二女の母であり

社の業務者たる喬子夫人！

藤井に快く信頼し服従してはたらく妻と

二人は一心同体で戦っていたが

彼女の負担は過重であつた。

二二年四月二十一日

彼女は吐血重床に臥した。

十月一日、一人十字架を負つたまま

彼女は他界した。

地上の生涯二十九年

美しい天国的な器であつた。

藤井は全身涙となつた。

詩篇を読みゆくうちに

「エホバ我をもたげて投げ棄て給えり」*

この一〇二篇の十節が全身にひびいた。

彼は彼女と共に此の世に死んだ。

どんな慰めも心耳にひびかない。

愛妻を失つた彼はその後の精神生活に於て

おのれをはじめて知つた

その弱さをその醜さを。

一切の道徳的努力も無力無効と知つた。

生来のおのれのどん底の相を知つた。

*主筆 新聞社・雑誌社などで、記者の首席として社説・論説や主要な記事を書く人。

*「エホバ我を…」 旧約聖書の詩篇第102篇9、10節「われは糧をくらふごとくに灰をくらひわが飲ものには涙をまじへたり。こは皆なんぢの怒と忿恚（いきどおり）によりてなり。なんぢ我をもたげてなげすめ給へり」

茲にはじめて

十字架の救の絶対不可欠を体受した。

絶対他力の恩恵たる十字架を。

妻と具に天界が現実となってきた。

来世の希望が現実となつて来た。

新しき光が臨んで来た。

この結婚生活の体験から啓示が臨んだ。

「羔の婚姻」という題の詩が

一三年春四月から

『旧約と新約』の巻頭に載り始めた。

この詩は百二十一号

ペンが彼の手から落ちるまで

欠かさず巻頭に掲げられていた。

この詩そのものが全藤井であった。

天界の彼女の存在が彼をして書かした。

それは全くベアトリーチェの存在が

ダンテをしてあの『神曲』を

書かした如くに。

「永遠の女性我らをひきて往かしむ」

の句をゲーテが大劇詩『ファウスト』の

終句となしたように。

日本における新詩調新テーマの

先生のこの詩は黙示録の半ばで

未完成交響曲となった。

私は孤独時代の先生の集會に参じた。

その最後の一年は黙示録の講義

これをメモしていた伊藤順子のノートを

種に私は先生のこの「黙示録」講に

心を合せて靈感されつつ

一ヶ月毎晩一講ずつ書いて

三十夜で完成した不思議な

恵みにあずかった。

謂わば先生との合作の如き

黙示録講となった。

新町集會出席の抑の始めに

*羔の神の小羊。イエ

ス・キリストのこと。新約聖書ヨハネ伝1・29、

36。ヨハネ黙示録21、22章。

*黙示録II新約聖書ヨハネ黙示録。

*未完成交響曲IIシュー

ベルト作曲の交響曲第八番口短調。仕事や作品が

未完成で終ること。

(筆者は、それがたとえ量的には未完成で終わつ

ても、その中に質的な完全性、永遠性をもつてい

ればよしとする。かえつて、その未完成のあとの

余韻を楽しむ。また、その消息を、満ちつつある

上弦の月に例えて、「満月を抱いて浮かぶ三日の

月」とも表現し、地上で未完成のものは天上で必

ず完成するとした)

黙示録の終章を聴き

最後に黙示録の終章を聴いた

まことに神の不思議な導きである。

さて歴史という語を知らぬヘブライ民族は

神の預言史を地で証して

天地創造の太古から

新天新地の完成に向って

聖書そのものが大劇詩を書いている。

これが神霊の啓示史である。

この神の歴史の中で

ギリシア系人はその哲学的思惟を以て

智の世界で神観の展開をなし

ローマ人はアウグスティヌスを以て

代表される情の世界で

人間観の深い役割を果し

ゲルマン民族はルターを以て代表者とする

意志の世界で救済の消息を身証し

宗教改革を以て福音的自由を開示した。

最後に日本人はその来世的希望の世界を

掲げて終末の世界を靈示する役割をもつ。

先生は「羔の婚姻」を以て

これを証示せんとした。

未完成だが「羔の婚姻」は

これを示している預言詩である。

ベアトリーチェに導かれたダンテの如く

天界の喬子夫人と共に

「黙示録」の聖国目ざして

わが国未曾有の詩は

上篇「羔」、中篇「新婦」

下篇「饗宴」と進み来て

その第十五歌「收穫」の続稿

「よろずのものの終につける

奥義はついに曙のごとく

.....

* 思惟は論理的な思考。

* 未曾有はまだ一度もなかったこと。空前。

先の二つの禍害^{わざわい}に増す

第三の禍害、地に住むものら

哀哭^{なげきはがみ}切齒^{きつ}することあろう」

ここで大詩篇のペンは手から落ちた。

ただ悲壮なる目指に

言い知れぬ愛を児^こらに遺^{のこ}して。

桜新町の預言者的詩人

万感を胸に抱きつつ

その逞^{たくま}しき英姿を消した。

想^{おも}えばこの絶句、二大世界戦のあと

大自然を台無しにしている

人類への預言でないか。

天藉^かするに尚^なお二年^{ふたとし}を以てせば

この「羔の婚姻」完結せしものを。

惜しみて余りあり、さわれ誰か知らん

未完成にこそ、こよなき余韻あることを。

内村鑑三と藤井武、この地上の二大巨星が

一九三〇年の春夏の天界にその光を移した。

さきの福音を土台とする

教育界の戦士新島襄^{しんとう}

庶民救済の愛の使徒賀川豊彦^{とよひこ}、そして

預言者的にして十字架信仰の内村鑑三^{かんざう}

詩人的な終末界希望の藤井武^{ふんけし}

天の川の白鳥座、北の十字架星座の如き

この四巨星、四つの真の巨光を

政治家たちよ、教育者たちよ

新たに認識し

大ベレストロイカ^{*}を起こすべし。

しかし、強調すべきもう一つのものがある。

それは無限無量の聖霊^{せいれい}の消息である。

十字架と不可離な聖霊の消息である。

パウロが

「聖霊を宿さざる者はキリスト者に非ず^{*}

と明言し、キリストが

「聖霊汝らに臨むとき力を得ん

* ベレストロイカは再編・改革・世直し之意。ソ連のゴルバチョフ政権が一九八六年以来推進している内外政策の基本路線。国内的には民主化・自由化、外交的には緊張緩和を基調とする。

* 「聖霊を宿さざる者はキリスト者に非ず」Ⅱロマ書八章九節。

わが証人となれ」

と言われたキリストのみ霊である。

この消息は無教会の流れから流れ出た

手島郁郎いくろうと筆者に使命がかかつて来た。

それはここでは語らぬこととする。

真白はかけき帆影たなび空に漂い

滴したたる緑葉幕屋を地に張り

よろずのものの輝く真夏

新町の里の預言者の詩人

ためらうことなき夕陽の如く

その逞たくましき姿を消した。

語らず言わず叫ぶことなく

ただ悲壮なる目指まんとしに

言い知れぬ愛を地には遺のこして。

その日その夕は巡めぐり来つれど

還かえり来まさざるはその人である。

時の車よ、などて彼をも還かえさざる！

子であり、父であり、兄弟であり

友であり、われには恩師たる

人らしき人は去りて今亡なし。

嗚呼ああ、今は地に亡き藤井先生

いかでかく速すみかに去り給いしよ

はや六十余年が過ぎゆきしとは。

人よ、小さき群を愛せし人。

そのなつかしき忘れな草の

葉しおりの片影をうつし出ださん。

ある秋のうららかなる一日ひとひ

師に伴ともいて数なき我ら

三浦半島を歩き暮した。

一包みの弁当箱をステッキに

結びつけてやをら肩にかき

おのれも必ず荷を負うべしと

弟子らに一步も譲ゆずらざる心

眼眸ひとみを遠く海と空とに

差し向けて悠々と歩む姿

*「聖霊汝らに…」
徒行伝1・8「然れど聖
霊なんちらの上に臨むと
き、汝ら能力をうけん、
而してエルサレム、ユダ
ヤ全国、サマリヤ、及び
地の極にまで我が証人と
ならん」

今もなおわがまなかいにある。

陽は鏝^{あいた}鏝^{たい}たる雲にかくれて

我らの歩みは未だ尽きない。

往き尽きて半島の端^{はし}に

到りしわれらを月は迎えた。

やがて三崎の岩頭に立つ。

名にし負う城ヶ島^{じょうとう}なる灯台の

光の明滅は夢^{うつつ}か現^{うつつ}か。

空ゆく雲は月華^{げつか}に映^はえて

白鳥の飛び渡るにも似たり

時しも懸^かかれる天心の星座^{しんそ}

白鳥^{シラス}と奇^くしき冥合^{めいごう}を示した。

やがてわれらの喉^{のど}の渴^{かわ}きを

癒^いさんと武蔵野^{むさしの}の牧人^{まきびと}は

大いなる美果^{みち}をとり出し給^{あがな}う。

これ、さきに途^{みち}にて購^{あがな}求^もいし品^{もの}

師^あの愛^{あり}こもる有^みの果^みの味^み

ネクター^{ネクター}ルも此^{かく}の如^{かく}きか。

夕空に突如流れ渡る声

師^{はらわた}の心腸^{しんちやう}より湧^{しらべ}きたつ曲調^{しやうべ}！

「清き岸^き辺^へに」^{*}の讃歌であつた。

声^{こゑ}に應^{こた}えて吾^{われ}らも歌^{うた}い

うたい終りていくばくもなく

小さき群^{ぐん}のため祈^{いの}り給^{たま}う。

岸^き辺^への祈^{いの}りは胸^{むね}底^{ぞこ}に沁^しみた！

三崎の波^{なみ}よ、潮風^{うしほ}よ忘^{わす}るな！

我^{われ}ら生^なきて祈^{いの}りに應^{こた}えん。

真鶴^{まなづる}、蓮光寺^{れんこうじ}、溝^{みぞ}ノ口

三浦^{みうら}三崎^{みさき}のこの散歩^{さんぽ}と

合^あわせて四度^{よたび}、など忘^{わす}れめや

新町五年、いかなる聖日^{せいじつ}も

休^{やす}むことなく私^{わたし}は貫^{くわん}き

聖書^{せいしよ}を親しく学^{まな}び通^{とほ}した。

午後にはミルトン、ダンテ

聖書^{せいしよ}の原語^{げんご}をこれに加えて

学^{まな}びし恩恵^{おんゑ}いつか忘^{わす}れん。

*鏝^{あいた}鏝^{たい}Ⅱかすみや雲のた
なびくさま。

*冥合Ⅱ知らないうちに
合^あう。自然^{しぜん}のうちに一致
する。深く合^あ一する。

*有^{あり}の果^みⅡナシの別名。

*ネクターⅡギリシア
神話^{しんわ}の神々の酒。蜜より
甘^{あま}く、飲^のめば不老不死と
なる靈酒。

*「清き岸^き辺^へに」Ⅱ讃美
歌489番。

預言者の死、聖旨は深い。

その実存と愛に迫られて

天の恩師と私は進む。

聖意みこころかしこみ聖霊により

いつかは折らるべき杖を執とり

聖言みことばの灯火ともしびをたよりに

私は後から、森を経て谷に出で

川を渡りて彼方かなたの岸の

戦いくさの場なる荒野に出でて

いつの日か神の呼び給たまうまで

愛の戦を戦い貫ぬいて

「曠野こうやの死」を独り賜たまわろう。

縦たとい人々に棄すてらるるとも

負いきれぬ十字架の下より

シオンの山の主を仰ぎ瞻みん。

賀川豊彦

— 愛の使徒 —

神戸の運送業者、賀川純一^{はんじやう}

商売繁盛^{はんじやう}だが妻と性格合わず

芸者^{ますえ}益栄^{たんいち}に端一^{さかえ}と栄を産ませた。

前世紀八と八年、明治二と一年七月十日に

菅生^{すけう}かめこと益栄は第三児を生んだが

純一^{とよひこ}は豊受大神のおかげだとて

豊彦と名づけ、かめに言つた

「この子出世するよ、神の子なんだ」

ふしぎなことを親爺^{おやじ}が口走る。

小柄のこの児、砂浜で相撲をとれば

遊び友だち彼に叶^{かな}わない。

「おまえは強いよ

だけど妾^{めかけ}の子じゃないか」

こんな汚名を浴せられた。

筆者も父の早死にのため、悪童に

「親爺^{おやじ}なし！」

と悪口^{あつこう}呼ばわりされたつけ。

餓鬼^{がき}どもの除^のけ者あつかいにやりきれず

豊彦は砂上に坐^ざして口惜^{くや}し涙。

蟹^{かに}を手の平に乗せて

かがわ とよひこ

一八八八—一九六〇年。

牧師・キリスト教社会運動家。神戸生まれ。神戸神学校・米プリンストン大卒。神戸貧民街の伝道をはじめ、労働運動・普通選挙運動・農民運動・生活協同組合事業などに尽力。

*前世紀八と八年—一八八八年。

*明治二と一年—明治二一年。

「おまえも独りか」

弟喜敬よしのりの出生で寂さびしさが薄らいだが

やがて父がこの世を去った、そのあとで

忘れ形見の弟益慶ますよしが生れたが

産後間もなくかめも純一の跡を追う。

やむなく栄と豊彦は正妻みちの実家いへに

第二人は乳母うばのお駒こまのもとに。

何たる悲惨事ぞ、別れのつらさ。

豊彦がこのように徳島の実家に

ひきとられたのは明治二十六年一月。

豊彦はまだ幼年期であつた。

この正妻に酷ひどい目に遭わされた。

吉野川の葦あしの葉かげで

豊彦は蟹かにや田螺たにしに噛かいた、涙ながらに。

桑くわの実をおやつにしたり

小鳥の歌に涙を拭ぬぐった。

学校でいつも独りぼっちだが

成績はいつもトップ。

優しく語りかけてくれたのは

小使いさんの娘子のふじえだけ

これが唯一の慰めだった。

この無二の相手が姿を消した。

悲しいかな、彼女は肺病で他界した。

兄の端一たんいち曰く

「おまえなら徳中に大丈夫入れるよ」

「いやだ、ほくもう死んでしまいたい！」

ふじえの死にまつわる誤解を気にして。

豊彦はトップ級で徳島中学合格。

二年生のとき英語の片山塾に入籍。

キリスト者片山正吉先生の影響で

アメリカ伝道者ローガン博士在席の

日本キリスト教会の門を叩たたいた。

ローガン博士の義弟マイヤーズ博士の

徳島本町自宅の聖書講義に

豊彦は欠かさず出席し始めた。

深い愛と信仰のローガンは

豊彦の身の上にあつい関心をもち
日々の祈りを以て彼を憶えた。

端一は親ゆずりか、好色で破産の憂目
そのため豊彦への支援が絶えた。

マイヤーズは豊彦のため霊の親として
具体的な支援を始めた。

豊彦の涙はマイヤーズの
キリスト愛で拭われた。

私は憶う、芸者で妾の母かめは
あたたかい心魂

才色兼備の女性なりしと。

偉人の母親が心魂の優れた

女性であることは

伝記をよむと、古来殆ど例外がない。
神は道ならぬ道を以てしても

優れた女性を撰んで

神の歴史にみ業を成し給う。

マタイ伝劈頭のキリストの系譜に

「サルモン、(遊女) ラハブによりて」
とか

「ダビデ、ウリヤの妻たりし女によりて」
とかあるように。

「かるかやの堤」から遠からぬ墓場で

豊彦は自分の運命に泣きぬれて

ヨブの如く

「生れざりせば善かりしものを」
と想いなやむその肩に手を按いた人がある。

「こんな処でどうしたんです」

声をかけたは教会の先輩森茂。

彼は豊彦の手を執り堤に向つて歩き出す。

夕陽が吉野川に金波銀波を漂わせ

夕空に黒い山影が映えている。

時に急ぐ鳥影二つ三つ

声を残して飛んでゆく。

「夕陽落ちて空くらく」の讚美歌を

* 劈頭＝始まり。最初。
冒頭。

* 「生れざりせば……」
旧約聖書ヨブ記3・11
3 「斯て後ヨブ口を啓
(ひら)きて自の目を
瞞へり。ヨブすなわち言
詞を出して云く、我が生
れし日亡びうせよ、男子
胎にやどれりと言ひし夜
も然あれ」

森茂が歌い出し、彼もこれに唱和した。

彼の心に何かあたたかい光がさした。

「神さまはお護り下さるよ」

マタイ伝六章の「空の鳥を見よ、……」

の聖句だよ！」

力強い先輩の声が豊彦に沁み込んだ。

森茂は何かしら蒲団包みを背負っている。

「こんなにおそく帰るんですか」

「ちよつと面倒をみてあげたい人が

あるのだね」

森茂の後ろ姿が

彼の心に愛の力をもたらしした。

一九〇四年（明治三十七年）二月二十一日

全生涯をキリストに捧げんと豊彦は決意し

徳島教会でマイヤーズ博士から受洗した。

想えば、筆者の生れて

二週間目の日なのだ！

正に日露戦争勃発の月

多くの青年が戦意に燃えている潮時に

キリストによる受洗。

これは実に彼の生涯を貫く戦の狼火だ。

絶対無抵抗の愛の戦である。

十字架を負う血涙の路ゆきである。

彼は読書で敵国のトルストイ文豪を知り

その徹底した無抵抗主義に感激していた。

彼は神無き社会主義ではダメなことを

神無き自由主義もダメなことを

況んや宗教否定の共產主義の欠陥を

生涯のドラマを通して身証してゆく。

中学五年卒業前の野外訓練に際し

彼は銃を投げ棄てた。

体育の教官が

「銃をとれ！」

「いやです。

人殺しの訓練は受けたくありません」

*「空の鳥を見よ」

三〇〇 マタイ6・26「空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に収めず、然るに汝らの天の父は、これを養ひたまふ。汝らは之よりも遙に優るる者ならずや」

*狼火のろし。台國のためにあげる火。

教官は鉄拳^{てつけん}を二つ三つ喰^{くら}わせた。

豊彦はそのため鼻血を出した。

「きさまは非国民だ！」

無抵抗の生徒を地面に叩き倒した。

「こいつは国賊だ！」

豊彦の体軀^{たいく}を蹴^けとばした。

叔父の森六兵衛は彼の受洗を知り勘当した。

彼は一九〇五年卒業はしたが

帰る家がない。

その時にも

「神はわが避け所また力なり」

となったのはマイヤーズ博士であつた。

東京市の西南部、美しい森と丘の

明治学院の高等部神学予科に

明治三十八年春、豊彦は入学。

彼は入学するや猛然^{もうぜん}と読書！

図書館のめばしい本を一日一冊。

まことに非凡^{ひはん}な読書力。

神学、哲学、文学、科学と広汎^{こうはん}に互^たつて

重要な箇所は書き留めながら読んだ。

筆者もかつて賀川先生の講演を聴いたが

メモなしで数字的なものに到るまで

自由^{しゆ}に而も正確に列挙されるには驚いた。

博覧強記文字通りの実力だ。

その源泉は明治学院時代からだろう。

「賀川は歩きながら

語りながらも読書する」

そんな言が友人の間で交^かされる。

目的に向つての邁進^{まいしん}たる読書三昧^{さんまい}なのだ。

コーヒー店で談話する暇はない。

実は筆者も大学時代

コーヒー店に入つたのは多分三回だ。

彼の親友は、加藤一夫^{かずお}、村田四郎

佐々木邦^{くに}、中山昌樹^{まさき}、高田銀造等で

終生不易^{ふえき}の友情を交わした学徒たち。

* 体軀^{たいく}からだ。

* 「神はわが避所」：

① 旧約聖書詩篇46・

1 「神はわれらの避所また力なり、なやめるとき
の最(いと)ちかき助なり」

* 邁進^{まいしん}＝勇んで進むこと。

* 不易^{ふえき}＝変わらないこと。
不変。

二学年の夏、徳島に帰省したとき

件^{くだん}の先輩森茂に会いたかったが不在。

マイヤーズ先生を訪ね、博士に訊いた。

「森茂さんが墓場のそばを通るさに

私に出遭^{であ}い

『めんどろを見なければならぬ人が』

といったのは何のためだったのですか」

「それは癩^{らい}病人、町はずれの寂しい処の

小屋の中にその人を訪ね

着物を着せたり

身の廻^{まわ}りの面倒を見たり

食物を食べさせたりして

キリストの愛をそのまま

黙ってやっていたのです。

彼は戦争に召集されたので戦地から

十日に一度の煙草^{たばこ}銭^{せん}をためて

それを私の処^{ところ}へ送って何か食べものを

あの癩^{らい}患者が飢えて死にませぬようと。

勿論、私は彼の代りに色々しました」

マイヤーズさんは微笑を浮べてそう言った。

豊彦の全身に火が燃えた、森茂の愛の火だ。

休暇を終えて帰校した豊彦は

この火のために別人になった。

勿論読書はするが、校友と親しく語り

暇を作つてはチャペルで深く祈る。

文学会にも出るが、祈禱会には熱がこもる。

パンに飢えてる人、絶望的な病者のため

涙を流して祈る賀川だ。

賀川が時折姿を消すので

或る時、中山昌樹が跡をつけた。

学院の東の谷間のぼろ屋の乞食^{こじき}を訪ねて

豊彦はその子らに飴菓子^{アメ}を頒^わけている。

讃美歌を歌って聞かせる。

咳^{せき}をする病人には

財布の小銭をみんなやつてしまふ。

寒い寒いと言う子供には

自分の上衣を脱いでやり

賀川はだんだんボロ着の人になってゆく。

それを見かねた或る婦人

彼に着物を贈ったところ

それも谷間の子供にやってしまった。

何やかやと貧民の病犬のためにまで。

過労と栄養不足で彼自身

血痰を吐き微熱に冒される。

一九〇七年の春

明治学院神学部予科を卒業

神戸神学校に転校のため

白金台地に別れを告げた。

秋の開校時まで

岡崎や豊橋の教会で伝道参加。

病身を顧みぬ働きのため

肺出血、発熱四十度。

医者は絶望とみて

親類に危篤の打電をしようとした。

その晩、奇跡的に危機を脱して助かった。

豊彦はその晩のことをあとで語った

「私は死を予感した。

魂が次第に肉体を離れてゆく。

すると光耀く美しい広野に導かれた。

パウロやパスカルがキリストを見て

喜び酔ったのも

こういうことだと思つた途端に

急に地上にひきもとされて眼が開いた」

この体験で彼は神の特別なあわれみを

死から生への呼び戻しを

感謝を以て自覚した。

初秋開校、通学間もあらせず病気の再発。

治療費生活費の一切を

マイヤーズ博士が引き受け

神戸衛生病院に入院させた。

経過思わしからず明石の湊病院に転入院。

闘病更に四ヶ月にしてやつと退院。

三河の漁村のとある家で

留守番をかねての保養。

「わが汝らを遣わすは

羊を狼の中に送るが如し。

されば蛇の如く賢く

鴿の如く従順なれ」

この聖句にはたと気がつき、こう決意した

大いに読書して賢明となり

何びとも負けるまじ。

神に信頼し、あらゆる苦難を突破せん。

やがて「鳩のまね」という

自伝的小説を書きあげた。

石油箱で机を構成り

大型の古雑誌を原稿用紙として

毛筆で書いた原稿である。

これを浄書して、明治学院の先輩

島崎藤村に呈した。

やがて藤村はこれを送り返して

「これはあなたが出世なさるまで

大切に保存しておきなさい」

との添え書き。

藤村の言に従って彼は時機を待った。

明治四十二年（一九〇九）初秋、神戸に帰り

神学校のコースを続けたが

過労の余波のため

今度は悪性蓄膿症に襲われ

再び危機に直面したが死線を越えた。

危機の夢の中で明治学院時代に面倒をみた

皮膚病犬が現われた。

「ジロー、おまえどこへ行つたんだ」

乞食の子らもぼろをまとって現われた

癩病人も杖にすがって現われた

浮浪者や酔漢らがよろめいて来る

酔漢は酒に酔った男

*「わが汝らを遣わすは
三 〥 マタイ 10・16 「視
よ、我なんぢらを遣はすは、
羊を豺狼（おおかみ）の
なかに入るが如し。こ
の故に蛇のごとく敵（さ
と）く、鴿のごとく素直
なれ」

*浄書 〥 きれいに書き直
すこと。清書。

*酔漢 〥 酒に酔った男。
酔っぱらい。

みんな悲しげな顔つきで彼を見つめる

「神さま、もう一度私を助けて下さい」

気の毒な人たちのために働きたいのです」

賀川は夢の中でも切々と祈った。

これらの人々の姿が霧の中に消えていった。かくて彼はまたみ霊のみ業で回復し始めた。

一ヶ月の後に退院したが、またもや

結核性の痔疾に罹った。

こんどは京都大学病院に入院。病床で

「ジョン・ウエスレー伝」(英文)を読み

深い感銘を受け、新たな祈りに入った。

癩患者をねんごろに看護した

森茂の幻影を見る。

この病床で彼が決意したのは

北本町の葺合新川の貧民窟

人間界のどん底に身を置いて

キリストの愛を体現せんことである。

一九〇九年(明治四十二年)の

クリスマス・イブに

賀川豊彦は木綿の筒袖姿で

蒲団、衣類の行李、書籍と書棚を

載せた荷車を自ら引っぱりながら葺合新川の貧民窟にやって来た。

而も十軒続きの長屋の

東から二軒目の檻樓家の前で

人力荷車を彼は止めた。

此れは貧民窟最低の荒屋だ。

表が三畳、奥が二畳の一室で

壁は血痕の飛び散り模様。

前年、殺人の惨事があった由

その証拠は夜に出てくる幽霊だ。

そのため借手がとんとつかない。

大家の曰く

「是れを借りる勇氣あらば

家賃は月に二円なり」

*ジョン・ウエスレー
1703年12月17日(一七〇三)九
一。キリスト教プロテス
タント教会の一派メソデ
イスト運動の祖。オック
スフォード大学に学び、
はじめ英国国教会の聖職
者であった。彼のメソデ
イスト運動はやがて国教
会の外に出て一教派をつ
くったが、イギリスの信
仰復興に大きく寄与した。

*行李 柳・竹・藤など
で編み、身とふたをほぼ
同形に作った物入れ。

そこで賀川は直約束。

もともと棄身の人助け。

キリストの聖靈の愛の身証だ。

一枚一円二十銭の古畳を三枚敷いて

荷物をやっと運び込む。

その晩はランプもなしで眠り込む。

二日目の夕方

浮浪者稲木、林、丸山の三人が

泊めて下さらぬかと名乗り出た。

賀川は「ああどうぞ」と同居を容した。

マイヤーズ博士から玩具の行李が二つ来た。

クリスマス・プレゼントというわけだ。

子供ら呼び寄せて頒けようとすれば

はやくも奪い合い。

「だめだめ！」

おもちゃが目茶々々になるよ」

彼らに耳あらばこそ

おもちゃに飢えてる彼らだ。

壊したおもちゃを手を抱え

それでも彼らは大満足。

年の瀬の二十七日、阿波屋の二階で

クリスマスの祝いと言つて集めた

百名ほどの貧しい人たちに

手拭と菓子袋を頒け与う。

彼らは嬉し涙で賀川と

昔なじみの人のように語り合う。

その晩かの同宿の八九三稲木が

「五円貸せ！」

短刀を賀川に突きつけた。

「そんなお金はもち合わせない」

丁度そこへ林が帰つて来て

稲木と林の取っ組み合いとなる。

稲木はひきあげたが

暴力団の園田を伴れて来た。

この園田が賀川に縄張り荒らしだと

つめかかり、なぐりつけた。

おまけに八つ当り、七輪を蹴とばし障子をぶち破り、刃物を振り廻すから

賀川は裏から逃げのびた。

海岸で夜釣りの篝火を見ていたが

神に新川を愛する勇気を切願した。

深く祈ってキリストのみに与った。

戻ってみると、園田はまだ胡をかいている。

七輪の火を起こし

あるだけのもので食事の用意をし

「園田さん」と呼びかけて

「気のすむまで食べてください」

八九三の文句は聞き流し

「自分は新川が好きなんだ」

賀川の本気の言に相手もやっとおさまった。

簞笥の奥の全財産二十円を

そのまま握らせた。

「恩にきまつせ！」

と一言吐くや出て行つた。

すると「おじちゃん」と言つて

入つて来たのは

両手のもげた人形をもらつた

花枝という女の子。

次に入つて来たのは

車輪のとれた汽車を抱えて熊蔵が。

二人とも嬉しさの報告なのだ。

二人とも眼をきらきらと輝かせていた。

さきほどの港の漁火のようだった！

一九一〇年正月二日

狭い住居に人々を呼び集め、新年礼拝。

キリストのはなしを易しくやつた。

お正月の餅を全員に配けてやつた。

福音のはなしより餅がもてたに相違ない。

花枝と熊蔵と甚公や虎市が

賀川おじちゃんと仲よくなった。

無邪気な彼らと遊んでいるとき

想いついたは日曜学校！
かんせい

関西学院神学部^{かんせい}の友らが応援に来た。

二軒おいた西隣り、六畳間を借りて

教会と日曜学校の会堂にした。

集つて来たは好いが

帰るとなると、下駄や草履の混乱で

大騒ぎには賀川テンテイ（先生）も

ほとほと閉口、どうしたものか。

友人の助けもあつて、続け得た。

「神戸イエス団」と命名し、友らと祈つた。

これが新川貧民窟伝道の第一歩であつた。
ひんみんくつ

花枝と熊蔵が

「テンテイ、テンテイ、ちよつと来て」

行つてみるとひどい荒屋だ
あばらや

老婆が土間に泣いている。
くわいは

そのまわりには猫が十三匹

彼女の貸家は首つり自殺があつた家

幽霊こわさに猫を飼つたが

それが増えてこの始末

老母は既に夫に死なれ、娘に棄てられ

屑拾いで露命をつないでいたが
ろめい

もうだめだ、自殺しようと思つて縄を架け

首を入れたが縄が切れてだめだった。

こんなはなしを賀川は聴いて涙した。

世の中の悲惨を一身に負い

十字架に架かつたイエスを語り

老婆を慰め、助けてやつた。

老婆は教会に通い出した。

子供らも道を歩きながら讃美歌だ。

賀川は彼らの青年期のため祈るのであつた。

新緑の五月のある日、数町はなれた

貝ボタン工場から使者が来て

キリスト教のはなしをたのむ。

期せずして伝道の道が拓かれた。
ひら

*貧民窟＝貧民が集まつて住んでいる所。スラム街。貧民街。

*露命＝はかないいのち。

工場の武内勝、芳夫の兄弟

その他七人の青年が教会に来て

教会や日曜学校の仕事を手伝う。

賀川の無私の伝道の愛が

次第に花咲き稔りゆく。

その頃の賀川の日課の概要は

晨の五時から青年教育

七時から貧民窟の病人見舞

あとの午前は執筆専念。

午後は病人の世話、子供との遊び

無文者や眼病人の戸籍届等の代筆役場ゆき。

時には葬式の司式一切を引き受ける。

夕の六時から夜学の先生

夜の八時から辻伝道

九時頃帰宅、読書して祈って眠る。

杉本法信という仏僧が

賀川の説教とその生きざまに感激し

キリスト教に改宗したので

本名中村栄次郎に「天国屋」を

一任することに相成った。

「天国屋」は貧者助けの

安値飯屋だから大入り満員

これを妬んで植木屋の辰という

酒癖悪の荒者がやって来て

大あばれして店はめちやくちや

更に賀川の教会堂に押しかけて

手あたり次第にぶちこわす。

賀川先生を尊敬している

けんか安という綽名の男が

「何を！」

といって辰に襲いかかろうとした。

これは大変と、賀川は

「安さん、安さん」

やがてマイヤーズ博士の後援のもと
一階飯屋「天国屋」を開業。

と宥め抑えて安きを得たとき

巡査が三人駈けつけて辰をとり抑え
先ず交番に留置し、消防手にたのみ
辰を荷車に縛りつけ、本署に送った。

その後、賀川は東京の貧民窟を視察し廻り
帰つてみると「天国屋」は遂に休業。

賀川の諒解の上、「天国屋」を閉業した。
中村の苦勞をねぎらい、転業を嘉した。

芝ハルという女工が福音印刷会社に居た
彼女は賀川の聖書伝道に心服していた。

伝道者のみ霊の火に燃えた眼は
感動して聴いている眼と照応した。

この伝道者は決して勿体ぶらない。

「私はね、新川に住む乞食の親分ですよ」
彼は度々の病で顔は青白いが

眼は光っている。

破れた素衣に破れた袴だ。

二人は身の上ばなしをし合つた。

女工は実は印刷会社の社長の娘

賀川の過去は小説よりも奇なる劇そのもの。
彼女の胸に敬愛の火が燃えてきた。

十二年のクリスマスが来た。

教会で乞食招待会を開いた、超満員だ。

ハルも手つだいに来た、愛に溢れた働きよ。
賀川の眼から熱い雫を誘つた。

「武内君、あのおみつさんはどうしたね」
半身不随の乞食のことである。

別な人がこう応えた

「先生、おみつさんはね

鶏小屋で寝とつたよ」

ただならぬ返答に、賀川は直ぐその小屋へ。

惨めな姿の彼女を見るや、彼は背負つた。

垂れ流しのため悪臭を放つ。

彼は自分のほろ家につれて来た。

これを聞いたハルは早速教会から

*諒解し了解。納得して
承知すること。

*心服し心から服従する
こと。

赤飯、吸物、蒲鉾^{かまぼこ}、煮豆という

クリスマス^{こっしす}の御馳走^{ごちそう}をもつて来た。

イエス^{イエス}団の人たちも

何ごとかと手つだいに来た。

悪臭のため彼らは顔をしかめた。

ハルは便の世話、着物の洗濯のみならず

自分の寝衣^{しんい}を替衣^{かえぎ}にしてやった。

その夜からおみつの病勢は逆転し

顔色はよくなり、口もともゆるんで

ハルを見て感謝の涙。

賀川とハルの聖霊の愛は

ひどい病者を癒^いした。

神はこのことに因^より二人の心を近づけた。

ハルは賀川のもとで働くことを申し出た。

「来るなら結婚のつもりで来て下さい」

まことに美しい天的な愛の約束だ。

一三年五月、神戸日本キリスト教会で

マイヤーズ先生司会、青木澄十郎司式で

聖霊の愛が結ばせた結婚が成就した。

救世軍^{きゅうせいぐん}の山室軍平^{やまむろくへい}から袴^{はかま}がお祝に。

二人は人力車に夫々乗った。

「何方へ？」

と車夫^{しやふ}が。

「新川の貧民窟へ」

車夫は耳を疑いまた訊いた。

賀川は大声で

「新川の貧民窟へ」

それが新婚の旅路である。

世界にたぐいなき新婚の旅路よ。

そしてこれが賀川の全生涯を表わす

キリストの愛の言葉ではないか。

どん底社会での愛の奉仕は

それ自身がキリスト愛の身証だが

いつまで続けても根本的な救とはならぬ

そう気づいた賀川に新しい啓示^{けいじ}が臨んだ。

*救世軍はキリスト教プロテスタントの一派。一八六五年、イギリスのメソジスト教会牧師ブリスが創始。七八年、軍隊式に編成した伝道と社会事業を行う組織に。

貧民窟を如何にして絶滅させるか。

その研究のためアメリカ留学を決意した。

ハルは横浜共立女子神学校を志した。

イエス団の仕事は武内勝に一任した。

マイヤーズ、ローガン両博士はこの挙を

嘉して旅費を二百円ずつ貸与してくれた。

ふしぎなことにその頃

みちが同居していた。みちとは

幼少年時に豊彦を虐待したあの義母

彼女は賀川の在り方に感激して昔を悔いた。

賀川豊彦は欣然と母を迎え入れた。

みちはこの外遊のため欣んで百円を捧げた。

豊彦は嬉し涙でこれを受けとった。

弟の益慶も大阪からやって来て百円くれた。

一四年八月二日

賀川は丹波丸で神戸を出帆。

頃は正にオーストリア・ハンガリー皇太子

フェルディナントが

セルビアの青年に暗殺され

第一次世界大戦勃発のただ中であつた。

賀川はサンフランシスコ上陸後

汽車でシェラ・ネヴァダ山脈を越え

砂漠を横断し、一四年九月に

ニュージャージー州のプリンストン着。

世界的なプリンストン大学受験

彼の答案は試験官を驚倒させた。

余りにも豊富な内容の答案のため

同大学及び神学校の席を得た。

優秀により毎月二十五ドルの奨学金を授与。

此処でも彼は一日一冊の英書を読破。

同大学の雰囲気は国際的且つ福音的で

福音伝道実践者賀川の人格は敬愛的

彼は優秀な学生等の

カルヴィンクラブ会員にされ第一学年で

早くもマスター・オヴ・アーツの資格を獲得。

第二学年クリスマスのは

マイヤーズ博士帰来し

降誕節^{こうたんせつ}をヴァージニアの

同博士宅で楽しく迎えた。

ハルからの手紙で

義母みちの死を知り涙の祈り。

一五年五月

バチエラー・オヴ・ディヴィニティ^{*}授与

常人の半分の期間でこの称号を得たが

学費の余裕なくプリンス^トンを去り

仕事を見つけた

旅費を作つてアメリカ大陸横断

一九一五年五月、横浜入港

波止場にはハルがハンケチを振つて

欣喜^{きんし}迎えたが……。

賀川在米中、武内勝はイエス団を

母と三人の弟と共に

よく運営したことを聞き

賀川は感謝感激の涙を流した。

しかしハルの妹ふみが

武内の叔母^{おば}に虐待^{ごうたつ}され

急性尿毒症、肺炎、喀血^{かつけつ}の末^{たふ}仆れた。

かくて武内とふみの結婚は破れた。

このことを聞き

賀川は言い難き涙にくれた。

だが賀川は更に次のことを聞かされた。

ふみはそのような仕打ちを受けても

却^{かえり}てその叔母^{おふみ}を不憫^{ふびん}に思い、臨終に際し

「あの叔母さんに

優しくしてあげて下さい！」

噫何たる美しき魂ぞ！

ふみはこの悪の地上に咲くには

あまりにも美しい花であつた。

武内もこのような女性を天界に送つて

涙の中から聖名^{みな}を讃^{たた}えた。

賀川の涙も虹となつた。

* 降誕節はクリスマス。

* バチエラー・オヴ・ディヴィニティは博士の称号。

* 不憫はあわれな事。かわいそうなこと。

賀川は感激の余り

後に小説『一粒の麦』の

芳江に於てふみを永遠に記念した。

キリストの愛の身証者武内勝と

その母とハルの妹ふみの文字通りの

棄身の愛でイエス団は

幼児、少年、少女の天国を現じていたが

これらの子供らが長じては

拘摸の仲間や暴力団入りとなったり

料理屋や置屋入りとなったりで

あわれ、地獄の暴風や淫風で

荒れた魂とみだらな心に化す者の

少なからぬ現象を何と見る！

「テンテイ、テンテイ」と言つて

賀川にまつわりついていた

花枝は料理屋に売られ……

熊蔵は拘摸の子分にされ……

賀川は新川を質のちがつたものにせんと

想をねり、新規やり直しにとりかかる。

しかし現状は不潔のためにトラホームが流行り出していた。

ハルが共立女子神学校卒で

帰川したので早速ハルに

目薬治療の巡回看護婦仕事を

やつてもらふことになった。

人手不足だから

「イエス団友愛救済所」を設置

福井捨一氏がその経費を負担し

姫野眼科医の診療奉仕で

新川に医療事業が始まった。

同郷の馬島が医療の応援に來た。

イエス団のは謂わば慈善事業だから

これに加担する人々がこれを支えた。

頃おい、第一次世界大戦で

神戸は、金の成る樹であつた。

市民の貧富の差が甚だしい。

賀川はこの社会問題解決のため

福音を土台の社会運動

労働運動にとりかかる。

一八年八月五日

富山県滑川町の漁夫ら三百

米騒動を起こす、これが狼火となつて

全国に燎原の火と燃え広がった。

神戸では二万余の暴徒が立った。

八月十二日、新川の労働者も米屋を襲った。

暴力沙汰まかりならぬと

賀川は清野知事に酒屋の閉鎖と

一週間の禁酒令を提唱したが

知事これを聴き入れず

新川の暴挙は賀川の憂慮の通り

竟に警官隊の出動となり流血の惨事。

清野知事は賀川の社会問題洞察の明に感じ

賀川に再会を求めて次の如く言つた

「貴殿はキリスト教に根ざした

博愛を以て日本の社会改善を

志して居られる。

貴殿こそ労働問題解決の

先頭に立つて戴きたい！」

この言は賀川の本質を伝えたのみでなく

今日に於ても社会問題解決の

根本精神であるべきだ。

賀川は下層階級を

上層権力の抑圧から救うべく

茲に神の義に拠る労働運動

神の愛に基づく社会主義の宣揚を

拡めるべく構想を練るのであつた。

二〇年三月、株式大暴落し、社会は暗黒の波。

銀行は破綻、貿易会社は倒産。

神戸港の汽船の汽笛が沈黙する。

*燎原の火は物事の勢いがさかんで、防ぎとめられないたとえ。

*博愛はだれでも平等に愛すること。

*宣揚は広く世界に示して、さかんにすること。

*破綻は物事が駄目になること。破局。商店・会社などの支払い停止。

生活苦で親子心中の悲惨事が起きる。

手形は動かず、実業家の自殺もあった。

諸々の犯罪が急激に増えた。

下層社会に同情を寄せている賀川は

労働組合の結成を待機する。

川崎造船所の工員青柿善一郎も

購売組合を考えていた。

賀川はそれらの同志を糾合して

労働組合運動と消費組合運動とを

労働者の表裏一体の運動と見なし

二〇年十月に「神戸購売組合」が発足した。

その事務所がイエス団の二階である。

これがその後の所謂社会主義者の組合と

本質的にちがうことに注目を要する。

そのメンバーの組合長は福井捨一

専務理事は林彦一、監事長谷川敞

仕入主任本多健太郎、庶務主任中山日吉

理事は賀川と青柿。遂に時期は満ちた。

彼は今や伝道者として

社会福祉事業家として

日本はおろか世界に名だたる賀川豊彦。

改造社と大阪毎日新聞社の

二人の社員が賀川の事業に注目し感激する。

改造社社長山本実彦は新川に

賀川を訪ね、非常に感銘。

賀川はそこで筐底の「鳩のまね」を見せた。

出版の段取りとなり、賀川はこれを

「死線を越えて」と改題した。

「改造」誌に連載したが

読者の感歎著しく

一躍、単行本として十月に出版。

賀川は正にこの「死線を越えて」が

旧約聖書のコーヘレス(伝道之書)第三章に

「万事時あり」とある如く

その時期を得たことを痛切に感じ

神に感謝の祈りを捧げた。

* 糾合 一つに寄せ集めること。

* 筐底 箱の底。

* 伝道之書第三章「天(あめ)が下の万(よろ)ず」の事には期(き)あり、万の事務(わざ)には時あり。生まるるに時あり死ぬるに時あり、植うるに時あり植えたる者を抜くに時あり。殺すに時あり医(い)すに時あり、毀(こ)つに時あり、建つるに時あり。泣くに時あり笑ふに時あり、悲しむに時あり躍るに時あり。……」

この本は百万部を越える
ベストセラーとなった。

『死線を越えて』は貧しき勤労者を

奮起させること如何ばかりか

これは小説にして小説に非ず

波瀾万丈の賀川的生活体験に

裏づけられた告白文学。

賀川は断じて売名者に非ず

俄然著名となった賀川に

講演を願う者、招待を申し出でる者

灯火の下に寄せる魚の如くであったが

賀川はことごとく断つた。

彼は新川の事業に相変らず力をそそぐのみ。

『死線を越えて』『太陽を射る者』等の

印税はみな福音活動、社会救済事業に

現実に困窮している人々のために

惜しみなく献金投入した。

その頃また川崎及び三菱の造船の労働者

二万数千名が過酷な労働条件

薄給のため、ストライキを起した。

賀川は彼らに深く同情し

総指揮者として起ちあがった。

決して暴力は用いざること

正当にして合理的な要求は断乎主張。

宗教改革時にルターの理念に反して

農民戦争が起つたように

賀川の信仰に基づく理念と行動が

暴動と誤解され、警官隊の出動となり

労働者団隊との衝突が起き大乱闘。

労働者側に死者が出た、負傷者も続出。

総指揮者賀川豊彦は逮捕され、刑務所投獄。

会社側も官憲側も賀川の真意を誤解

次元の相違からくる迫害は

史上、幾多の悲劇が示す通りだ。

賀川の釈明は理路整然、堂々たるもの

やがて釈放とはなったが

*俄然にわかに。たち
まち。

労働闘争で警官との衝突のため

牢中にいる人々の家庭を賀川は訪ねて毎月百円ずつねぎらった。

或る労働者の妻は援助のお金を受けて

「賀川先生は本当に神さまみたいなお方」

と感謝の涙。同感の人々が幾人もいた。

彼はまたイエス団友愛救済所のため

財団法人を組織した。

公事^{こうじ}としては

普通選挙権獲得^{かくとく}の運動が始まる。

二〇年一月十八日

尾崎行雄、今井嘉幸^{よしゆき}、賀川豊彦ら

乗馬姿で大阪市中をねり歩き

賀川作の「普選の歌」を歌いつつ大行進。

賀川の運動はどれも福音を土台としたもの。

然るに関東に起った大杉栄を指導者とする

政治運動は暴力をいとわない。

関西側と関東側のこの相違が

ある時、悲しむべき論争となった。

一九二二年（大正十年）から二三年に互り

賀川は多忙を極め、過労が病を度々呼んだ。

しかしそれは聖名^{みよな}に在^あつての隣人愛ゆえ

賀川は欣然^{さんぜん}として耐え貫いた。

二二年十月五日

京都での日本基督教大会のため

左の諸氏等、奈良は旅館菊水樓に糾合^{きうごう}

賀川豊彦、中山昌樹、村田四郎

吉田源治郎他十数名、祈りを共にし

ヨハネ十五章九、十四節^{*}の

イエスの言に拠り

「イエスの友会」を結成した。

即ち神・キリストの愛をもて

互いに愛することが焦点。

二二年一月から賀川編集主筆の

月刊「雲の柱」が警醒社^{けいせい}から発刊。

彼はこの霊雲、霊火を以て

*公事はおおやけの仕事。公共の事情。

*ヨハネ十五章九、十四節「父の我を愛し給ひしごとく、我も汝らを愛したり、わが愛に居れ。なんぢら若し、わが誠命をまもらば、我が愛にをらん、我わが父の誠命を守りて、その愛に居るがごとし。我これらの事を語りたるは、我が喜悅の汝らに在り、かつ汝らの喜悅の満されん為なり。わが誠命は是なり、わが汝らを愛せしごとく互に相愛せよ。人その友のために己の生命を棄つる、之より大なる愛はなし。汝等もし我が命する事をおこなはば我が友なり」

文書伝道の火蓋^{ひふた}を切った。

更にまた日本いずこであれ

教会や団体の求むるままに

伝道、講演に文字通りの

東奔西走^{とうほんせいそう}、南船北馬^{なんせんほくば}。

既に天下の賀川、到るところで超満員。

講演内容は印刷されて、新川にも配布。

いつも彼の心に懸^かかるのは農民である。

福島県で農村伝道をしていた

杉山元治郎が大阪に現われて

賀川の農村組合の構想を欣^{よろこ}んだ。

賀川の「大阪毎日」に報道した農村組合は

全国的な反響を呼び起こした。

二二年二月、機関誌「土地と自由」を創刊。

四月九日には神戸のYMCAで

日本農民組合の創立大会。

その役員は日本各県の代表的な人

殆ど全員がキリスト者。

賀川は途^{みち}すがら教会、キリスト教関係の

大学で講演しながら上京した。

東京の「イエスの友会」関係の

中渋谷教会で朝な夕な講演四日間

四方八方から聴講者来会で超満員。

またもや過労で秋二ヶ月は神戸衛生病院。

治るやまたもやイエス団のために奔走^{ほんそう}。

彼は既にその名世界に知れ渡り

アインシュタインにも出会^でつてゐる。

「死線を越えて」の独逸語訳^{ドイツ}

「Über die Todeslinie」を私は

西荻窪^{にしおぎくぼ}の古書店で見つけたので

翌日買わんと思つたが既に無し

残念^{せんぱん}千万^{せんまん}だったことを思い出す。

賀川夫妻は相も変わらず

新川の貧民窟^{もんく}の住民で

文^{もん}無し^{なし}の同居人もかつての如しだ。

八九三^{やぐさ}の松井が酒癖悪く

*東奔西走||あちこち駆け回ること。各方面に奔走すること。

*南船北馬||絶えず方々を旅行していること。

*奔走||目的を実現するために、関係先をせわしく走り回ること。

悪鬼の如く刃物を手にして荒れ廻る

賀川夫妻が武内勝を訪問中

恐るべき危機を醸した

賀川はために前歯二本と

上顎の骨を折られた。

彼は絶対無抵抗、こんな人間のためにこそ傷を負つても折つてやまない賀川夫妻は常人には見えない光に包まれている。

二二年のクリスマス頃、賀川夫妻に

男の児が与えられた、純基と命名された。

その慶びの次の瞬間、室を出るとき

椅子に躓き倒れた、どうしたことか

賀川は過労とトラホーム感染のため

眼病悪化で眼前朦朧

入院治療も効果乏しく

爾来賀川は視力薄弱

時に痛苦に襲われる身となった

愛の使徒賀川はしかし

心眼靈眼の人、肉眼の病苦を啣たない。

一九二三年（大正十二年）

九月一日十一時五十八分

突如関東に大地震、大東京は火の海と化す。

報を聞くや賀川は直ちに山城丸で神戸出帆

三日の夜、横浜入港、横浜も悲惨な状況

東京に来てみれば一面焼野原、死屍累々

罹災者の惨めなさすらい

正にこの世の地獄。

賀川は更に意外な風聞を耳にした

朝鮮人が井戸に毒を注いだと。これは

「二犬虚に吠ゆれば万犬実を伝う」の虚報

無実の罪のためどれほどの

朝鮮人が犠牲にされたことか。

ハルは大震災罹災者救援のため

衣類その他の物品を寄贈せんとて

* 啣つゝ不平・ぐちをいう。

* 罹災＝災害に会うこと。被災。

* 風聞＝うわさ。風評。

* 「二犬虚に……」＝ひとりかうそを言うと、大勢の人々がそれを事実として信じていふたとえ。

神戸の町を^{へめぐ}経巡り歩いた。

賀川は東京で罹災者援助のため

心ある人々と共に救護事業に尽力。

彼は一旦^{いったん}帰川し

関西連合大会に呼びかけて

衣類、布団、雑誌等の寄付を募り

四十箱を整え

再び船で横浜のYMCAに搬入。

アメリカ赤十字からは TENT 五枚。

賀川はキリスト教婦人矯風会^{きようふうかい}の渡辺照子と

天幕を夜陰に脱出して浅草公園に赴^{おもむ}き

寒さの中で半裸体で寝ている人々に

着物をかけて廻るのであった。

有田すてという実業家の妻が

財産のすべて、衣類、宝石類を

友人や雇用人に^{わふ}頒ち

残りの二百円を献金として持参。

賀川の許^{もと}ですて身の奉仕を始めた。

仲間から「ママさん」と呼ばれ敬愛された。

田中源太郎という大林組の大工が

賀川の救済運動に感激して

二十余円の所持金を全部捧げて

賀川先生の下で働き出した。

「服衣^{はつび}着た天の使者^{つかい}」と賀川は感激した。

更には広本久代という

人生の波瀾^{はらん}を乗り越え

人の世の裏面も知り尽した人が

毎日路傍伝道に従事

賀川先生の助主^{たすけぬし}のように働いた。

神戸からは馬島博士が仲間を伴れて

東京の焼跡で無料診療を開始した。

大震災の羅災者^{りさい}救援に始まった

福音的活動に申し出でた奉仕者の数は増し

その有機体的な団体は

宗教活動、社会事業、組合事業

法律相談、人事相談、職業相談等の

*波瀾は、大波と小波。物事に起伏・変化のあること。

諸部門を中心に、医療、諸配給
無料入浴場に到るまで

諸々の援助施設が備わった。

この比類なき奉仕活動の源泉は何か
ルターの名著

『キリスト者の自由』の劈頭の

「キリスト者は万物の自主にして

何ものにも隷属しない。

キリスト者は万物の隷僕にして

あらゆるものに隷属する」

という自由独立と万人奉仕の

この二命題の源流は使徒パウロの

コリント前書九章一九節だが

これを賀川は証したのである。

彼の愛の相が愛の波を起こし

キリスト愛のからだたる団体を現じたのだ。

内務省の官吏生江孝之がある日

音に聞き見学に訪れて来た。

彼はバラック建てのこの神の幕屋に
溢れんばかりの人々が生き生きとして
喜んでゐる姿に感歎して訊いた

「一体、どうやってこれだけの人たちに

食べさせていらつしやるのですか」

賀川はこの問いに対して微笑ながら

「どんなに大勢いても

神さまは養つて下さるのです。

私たちはふしぎにも

何回も助けられました。

ここにゐる人々と

これから食物を分け合つて

最後のお米の一粒までも

彼らと仲よくわけ合うつもりです」

生江は参った！

平身低頭して帰って行つた。

人はもと靈止、神靈の止まる存在

神を見失い、神を無視する社会も国家も

*劈頭Ⅱ まつさき。最初。
冒頭。

*隷属Ⅱ 人につき従うこ
と。従属。

*隷僕Ⅱ しもべ。

*コリント前書九章一九
節Ⅱ 「われ凡ての人に対
して自主の者なれど、更
に多くの人を得んために
自ら凡ての人の奴隷とな
れり。」

いつか必ず破れ亡びるときが来る！

賀川の在り方は、その全存在を以てする

警告であり、預言であるのだ、現に今でも。

「今こそ我らが立ち上る時です」

その晩、祈禱会で彼は同志に叫んだ。

何のためぞ、日本の救霊運動のため

「本所キリスト教産業青年会」と命名した。

浅草観音堂の下には野宿の者ら

七、八百人もいるではないか

賀川は見かねた、浅草寺を訪ね

公園内に天幕の許可を願った。

許可どころか、住職は感激して

「どうぞどうぞ」

住職は、加^{しかのみならず}之率直に告白する

「わたしや、正直言つて

ヤソ教はきらいだった。

ヤソ坊主を心から軽侮していた。

だが、あなた方は異^{ちが}う

真^{まこと}の愛の人だ」

賀川と仲間の人たちと握手した

「あなた方の手は暖かい、どうか

わしら仏教徒をきらわんで下さいよ」

浅草寺の住職は賀川に感服の余り

いろいろ手つだつてくれ

お賽銭^{さいせん}をもつて来た。

愛は宗派を越え、考え方の相違を超えて

不幸な人々への愛の奉仕と燃えた。

賀川は過度の活動や講演で

二四年の春三月またもや眼病あらたまり

一時は失明状態、急性腎臓炎も起こしている。

医師の忠告により静養となる

京王線^{かみきんせん}上北沢駅^{きたざわ}南方の松沢^{まつざわ}で。

神戸の葺合^{ふきあい}新川のイエス団は武内勝が中心

賀川の力で

鉄筋コンクリート四階建が立った。

東京では女子医専卒のハルの妹芝やえが友愛救済所で治療活動に入る。

神戸と東京の二焦点をもった

太陽の如きイエス団と相成った。

一九二四年霜月しもつきから八ヶ月に亘り

世界一周旅行を賀川は試みた。

アメリカを除いた北半球は戦乱の

あらしの前の不気味さを彼は感じた

特に軍国主義の日本に。

彼の不在中、日本M.T.L（救癩協会）が

後藤安太郎、鈴木恂まことを幹事とし

地道な仕事を開始して

賀川をもそのメンバーにしていると知り

あつき友情に感謝した。

と同時にあの気の毒な癩病人の世話を

独り黙々もくもくとしてやっていた徳島の

森茂のすがたを彼は想い浮べた。

二五年七月三十日

箱根は御殿場東山莊とうざんそうで開かれた

イエスの友修養会で賀川は

全国的な救霊運動を企てんと宣言し

「百万の霊を神に捧げん」と深く祈った。

賀川が世界旅行で感じたことは

第二次世界大戦への危機である。

一番危ないのは強力な軍備をもつ日本。

反之、神の国建設を日本のキリスト教界

は

真剣になさねばならぬと

彼は自覚しこの新運動を開始した。

二八年春三月

ダビデの市エルサレムで世界宣教会議開催

賀川は日本に於ける福音戦の悲願として

「百万人運動実行」のプログラムを発表し
せいれい聖靈の執成とりなしを祈りつつ

「神様お願いです

愛する日本がこれ以上

おそろしい罪を犯しませんように」

賀川は全身の平伏しを以て祈った。

三一年九月十八日の夜

満州柳条溝付近で

満州鉄道爆破事件が起った。

これを契機としての

日本軍部の野望は何であつたか。

翌年の春三月

日本軍部は満州国を推し建てた。

世界の眼がこれを正当視するはずがない。

日本の狐狸こり*的な策謀さくぼうは必ずや

崩壊の時来たと賀川は見た、涙しつつ

彼は神に平伏して日本の罪を謝した。

日本のために祈る朝晩であつた。

賀川は「雲の柱」誌に

毎号けいせい*警世の文を掲げて

神の国運動を烈しく進めた。

たましひの教育を第一とする教育

神の下、キリストの愛を以てする民主主義

これのみが真の平和国家たるべきの道。

賀川はいよいよ靈の戦を戦った。

「国賊!」「非国民」「売国奴」ど

彼はこんな罵詈ばり*惡口を投げかけられた

中学五年の軍事訓練のときのように。

禍害わざわいは禍害を呼ぶ

人間界の戦争というあらし

三陸方面の大地震、大津波

農民も漁民も飢えたり、凍えたりだ。

賀川の祈りは直ちに行為に化する。

イエスの友会は援助隊を災害地に送る。

彼自身、身を粉にして連日荷車をひき

*狐狸ニキツネとタヌキ。
人をはかすもの。

*警世ニ人の世を戒める
こと。

*罵詈ニのしること。
罵倒。

東京を歩き廻り、衣服、食料の寄付を募る。
関西では暴風雨で水害続出。

この救助に「四国島セツルメント」が活動。

東京からはイエスの友会が援助に出動。

東北の地震のあとの飢饉きんによる

困窮こんきゆうの家庭の子らを

一、二年あずかりもした。

賀川が東北のある町を通りかかると

袖そでひきとめる「街まちの女」があつた。

「ちよつと寄つていらつしやいよ」

問答二三、顔を見ると、驚いた。

「花枝ちゃん、あんた花枝ちゃんだろう」

また問答二三

「知らないね、そんな茸ふかあひ合新川なんて」

賀川は持ち合わせの小錢をみんなやつた。

酒場の八九三やぐざが彼女をひっぱりこんだ。

噫、「テンテイ、テンテイ」と言つて

慕つてくれたあの娘

「猫のおばあちゃんを助けて」

と案内したあの娘の変りはてたこの姿

讚美歌は酒場の歌に

天国の少女が地獄の魔女となつたのか。

誰の罪か、政治の罪か、社会の罪か

そして彼女自身の。

賀川精神は年々波及し

農民福音学校が諸所に。

キリスト教保育園、結核療養所

「ベテルホーム」等。

反之、三七年七月、蘆溝橋事件ろこうきょうじけんが勃発

日中関係は長期決戦に深入り。

そのピークを成すものは南京大虐殺事件なんきん。

日本軍に武士道の片影すら見えぬとは！

一九四〇年八月二十五日の聖日松沢教会で

平和と無抵抗主義を語っている際

二人の私服しふくが賀川を拉致らちして行つた。

*私服＝官服以外の服を着た警察官。
*拉致＝無理に連れて行くこと。

問答の末、裏の留置所に入れられる。

小川清澄牧師も捕えられた。

二人で「十字架の血に」を唱い出したら叱りとばされた。

毎日訊問、憲兵は訊問しているうちに

賀川は本当は愛国者で売名家でも

非国民でもない、そう感じとり

遂には「賀川先生」と敬意を示す。

この憲兵分隊長の意思に反して本部命令で

陸軍刑法第九十九条により

「雑言蜚語罪」として起訴。

東京地方裁判所、判事の簡単な訊問のあと

巢鴨拘置所に運ばれて囚人服だ。

看守は賀川と小川を乱暴に取り扱う。

賀川逮捕のニュースが国の内外に伝わる。

外務大臣松岡洋右がこれを知るや

司法大臣風見章に対して

「賀川さんを直ぐ出せ

それが出来ないのなら

自分が代りに刑務所に入る」

と言つて釈放を迫つた、これも報道された。

四〇年九月十三日、賀川と小川は突然釈放。

賀川が家に電話すると教員が祈りの最中

ペテロが天使の助けで牢を出た故事を思ふ。

問題の人松岡はこのとき天使となつたのだ。

その後、賀川は再び各地伝道

その間、日米関係に暗雲がたちこめる。

一九四一年の春

日本キリスト教団は世界平和のため

平和使節をアメリカに送り出す。

山崎道雄、賀川豊彦、小川清澄等七、八名

ロス・アンジェルスの

イエスの友会に迎えられる。

リバーサイド・チャーチで

両国代表全員糾合

*蜚語＝根のないうわさ。

*ペテロが天使の助けで牢を出た＝使徒行伝12・5・10「斯てペテロは獄のなかに囚はれ、教会は熱心に彼のために神に祈りをなせり。……視よ、主の使ペテロの傍らに立ちて、光明室内にかがやき、御使かれの脇をたたき、覺していふ『疾く起きよ』かくて鎖その手より落ちたり。御使いふ『帯をしめ、靴をはけ』彼その如く為たれば、又いふ『上衣をまとひて我に従へ』ペテロ出でて随ひしが、御使のする事の真なるを知らず、幻影を見るなと思ふ。かくて第一・第二の警固を過ぎて町に入るところの鉄の門に到れば、門おのづから彼等のために開け、相共にいでて一つの街を過ぎしとき直ちに御使はなれたり」

毎日、朝、昼、晩と三回祈禱会、懇談。

賀川の存在は大きな力であった。

政治上の、民族間の隔たりは消えていた。

ニューヨークのルーズベルト・ホテルの
ごさんかい
午餐会で賀川はつと立ち上り

涙ながらに叫んだ

「皆さん、今の世界を想うと

食事が喉を通りません。

日本とアメリカのために祈りましょう」

ホールは祈禱会場に化した。

アメリカと日本の非戦のための熱禱である。

四一年十二月一日、アメリカの伝道者

スタンレー・ジョーンズから

ワシントン教会では

日米会談の平和解決のため

十一月二十九日から一週間徹夜祈禱会突入

との報せ、これを聴いて

賀川は直ちに神田教会の小平国雄

益富政助、イエスの友会幹部とはかり

十二月一日から一週間の

徹夜祈禱会を實行した。

蠟燭の火蔭に平伏して平和を切願。

一週間の果てに蠟燭の火は消えた

正にその十二月八日の晨

ラジオは日本海軍機が

ハワイのパール・ハーバーを空襲し

主力戦艦数隻を撃沈と報道。

噫、日本の暴挙如何せん

そう賀川は思った。

これとは別に外交官寺崎英成は

愛妻アメリカ人ゲンとの

国際結婚の奇運により

外交政治が軍事の上位である原則を以て

百方手をつくして日米外交界の融和を謀り

軍部を納得せしめんと努力したのだが

残念ながらそれが実のらなかった。

寺崎英成とグエンの独娘^{ひとり}なる

天使の如きマリコを

日米の虹の橋の如き存在として

『マリコ』と題した名著を以て

ノンフィクション著作家柳田邦男が

日米戦争を何とか喰^くいとめんとした

その詳しい経緯^{けいゐ}を伝えている。

賀川が最も憂えていた

第二次世界大戦来たらば

日本は敗戦することを彼は予見していた。

彼の愛国は日本人の魂に対する熱愛で

戦後賀川は伝道と社会事業を力強く再開

あの病痕^{びょうこん}だらけの体^{からだ}で

よくもあれほどの活動を。

それは聖霊の力に

裹づけられた愛であるからだ

そのことが一般に洞察^{とうさつ}されていない。

使徒パウロに能^{あた}らいていたあの聖霊の愛だ。

賀川が創設した「キリスト新聞」社は

賀川精神を以て貫くべき使命をもっている。

彼は敗戦後も世界の賀川として

海外講演旅行で巡回した。

この第二次世界大戦を顧^{かえり}みて

いかに列強の権力者や軍部が

欲心から発する諸々の齟齬^{そご}、敵視を以て

戦争を捲^まき起こし

何ら恨みもない幾千万の庶民が

徒^{いた}らに生命を犠牲に供したか

世界の歴史は同じ罪業を

諸々の相を以て繰り返している。

人の世の罪の深さよ

釈迦^{しゃか}の悟りも徒然^{とぜん}であつたか。

キリストの十字架の血も徒^{いた}らに流れたのか

世はどうなろうと

*洞察Ⅱ自分の知恵や経験に基づいて、物の本質・事情・原因などを深く見抜くこと。明察。

*徒然Ⅱいたずらに。あてもなく、むなしこと。

キリスト、釈迦を始め

まことの愛を以て生きた人は

真心を以て生きた人は誰であらうと

断じて徒らに死んだのではない。

賀川は帰国後、四国伝道の途次^{とじ}

年来の諸病の再発のため卒倒。

慢性腎炎、気管支拡張炎、心臓肥大等

その後一年、一九六〇年の春四月二十三日

武蔵野の上北沢の自宅で

病床にあつた賀川を

小崎道雄夫妻、都留仙次

ヘレン・タツピングの四名が見舞つたが

彼らの帰るにあたり

賀川豊彦は大声で祈つた

「神さま感謝いたします。

教会を強くして下さい。

日本をお救い下さい。

世界の平和をお護り下さい。

すべてを聖手にゆだねます。

イエス・キリストの聖名によつて

アーメン」

これが彼の今生^{こんじやう}の最後の祈りとなつた。

その晩九時十三分

キリストの愛の使徒

賀川豊彦はしずかに天界への

不帰^{ふきき}の旅路についた。

言いつくされぬ苦難を

み名に在つて共にした

ハル夫人に親しく見護られ

見送られつつ。

*今生^{こんじやう}この世。現世。

*不帰^{ふきき}二度と帰らないこと。

第六篇

特殊な人物

禅海

— 青の洞門 —

北の国土^{くに}越^こ後は高田の藩士の子

福原市九郎、その性^{さが}は純、その資^{たち}は真

思春の頃から悪^あしき友^{とも}らに誘^{さそ}われて

魂^{たま}を酔^よわせる水^{みづ}に溺^{おぼ}れて

眼^{はだ}と膚^{かわ}を蕩^{とろ}かす異性^{いせい}に耽^{ふけ}りこみ

茶屋置屋通いに先^{おき}だつものの欲^{おき}しさに

親^{おや}命^{めい}の金子^{きんす}をちよろまかし

お袋^{ふし}の懷^{こころ}中^{なかつ}を騙^{だま}し取り

果^はては博^{ばく}打^{うち}の賭^{ばくち}けごと^{ごと}にのめり込^こんだ。

悪^{わる}しき習慣^{しゅうはん}、性^{さが}となり

坂^{さか}を転^{ころ}げる石ころか

山^{やま}から流^{なが}れる谷川^{やがわ}か。

水^{みづ}は低^ひきに流^{なが}れ去^さる

自然^{しぜん}の相^{すがた}に漢^{かん}民^{みん}が

法^{はふ}という字^じを作^{つく}つたように

市九郎^{いちくわう}、悪^{わる}の法^{のり}に身^みを落^おとし

遂^{つい}に勘^{かん}当^{とう}の憂^{うれ}き目^めを受^うけた。

酒^{しゅ}色^{しき}の徒^と輩^{はい}に相^{あい}談^{だん}しようと

賭^{ばく}博^{ぱく}の仲^{なつ}間^{かん}に身^みを寄^よせようと

い^いか^かで永^{なが}続^{ぞく}きせんものぞ。

ぜんかい
一六八六—一七七四年。
曹洞宗の禅僧。耶馬溪の
青の洞門（大分県北部、
耶馬溪町にあるトンネル
）をつくつた。菊地寛の
『因幡の彼方に』の主人
公として知られる。

欲の友らは欲の仇^{あだ}

利に合う者は不利に離れる。

生^おい立ち悪^あしからぬ市九郎

さらば働いて身を立てて

やがて親許^{もと}へ立ち帰り

前非を謝すべしと心を定め

南へ東へと路^{みち}を変え

此処^{ここ}に三週、彼処^{かしこ}に五週と

渡世人さながらの旅の果てに

到り着いたは、お江戸浅草の

田原町なる旗本屋敷。

中川三郎兵衛なる人の

下僕^{げぼく}として住みつくことと相成った。

時に市九郎は二六の歳^{にろく}の

眉目秀麗^{びもくしゆれい}なる好男児

士族の氣質、天資の才能

茲^{ここ}に現われ、主人はおろか

家人みな衆の信をがち得

とりわけ後妻お里の眸^{まなこ}が

市九郎に惚^ほれ込んだ。

主人不在のときは一入^{ひとしほ}

愛の言と仕種^{しぐさ}を伸ばす。

「魚心あれば水心」の譬^{たとえ}の如く

妾上^{めかけ}りのお里の恋慕

男盛りの下男の胸に

道ならぬ過去の渦^{うず}をば捲^まき返す。

主人三郎兵衛は謡曲^{うたい}の夜会とて

向島^{ななかま}なる同僚^やの屋形^{やかた}へ赴^{おもむ}いた。

夜更^{よふ}けまでの会合のゆえ

お里は市九郎と

竟に夜の情事に落ち込んだ。

丑^{うし}の刻も更けた頃

突如開いたのは襖^{ふすま}の扉^と

道ならぬ情景を見た主人^{あるじ}

*眉目秀麗は男のみめうるわしいこと・さま。

*丑の刻は午前二時頃。

何たることぞと拔劍一閃！

市九郎、煙草盆もて一防ぎ。

二の太刀に身を交したが

眉間に傷を受けたので

煙草盆を投げつけた。

次の瞬間、刀をおつ執り斬り込めば

主人は動と倒れ伏す。

護身のためとは謂いながら

主人を仆した罪は罪。

飯令陰府に身を隠すとも

閻魔の腕が彼を曳き出すだろう。

飯令山奥に攀ち登るとも

猛虎の餌食とならんのみ。

償い難き罪過を知った市九郎

血染の三郎兵衛の面前に平伏した。

この果たし合を見ていたお里

市九郎の勝ちを欣び

「剣をとれば勝つか負けるか生か死よ！

何を愚図々々しているの

さあさあ夜の明けぬ間に

必要な物品のあれこれを

あんたも取りな、妾も取るわ」

風呂敷包みをそれぞれ背負い

文目もわかぬ彼は誰れ時に

お江戸払いを自ら定めこみ

道は北へ西へと裏街道を

頬冠りして人目を忍び

葛折りと辿り往くは

お天道さまに顔向けならぬ影二つ。

外見はいかにも仲よしの

新婚夫婦の如くにて

怪しむ人もないままに

両人は上州、信州を歩き貫き

はやくも木曽路に差しかかる。

路銀にこと欠き、どうしたものか

美貌のお里と腕力の市九郎

*上州＝上野国（こうずけのくに）。現在の群馬県。

*信州＝信濃国（しなののくに）。現在の長野県。

案じ出でたる悪だくみ

美人局をやれば、枕探しもこなし

強請もやれば、追剥も果たす。

女は毒を孕んだ鳥兜

男は羊皮を被った狼か。

信濃路から木曾路に向う

鳥居なる峠の茶屋の

旦那とお上に変身すれば

旅人のもてなし堂に入ったもの

春秋十年、あやめもわかず時は流れた。

見知らぬ男女の旅人を

たくみにあやめ、たくみにかすめた。

怪しき流れ星が幾たび傾ちたか。

いやはてに通りかかった鴛鴦は

上州高崎の名だたる呉服問屋蝦夷屋の

新婚夫婦、伊勢参宮と上方見物の

路をいそいそと辿る峠の一休み。

指し往く先きは藪原と聞き及び

跡をつけ狙い、先き廻りして

あらぬ言い懸かりを口走り

押し問答の揚句に新郎を斬り伏せた。

新婦は

「私も跡を追わせて」

と泪の悲願。

十日の月華の光に映ゆる月下美人よ。

女を斬るは男の恥と

首を締めようとしたその瞬間

女は合掌しながら

「南無阿弥陀仏！」

この断末の声は虚空に消えたが

市九郎の心耳にはその響き

鶴鳥の音か、魂消えて

全身ために打ち震う。

極悪非道の暗黒に

転迷頓悟の靈光指し入る！

採る物もそこそこに

*美人局 女が自分の夫や情夫と相談の上、他の男を引き入れ、それを言いがかりにして男から金品をゆすること。
*枕探し 旅客などの寝ている間に金品を盗むこと。

*月華 月光。

*断末 断末魔。死にきわ。
*断末 断末魔。死にきわ。

*鶴鳥 鶴に似て、からだは黄赤色。夜、幼児のような悲しげな鳴き声をたて、その声を聞くと病気になるという。トラツグミの異名。

*頓悟 あるきつかけで、突然と悟りを開くこと。

茶屋に帰れば、毒婦は何事ぞと

自ら現場に走りゆき

貴重な衣類装身具を

あらうざらい剥ぎ採つて来た。

疲れて眠ったこの夜又女に

「さらば！ 最早汝に関わりなし」

と無言の訣別。

別人と化した市九郎、始めは拔足差足で

やがて脱兎の如く西へ南へと木曾路を降る。

射干玉の黒き腹なるかの毒婦

追い駆けるやも知れずとて

道を外れたり藪を抜けたり

市九郎、三里、五里、七、八里

無我夢中の遁避行。

されどいかほど急ぐとも

追い来るものは「南無阿弥陀仏」の

女の声よ、如何にせん。

思わず足を止め、路傍の草に端坐して

合掌すれば、その声音

罪業深きおのがため

執り成す祈りとなりにけり。

はらはらと涙溢れて止め度なし。

市九郎自ら「南無阿弥陀仏」と

女のために念じ返せば、こは如何に。

ふしぎや脚に力は湧き出で

二十里あまりの道程を後にして

明くる日の夕まぐれ、酉の刻

辿り着いたは、美濃の国なる

成願寺の門前なるぞ。

寺の中からは晚鐘ならぬ夕暮の

誦經の声なる南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

市九郎、地獄の河から這いあがつた

亡者の如き心地して

「頼もう、頼もう」

と本堂の扉を叩いた。

耳にした明円上人の命により

*毒婦Ⅱむこくて、曲がった女。

*夜又女Ⅱ容貌や姿が醜怪で猛悪な女の鬼神。

*射干玉のⅡ「黒・夜・夕べ・髪・月・夢」などにかかる枕ことば。

*西の刻Ⅱ午後六時頃。

*美濃Ⅱ美濃国。現在の岐阜県中南部。

*亡者Ⅱ死んだ人。死者。成仏しないで、魂がこの世で迷っている者。

一僧障子しょうじを押し開き、うち見れば

頭髮ひげ乱れ、鬚髯ひげは叢そう、眉間みけんに太刀傷たち

此奴こやつは曲者くせものに相違なしと

障子をぴたりと閉めてしまった。

告げ口上ぐちに怯ひるまず懇願こんがんすれば

上人しやうじん自ら現われ給い

慈顏はえ微笑みえ言葉優よしく

寺の中に招しょうじ入れ給う。

こは文字通り地獄で仏に逢あつた現実うつつと

市九郎、上人の足下に平伏した。

湯を浴び衣を替え、夕食けにあずかりしとは。

言ことばにも身にも余る恵たまわみを賜り

上人に過ぎし四十路よそじの人生の

煩惱はんのう罪業深甚ごうじんじんの

ありしままを告白し懺悔ざんげした。

心の闇も死の影も

弥陀みだの慈光じこうにややに消えゆくと

上人に慰められて、涕淚ていれい滂沱ぱんた。

朝に夕に勤行ごんぎやう重ね

諸仏の光の子となつて

滅罪くしやくの功德くどくを重ねゆかんのみ。

中川三郎兵衛の一子がいつか

仇討かたきうちを企はかめることあらん

その日には潔いさぎよく生命いのち捧げんと

心を決めた市九郎。

はやくも三年みつとせあまりの勤行ごんぎやうを

模範もはん的にぞ果し終え

禅海ぜんかいという法名をすでに賜り

その相すがた正ただしく慈光を身に帯びて

明円上人の愛弟子まんだうじんとこそ相成つた。

朝な朝な南無阿弥陀仏で起きあがり

夜な夜な南無阿弥陀仏で床とこに就つく

その念仏の中にて過ぎし日の

亡霊の数々のため謝罪する

道心どうしんいよいよ深まつて

今より後は衆生しゆじやう済度さいどに身も魂たまも

*叢そう草が乱れはえてい
るさま。

*深甚ごうじん非常に深い。は
なはだしい。

*慈光じこういつくしみ深い
光。めぐみの光。

*涕淚ていれい滂沱ぱんた涙がとめど
なく流れ出るさま。

*勤行ごんぎやう仏前で、時を定
めて読経、念仏、礼拝、
焼香などをすること。

*功德くどく善行の結果とし
て受けるよい果報。神仏
のめぐみ。

*道心どうしん仏道を求める心。
*衆生しゆじやう仏の救いの対象
となるすべての生命のあ
るもの。衆生済度しゆじやうさいど衆生を迷いの世
界から救つて、悟りの世
界へ導くこと。

捧げ尽さん悲願を抱き

厚き恩義慈悲を身に受けた

明円上人に名残惜しくも

感恩の心に溢れて、訣別を告げ奉り

禪海、成願寺を立ち出でて

諸国行脚の旅路に就いた。

自ら脚は西へ西へと陽を追うて

近江路辿れば比叡山。

歴代菩提の名僧修行の

本山に詣でてみ仏の

魂さわる靈生に触れた。

名利さわるなる仏の都

今し桜の花吹雪

柳青葉の波風情

祇園の夜の月の影

暁鐘に鳴く鳥の声。

去りがての古都をあとにして

禪海は難波の海に沿う道に

老いゆく人を慰めて

明石の浜辺で病む人に

如来の力を念じ入れ

播磨の浦の舟人と

楽しく語らい子らと遊んだ。

瀬戸の島蔭に出入りする

白帆の影の美しや。

夕陽に映ゆる金波銀波

寄せては返す波の音。

月なき夜の星影に瞬く灯影は海の宿。

備前、備後を後にして

鳥居に著き厳島、幾日幾夜の旅枕

夏の陽、今は秋の風

長門の国の西の端、悲涙を誘う壇の浦！

赤間ヶ関を舟出して

豊前ふぜんは小倉こくらに渡り着く。

時は享保十八年（一七三三）の秋

*名利＝名高い寺。

*暁鐘＝夜明けに打ち鳴らす鐘。

*播磨＝播磨国。現在の兵庫県南西部。

*備前＝備前国。現在の岡山県南東部。

*備後＝備後国。現在の広島県東部。

*長門＝長門国。現在の山口県北西部。

*豊前＝豊前国。現在の福岡県東部と大分県北部。

懺悔僧^{ざんげ}禪海の人生は

四十八路^{じゅうはちろ}の峠であつた。

小倉^{こくら}から遙か南東の方

宇佐八幡宮に彼は詣^{もつ}でた。

そは何のためか、今頃は二十歳とおほしき

中川三郎兵衛殿の一子実之助殿の

仇討^{あだうち}の武運長久を祈らんがため！

祈願し終つて最寄りの四日市を出で

萩の野や尾花の原の露分けて

路を山国川の溪谷に取り

英彦山を遙かに望み

本耶馬溪は羅漢寺に到り着く

その旅衣の滴りは露か涙か！

寺詣で、「南無阿弥陀仏」、腹底の声。

午さがり樋田の駅を後にして

往き着いたのは「青の村」はずれ。

禪海が往手にはもの騒がしき人の声

小手を翳^{かざ}してうち見れば

川添の岩陰に人の群れ居る。

近寄り見れば薦に包まれた亡骸よ！

よくぞお出でなさつたと

異口同音の願言

「お願いですが、御出家さま！

此処な死人の成仏のため

お経で回向してくんなされ

あの崖から落ちた旅人よ

非業の最期憐^{あわれ}んでの弔いを

おいらは本当にお頼みでがす」

あな痛ましや、禪海数珠で九字を切り

菅笠を手にして薦の前に跪いてぞ

「南無阿弥陀仏」

三度び唱えた。

この耶馬溪の断崖に

懸けた鎖渡しのたよりなさ

危険極まる難所のゆえに

*長久に長く続くこと。
永久。

*異口同音に多くの人が
同じことを言うこと。

*回向に仏事を営み、死
者を供養すること。

*非業の最期（を遂げ
る）に災難で死ぬ。

*九字に密教・修験道で
身を守るまじないとして
となえる、「臨、兵、闘、
者、皆、陣、列、在、前」
の九文字。九字を切るに
九字をとなえながら、空
中に、指で、縦四本・横
五本の線を、交差させる
ようにえがいて、まじな
いをする。

年に十指を数うる犠牲のはなしを
聴いてあわれみ、袈裟を取り出し
鈴うち鳴らしこの死者と

背後に連なる亡霊たちのため
般若心経を篤と唱えた。

誦経の声に涙交れば

山国川の岩に碎ける波も鳴く。

風に嘯く逆松、天に通ずる回向念仏

「南無幽霊出離頓証菩提」

誦し終つて三礼すれば

並み居る村人感謝の合掌。

「さようなら、御出家様！」

鎖の渡は直ぐ近くです、それあそこ！

くれぐれも御用心

御無事に渡らっしゃい」

山国川に峙つ断崖絶壁に

蛇行する一条の岨路よ

路が絶えれば手には鎖綱、脚には岩棚

一手一足、力をこめて

たぐりつ踏みつのいのちの運び

ひとつ過まれば、真逆落し

山国川が地獄の川と化る難所

禪海身を以てこれを知ったので

もと来た路を帰り来て

念仏しつつ、つらつら念ずれば

旅人救わん道はただ一つ

この絶壁の大岩磐に

穴を穿つて隧道開拓の唯一途！

その難工事、おのれを措いて誰がやる。

「罪びとの首」なるこの身ゆえ

わが罪業の贖いのため

十年二十年何年かかろうと

生命を賭けて断然遣り貫こう。

禪海茲に一大誓願をうち立てた。

誰か知らん行雲遽かに走り行き

流水頓みに浪立った。

*南無〓帰依する気持ち
を表わすことば。

*幽霊〓幽冥界に住み、
時にこの世に姿を現すと
された精霊や死霊をいう。

亡霊、亡魂とも。

*出離〓離れ抜け出してい
ること。迷いの世界、煩
悩の束縛を離れること。

*頓証菩提〓段階的な修
行を経ずに、ただちに菩
提（悟り）を得ること。

*隧道〓トンネル。

かくて禅海羅漢寺に再び詣で
本尊釈迦如来の御前に

三七日の参籠を続け

深く大願成就の加護を祈った。

岩磐穿孔開掘は鑿一本、鉄槌一挺。

三月がほどは地勢を検べ

洞門の位置を定めて小屋を建て

村落に托鉢^{たくはつ}なして食糧^{かて}をいただき

鉄石をも穿^{うが}つ念仏を力に

昼夜を分かつ洞門の中

カチンカチンと岩を穿つ。

これが禅海の生きざまであり生命^{いのち}であつた。

ノアが山で方舟^{はふね}を製作すれば

氣狂^{きか}いか馬鹿^{のし}と罵られたように

鑿一本と鉄槌一挺で

東西百五十間の岩山を

どうして穿^{うが}ち得ようぞと

村人たちの嘲笑^{ちやう}的^{てき}とはなつた。

禅海は、阿呆^{あほう}、狂人、何と悪口^{あつこう}されようと
ごもつとも、阿呆でなければ出来ぬこと
おのれを世人^{よびと}のどん底に
置いて動ぜぬ菩提心^{ぼだいしん}。

禅海のこの誓願の如く

天海^{てんかい}（天弓^{てんきゅう}）は米寿^{べいじゅ}を迎えん今にして

ダンテ、ゲーテの大詩篇に匹儔^{ひつちゆう}すべき

長篇の詩をものすべく

天来^{てんらい}のみ霊^{たま}の力を身に受けて

辿^{たど}りゆくなりこの詩の一路。

パウロ、内村鑑三に継いで

第三の罪びとの首^{かしら}なる

天海が右の掌^{てのひら}には

神秘の十字と聖霊^{みたま}の徴^{しるし}を賜^{たまは}つてあり。

「キリストの福音はひとえに

天海のためなりけり」

*穿孔Ⅱ穴をあけること。

*菩提心Ⅱ悟り（菩提）を求める心、悟りを得たいと願う心などの意味。

特に利他を強調した求道心をいう。菩提心は大乗仏教の菩薩の唯一の心で、一切の誓願を達成させる威神力を持つと考えられた。

*天海（天弓）Ⅱ筆者の雅号。後に「天弓」と改める。

*米寿Ⅱ数え年八十八歳のこと。

（筆者八十八歳は一九九二年二月七日）

*匹儔Ⅱ同じたぐい。

*神秘の十字と聖霊Ⅱキリストの十字架と聖霊のこと。

（筆者は、キリストの十字架と聖霊は不可離の事態であるとし、丸に十字の徴で表す）

と親鸞の如く告白するなり。
 名名のゆえ世界に贈るこの一詩
 神秘の数なる十二年後には
 完徹せしめ給え！

破衣やれぎぬ、破れ笠の禪海和尚おしやう

西の方柿坂かたの里で托鉢すれば
 村の童わらべども寄つてたかつて

「鎖の渡し」の氣狂坊主がやつて来た。

此処でも同じく悪口あつこうどうごん雑言

子供も大人も狂人あつかい。

次元の異ちがう禪海は

いつもニコニコ微笑はほえみの

衆生しゆじやう済度さいどの仏心ぶつしんよ。

朝日夕陽の変らぬ如く

禪海和尚ぜんかいの槌つちの音ねの

聞こえぬ日とては絶えて無い。

三月、半歳、一年と月日と共に
 洞穴どうけつが確かに掘られてゆくすがた。
 青村と柿坂村の名主ども
 羽織袴はおりはかまの扮装いでたちで

洞門の入口に訪ね来て

大変ですねとねぎらいながらも

仕事のさきをあやぶんだ。

禪海応えて、御心配ごしんぱはありがたけれど

如來に誓願をいたせしこの身

止めろとのお告げなら、いさ知らず

この両手もうから鑿のみと槌つちとが落ちるまで

禪海断じて止められませぬ。

不退転せきぜんの石心いししんと裕ゆたかな仏心に

感じ入り、名主どもは引きあげた。

時に禪海五十路いそぢの峠にさしかかる。

三年五年と経つうちに、三人五人と

村人も法師すがたの相に揺れ動き

食は持て来る手助けはする。

*衆生済度しゆじやうさいど＝生死の海
 (迷いの世界)に溺れ沈
 んでいる衆生(多くの生
 きとし生けるもの、一切
 の生物)を救済して彼岸
 (悟りの世界)に渡すこ
 と。

*石心いししん＝鉄石心。意志の
 強いこと。かたくてしつ
 かりしていること。

「ものぐるおし」の声も途絶えた。

噫、星霜ここに十指を数う。

穿った長さも百余間

貫通の希望は確か。

一本の鑿、一挺の槌が

かかる大隧道を穿ちゆくとは。

法師の腕は鍛えられ、強められ

神技に齊しき穿岩の業

進みゆき深まりゆく哉！

さて願れば、禪海、元は福原市九郎

勘当され、落ちのびて辿り着いたのが

浅草田原町なる旗本中川三郎兵衛の許

妾上りのお里と不義の交りのため

主人三郎兵衛を殺害し

二人は江戸を逐電したのであった。

時に中川の一子実之助は二歳の乳児

乳母に抱かれて叔父の中川三之丞方に

引き取られ、やがて少年実之助

父の仇討ちを断乎決意した。

十三歳にして柳生但馬守の門に入り

二十歳にして柳生流剣と槍の皆伝許され

將軍に仇討の願いも聴き容れられた。

享保十三年（一七二八）親戚に

別れを告げて仇敵探しの旅にのぼった。

先ず北の方三陸路に向い

会津、仙台、盛岡を経て青森に着く

更に海路を蝦夷松前にまで渡りゆく。

仇の影も風評も耳目に触れない。

舟路はるか佐渡ヶ島に渡りつく。

更に越後に渡り、西方加賀、能登

越前、越中をあちこち捜し

山陰経巡り、本州の西端を極めたが

三年の旅も空しく

山陽、東海道を經て江戸に帰った。

*逐電||跡をくらまして逃げること。逃亡。

*皆伝||師から技芸・武術などのすべてを伝授されること。

*越後||越後国。現在の新潟県的大部分。
*加賀||加賀国。現在の石川県北半分。
*能登||能登国。現在の石川県南半分。
*越前||越前国。現在の福井県的大部分。
*越中||越中国。現在の富山県。

江戸八百八町のいずこにか

隠れてはいまいかと半年が程

旗本大名小名の邸を搜つた。

仇討ちの素志は尚も崩れず

残された路は中仙道！

木曾街道で、十二年前の

強盗殺人の昔ばなしを耳にした。

それが市九郎ではないかと直感。

木曾路を降つて京に出で

五畿内五国限なく歩きお宮お寺で

「不倶戴天の仇に巡り逢わせ給え」

と祈念した。

光陰流れて六星霜

播磨路往けば備前、備中、備後の国

安芸を経て西の果なる長門まで

本州全土を極めたるその不屈の執念。

残るは九州、まず豊前に渡った。

時に寛保三年の秋九月

実之助、人生は今や三十路の峠

道は東西北南十年の旅路！

父を弔う仇討の旅。

箱崎八幡、宇佐の八幡神社に参詣

「願わくは、仇敵の在所を

探し出でさせ給え」

心を罩めて祈り居るうち

耶馬溪の名が不図胸に浮んだ

神の示しか、いざ耶馬溪へ！

陽が西山に傾いたので

道べの宿屋に投宿し

夕餐のあとで亭主と語らい

耶馬溪のあれこれを

聞き居るうちに、問わず語りに

この宿主は世にも不可思議な

禅海和尚の風評ばなしを

熱意を罩めて物語る。

実之助これぞ奇縁と聴き入って

*小名〓江戸時代、領地の少ない大名。

*素志〓かねてからの願。平生からの志。

*五畿内五国〓都の周辺の、大和・山城・河内・摂津・和泉の五国。

*不倶戴天〓どうしてもあだを討たずにはおかないこと。

*安芸〓安芸国。現在の広島県西半分。

この人こそは父の仇なる
市九郎に相違なし

いざ明日は訪ね行き

宿年の仇討ち果さんものと

熱血全身を駈け巡る。

現か影か見知らぬ父の

笑顔が夜明けの夢の中。

時は来たれり、優曇華の

花咲き出でたる想いして

父の形見の小袖をば

肌身に親しく着用し

袴凛々しく腹に着け

名刀備前包光を

確かと佩びてぞ立ち出でた。

実之助洞門に差ししかれば

禅海今や小屋を出で洞門に向うところ

「ヤアヤア其処なる出家殿

福原市九郎にはござらぬか。

これなるは中川三郎兵衛の
実子実之助でござる」

禅海、振り向いて親しげに

「ああ貴殿が、中川殿の御令息！

わが前身は正しく市九郎。

手前は年来御身を想い、武運を祈り

お会いの折は快くこの首を捧げんと

お待ち申せし者なるぞ。

いざ実之助殿、近う来て

御存分に御討ちなされ。

御尊父の霊前に

いざ此の首を手向けられよ！」

「殊勝なる哉、市九郎。

されど手向いせぬ者を

討つたとあつては仇討の名をけがす。

勝負は時の運、返り討ちも苦しいはない。

いざ真剣勝負をなされかし」

「いやいや、返り討ちなど滅相もない。

*優曇華はインドの想像上の植物。二〇〇〇年に一度花が咲くという。転じて、きわめてまれなことのため。

*殊勝はけなげで感心なさま。

すでに十余年前、捨つべかりしこの生命。

貴殿を待つてぞ生き延びたる次第。

今更立合いなどは無用でござる。

疾く疾く近寄つて本懐を遂げられよ」

「然らば是非もござらぬ。

其の首は貰い受けるが

今はの際に何なりと

言い残すことはござらぬか」

「有難や、唯一つ申したきことは

是なる洞門開鑿の

祈願を起しましてからここに十年

わが身の罪滅ぼしに

この難所ゆく旅人のため

魂籠めて掘りし跡は百余間

この完成をなし得ぬことが心残り

他に思ひ残すこと何もござらぬ」

「おお、人命救助と滅罪のためなる

此の洞門！して洞門完成に

尚いかほどの月日が要るや」

「唯今は村の人たちも

仕事をお助け下さる。さりながら

尚三年はかかりましょう」

「貴殿が棄身の御誓願を聴いた上は

仇敵は仇敵、情は情。

無解に刀を何で振れよう。

某も貴台が志に免じて

この工事終るまで向う三年、命を貸そう」

「何とおっしゃる、三年の生命を。

折角の御情けながら、此の期に臨んで

貴台に巡り合うたのも仏の御引き合せ

今は禪海が臨終の時期と存じます。

この洞門、あとは村人たちが遣り遂げて

某の悲願を成就して下さろう。

罪業深き禪海なれば

現世に御暇をお願い申す！」

実之助、禪海の言に深く感じ入る。

*本懐＝本来の望み。本望。

*滅罪＝念仏や、懺悔などの力で罪業を消し去ること。

武士の放った一言をいかで翻さん。

抜いた刀を鞘に収めた。

禅海はもはや言もあらず

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏！」

かくて実之助を洞門前の小屋に案内。

うそいつわりの露ほどもなき

仏心の禅海と十日、二十日と枕をならべ

明け暮れすれば実之助も仕事のすけだち。

村人の助けも更に加わって

三年の工事は二年で

成し遂げられた、万々歳！

穿徹したる洞門の

全長百と五十間

高さも驚くなかれ二十尺。

光さし込む窓もある。

驚き入りたる名洞徹

神仏を畏れた禅海の

誠心無心の神技なり。

知命に垂ん齡に始まり

南無阿弥陀仏の念力のもと

衆生済度の悲願靈願をもて

滅罪の涙、孤独の寂寥に耐え

不撓不屈の穿岩を貫き

驚天動地の洞門貫徹！

噫十有二年の菩薩行

遂に成りたる青の洞門。

禅海、感謝感激、ただ泪！

天も応えて白雨沛然と降る。

山国川の波の音、泣くが如く、

欣ぶが如し。

前代未聞、空前絶後のこの穿岩！

今や菩提心の禅海は

莞爾として実之助の前に

両手について厚く礼を述べ

「おかげさまにて今や

思い残すこと一塵もござりませぬ。

*洞徹Ⅱうがち通すこと。

*知命Ⅱ（論語に「五十にして天命を知る」とあることから）五十歳。

*衆生済度Ⅱ仏・菩薩が衆生を迷いの世界から救つて、悟りの世界へ導くこと。

*寂寥Ⅱ寂しくて、ものしずかなさま。

*不撓不屈Ⅱ困難に出会つても、屈したり、くじけたりしないこと。

*白雨Ⅱ夕立ち。にわか雨。

*沛然Ⅱ雨がさかんに降るさま。

*莞爾Ⅱにつこり笑うさま。

いざ禪海が首をはねて
御尊父の靈前に手向けさせ給え！」

念珠を手にして端坐合掌。

「南無阿弥陀仏！」

「おお、待ち構えたり市九郎

覚悟いたせ！」

実之助、名刀包光をすらりと引き抜き

「エイ」

と一閃きらめけば

刀は宙を切つて

おのが髻切り落とす！

禪海の前に両手をついた実之助

「禪海殿、仇敵は正しく打ちとめました。

この二星霜、共に寝起きし

貴殿がおのが過去を切り捨てし如

今しがた私も過去のおのれを切りました。

共に働いたこの実之助

貴殿が生きざまを拝見し

全く感じ入りました。

今は一切衆生の善知識。

生き仏なる禪海殿に何で刃を……。

実之助、今は恨みの妄執が消えました。

日本全土を探しあぐんだ大行脚も

この貴殿を発見し

私自身が救われんためでした。

亡父の靈も今や

私の心を知つて怨念が消え

涅槃の境に入ったと存じます。

この上は、某を弟子とされ

衆生済度の仏門に入れて下さいませ。

靈界の父の欣びいばかりでしょう」

茲に敵も味方も今やなし

二人の間は極楽浄土！

二人は真に生き仏

罪過だらけの人の世を

変貌させ得るものは唯一つ

*髻 髪をまとめて
結んだところ。髻を切
る 出家する。

*善知識 正しい教えを
説いて、人を仏道に導き
容れる人の称。

*妄執 真実でない、迷
いの世界への執着。

*行脚 各地をめぐる歩
くこと。

*怨念 深いうらみ。

*涅槃 煩惱を滅して苦
がなくなった究極的な悟
りの境地。

神仏の心を心とすることのみぞ。

「極樂は東にあらず西になし

来た（北）路さがせ

みんな身（南）にあり」

市九郎にとり、また実之助にとり

夫々長歳月の艱難辛苦の極みにて

発見したこの絶対界。天国、極樂は

靈しくもみんな身（南）にあった。

いかなる囚人も一国の宰相も

およそ人という人にして

全存在を感動させる

人生ドラマこれにすぐるものありやなしや。

血と涙と心と魂と肉と骨

その全身全霊の救は

神仏の絶対界を

この相対界に体现するにある。

そして同時に隣人を万人を

その現実に入れんことあるのみ。

即身成仏であり、即身神人である。

煩惱即菩提なるかな。

空即是色、色即是空なるかな。

無即無限無量なるかな。

即の逆説的深みよ。

かかる宗教的境涯に入らずんば

すべては虚の虚、空の空なり。

天海十二年の詩作成就を期し得るは

禪海が十二年間をかけて

青の洞門隧道貫穿を成し遂げた

実存に照応せんがためなるぞ。

主よ、み名ゆえに

み名に在りて成しとげさせ給え！

ひとは乳幼児の頃、皆神仏の卵だ。

*即身成仏 世に生を受けたこの身のままで仏になること。現世で受けた肉体のままで仏になること。真言密教の教義で、三密加持して、衆生が仏と一体になり、衆生の本来有している仏の法身を証して成仏することをいう。

*煩惱即菩提 煩惱はそのまま悟りの縁になること。煩惱もその本体は不變の真如に外ならないから、悟りと対立したものでないことをいう。

*色即是空、空即是色 ものはそれ自体が実体として現象し存在するものではないことを色即是空といい、また実体としてではなくて、諸条件に支えられているからこそ、そのものがそのものとして現象し存在することを空即是色と説く。

だからキリストは幼児を愛し給うた。

清き溪流^{けいりゅう}が都市を流れる頃は

濁流となるように大人は「罪びと」だ。

何びとも救いなしには在り得ぬ存在だ。

だから社会問題、国際問題は

歴史の終末まで。

囚人はその行為が法律を犯したただけだ。

前非を悔いて回心^{かいしん}すれば

この禪海の如く常人のできないことをなし

却^{かえ}て神仏の如き人たるを身証^{しんしょう}する。

人間最重要事は

神仏と同質の人となることのみだ。

*回心^{かいしん} 心を改めて正しい信仰に入ること。心を神にめぐらすこと。

塙保己一

一七四六年、延享三年

埼玉は保木野村の土百姓

荻野宇兵衛に男の児が生まれた。

寅年に因んでその名は寅之助。

この幼児、肝炎のため五歳で失明！

何たる悲運、寅を忌み辰之助と改名。

幼少にして多聞強記、因って多聞房。

百人一首など一首残らず暗記した。

十二歳の時母を失った。母の弔いは

志を立てて偉業を成すに在りと

江戸に出でて学を修めんと父に請う。

天はこの立志を嘉したのだ。

一絹商が彼と同道してくれた。

この商人は後の町奉行根岸肥前守。

彼は雨富検校須賀一の門人となり

この家に寄宿し、名を千弥と改称

この雨富の本名は塙という。

盲人は歌舞糸竹を修得するのが常道

されど千弥の天性はこれになく此処を去り

萩原宗固の門人となり文章を学ぶ。

はなわ ほんいち

一七四六—一八二二年。

江戸後期の国学者。武威

の人。賀茂真淵らに国学

を学ぶ。五歳（七歳？）

で失明。総検校。「群書

類從」の編纂と刊行、統

編の刊行企画と準備は、

學術研究の發展に幅広く

寄与した。幕府の援助を

得て和学講談所を開設し、

和学振興に尽力。

*多聞 多くのことを聞き知っていること。

*強記 よくおぼえていること。

*偉業 すぐばらしい仕事、業績。りつばな事業。

*立志 此ころざしを立てて、なにとげようと決心すること。

*嘉する 神・貴人などがほめる。

*検校 昔、盲人の最上級につけた官名。

*歌舞糸竹 歌と踊と音楽。遊芸。

山崎闇斎の門下川島貴林に就て

神道、小学、近思録を学ぶ。

松平織部正乗尹より諸講義を受け

山岡明阿から律令を学ぶ。

仙石播磨守と共に

「類聚名物考」なる書を出版

品川東海寺の僧孝首座に就て

難經素問という漢文の医書を学ぶ。

盲人にして博学強記、暗記力無比

年未だ十五歳の若輩とは。

十八歳にして一座の頭分となり

故里の名に因んだ保木野一と改名

生来蒲柳の質の彼、漢方薬で保健する。

かの雨富彼に金五両を与えて旅を勧告。

時に齡二十一、父に同道を願ひ

先ず伊勢神宮に参拝し

次に京都は北野天満宮に詣で

和魂漢才の修業を祈願する。

漸次西して大坂、播磨、明石を歴訪

更に方向を変じて高野山詣で。

生来神仏に対する敬仰の念篤く

彼の身心強健の源泉は

正にその不動の宗教心にあつたのだ。

二ヶ月の内容ゆたかなる旅を

果して帰江した。

萩原宗固の勧告により、国史を学ぶべく

賀茂真淵の門を叩いた。

惜しむべし、半歳にして真淵逝く。

三十路に近き保木野一に

無双の英才を見た雨富は

その文献学の大成のため

金百両を彼に与えた。

人生意気に感ず、学界のためならば

全生涯を献げんと、正に立志の年なる

安永四年正月元日保保己一と名乗り

番町は高井山城守の家に転居した。

*小学Ⅱ一八七七年、宋の劉子澄(りゅうしちやう)が朱子の指導により編述した、初学者のための礼儀・修身の書。

*近思録Ⅱ中国 宋の学の入門書。宋の朱子と呂祖謙(りよそけん)の共同編。

*類聚Ⅱ同じ種類のものを集めること。

*蒲柳Ⅱからだの弱いことのとえ。

*和魂漢才Ⅱ日本固有の精神と中国の学問を融合させて活用させること。

*敬仰Ⅱ敬いあがめる。

*賀茂真淵Ⅱ一六九七、一七六九年。江戸中期の国学者・歌人。国学研究に一時期を画し、「万葉集」研究に業績を残す。門人に本居宣長など。

性来母親から受け継いだ

敬虔な心根の保己一は三十四歳から

本格的に般若波羅密多心經を

毎日百遍誦経した。

この彼の根性に万難突破の秘訣があった。

同年より保元以降の諸家記録雜書の

収集に乗りだし

叢書を編纂すべく力を尽す。

再び天満宮に祈願を籠めて、終に達成。

かくて三十八歳にして檢校の職に昇進。

四十歳のとき源平盛衰記の校訂に参与

水戸義公、盲人保己一の博聞強記に驚嘆し

月俸五人分を賜わる。

上記校訂もほどなく完成。

かくてかの大日本史の校訂も彼に依頼。

彼これをも完成。

水戸公もその功を祝して月俸十人分を賜う。

ある時、盲者保己一の講義中

突風のため突然灯火が消えたので

弟子どもも文字の読み書き不能を訴えた

盲師曰く

「眼明きとは不便なる者かな」

と。一度び聞かば忘却なき保己一は

多くの文献を正確に強記する

靈妙の頭腦者

東西古今に此の如き超人ありや。

天明元年四十一歳のとき

「古今物語」を著わす。

四十八歳のとき

上野の国人常照院の勧誘により

当時の寺社奉行脇坂淡路守に願ひ

和学講談所を建設して

歴史律令の講義を開始。

六十三歳にして、平田篤胤と共に

史料編纂の文献業に着手。

これより先き既に彼は群書類従の

*敬虔||神仏に対して、つしむさま。

*誦経||声を出して経文を読むこと。

*叢書||同一方面の種々の書物・論文をまとめたもの。

*編纂||種々の材料を集めて整理し書物・辞書などを作ること。

*校訂||古典の諸本の文字・語句などを比べて直すこと。

*靈妙||人知では計り知れないほど、すぐれているさま。

*上野||上野国。現在の群馬県。

前代未聞の偉業にとりかかっていた。

遂に文政二年一八一九年

六百七十巻の大編輯を達成。

噫盲人碩学の大業！

数百年埋れてありし古文獻の

集大成茲に成る。

彼は更に続群書類従を編んだ。

更に對外關係についての書

「鷄林拾葉」を著わす。

その業績尽くるところを知らず

皇親譜略、椒庭譜略、武家名目抄

史料、螢蠅抄、総隠集等が主なるもの。

保己一を助けた代表的人物は

屋代弘賢、西田元吉の両氏。

彼は自然に対する情感幽玄にして

「秋よりも心づくしの影なれや

桜花の木の間にかすむ夜の月」

「秋風に尾花が末の露はれて

富士の峯近き武蔵野の原」

さりながら彼もある西路の途上

人々の富士を三嘆するを聞いて

「何事も見えぬに馴れてなげかねど

富士とし聞けば涙こぼるる」

と詠っている、この歌の前に涙するのみ。

文政四年（一八二二）九月十二日

七十六歳を以て

この文献学実践の曠世の偉業を

母と父への献物として彼は召天した。

*前代未聞〓これまで聞

いたことがないほど、ま

れなこと。空前。

*編輯〓編集。

*碩学〓学問が広く深い

人。

*史料〓歴史を研究する

材料。

*幽玄〓奥深く微妙で、

はかりしれないさま。

*三嘆〓何度も褒めるこ

と。

*曠世〓またと世にない。

*召天〓天に召される。

往生。

蓮月

京都は御所の東方鴨川西畔の
三本木と称え、ば町芸者の置屋どころ
東天を限っているは比叡山
かかる三本木で伊勢国、津城主たる
藤堂家の分家藤堂某氏に女の子が生れた。
時は寛政三年、一七九一年正月八日寅の刻。
この娘は誠と名づけられ
長じては世にも希れなる美しき女
されば母は美質の遊女にちがいない。
生後間もあらず洛東は

浄土宗の本山知恩院の坊官
大田垣伴左衛門光古の養女にされた。
謂わば父なく母なき娘
生涯父母と語るすべもなき
孤独が彼女の命運であつた。
誠は少女時代丹波の亀岡城で奉仕の生活
薙刀、鎖鎌、剣術、柔術で身心を鍛え
しかも古典文学を好んで読む才女。
光古の妻は五人の子らに先だたれて死し
光古は遠縁の子を養子とし望古と名乗らせ

れんげつ
大田垣蓮月。一七九一、
一八七五年。江戸末期の
女流歌人。平明流麗な歌
風。夫や子に死別し出家。
個性的な書風と陶芸作品
で知られる。

*置屋 芸者をかかえて
いる家。

*伊勢国 現在の三重県
の大部分。

*某氏 某氏ある人。

*洛東 京都の鴨川から
東の地域。

*坊官 門跡家の家司で
僧衣、帯刀にて僧坊の政
治を執る者。

*丹波 丹波国。現在の
京都府の中部と兵庫県の
一部。

誠と結婚させたが、望古は放蕩無頼

一男二女も相繼いで夭折、何たる悲運ぞ。

誠は望古とは離縁せざるを得なかった。

望古も死して後五年

文政二年（一八一九）の春

彦根藩家中、石川広二光定の三男重二郎を

迎えて再結婚、彼は古肥と名乗る。

光古譜代のゆえに彼も知恩院に出仕

この結婚生活も四年にして

古肥の死を以て終る。

噫、誠は古肥の死の前日薙髪して

夫の葬儀のあと養父光古と共に

知恩院大僧正より剃髮式にあずかった。

光古は爾後西心、誠は蓮月と名乗る。

蓮月の惨憺たりし人生前期はここに終った。

蓮月の蓮月たる後期に入る。

時に文政六年（一八二三）

光古六十九歳、蓮月三十三路のさ中

この若き美しき蓮月に

光に寄り来る魚の如く

男らの艶書などもて言い寄る煩わしさを

避けんとして蓮月はおのが齒を

見にくき様に抜きとつた。

何たる荒行ぞ

僧の勤行もこの挙に比し得んや。

蓮月、本来情愛妙なる遊女の娘

天涯孤独のこの運命

いずこに愛の相手があるや

養父光古の外に今や誰かある

手仕事から休らうときをみて

二人が囲碁に興ずるときこそは

極楽浄土の楽しさよ。

かくて怡楽の歲月流れて八年

美しき情愛の暮らしが突如終末。

天保三年（一八三二）八月十五日

*譜代は代々その主家に仕えること。仕えてきた家臣。

*薙髪は頭をまるめること。僧になること。剃髪。

*艶書は恋文。

*怡楽はやわらぎ楽しむさま。

光古は七十八の年

蓮月は四十二路の人生の真夏時

光古不帰の旅路へ、極樂往生！

南無阿弥陀仏。

蓮月は実父に優る霊父を今や失った。

たましひと心の恋人を失った。

彼女は泣きぬれて眠られぬ夜を明かす。

しばらくは日毎に墓前で泣いた。

「たらちねのおやのこひしきあまりには

はかにねをのみなきくらしつ、」

これより彼女坊官として知恩院に出仕

伴左衛門一家の援助のもとに。

陶器、短冊、画賛の製作を

心のすさびやなりわいのわざともなして。

西心と死別はしたが去り難きこと十年

竟に知恩院山内真葛庵を出でて

歌人小沢蘆庵の住み居りし岡崎へ。

歌道に精進、和歌を詠み

おのれを告白するは

彼女にとつてはたましひの息吹

さりながら一所不住を

「例のくせ」と言いながら

孤影転々、居を替えるがこよなき氣ばらし。

嘉永四年前後幾年か「大仏閑居」をなして

特に六人部是香の門に入り

転々と居は移るとも是香の死まで

師事すること十四年、蓮月ときに還暦前年。

蓮月は富岡鉄斎をわが子の如く愛しむ

鉄斎時に二十歳

彼女から作陶を学び手助けもした。

画道に於ても蓮月の画観に負うところ大。

一所不住の蓮月にとり、人生は旅。

岡崎にもどるかと思へば聖護院村に移る。

鉄斎、文久元年（一八六一）長崎へ赴き

海外事情を見聞し年末に帰洛

聖護院村の蓮月宅に身を寄せる。

*還暦 数え年六十一歳のこと。また、その長寿の祝い。

*富岡鉄斎 一八三七、一九二四年。日本画家。京都の人。明清画と大和絵に学び風格ある画風を樹立。水墨に彩色された色調は他の追従を許さない。

蓮月居を移すやそこに私塾を開く。

彼の身辺繁忙を察知した蓮月

鉄斎に結婚を勧むるや、瑞芝和尚の

影響による独身主義ここに揺ぎ

慶応三年（一八六七）円山派の画かき

中島華陽の娘多津と結婚。

時に彼は三十二歳。

愛ありて愛を越えたる蓮月の

仏心の愛が鉄斎を人間道に導いた。

この愛に感じ入りたる鉄斎は

終生蓮月のため力を尽した。

旅心此の里出でてかの里へ

三十幾度、転々と居を移した蓮月は

世の煩わしさを厭い孤独をねがい

自然に抱かれ、自然を詠った心根は

世を離れて世を愛し

現実を越えて根源現実に入らなためよ。

それを三十一文字に詠い貫き

いつなりといわずこなりとも読む人の

心に沁み入り時空を越えて

愛の流れを滾々と。

これは夢ならずまことの現実。

彼女の陶器は縦い破るるも

不破の歌に陶器は浮び

流水よりも美しき蓮月の筆跡は

霊水と化して、見る人の魂を潤す。

霊しきかな蓮月よ、汝れの和歌

読む人の心に流れて尽きることなし。

歌のひびきは消えてはまた現わるるなり。

汝が旅路のいやはては西加茂の

神光院、慶応元年（一八六五）とかや

蓮月ときに七十五路の峠にさしかかる。

蓮月は孤独を愛しながら

幕末の志士、文人と

折にふれては親しく語らった。

文久三年（一八六三）八月十九日

七卿しちきやうの都落ちを見送った一瞬に
蓮月の魂たまは最も光りしならん。

「蓮月さん、私も京都は法然院町の
樋口種造という人に案内されて

一九八三年八月夏のさかりに

神光院を訪れて、貴方の急須きゆうす

煎茶せんぢや々碗まづちや、抹茶まづちや々碗

諸々の書画を親しく拝見し

感嘆お措あたく能あたわず

極めて一部ながら

御遺作の中にこもる全蓮月を

瞑想ぜつげんし合掌あがら絶言ぜつげんでした」

蓮月たづけんは達見たちけんの女性であつた。

例へばかの橘たちばな曙あけみ覧らんとも会つてゐる。

さぞ肝胆かんたん相照あいてらしたことだろう。

*七卿の都落ち＝七卿落
ち。一八六三年（文久三）
八月、三条実美（さねと
み）ら七人の尊攘派公卿
が京都から長州藩へ落ち
のびた事件。

*橘曙覧＝一八一二～一六
八年。江戸末期の歌人。
福井の人。歌は万葉の精
神を受け、題材も変化に
富む。

*肝胆相照す＝気持ちがあ
ひつたり合う。

第七篇

芸能人

チャップリン

十九世紀の暮つた

ロンドンの貧民住居すまいの一角に

唄うたい手と踊おどり子なる寄席よせ芸人夫妻の間に

男児おのこが産声うぶごえ挙げた。

八九年四月の十と六日むいかのことだった。

父親は日ならず身罷みまかった。

母親のハンナ・ヒルは

その名の如くユダヤの血統ちすじだが

精神病院に出入りした。

だが彼女は情篤あつくこの児を愛めでた。

母が不在のときには街路や公園のベンチに

しばしば夜を明かす浮浪児同然。

さわれ彼の心はいつも母を慕い

成人して母の死を聞いたとき

慟哭どうこくして幾日も仕事に身につかない。

さてこの児の本名は

チャールズ・スペンサー・チャップリン。

愛称はチャーリー

公称はやがて世界のチャップリン！

ロンドン児氣質かたぎの特質ある児

Charles Spencer Chaplin
一八八九—一九七七年。
イギリスの映画俳優・監督・脚本家・製作者。アメリカ映画で活躍。独特の扮装と演技で喜劇の王者となった。

*身罷る＝世を去る。

*慟哭＝声をあげて泣くこと。号泣。

後にアメリカで大活躍をしたために
アメリカ人かと思われがちの存在。

筆者が小学後年、中学初期の頃

チャップリンの活動写真が大評判で

時折長兄政美に伴れられて浅草へ

それを見に往くことが何よりの楽しみ。

「チャップリンの霊泉」^{ザ・キュア}へ

「冒険者チャップリン」^{ザ・アドベンチャー}へ

などの諸場面や

美女優エドナー・パーヴィアンスの面影が

今でも眼前にちらつくではないか。

人物チャップリンの伝記

この喜劇の大芸術家大作から

私が受ける印象は、一言で謂うならば

渾然たる矛盾弁証法的存在である。

大作とは、「黄金狂時代」^{ザ・ゴールドラッシュ}へ

「街の灯」^{シティ・ライツ}へ

「モダン・タイムス」^{モダン・タイムス}へ

「独裁者」^{ザ・グレート・ディクテーター}へ

「殺人狂時代」^{ムンシユ・ヴェルデュー}へ

彼はもぢまへの性格と

悲惨な生い立ちのゆえに

寂しさと憧憬、愛着と愛憐

此の世の權威への不屈の抵抗とが

妙なる綾をなし

隠れた天才性を土台に

技芸への不撓の精進を以て

渾然たる芸術へと展開し

偉大なる喜劇芸術が三十代にして花咲いた。

人間チャップリンなればこそその

豊かな芸術よ。

その豊かなフェミニスト的情感は

ゲートと同類。

権勢や暴力に抗する気魄は

ベートーヴェンと同魂。

*憧憬Ⅱしようにい。あ
こがれること。
*愛憐Ⅱいづくしみ。情
け。

*不撓Ⅱ困難に出会って
もくじけないこと。

*フェミニストⅡ女性を
尊重する男性。女にあま
い男。

広い人類愛をもつことに於て世界人。

これが全人チャップリンの相ではないか。

彼の喜劇は笑いの中に

涙を妙えにもつ樂園！

ダンテは「神曲」を

単に「コメディア」(喜曲)と名づけた。

ベートーヴェンはあの「第九」の大合唱で

詩人シラーと共に歓喜を人類に謳歌した。

そしてあの悲劇的生涯のはてに叫んだ

"Paudie Amici! Comedia finita est!"

「友らよ歓呼せよ、喜劇は畢った！」

と。この惨憺たる人の世が、何で喜劇か。

「樂園喪失」(Paradise Lost) の

失明詩人ミルトンは

「樂園回復」(Paradise Regained) を

謳わざるを得なかった。

「悲劇ファウスト」(Tragodie Faust) の

ゲーテはその終曲の

「神秘の合唱」(Chorus Mysticus) で

天界の現実を謳歌して

「永遠的女性が

我らを引きあげてゆく」

"Das Ewig=Weibliche

Zieht uns hinan."

と告白。それはどのようにして、何方へか。

「愛と歓喜をもって

神聖なる太陽(神)へ」

"Mit Lieb und Wonne

Zur heiligen Sonne."

そう私はゲーテの余韻に應えよう。

「永遠的女性」は愛の象徴的表現。

偉大な魂は現実の悲惨に絶望しない。

希望、願望を現実として抱く。

ユーゴーは

「レ・ミゼラブル」(Les Misérables) の

ジャン・ヴァルジャンをして

コゼットとマリウスの
愛の相^{すがた}で終らせている。

ドストイェフスキーは

『カラマーゾフの兄弟』の終局を

福音の光で被^{おほ}つた。然^{しか}り

チャップリンはその天才的神技を以て

観客を現実のゴタゴタの世界から

笑いと感激の天国へ踊り入らしめ

人間愛を心の中に滲^{しみ}込ませて

家路につかせる靈妙な路案^{みち}内者。

彼の数篇の傑作たる喜劇は人類に

泪^{なみだ}の虹の中から愛の光を投^なげている

永遠不滅の劇詩なのだ。

彼こそは真の大芸術家。

彼は制作のため文字通り精魂^{せいこん}をうち込んだ。

生命賭けで演出し、出演した。

費用も時間も問題としない。

何日も、幾月も時には何年も

思考して練りあげる。

さてここで彼の生い立ちの

片鱗^{へんりん}*に触れてみるならば、ロンドンの

チャールス・フローマン一座に拾われ

シャーロック・ホルムズのピリー少年を

演じたことがあったのも忘れ難い一齣^{いちじく}だ。

その後喜劇界の大立者

フレデリック・カルノーに注目されて

ミュージック・ホールの一夜

十七歳にして酔いどれ紳士を演じたが

その芸技の奥に彼の本質^{ひそ}が潜^{ひそ}んでいたのだ。

酒に酔い、女に酔う妙技の奥には

たましひの源泉に酔う神秘の世界を

ユダヤ血統^{ちゆうじ}の彼は有^もつていた。

預言者エレミヤはこう言^いつた。

「我はエホバとその聖言^{みことば}のため

醉漢^{すいかん}の如^{ごとく}、酒に勝^{かち}たるる人の如^{ごとく}し」

*片鱗^{へんりん}ごくわずかな部分。

*「我は……酒に勝^{かち}たるる人の如^{ごとく}し」旧約聖書エレミヤ記23章9節「預言者輩のために我心はわが衷に壊れわが骨は皆震ふ。且つエホバとその聖言のためにわれは酔へる人のごとく酒に勝^{かち}たるる人のごとくし」

と。根源的なものに酔うは真の目覚め。

それは統覚^{とうかく}をもった境地だ。

彼が若々しい笑いのさわる

アメリカに渡つて来たのも

喜劇のためにはふしぎな天の配剤^{はいざい}だ。

ここに一言したいのは

彼の喜劇はパントマイム

口よりも眼と動作がものを言う。

雄弁は銀にして沈黙は金なのだ。

靈妙^{りやうめう}洒脫^{しやだつ}偉大なる哉^{かな}チャップリン。

さらば我らは上掲^{じやうがい}の大作^{ださく}夫々の

焦点やギャグとおぼしき点に当るとしよう。

まずは「黄金狂時代」^{ゴールドラッシュ}へ

三十六歳、世紀二五年の作

スクリーンの舞台は雪深いアラスカ

探索の騒ぎの対象^{あて}は金鉱^{きんこう}よ。

孤独なチャップリン

とぼとほと白雪の上を辿りゆく。

大吹雪のため山小屋に避難すれば

そこには悪漢^{あくかん}が潜伏^{せんかく}、これはしたり。

そこへ大男ビッグ・ジムが

ころげこんできた。

吹雪は何日も降りやむ気配なし

空腹が極限状態となつたので

三人はカードで食物さがしの籤^{くじ}引きだ

くじに当たつた悪漢は

追跡の警官二人をやつつけて逃亡^{とうぼう}。

奴がどろんしたので、チャーリーは

やむなくドタ靴の片っぱを油であげた。

ジムが甲革のところを取つたので

彼は皮革に喰いついた

釘を骨のようにしゃぶるじゃないか

靴紐^{ひも}はスパゲッティ同然

フオークに捲^まきあげて食べるじゃないか！

奇想天外^{きそうてんがい}のこのギャグよ。

*統覚は多くの心理的な内容を統一的に結びつけ、明確に意識しようとする心的作用。

*配剤は適切に取り合わせるること。

*洒脫はさっぱりして俗気のないこと。あかぬけ。

*奇想天外は考えや発想がたいへん奇抜なさま。

喜劇の筋はともあれ

キャバレー「モンテカルロ」で

見とれた女優ジョージアとワルツを踊る。

そのうちにベルトが外れた。

泡を食って目さきの紐を帯したところ

それが犬をつないだ綱だったので

犬にひっぱられてスッテンコロリン！

惚れたジョージアに御馳走つくって

待つ大晦日、待ちあぐんだチャーリーは

二つのフォークで

ロールパンのダンスを演ずる。

ビッグ・ジムとチャーリーは

再び例の山小屋に辿りつく

その夜猛吹雪で

二人の小屋は雪の上をひきずられ

崖つぶちで傾きながら危く止まる。

夜明けに二人は

やっと小屋を這い出てみると

小屋の網が杣にひっかかって

小屋は半ば崖から突きでているではないか。

だが此処はジムが見つけた金鉱の

側だったので

二人は一躍大金持になったとは。

さてこの「黄金狂時代」(Gold Rush)の

狙いとは何か。いつの世でも

どこの国でも、どの社会でも

金が、富がものを言い、幅をきかせる

これを追求するラッシュが絶えない。

そこに問題や、スキヤンダルや

闘争が当然起きる。

その極限現象は戦乱だ。

「戦争は何処からか

分争は何処よりか

汝らの肢体のうちに戦う

欲より来るにあらずや」

ヤコブ書四章のこの言の通りだ。

* 肢体＝手足と身体。

* 「戦争は……欲より来るにあらずや」＝新約聖書ヤコブ書4章1節。

いつの時代も黄金ラッシュに変わりなし。
危険危険！ 崖から落ちるな

戦乱を起こすなど

大きな暗示を語っているではないか！

さて次は「街の灯」へ「City Lights」を見よう。

折にかなってギャグを演ずる

主役者そのものが隠れたギャグなのだ。

あの山高帽、古ぼけたフロック

だぶだぶズボン

これにマツチするドタ靴

竹棒然たるステッキ。

これらを身につけた相が滑稽で

しかもそれが神出鬼没の振舞をしでかす。

今や街の広場で新造彫像前の除幕式だ。

街の名士たちの祝辞が終るや

彫像の幕がパツと除けられる。

見よ、像の前に寝ていた男が驚きあわてて降りようとすれば件のズボンが

別の寝像の剣に刺されてだいなしだ。

参列の大衆の哄笑と警官の怒号が起るが

はやくも彼のすがたは見えない。

この浮浪者はことも無気に街をさ迷う。

とある街角で美しい花売娘に目にとまる。

近寄って小銭を一枚手にわたす。

娘が花を一輪買手の胸にさそうとすると

手にぶつかって花が落ちた。

拾おうと彼女は手探りをする

噫この娘は失明者なのか！

二人はしずかに別れゆく。

そこにロマンティックな

哀愁の余韻がのこる。

開幕と何たるコントラストの場面か。

浮浪者はその夜は石段を降りて

川べりのベンチをベッドに。

* 神出鬼没 人が鬼神のようによい、自由自在に出没すること。

* 哄笑 大わらいすること。

* 怒号 いかりさげぶ声。

一輪の花を胸に、夢路を辿ろうとした。

そこへ石段を降りてくる男の脚音

見れば立派な身なりの紳士、だが千鳥脚

見ているとロープを首に結びつけ

重石をつけて身投げの動作

「死にたい」のだ。

止めようと捉えはしたが、諸共にどぶん！

やつと這い上って

「悲観するな

夜明けには小鳥も歌うよ」

河水に浸り、水も飲んだが、正気に帰り

「あんたは生命の恩人だ

家に来なさい」

この金持紳士は酔い時と覚め時の

浮浪者への意識と態度が全くちがう。

はなしは飛んで

花売娘は老婆と二人暮しだが

娘は熱病に罹った。

浮浪者は助けたいが金がない。

そこで働き場の第一が街の清掃夫

第二がボクシング

勿論ノックアウトされる。

ところが外国帰りの例の紳士に

運よく出遭い

娘救助の千ドルをもらいに豪邸へ行く。

千ドルをめぐって

彼と泥棒と警官の三巴騒ぎ。

やつと警官の手から奪いとって

花売娘の家にゆき、娘に渡して街に出る

張り込みの刑事につかまって留置所へ。

秋が来て出所、以前にもましたほろ姿

街角で悪童に吹き鉄砲でからかわれる。

ふと見ると塵の中に花一輪

想い出が目には浮かぶ。

向い角は新店の花屋ではないか

その花屋の美女が、彼を気の毒そうに見た。

彼はまた不思議そうに彼女を見つめた。
娘は花を一輪手にして彼に近よる。

花を受けとって立ち去ろうとする彼に
小銭を握らせた。

そのときの手の触覚に彼女は驚いた。

かつて花一輪に

小銭を握らせてくれたあの人！

「あれは紳士ではなく

この人だったのか！」

と心の声。

「あなたは眼が見えるようにな

りましたね」

と眼の声。

兩人の心は抱き合ったが

現実はそのままで立ち消え。

あたたかい人間愛のこもった

美しいロマンティックな瞬間だ。

この最後の場面の

余韻はいつまでもいつまでも。

「街の灯」は正に愛の灯火だ。

チャップリン全作品の華ではないか。

三番目は

「モダーン・タイムス」(MODERN TIMES)

開幕は羊の群

次はラッシュアワーの人の波

次は大工場の一角を走るベルトコンベア

その前に立つて両手でスパナールを持つ工具

コンベアの上に運ばれてくる機械の部品

その二つの螺子をスパナールで

締めつけるのが工具の仕事

見ていると工具の締めつける

業そのものが全く機械的！

コンベアの速度が早くなれば

締めつける業も

それにつれて早くならざるを得ぬ

人間が機械に従属している機械人間

その工員の一人がチャーリーではないか。
禍^{わざはひ}なるかな、人間性喪失の機械文明！

工員とその働き振りをビデオで

煙草をふかしながら看視^{かんし}する社長

資本主義社会の象徴の一場面。

更にランチタイムの自動食事機の

実験台に選ばれたチャーリー

何でも機械で食べさせられる

犬より惨め^{みじ}なその喰^くい方。

チャーリーはとうとう気が狂って

何でもスパナで締め^しめつける動作をする

女の胸の飾りボタンを

螺子^{ねじ}と錯覚して締めつけようとした。

女は驚いて逃げ廻る。

チャーリー自身

大きな歯車の中で回転される。

工場のスイツチも

螺子^{ねじ}と違ってやたらにひねる

工場はために大混乱！

チャーリーは救急車で精神病院へ。

人間性無視の

オートメイシヨンの工場でないから

人間性回復で氣^き狂^がは苦もなく治る。

次のギャグの一齣^{こま}、無銭飲食で

警察への護送自動車に入れられる

そこにはパンを盗んだ少女が居た。

貧乏で昔^{むかし}そんなこともしたチャーリーは

この娘^{むすめ}を助けたいと念ずる

急カーブで二人は路上に投げ出された

それを知らずに車は走る、神の助けよ。

デパート夜警的一幕のあと

二人は街を出る

少女は小川沿いの空き家を見つけた。

少女は運よくキャバレーの踊り子になる

チャーリーは彼女のおかげで給仕となる

食客サービスのため彼が歌う番となる

忘れてもこまらぬように

歌詞をカフスにメモしておく

うまく踊り歌っているうちに

カフスが飛んじやった

一瞬こまつたが機転の即興

「ティティナ」節の即妙に大喝采！

二人の嬉し涙も束の間で

感化院の役人が脱走罪とて

少女を逮捕に來たがすばやく逃げた

捕らえられてなるものかと

チャーリーも相共に。

町外れの叢林に一夜を明かしたこの二人！

オートメイシヨン文明

人間性不在の都会よさらば！

山高帽とダブズボン

ドタ靴とステッキの彼は

心美しい乙女ポーレットと

アーム・イン・アームで

お天道さまのあたたかい光を浴びながら

自由と愛の世界を指して

心一つに寄り添いながら歩きゆく

そのうしろすがたの

ロマンティックな美しさ！

最後にチャップリン喜劇精神の総括たる

「独裁者」＜THE GREAT DICTATOR＞を

視ることにする。（これはパントマイムで

なくトーキーにきりかえた）

時期は第一次世界大戦の末期に因み

トメニヤ（ドイツ）軍が劣勢となつたが

射程距離百マイルの巨砲ビッグ・バーサを

ぶっぱなつ役割は床屋のユダヤ人兵士

これに扮したのは

二役を演ずるチャップリンその人

発射命令でロープを力一杯ひっ張つて

*機転＝才知がよく働くこと。

*即興＝その場ですぐ詩歌などをつくること。

*即妙＝即座に能く才知機転。とんち。

*叢林＝樹木の群がりはえている林。

ひっくりかえる。

巨弾は筒先からポトンと落ちた、不発弾！

「ヒューズを調べろ」

で兵士はぬき足さし足で近づく。

弾頭から後尾に廻ろうとすれば

あなふしぎ、巨弾の弾頭は

彼に従^ついて廻るじゃないか！

逆に廻れば、同じく逆回転

兵士が止まれば巨弾も止まる。

だが突然、巨弾は火花を吹き出し

猛烈な回転を始めた！ 危険！

兵士は司令官たちのところへ

駆けもどるや、伏せ！ と逆命令！

次の瞬間、砲弾は爆発！

次は高射砲の操縦と手榴弾^{てりゆうだん}のお笑いの一齣^{いちぶ}

いよいよ突撃

硝煙^{しょうえん}がたちこめて敵味方の混乱

煙が消えるとフランス型ヘルメットの中に

ドイツ型のはこの兵士だけ。

この床屋さん兵士あわてて

トメニア機関銃隊の小屋にもどる。

同僚はこの兵士にまかせて退却

やがて小屋の裏手に「助けてくれ」との声。

出てみると飛行将校シュルツではないか。

不時着の飛行機から投げだされて動けない。

「飛行機にもどりたい」

彼も一緒に乗って助手となる。

飛行機は飛び立ちはしたが

そのうち天地逆転飛行！

ガソリンがきれて墜落！

兵士は泥沼にはまり込む。

トメニア軍の兵士たちが駆けつける

「俺^{おれ}をシュメロフ将軍のところへ

連れて行ってくれ！

今すぐ書類を届けないと

わが軍は敗北だ」

*硝煙は鉄砲をうったときのけむり。

「もう終戦です。我々は負けです」

「負けた!? ああ」

戦後、ヒンケル党（ヒットラーのナチス党）の勝利、トメニア国の独裁者ヒンケルの独裁政治始まる。

ダブルクロス
双十字章（皮肉にも裏切者の意あり）の旗の波、挨拶は

「ハイル・ヒンケル」

トメニア国は狂気のさただ。

ヒンケルの獅子吼的演説が

国民の理性を沈黙させる。

ユダヤ人迫害前兆として

ヒンケル親衛部隊が

ゲットー（ユダヤ人居住区域 Ghetto）に

乱暴をする。

ハンナ（ポーレット）は女だてらに嘯いた

あんた達、多勢を盾に女いじめや

盗みや乱暴をする八九三じやないか。

トラックの隊員はハンナめがけて

盗んだトマトを投げかけた

ハンナの衣服や洗濯物を

だいなしにして立ち去った。

記憶喪失症で長期入院の床屋チャップが

ゲットーに帰還した。

雨戸には白ペンキで「JEW」

店は塵芥と蜘蛛の巣だらけ

床屋は国の状況の大変化を知らぬから

昔の通りの気持と判断でことをする。

親衛隊との小競合にハンナも加勢

頓珍漢な喜劇場面の連続。

街頭で危く床屋は

首くくりに処せられるところ

親衛隊司令官シュルツが

オープン・カーで通りかかる。

「何ごとだ

*獅子吼＝熱弁をふるうこと。

この人は私の生命の恩人だ！」

シュルツの街頭一席を聞いて

床屋もシュルツとの飛行機事件を思い出す。

「今後何かが起きたら

私に報せてくれたまえ！」

独裁者ヒンケル（チャップリンの偽相）の

パレスでの美人秘書リタを相手の半齣

側近ヘリングやガービッチとの押し問答

地球がわくの中に置いてある

ヒンケルはそれを取り出し

見れば気球なのだ

軽く両手片手でもてあそび

こんどは脚で蹴り上げる

伏せ身になって

つまさきでポンポンお手球、^{てだま}否足球だ

お尻で突きあげもする

地球世界はおれのもの

ところがついにパチン！

気球の地球は影もなし

ヒンケルの悲惨な末路の予言かな。

場面は変つて床屋さんの店の中

隣家のジェットケルが鬚髯^{ひげ}を剃^そってもらう

ブラームスの「ハンガリアン舞曲五番」が

ラジオから流れる

その曲調^{しらべ}に合せた動作で床屋がひげを剃る

チャップリンのこの妙技に観客は大笑い。

ヒンケルはいよいよ

ユダヤ人迫害にとりかかる。

「シュルツ！ ユダヤ人迫害だ

親衛隊を召集せよ」

「総統、そのような暴挙は

混乱を招きます」

「何だと、お前は

ユダヤ人の肩をもつのか」

「わが党と人類を思つての意見です」

「お前は強制収容所に行くのだ」

かくてシユルツに逮捕命令が出た。

「結構、だが憶えておきなさい

あなたの主義は必ず失敗する

無実な人々に無謀な迫害をして

それを足場とするとは愚挙ぐきやですよ

総統の政策は犯罪より悪質です

悲劇的な錯覚です！」

シユルツはかく言い遣のこして、拉致うちされた。

一方床屋はあのチャップリン相すがたで

ハンナと手をとつて街に出た。

或る街頭に來たときに、スピーカーから

総統の演説が流れて來た。

トメニア語のその演説は

激烈な口調のユダヤ人捕獲宣言だ。

その間シユルツ逮捕の号外も撒まかれる。

床屋とハンナは急いでもどつた。

親衛隊の再來により

床屋の店も焼かれてしまった。

しかしジェツケルの家は無事だった。

シユルツはその家の地下室に隠れていた。

その夜は

プディングと銀貨のさわぎがあつた。

またもや親衛隊の來襲のため

遂にシユルツと床屋は

一緒に収容所行きとなる。

ジェツケル一家とハンナは

オスタリツチに逃げ

田園生活を楽しむことになる。

収容所の床屋にハンナは手紙を書いた。

「あなたが釈放されて

再会の日を待っています」

と。

トメニア国のパレスでは

ヒンケル、ヘリング、ガービッチが

高官数名を呼び寄せて今や晩餐会^{ばんさん}。

ヒンケルはオスタリツチ侵攻を思いついた。

その準備をなし遂げたヘリング元帥^{げんすい}を

称賛^{くんしょう}し、勲章を胸一杯にしてやって

乾杯をする。電話がかかる

バクテリア国（イタリヤ）の

ナバローニ（ムツソリーニ）が

六万の軍隊を以て

オスタリツチに侵攻したと。

これを聞いたヒンケルは

先手を打たれたと激昂^{げきよう}し

ヘリングの勲章を胸から全部^{むし}取り取り

上着やズボンのボタンもちぎりと取る。

「ナバローニに宣戦布告だ」

といきり立つ。このとき

ナバローニからの電話がかかる

オスタリツチ侵攻につき

総統閣下^{かつか}と会談したき旨^{むね}。

それでヒンケルの気持も鎮まり^{しず}

トメニアのパレスに招待することになる。

この招待のありさまと、二人の独裁者の

優越あらそいの笑止千万^{しょうしせんばん}の場面が展開。

強制収容所の囚人二人

将校制服を奪って遁亡^{とんぼう}。

逃げたのは言うもおろか

シュルツと床屋。

床屋はヒンケルと瓜^{うり}二つの

否瓜^{ひきうり}一つの相貌だ。

二人はオスタリツチ国境に近づく。

ヒンケルは国境付近の湖で

ボートに乗って鴨獵中^{かもしよう}だ

ボートが小さいために射撃の反動で転覆。

遁亡者探索中の親衛隊員が駈^かけつける。

*激昂いいきりたつこと。

*笑止千万いひどくばからしく見えるさま。

*相貌顔つき。人相。

湖の岸に這い上がるすぶ濡れの怪しい男を捕えて、有無を言わせず収容所へ連行する。

一方国境に迫った二人に

三人の親衛隊員が近づいて来た。

すれちがつてから

後姿で一方をヒンケルと思つて

村へ報告にゆく。

シュルツと床屋が村に入ると

將軍や將校らが

勢揃いで出迎えるではないか。

「ハイル、ヒンケル！」

總統、お喜び下さい、準備完了です」

シュルツが先ず

「よろしい」

と一言。これに着いて床屋ヒンケルも

「よし」

一緒にオープン・カーに御乗車だ。

オスタリツチには

ハンナが居るのだとは床屋の胸の中。

トメニア軍の戦車や装甲車が堂々と

国境を越えて侵入してくる。

新聞は見出し大きく告げている

「ユダヤ人街襲撃さる。財産没収。

ゲットーのユダヤ人たち

親衛隊に暴虐された」

オスタリツチの田園に

親衛隊員がやって来た

不審の者らに乱暴を加え

ハンナも地面に倒された。

オスタリツチ首都のスタジアムには

数万の群衆と軍隊が参集している。

そこへ床屋ヒンケルと

シュルツの車が到着だ。

「ハイル、ヒンケル！」

*暴虐は手荒く取り扱うこと。むごく、いじめるさま。

降車の彼に挨拶だ。

「總統閣下、世界は

閣下のお言葉を待望してます」

ガービッチ、ヘリングラの高官が待っている。高い演壇に登りゆく床屋ヒンケルとシウルツ

「總統の様子が変わったね

シウルツは許されたのだろう」

顔を見合わせ囁く声がちらほら。

床屋ヒンケル、席に腰をおろしたが

ぼろ椅子で尻餅をつく

あわてて椅子はとり替えられる。

ガービッチが先ず演壇に立ち

独裁政治を讚美する。

要旨はこうだ。自由平等民主主義

そんなものは民衆欺瞞の美辞だ。

絶対服従の国家奉仕が人の道。

ユダヤ人を始め

非アーリア民族は市民権を剥奪される

トメニア国の独裁者

彼が世界に君臨するのだ。……

彼はとんでもない独断的な

全体主義を吐いた。

さていよいよ床屋ヒンケルの

六分間名演説となる。

(ここには全文を載せるわけには

ゆかぬから、いくつかの焦点を

自由な言で掲げることにする)

「私には寸毫も征服支配欲なし。

ユダヤ、アーリアン、黒人、白人

何らの区別なし。

宗教は何であれ

愛することが人間の本質なのだ。

幼児に国境がないように

*欺瞞＝だますこと。ごまかし。

*美辞＝美しい文句。巧みなことば。

*寸毫＝きわめてわずかなこと。寸分。

各国人が助け合うなら

国境はあつて無きもの、世界は一つだ。

独裁者は在るべきものではない。

自由の本質は愛だ、自己主張ではない。

不正や権勢や暴力がのさばるならば

そのとき主権者民衆は

義のため愛のため戦うべきだ。

機械文明の機械人間になるな

人間は家畜でも奴隷でも機械でもない

人間の人間たるは

人助けの愛があるということだ。

ルカ福音書第十七章の

キリストの言に注目しよう

へ神の国は君たち人間の中にある。^{*}

恵福^{けいふく}を生み出す力は本来授かっている。

天与^{てんよ}の人間性にこそ

本当の民主主義がある。

智性理性に於てこそ

科学の進歩は世界を益する。

これに欲がからまると

禍害や戦乱となる、注意せよ。

地球は円い、円現の心で

世界国家を目指して行こう^{*}

これが床屋ヒンケルの名演説の主旨だった。

そして終りにつけ加えて言つた。

「ハンナ、聞こえたかい

何処にいるか知らぬが

上を見なさい、ハンナ

太陽が顔を出したよ

私たちは暗闇から

光の世界に向つているよ

貪欲^{どんよく}や憎悪^{そうお}の地獄を立ち出でて

あたたかい天国的な

世界が開かれて来た。

ハンナ、人間の魂には

^{*}神の国は君たち人間の中にあるルカ伝17・21
「また「視よ、此処に在り」「彼処に在り」と人々言はざるべし。視よ、神の国は汝らの中に在るなり」

^{*}貪欲は欲が深いこと。
強欲。

翼が与えられている

その翼で今飛び立ち始めているのだ

人間の魂は

七彩の天橋なないろのてしに向って飛んでいる

希望の光の国が

あなたの、私の、みんなのものだ

栄光の将来が待っている

そこへ飛んでゆくのだ。

見上げなさい、ハンナ！ 上を

ハンナや、聞いたかい!?」

切々たる愛の語りかけだ。

この「ハンナよ」の呼びかけは

チャップリンにとり

天界の母ハンナへの

涙の呼びかけでもあった。

ジェツケルお翁うが感嘆して

ハンナのところへ近よった。

ハンナは夢心地で天空を仰ぎ見

聴き耳を立て

倒された体軀からだを抬もたげて微笑ははえんだ。

その眸ひとみは天的希望に燿かがやき出した。

美しい天的な楽音らくいんが流れてきた。

ハレルヤ。

「殺人狂時代」はこの「独裁者」の

各論的な軍備拡大の相。

チャップリンの悲願を裏切る世界状況だ。

この「独裁者」の

理髪屋チャップリンは

弱者、被虐者たちの味方となって

世界平和をただ口にするのではなく

身を以て愛を身証しんしょうしてゆくことにのみ

悲願ひがんの達成があることを

示唆しさしているわけだ。

ところで

*楽音＝楽しい響きの音。
（著者は、キリストの「福音」は天来の楽しい響きの世界であるとして、しばしば「楽音」と称した）

ここに一言しておきたいことがある。

即ち、チャップリンは

一八八九年四月十六日生れ

ヒットラーは同年同月二十日生れ

四日ちがいの奇運のこの二人

それが正に不倶戴天ふぐたいてん*の二人ではないか。

一人は人類愛の大芸術家

他の一人は人類禍害の独裁者

チャップリンはこの「独裁者」を以て

独裁者ヒットラーにうち勝つて

平民のどん底に立った。

まことに彼の演出

出演そのものが

人類愛の行為的身証である。

大喜劇作家にして

大演技者チャップリンは

おのが人生体験を土台とし

天才じゆうぜんを完全かつぜんに活現した

空前、絶後の

大喜劇芸術家、大俳優である。

彼の悲願に心ある人々が身証せんことを

チャップリンは作品を通して祈っている！

*不倶戴天Ⅱいつしよに
天をいだだかない、つま
り共に生きてはいないと
思うほど、恨むこと。

マリリン・モンロー

アメリカは西海岸北緯三三度あたりの
港市ロサンジェルスの総合病院で

貧困と精神異常の家系の

グラデイス・ベーカーという女が

一人の女の子を産んだ。

相手の男はエドワード・モートンズン

この女の子はノーマ・ジーン (Norma Jeane)

と名づけられた。

この乳児には美が内住していた。

アイルランド、スコットランド

ノルウェイの血が

混在している家系であつたから

北欧の美が大西洋

アメリカ大陸を横断して

太平洋岸に花咲いたのだ。

精神病の母のため

私生児ノーマ・ジーンは孤児となり

養女として里親を

転々とバトン・タッチの

幼少女時代をすごしつつあつた。

Marilyn Monroe
一九二六―六二年。アメリカの映画女優。性的魅力のある女優として世界的人気を得た。

天性の超理性の行動源と花も羞^はじらう無邪気な笑^えみと

宿命的な憂悶^{ゆうもん}に因^よる

自滅^{じようめつ}の衝動^{しょうどう}を宿^よしていた。

彼女が初めて太陽に照らされたのは

一九二六年の六月一日。

彼女を預った里親は

当局から養育費をもらう目的

「当時私が何にもまして

求めたのは愛情でした」

とはノーマ・ジーン^{じゆん}の涙^{なみだ}の述懐^{じゆつかい}。

愛に飢えても、愛してくれる人がない。

父、特に母の愛なき子らは

ぐれて愛なき人になること多し。

生きとし生けるものにとり

愛こそ生命の生命なれ。

ノーマ・ジーンは孤児院に暮すこと

三五年から三七年までの

九、十、十一の少女時代。

その窓からRKO^{*}の建物が見えた。

そして日が暮れるとその映画産業の

ネオンちらほら、ああ映画！

それは彼女に女優たらんとの

夢を見させたことだろう。

彼女はエマスン・ジュニア・ハイに入学。

どうしたわけかヒューマン・ビーンズ

人間豆という綽名^{あだな}をつけられた。

栄養不足のみじめな相^{すがた}のためらしい。

その後ハイスクールに入ったが

五ヶ月で退学

型にはまった学問は彼女に無縁

彼女は顔と肉体と技能で

生涯かけて勝負をする特異な女性

思春期のノーマ・ジーンは

自然の欲求のまにまに暮した。

彼女にとっては

*憂悶＝心配してもだえ
ること。

*RKO＝レイデオ映
画。

それが赤裸々な有り方だった。
性欲も食欲も神から授かった

本能的衝動にちがいない。

あと臭れのない陽性の遊び。

しかし教会人からは

不良少女のそしりを受けた。

ヨットに日が暮れば

ダンスに夜が更ける

陽が中天に昇ればプールで人魚

午睡から覚めれば

フット・ボールで馳せ廻る

何と澁刺たる少女かな。

美の権化になってゆく彼女は

まことの美は肉体の健康、心の明朗

安らかな睡眠に在りと自覚していたが

性来の精神病質が時折安眠を妨げた。

噫惜しむべき宿命よ

睡眠薬を用いる度数が

成人してから次第に増して来る。

ジム・ドアティーがやがて

結婚の相手となった。

一九四二年六月に結婚

彼女は十六歳、早熟な女性だ。

ノーマ・ジーンはジムを熱愛し

「もし、あなたが私を棄てたなら

サンタ・モニカの埠頭から

投身自殺をするわ」

と嘯いたとジムはのちに語った。

これは衝動的な言であつたと見えて

彼女はこれを否定した。

うちなる彼女は

本当に幸福な家庭をのぞみながらも

矛盾する感情のため

結婚は永つづきしなかった。

彼女はその美貌のゆえに十七歳にして

*午睡||昼寝。

*権化||ある特性が人間の形をとってあらわれたかと思えるほど非常に強いもの。

*嘯く||口をつはめて声をだす。大きなことを言う。

すでにモデルに成るのであった。

決して魔的ではない美体の魅力

花で言えばピンクの薔薇^{ばら}か

黄金色のランの花か

雅歌書^{がかしよ}の名句を想わせるゆたかな乳房^{ちちう}

眸^{ひとみ}は緑色、品のいい姿体

ミロのヴィーナスの

活ける現代型とでも謂^いわんか

その微笑にはどの男性も降参^{まゐ}だ。

一九四五年、十九歳の彼女は

身長五・五フィート、Bは三六

Wは二四、Hは三五インチ

ノーマ・ジーンは気の毒な母の扶養のため

モデル写真を何種類も撮^あることを

敢^あえてした。

ハリウッドの新人女優

マリリン・モンローも

スターレット時代を地道に

踏^ふんでゆかねばならない。

その頃一方では美の権化^{ごんけ}たるマリリンの

一九五二年度のヌード・カレンダーの

綾^{あや}なす美は雨後の雲霧に現^{あら}われる

虹霓^{こうげい}の如く眼を酔^よわせた。

イングリッド・バーグマンと

マリリン・モンローは

やがてハリウッドの名女優として

相前後して輝いた。

いずれにせよ偽善をきらった女優

マリリンについての美しい神話は

She refused to let anybody

"use" her body sexually.

彼女はジョー・ディマジオと

一九五四年に日本を訪れた。

そのときの彼女は

世界的美人たる容姿のみならず

記者団に心情の美も印象づけた。

* 雅歌書＝旧約聖書の中の一書。神とユダヤ民族との純愛詩集。

* 虹霓＝虹。

* *She refused to let anybody "use" her body sexually.*＝彼女が誰にも自分の肉体を性的に「使^{もち}う(提供する)」ことを拒んだ。(直訳)

その後アーサー・ミラーとの最後の結婚生活に入った。

彼女はしかし幸いな家庭を成すには余りにも肉体が害^{そと}われていた。

女優としての活躍は若き生涯の最後の数年に耀^{かが}っていたが

彼女の遺伝的精神病が深まっていた。

噫マリリンの美の中には

天性の超理性の行動源と

花も羞^はじらう無邪気な笑みと

宿命的な精神病に因る不眠病からくる

無自覚の自滅への衝動を宿していた。

おそらく睡眠薬を過つてのみすぎたため

救いの受話器に手をかけたままこと切れた。

一九六二年八月五日の未明に

彼女のたましひは天使に迎えられ

み空の星に帰ってしまった。

彼女の人の知れぬ涙を受けたのは

かの十字架のナザレ人の

聖手であつたにちがいない。

白日夢^{はくじつむ}を神秘の現実として生き貫いた

美の精たるマリリン・モンローは

世界の超恋人として散つた。

二十世紀のこのヘレーナ^{*}は

永遠の女性として生きつづける。

主演女優として

一九五三年の「ナイアガラ」

一九五四年の「帰らざる河」

一九五五年の「七年目の浮気」

一九五六年の「バス停留所」

一九五七年の「王子と踊子」

一九五九年の「お熱いのがお好き」

一九六〇年の「恋をしましょう」

一九六一年の「荒馬と女」

*白日夢＝白昼夢。覚醒時にあらわれる、夢に似た意識状態。空想よりも現実的な内容をもつ。

*ヘレーナ＝ギリシア神話のギリシア世界第一の美女。ゼウスとレダの娘。ヘレネ。

結婚は

ジェイムズ・ドアティと

一九四二年六月～四六年十月

ジョー・ディマジオと

一九五四年一月～五六年六月

アーサー・ミラーと

一九五六年六月～六一年一月

「マリリンさん

あなた 貴女の宿命を心から気の毒に

思う者の一人ですが

日本語の『気の毒』の

文字通りに貴女の気が

毒せられていたのでしたが

ある瞬間にあなたは

きつとキリストを

慕ったことがあるでしょう」

「ええ、ありました

病院にいたときに」

「そのとき、あなたは

あのマケダレーナのように

主さま！ と叫んで

全身をキリストの中に投げ入れたら

ふしぎな力を受けて

キリストのみ腕の中で

眠る秘訣を得たはずですよ。

でも、いいです。

あなたは世界的な女優として

地上のいのちを

燃やしつくしたのですから。

今、天界でバラの如く

永遠の美のしるしとなっています」

松井須磨子

松井須磨子の故里は
わが母の故里と同じ松代で
茲に彼女の生きざまを
しばし語らせてもらいたい。

松代は長野市の南方善光寺平の一寒村
山蔭の半日村の名を偲ばせる
松代の一角、清野の里の丘の上の
真田藩士小林藤太といしの家に
兄弟姉妹の九番目に

末子として女の子が生まれた
明治は十九年十二月八日という
後の日本の歴史的な月と日に。
この女の子は上田なる長谷川の家に
養女となつて小学時代を暮し貫き
やがて東京は麻布の姉峰子の
菓子舗風月堂に起居をして
海老茶袴を穿いて裁縫女学校に通い
帰宅しては店番の一員ともなっていた。
卒業後十八歳にして千葉は木更津の

まつい すまこ
一八八六—一九一九年。
女優。本名、小林正子。
長野県生まれ。「人形の
家」のノラで脚光を浴び、
新時代の女優として活躍。
島村抱月と芸術座を結成。
『復活』のカチューシャ
で全国的に知られた。抱
月の死後、自殺。

割烹旅館^{かつぱうりやん}の鳥飼啓蔵に嫁した
勉学の意欲旺盛^{おうせい}な彼女は

一年にして離婚、再び風月堂に。

意欲あるところに道は拓^{ひら}かれる。

高等師範学校地歴科出身の

長野県人前沢誠助と知り合った。

彼は巖谷小波^{いわやこなみ}に師事するほどの

文学好きで、正子の心は拓かれてゆく。

正子は前沢と第二の結婚。

牛込の高等演芸場で

お伽芝居^{とぎしばい}の公演があった。

主催者荒川重秀は才人

哲学も農学も身につけていた。

この荒川に紹介もあらなく

正子は女優になりたいと

あからさまに頼みこんだ。

荒川は「人生意気に感ず」で応え

「それほど本気なら今日から稽古^{けいこ}だ」

と。前沢は新派俳優藤沢浅二郎開設の
「東京俳優養成所」の講師となった。

その面々は

小山内薫、東儀鉄笛、土肥春曙ら。

正子は松井須磨子^{すまこ}と名のる女優となった。

彼女の稽古たるや朝から晩まで

全身火の如し

芸のためには他事一切を犠牲に供する。

明治四十二年に須磨子は

坪内逍遙^{つばうちせうよう}の文芸協会の演劇研究所の一員

猛き勉強、烈しき修練

能う限りの時間を利用して励みに励んだ。

平素身なりは一向かまわず

家事も最小限のため

妻としてふさわしからずと見た前沢は

明治四十三年秋に離婚した。

茲^{こゝ}に松井須磨子は名実共に

独身の一女優として提身^{ていしん}。

*割烹料理屋

*巖谷小波 一八七〇—
一九三三年。小説家・童
話作家。東京生まれ。兄
章文学草創期の第一人者。
*師事 師として仕え、
教えを受けること。

*坪内逍遙 一八五九—
一九三五年。英文学者・
劇作家・小説家・評論家。
美濃の人。東大卒。早大
教授。「早稲田文学」創
刊。文芸協会設立。新史
劇の道を開き、新舞踊運
動を起す。シエークス
ピア全作品を完訳。

文芸協会の第一期の女優には

彼女の他に山川浦路、秋元千代子。

須磨子は所謂美人ではないが

その情熱と理智の渾然とした眸と

たのもしい体軀に言い知れぬ魅力があつた。

明治四十四年春五月帝劇で

文芸協会が第一回公演として

「ハムレット」を上演

クロードアスと墓掘りの役は東儀

ハムレットに扮したのが土肥

オフィリアを演じたのが須磨子

一週間のこの上演で彼女の名技が

観客を魅了し芸名は高揚

演劇を志して僅か三年にして

女優としての名声を勝ち得た。

彼女は半年にしてハムレットの

すべての台詞を「せりふ」ことができた。

おどろくべき全体的なうち込みよ。

おのが欲することを妨げる事態は

何者何事と雖も遠慮なく拒む

彼女の性格が文芸協会内に

波紋を起したのは当然の事態。

逍遙の愛弟子島村抱月が

彼女の才幹をみて大いに鍛えた。

彼女は抱月の学識と人物に傾倒し

その鍛錬を全身で体受した。

抱月が訳したイブセンの

「人形の家」のノラに扮したのが須磨子。

自由を主張する新型女性の

ノラには須磨子こそ正に適役。

野生の花たる「ノラ」須磨子は

嵐に散るとも

室咲きの花と愛でられて萎むに優る。

抱月は演劇への熱意のゆえに須磨子を愛し

須磨子は演技を鍛える師のゆえに

抱月を愛した。

*渾然Ⅱ溶け合つて一体であるさま。

*体軀Ⅱからだ。身体。

*島村抱月Ⅱ一八七一—一九一八年。評論家・作家・演出家。島根県生まれ。早大卒。早大教授。自然主義文学運動・新劇運動に貢献した。文芸協会を経て女優松井須磨子と芸術座を結成、欧州近代劇の大衆化に尽力。著書「近代文芸之研究」など。

この関係が会員の間に波紋を起した。
ズーダーマンの『故郷』を

明治四十五年（一九一二）の春
有楽座で公演。その女マグダも
須磨子が演じてまことに適確。

新型の自己主張の女性の故に
当局の干渉に遭い
マグダは終幕では懺悔する。

抱月と須磨子の演劇実践は
優秀な成果をあげたが

二人の相愛が醸した波紋のゆえに
抱月は辞任、須磨子は諭旨退会

大正二年（一九一三）晩春のことであつた。

早大を重んじ逍遙を敬していた抱月は
演劇には生命をかける。

そのためには抱月を全的に信愛する
希代の女優須磨子が絶対に必要。
家庭ある抱月には悲劇的な命運か。

須磨子には生命がけの必然。

演劇への生命がけが

両者を生命がけの愛へと。

かくて大正二年七月に

新劇団「芸術座」が発足。

二人の間に極秘の誓紙が三度交わされる。

抱月の指導と彼女の猛練により

松井須磨子は既に日本最初の「新劇女優」。

抱月は正に

「月」なる須磨子を「抱」くが如し。

大正二年九月に第一回公演を有楽座で

メーテルリンクの

「モンナ・ヴァンナ」と「内部」。

芸術座は抱月・須磨子の熱い関係のため

はやくも脱退者続出、芸術座の危機迫る。

大正三年（一九一四）三月の第三回公演に

トルストイの『復活』を題材にして

抱月は乾坤一擲の演出を試みた。

*諭旨＝わけを言い聞かせること。

*希代＝世にもまれなものと。

*誓紙＝誓いの文句を書いた文書。誓約書。

*乾坤一擲＝のるかそるか、運命をかけて勝負をすること。

青年士官ネフリュードフと

女囚カチューシャの悲恋物語は

抱月・須磨子の命運の予言か

相馬御風・抱月作詞、中山晋平作曲の

「カチューシャ」の劇中歌を須磨子が歌う。

これが大ヒットしてこの劇は四年間

正に第一次大戦と時を同じうして

内地の諸都市はおろか

北海道、台湾、朝鮮、満州にまで巡業して

総計四四四回の公演と相成った。

正に芸術座「復活」の象徴たる如く。

「カチューシャ可愛や別れの辛さ」

に始まる全十節の哀歌は全日本を風靡した。

この流行歌の余韻は嫋々として

明治、大正人の耳朵に今猶響く。

その勢に乗じて芸術座は

「サロメ」「清盛と仏御前」「闇の力」

「マクベス」「アンナ・カレニナ」「沈鐘」

そして「生ける屍」と。

芸術を大衆化した公演は

芸術座の犯した矛盾であったか否か。

しかし女優須磨子の本質は

その心魂の自由さ、その個性の豊かさ

その縦横無尽の演技力にあって

大衆化ではなく

大衆を生命的な芸術の世界に

同化させる魅力をもっていた。

正に大女優たるの実力が発揮されたのだ。

惜しむべし彼女は女優たるの反面

女性としてのつましさに欠けていた。

天は抱月と須磨子の愛の世界に断を降した。

それは奇しくも「死とその前後」劇に

全力を傾注して準備中の須磨子が

流行中のスペイン風邪に罹り

介抱していた抱月に感染した。

須磨子は治り、抱月の病は革まる。

*風靡＝なびき従わせること。

*嫋々＝声が細く長く響くさま。

*耳朵＝みみたぶ。みみ。

*革まる＝病が危篤になる。

抱月は「稽古に疾く往けよ」と
演劇第一の姿勢を貫く。

ダナンチオの「緑の朝」の稽古中
抱月の胸の時計は

大正七年師走^{しわす}五日の深夜に止った。

急を聞いて須磨子は駈^かけつけた……。

抱月の胸に顔を埋めて彼女は号泣^{ごうきゅう}。

「緑の朝」は皮肉にも

「闇の朝」となったが

舞台第一は芸能人の宿命^{さだめ}

彼女は明治座の興業^{こうぎょう}の役割を果たした。

芸術座はどうなる

「解散はいしません」

須磨子は劇場へ赴^{おもむ}く前に必ず抱月の霊前で

「先生、行ってまいります」

と低頭。「カルメン」の舞台稽古を

その大晦日にも。

しかし抱月なきあとの須磨子には

カルメンの

「二切合切みな煙」

の絶望的な気分が襲った。

遂にときが来た

三通の遺書をしたためた。

抱月の遺影の左右に

女優番^{まげ}と丸番の自影を立てた。

女優番に結い化粧をすませ

大島緋^{かきり}の二枚重ねの上に大島羽織を羽織り

水色緋^{しるべ}珍の丸帯を締め

抱月の霊前に香を焚^たき

「先生のお側に参ります」

と口吟^{くちぎみ}み、秘かに階段を降り

芸術倶楽部^{くげうぶ}の舞台裏なる

物置に入り、紅鼻緒^{べに}の草履^{ぞうり}を脱ぎ

卓上に椅子^{いす}を乗せ

緋^ひちりめんの扱帯^{しごき}を梁木^{はり}に懸^かけ

水色の扱帯^{しごき}で両膝^{ひざ}をしばり

*興業＝新しく事業をおこすこと。

*緋＝あか。あかるくて、濃いあか色。

椅子の上に立ち

扱帯の輪に首を入れ瞑目して

「先生！」

と叫びかけるや、椅子を蹴つて

彼女の魂之靈は「先生」の許に！

時正に大正八年（一九一九）一月五日

抱月去つて二ヶ月目なる命日の晨！

須磨子は抱月への愛を貫いた。

抱月は誓文の如くは離婚しなかつた。

須磨子はそれを容^{ゆる}していた。

相愛はいのちがけの演劇の随伴現象で

この世の秩序とは

本質的に関わりなきことであつた。

使命が結んだ師弟の情愛と

家庭の夫婦愛との

わりきれぬ現実の中で抱月は去つた。

使命に生き貫き

そこに起きた師弟愛を貫いて

自決となつたのは須磨子の本質。

悲劇を地で往つた

大女優松井須磨子は

演劇史上の永遠的な存在である。

松代の生家から程遠からざる

「須磨子演劇碑」を訪ねたことがある。

「カチューシャ可愛や

別れのつらさ

せめて泡雪^{あわゆき}とけぬ間と

神に願いを

ララ かけましょか」

石碑上の彼女の美しき筆跡から

今も歌声がひびいてくる。

「松井須磨子さん！

貴女は天賦^{てんぷ}の本質を

いつわりなく自ら鍛え貫き

*瞑目||目を閉じること。

*命日||毎年、または毎月めぐってくる、その人の死亡した日。

*天賦||生まれつきの素質。天性。

新劇の大女優として

使命を美事に果されました。

中学生のとき私は新聞紙上に

女優としてのあなたのすがたを見ました

それはマグダに扮したものでしたろう。

とても美しかったです、今も眼前に。

地上の不運と短命に

却てあなたの永遠性が結晶して

その光芒が演劇史上に

虹霓の如く耀うています。

私も昔々歌った『カチューシャ』を

今も時折、私の母の故里でもある

この松代をなつかしみつつ歌うのです。

今あなたと一緒に好きな第三節を」

「カチューシャ可愛や

別れのつらさ

せめてまた会おうそれまでは

同じ姿で

ララ 居てたもれ」

私が歌うと歌碑にまつわる
蔓草の葉が風に揺れ動いた
さらさらと涙する如く。

中山晋平

……

……

或る祭日の前日のこと

笛吹き晋平しんぺいの出演の相手がふと不在。

そこで晋平は腕白仲間の

荒木則定のりさだに呼びかけたが

「晋ちゃん、いくらなんでも

祭は明日あしただというのに

おらに出来るはずがねえよ」

と、無理もない返事。

「フフ、そんな無理は冗談さ。

でも、舞台に坐ってくれよな。

吹けなくなっても、笛を口にあてて

おれのまねをしていればいいのさ」

相談のけりがつくや

則定はススキの茂みに仰向けになった。

すると、晋平も同じくひっくり返って

お空を仰ぐ。

「晋平ちゃん、おめえ

笛なんておもしろいかい」

なかやま しんぺい
一八八七—一九五二年。
作曲家。長野県生まれ。
東京音楽学校卒。民衆に
密着した童謡や流行歌な
どを多数作曲。作品「カ
チューシャの唄」「さす
らいの唄」など。

「うん、おれは好きだよ
氣持がすつきりするよ」

「やつぱ、晋ちゃんは

笛の名人なんだな」

「そんなことあるか」

「だって、村の人たちは

名人だと言っているよ」

晋平は風評などよそにしてひたむきだった。
そういう幼年期もやがて過ぎ、学齡になる。
小学校二年生の頃

音楽室にベビー・オルガンがはいってきた。

それは日清戦争の開戦の明治二十七年。

音楽好きの晋平は大喜びで

晋平ははやくも高等科志望の魂胆。

家計がそれに応えかねるので

母親は「堪忍な、堪忍な」と嘆声。

母の涙を知る晋平は雄々しく断念。

春が来た。菜の花が咲き、蝶が舞い

雲雀がお空で囀っている。

級友たちは高等小学校に入った。

卒業式で総代最優秀たる晋平を

迎えたのは高等小学校ではなく

春の自然だ。床は草の青畳、天井は青空

それが彼の学校で、先生は誰だろう。

日の本の少年に最も相応しい太陽だ。

晋平の仕事は何だ

野良仕事に桑の葉摘み。日暮れになって

笛を吹くのがなによりの楽しみ。

母は二階の蚕部屋で蚕の世話だ。

兄の隆太は役場勤務で経済的な母助け。

母と兄の語らいは晋平の高等科進学のこと。

これを聞いた晋平は欣喜雀躍。

かくて、晋平は長野県下高井郡町村立の

高井高等小学校に十一歳で入学

時は明治三十一年（一八九八）。

雨が降ろうが、風が吹こうが

*堪忍＝我慢すること。

*欣喜雀躍＝小おどりして喜ぶこと。

勉強好きな晋平の心の空には
いつもお天道さまが輝いている。

学校では心ある友人たちと

文学、音楽の話に花がさく。

帰宅すると直ちに二階にたてこもって

読書に無我夢中、夕食を忘れる本の虫。

年が明けてやがて春三月。

進級の四月がまっている。

だが、家計には進級の余裕がない。

母は涙ながらに

その胸を晋平に打ち明けた。

「いいよ、母さん、働くよ」

と母を^{いたわ}り慰めた。

少年晋平は高等小学校を自ら退学。

かくて^か甲斐^い甲斐しく母の手伝いを始めた。

……

……

……

晋平は音楽には魂をゆさぶる

不思議な力があると感じていた。

相手が相手だから

口語調の歌をえらんで歌わせた。

歌は喉^{のど}でうたうのではない。

全身で歌うのだというわけで

行進させながら歌わせた。

生徒がよろこぶので教場を出て

青空の下で野辺を歩かせながら歌わせた。

こんな授業は正に晋平の^{そうあん*}創案だ。

田畑の村人たちは驚いて

「なんか、変わった先生じゃの!」

約束の二ヶ月が^た経つころ

子供たちとの別れるのがつらくなって来た。

「先生! 先生! さようなら」

子供たちの別れの叫び。

晋平、手を振って別れるうちに

目がしらが熱くなった。

*創案IIはじめて考えたこと。新しい工夫。

晋平、音楽を志す。

上京、明治三十八年（一九〇五）晩秋
時に十八歳。

正月に備えての門松あり。

牛込に住む早大教授島村抱月（はうげつ うしごめ）（当時の文壇
の大家の一人）の書生に。

「やあ、いらっしやい」

抱月がにこやかに。

「中山晋平です」

よろしくお願ひします」

抱月はさっそく文壇のこと

「早稲田文学」誌のことを語る。

原稿の清書をたのむとのこと

及び子供たちや小鳥の世話。

市子夫人現れて

「まあ、いらっしやいませ」

子供たちも一緒にあとから。

夜は玄関わきの部屋にこもり

抱月の原稿の清書。その仕事と同時に
内容（文学論）も頭に入れた。

「晋平君、芸術はね

大衆あつての芸術なんだよ。

大衆をぬきにして文学だの

演劇だの音楽だのと言つたつて

はじまらんのだよ」

日がたつたある日

「晋平君、どうだね、そろそろ

上野の音楽学校を受験してみたら」

「……がんばつてみます。

ぜひ受けさせて下さい」

抱月からお金を前借りして

中古のオルガンを買い受験に備えた。

東京音楽学校受験、合格。

外へ出ると上野の山には前夜に降つた

季節はずれの春の大雪がつもっている。
抱月の家に帰って

「先生」

と叫んで合格を告げる。

抱月

「いいかね

君は西洋音楽を学ぶのだが

日本古来からある

伝統芸術を忘れるなよ

大衆の民謡、わらべ歌、そうめんく* 箏曲などを

「はい」

入学したのは明治四十一年（一九〇八）

二十一歳。

晋平は着物で登校、わけは言わずもがな。

本科二年生になっても

古着の洋服に下駄ばき。

音楽学校に居る人間はみんな嫌いだ。

「蛇の室屋」じろやだ。

蝮ムシ、ウワバミ、山かかし、青大将
縞蛇シマヘビ、蜥蜴トカゲといった奴らばかりだ。

ピアノはウンケルと橘糸重

声楽はソプラノ歌手として世界的な

三浦環の指導のもとに。学生の中には

山田耕筰こうさくがいた（一年以上級）。同級には

「城ヶ島の雨」で有名になった梁田貞やなだんじ。

晋平は早大教授の抱月の書生で

いろいろ手伝いのため

百パーセントの学習は不可能。

それやこれやで音楽学校の欠席が多い晋平

先生たちの中で進級の件で問題となる。

ある女性教官（幸田延子、露伴の妹）

が言った

「彼は将来花ひらく素質が

あると存じます。

よって進級させることを切望します」せつぼう

この言で晋平は進級と決定。

*箏曲は日本伝統音楽の一つ。箏をとまなう声楽曲が主だが、箏だけの独奏曲・二重奏曲などの器楽曲もある。

二年になるとピアノが弾ける必要あり。
ピアノは買えない。

ありがたいことに親戚の家から
貸してあげようと。

それで抱月の家から

ピアノの旋律が流れ出した。

校内の学友会誌「音楽」が創刊されると
その編集の一員となる。加之

詩や音楽の評論も書いた（口語体で）。

音楽の本質に迫る論説を書いた。

抱月はそれを読んで同感！

歌は大衆にうたわれる

歌詞がいのちとして。

生涯を貫いてこれを持論とした。

カチューシャの唄

明治四十五年（一九一二）三月

晋平は音楽学校卒。

その年の十二月、浅草区千束小学校
音楽専科の教員になる。

一週間十七時間。

余りの時間は早大で聴講。

抱月は坪内逍遙しやうようを助けて文芸協会を起す。

新劇運動、俳優女優の育成。

従来の因習を乗り越えて

人間を自由に解放する目的。

この文芸協会に

とびこんで来た有望な女性が

長野県松代出身の松井須磨子すまこ。

抱月は須磨子の才能を見ぬき

女優にすることを大きな望みとした。

晋平の卒業前に須磨子は

研究生による第一回公演として

シェイクスピアの「ハムレット」の

ヒロイン、オフィリアを演じた。

もう女優として立派な素質なることを

実証した。次いで、イブセンの「人形の家」ズーデンマンの「故郷」の主役を。

晋平は抱月の家で時折彼女に出会った。

彼は彼女がやがて自分の作曲の劇中歌を歌うようになるとは夢想だになかった。

大正三年（一九一四）正月

抱月が晋平を書斎に呼ぶ。

「実はね、芸術座の公演として

トルストイの『復活』が

帝劇で上演となる。

その中に歌を入りたいのだが

即ち劇のヒロインのカチューシャが

歌うのだからね

そこで君が必要なのわけ。

新潟の高田出身の相馬御風くんがね

君の名前を出して

その歌の作曲は晋平君がいいという。

晋平君のメロディーの基調は

日本人の伝統をふまえたものだが

リズムが実に新しい、と絶賛していたよ。

それで君にたのむよ。

日本に古くからある俗謡と

リードの中間のような

旋律を考えてもらいたい」

その歌は机上にあった。

「カチューシャかわいや

別れのつらさ……」

歌うのは松井須磨子。

晋平はその夜、考えにとりかかった。

帝劇の大舞台で

大女優須磨子が自分の曲を歌う。

その作詩は抱月自身のだ。晋平は

この恋の歌は或は抱月の須磨子への

熱烈な恋の心を正直に歌っている

といっているかも知れないと思った。

（須磨子も抱月の心を感じていたことは

いずれこの二人の他界が実証するところとなる)

抱月と須磨子の恋により

文芸協会は維持不能となり

会長坪内逍遙は会を解散した。

抱月は須磨子と芸術座を開設

第三回公演の原資料はトルストイの復活

晋平は曲想を考える。

歌詞はすばらしい。

ピアノに向かって何日も。

ねても起きてても「カチューシャ」で

気も狂わんばかり。そんなある夜

晋平は曲が間に合わぬ夢をみた。

その衝撃で目がさめた。

晋平はおきあがって瞑目

戸外では雪が降っている。

ポツンと星が輝きだした。

星の光が靈感を与えた。

メロディーが聞こえて来た。机に向かった。

五線紙に一気に書き出した。

「カチューシャ可愛いや

別れのつらさ

せめて淡雪とけぬ間と」

しかしどうも満足できない。

郊外に散歩にでかける。

枯れ草に腰をおろす。

「……せめて淡雪とけぬ間と

神にねがいを……かけましょか」

何か足りない。

“ララ”を入れた。できたぞ。

抱月にうたってみせた。

「いいじゃないか、晋平君！」

……

……

……

美空ひばり

大洋船の汽笛きてきの音が

ひびく港の町の中

魚増さんに人魚うみこが生れた

海からはねたか、天から降ったか。

生れながらの歌の娘むすめだ。

三歳童女さんさいどうにょのときにして

百人一首を暗誦くらんじた

天才少女で彼女はあつた。

紫色むすひの好きなこの女ひとのため

紫式部の三十一文字みそひとを

ここに口吟くちんんで唄うたぼうぞ

「巡り逢めぐあひて見しやそれともわかぬ間に

雲くもがくれにし夜半よわの月かな」

まこと靈たますしき身まかりよ。

かつて巡り逢めぐあひて見しは帝劇で唯だ一度

今日けふ、一九八九の水無月みなづき二四にじの日に

真夜中の月が雲がくれしたように

五十二路いそふたじのこの世の旅路を

美空にうつしひばりと化して

これからはみ空で歌いつづけよや。

みそら ひばり

本名、加藤和枝。一九三七、八九年。歌手。神奈川県生まれ。ヒット曲「悲しき口笛」「リングロ追分」「柔」など。平成元年、国民栄誉賞受賞。一八八九年六月二十四日午前〇時二十八分没。

*水無月、陰暦の六月の異称。

好きだった火酒（かしゆ）の如く

おのれを歌で燃やし尽した。

歌に生れ、歌に生き、歌と心中（しんじゆう）。

生くるは即ち歌うことのほか

何ものでもなかった彼女に

結婚が束（つか）の間に破れたのは

必然の運命（さだめ）だったのだ。

母に助けられ母を助けた見事な母子

義理にかたく、人情に厚かった女（ひと）。

美空（加藤）和枝は個性（けんせう）顕然

少女（とこ）の時代から大人の演歌を

歌う妙（たえ）なる歌声の娘（こ）。

その環境と個性のゆえに

生涯はドラマの起伏

その波風の中なればこそ

その歌声はいよいよ絶妙

はやくも歌謡界の第一人者！

情熱と意志と智慧の

ふしぎなゆたかさをもった歌姫（うたひめ）の相

歌詞を生かしつつ越えてゆく無量の余韻

「悲しい酒」を歌いつつ涙する

あの相（すがた）こそ美空ひばりそのものだ。

「無法松の一生」を叫び歌いつつ

玄海の波より荒く逆まくあの意気

彼女は死してやまざる歌の精。

あの歌声は永遠（とわ）に歌謡の美空に

ひびき渡って絶えることがないだろう。

正に歌謡の女王にふさわしき四十年（よそとせ）余り

あふる情熱は竟（つい）に一人の恋人をも有（も）たず

ひばりの歌を愛する万人を恋人としてゆく。

彼女は歌に殉じた歌謡のひばりだ。

「今晚はあなたと一対一でね！」

とテレビ画面から語りかけたひばりさん。

「私は地上であなたと

語ったことは一度もなかった者

*火酒＝火をつけると燃えるほどアルコール分の多い酒。しようにう。ウオツカ。

*顕然＝明らかさま。

天海てんかいと称いいます。

かつて歌の道三十周年記念にあたり
帝国劇場で歌い貫ついて下さったとき
全くあなたに魅め了りされた者ですよ。

「二度決めたら二度とは変えぬ」

あの「人生一路」を

貴女が全身で歌っていたとき

これこそ貴女の本質を

最もよく現わしている歌なりと

感入して私も火となりました。

ここに一言告白したきことは

あなたのような純真な歌の魂たまが

眼指まなざしをファンの民衆から

一度離して天に向け

神様、天界の調べを聴かせて下さい

と祈いのって下さい。

ここは復活の日本天界

新しい歌詞も歌曲も与えられ

ふしぎな靈歌を唱うって下さい。

あの地的情熱が天的なひびきとなつて

今魂を奪うばわれました。

人の心を深く捉とえ、身をしびらせ

病める心も軀からだも癒いされますよ。

ここの演歌は人を芯しんからなぐさめたり

うれし涙で泣かせます。

そして靈歌は人をよろこばせ力づける。

然らば正に美空ひばりの名の如く

人の心魂を天地の間に自由自在に

昇り降りさせますよ」

「ああ、そうですね。

私は、天海さん

そういうあなたに今お会いして

とてもうれしい。

私はここでは地上より

歌謡にもっと力と

よろこびにあふれます。

*「人生一路」

二度決めたら

二度とは変えぬ
これが自分の生きる道

泣くな迷うな

苦しみ抜いて
人は望みを果たすのさ」
(石本美由起作詞)

「苦しくとも

哀しくとも

終りなき
この道を
歌で貫かん」

(美空ひばり)

ああ神讚美は

何とすばらしいことでしょう。

天海さんの讚美を歌わせて」

「では、これを歌って下さい」

「曠野の如き」（イザヤ書三十五章）

時は移りて時期じきを呼び
壊滅はうびの夜は明け初はつめて
朝霧霞あさぎりむ地の面おもてに

朝日の光指しそえは
小草おほの芽生めばえ現われぬ
ああ復活の春は来ぬ

見よ曠野こうやには紅白こうやの
サフランの花咲き薫かおり
見渡すかぎり楽園らくえんに
復活ふたごりたりあな不思議

いざ平伏ひれふして聖名みなを呼び

声高らかに讚美せん

レバノンの栄光はえ男おの児こらに
サフランの美は女めの子らに
輝いき出でんあな嬉うれし
歌いて舞えよ乙女子おとめこよ
主の栄光を身に浴びて
花サフランの精せいの如ごとく

「遺のこれる民よ汝らは
曠野こうやの中に恵まれぬ
わが窮かきり無き愛により
救われたるは十字架の
碎けの愛の人々よ
民族やからの差別絶えてなし」

時期ときは来たれり人よ聴け

*曠野はひろびろとして
人家も樹木もない野原。
あらの。広原。砂漠。

盲者の眼開かれぬ

聾者の耳聞こえたり

跛者の脚立ちあがり

啞者の舌はもの言えり

主イエスのみ業茲になる

曠野に泉水たばしりて

砂漠の中に川流る

涸れたる丘は緑して

羊の群が牧わる

猛き獣の影失せぬ

小鳥や蝶が飛び交うよ

イエス・キリストに救われし

民らは今や復活の

大地の人よ歡びて

おのが天職はげみつつ

交響樂を編み成さん

神の聖旨の成るままに

噫これ夢か幻か

全地は今や神仏に

伏しておろがみ立ち帰り

かたみにゆるし相抱き

愛の世界を体現せよ

聖書の預言畏るべし

それを靈聽する歌姫が今に現われ

天の歌謡界に新しい光を投じて下さい。

さもあらばあれ、歌謡界の不死鳥

美空ひばりさん

永遠の歌姫よ！

この天界から靈歌を歌いおろして下さい。

宗教心がとけこんだ美しき声！

天来の調べが靈妙に

ひびくと人はおのずから

天を仰いで言いしれぬ
よろこびと力にあふれます。



わが賜りたる福音

武蔵野幕屋創立五十四周年記念集會にて

一九九四年九月二五日

どの教會にも理解せられず

無教會には異端視されて

荊棘けいきくの道を我つき進み

孤高の嶺を目指して歩み

陰崖の隘路を歩一歩辿り

悠久の天路を夢見る私。

嗚呼、偽善なるパリサイ人ら

妬みと嫉み、陰口の徒ら

我汝らと関わりはなし。

我はわが身に十字架を負い

大慈大悲の道なき道を

我悠然と歩みに行かなん。

悲しむ人と涙を共にし

悩める人と悩みを分かち

求むる人の求めに応じ

病める人には手を按き祈り

迷える人の道伴れとなり

主のみ光に貫かれつつ

主のみ力をわが身に受けて

助け慰め喜ばしめん。

かくて福音の証し人たらん。

嗚呼、賜りたる無者たるの道

無のどん底の実存の態。

海辺に往けばそこに友あり

野山に往けばそこに人あり

人々はみな同胞なるぞ

我が胸の胸中にはお陽さまがござる。

我に壁なく、石垣もない。

わが魂之靈は開かれてあり。

無者たる我は八方破れ

主の福音のわが告白に

欣然共感、抱きつくひと

また魂之靈の砕けたるひと

思い遣りの愛情のひと

他人の過ちを言あげせぬひと

天つ義のため耐え忍ぶひと

実に慕わしや、かかる人々。

武蔵野幕屋の遺れる民と

この集会を共にし進み

主の御旨なら何でも受けて

十字架・聖靈の一路を辿り

新しき人を喜び迎え

使徒らの心と同じ心で

聖靈に与かり告白伝道

幕屋を張りつ畳みつなして

涯しも知れぬ福音の道を

限りあらなき曠野の野路を

御国めざして私は往くのだ。

この旅路にて、水茎の跡

留めおかまし或る詩篇

わが胸は燃え、力身に満ち

全身全靈火の玉となる

今世紀をば突き貫けて

険路なれども主の恵導のもと

書き続けん、或る長編の詩。

御名のためなるこの靈願を

贖い主よ、受けさせ給え。

救い主よ、御前に平伏し

汝の碎けに我は碎かれ

汝が復活の突破の生命に

われ与かりて万難突破。

嗚呼、驚しや神の臨みよ

天つ臨みよ、まこと幽形の筆致たるべし。

使命のためには百寿突破

御名にあつての証し人たれ。

神の歴史の靈しき道を

今や我なりに辿り辿りて

昼また夜に読書に詩作に

粉骨碎身、研鑽鍊磨

時空を超えて靈界を歩み

冥想に耽り黙示に与かり

過去現在未来の三世

地獄煉獄天国三界

回顧し直視し洞察すべし。

実に宇宙的主キリストの

御懷にわれ躍り入り

神の歴史と神の御国と

大宇宙をば大觀しうる

大聖靈にわれ抱かれて

我とわが身は既にあるなし。

靈法冥利限りあらず

我を捕らえて天翔けらしめ

諸々の宗教、うって一丸

あらゆる真理抱いて融かし

円融無限、遍照無辺

主キリストよ、聖靈の神よ

この烈々たるわが魂之靈を

確と捉え、自由に駆使し

鍛えに鍛え、練りに練りあげ

天来の詩をただ御名ゆえに

書かしめ給え、成らしめ給え。

我は耐え貫き、忍び貫きてぞ

千苦万難貫きゆかん。

悲願靈願、祈りに祈り

主の本願に即し奉りて

この詩成就のその曙に

上弦の月は円現すべし。

旭日照り出で、暁雲を突き

全天の星、樂を奏でん。

百花は山野に咲きて躍らん

千草は原野に舞いて笑わん。

百獸、草原に躍りて走り

千鳥、蒼空に飛びて歌わん。

哀れ棄てられし一預言者

大キリストの今様の使徒

主キリストの福音の証者

涙は腹の中に流れ入る。

宜^うべなるかなや、我罪^{われ}びとの

首^{かみ}的なる存在なれば

主の御前にただ平伏して

主の無者として無に徹し貫き

あらゆる定め、黙して体受

ひたすら御名を讚美し奉^{たぐ}らん。

栄光、主にあれ！

アーメン、ハレルヤ！

小池辰雄遺作刊行にあたって

小池信雄

本書は、一昨年夏召天した父小池辰雄が、百歳になったときに完成するつもりで書き始めた叙事詩をまとめたものである。

父は昔から、口癖のように文学は詩につきると言い、自分の本来の姿は詩人なのだと言っていた。詩人といえば、ランボーや中原中也のような人のことだと私は思っていたから、どうみても学者にしか見えない父の言う意味はよく分からなかった。したがって、ダンテのような大長編詩を書くのだという科白も半ば冗談、半ばかなわぬ願望として聞き流していた。

七十歳を過ぎた頃であろうか。著作集の刊行に際して、略歴を奥付に記すことになった。すると、独文学者、伝道者に加えて「詩人」と自分で書き足したのである。校正をしていた私が「詩人」の文字を削ろうとしたら、大変怒って、自分のライフワークは一大長編詩を書くことである、いままでのすべてはそのトレーニングに過ぎないと言い放った。

父が亡くなってから、遺された蔵書にたくさん詩集があるので改めて驚いた。ブラウニング、ホイットマン、ミルトン、テニスン、カーライル、ワーズワース、ブレイクといった英詩の原書もたくさんでてきた。ドイツ文学者であったからドイツの詩人の本があるのはわかるが、こんな

にも多くの英詩の本をいつから買い集めて読んでいたのだろうか。それも最近の版ではないところをみると、詩人への思いは深く長く潜行していたことがわかる。

身近に暮らしている者が理解していることなどたいしてあてにならないものである。毎日、おはようといい、犬を散歩させ、庭に水をまき、今日は鰻を食べたいと言っている人物の深く潜行している思いに至ることは難しい。詩人への思いが、まぎれもない本ものであったればこそ、周囲には冗談のように言っていたのだろう。七十歳を過ぎてようやく「詩人」と記すことを自分に許し、大長編詩を書くことを人前で公言することによって自分を追い込んでいったのだと思う。

この度、遺された本詩を読んで父がどういう心から詩人であろうとしたのかがおぼろげながら分かった気がした。

本詩は、未完である。未完成であるということは、師藤井武氏の長編詩「羔の婚姻」が未完であつたことに由来している。小池が二十六歳の時、敬愛する藤井武氏が、四十二歳で天界へ旅立つた。遺された詩「羔の婚姻」を手にして青年小池は、長編詩を書きつつ逝つた師の在り方を、痛烈に受けとめた。以来、自分の生涯の最後の在り方はかくありたいと願つたに違いない。

「羔の婚姻」は、藤井氏が三十四歳の時に直面した愛妻の死から、それを受けとめて書き始められ、死に至るまで書き続けられた愛の詩である。氏が、文学の世界でいういわゆる詩人であつたはずはないが、この時氏はまぎれもなく伝道者であり詩人であつた。この時期に小池もダンテを読みミルトンを学んだ。青年期、二十代前半の五年間を氏とともに生き、そしてその死に直面することによって、氏の生き方のすべてを受けとめた。伝道者であることは同時に詩人でもあると

いう在り方を、この時氏から学んだのである。

聖書を読み、神のみ業を語る者は、ヨハネ伝福音書にある「初めに言ありことば。言は神とともにあり。言は神なりき」という在り方でなければならない。小池のいう詩人とは、そういう意味だったのである。

年譜を見ると、一九八九年六月に詩の草稿「青の洞門」を日曜集会で朗読している。本人によると本格的執筆に入ったのは一九九二年になっているが、それ以前から書き進んでいたらしい。書いたものは、ことさらに人に読ませたがったものだが、詩についてはそうではなかった。ただ日常生活の中で、「西郷南洲は、すごいね」といったことをぼつりと言う。その時、その人物を書いているのだなと思った。草稿が仕上がる度に、集会の沢田正信氏がワープロに打ち込み、それをまた改稿し、仕上げるといった作業を繰り返し、小冊子の形にして遺していた。死ぬ直前の七月には、「アッシジのフランチェスコを完成させた」と晴れ晴れしたように言って、野尻の山荘に出かけていった。アッシジのフランチェスコが最後の詩となった。

私の目から見ると父の文語調の詩は、なかなかなじめなかった。一高寮歌のような詩が好きだったからしかたのないことであろう。しかし、いま読み返してみると、これが彼にとってもっとも気持ちの込めやすい形式なのだということが分かる。なじみにくい数頁をすぎると、あとは語ろうとする世界に引き込まれていく。彼の思いのたけを言葉が勢いをもつて運んでいつている。文学的、技術的な善し悪しを超えて、霊的次元へ突き抜けた人物のドラマを語る情熱と息吹が迫ってくる。なるほど、霊的次元へ突き抜けるドラマを語る言葉を彼は「詩」と言い、それを語る

者を「詩人」と言っていたのだった。

マリリン・モンローや美空ひばりまで登場するあたりは、個人的にはほえましくも思う。私の少年時代、ラジオで歌謡曲やジャズを聞いていると、父は眉をひそめて「くだらん」と一言いい、スイッチを切ったものだったからだ。しかし彼の四十代後半から次第に変わっていったことは、本書の冒頭にある詩にも描かれているとおりである。すでになにもものにも拘泥せず自由自在に生きた証だと納得する。

霊的なひとは、自由自在となる。聖霊に打たれ、聖書を「大ドラマ」として身読するようになってからの彼の自由自在な在り方の根源を、この度あらためて素直に読み、知り、若干の羨望と残念とが去来している。

息子というものは、父の死によってしか素直になれないものなのか。ともかく、本をやることだけを仕事としてきたおかげで、本書を刊行する行為から初めて小池辰雄という人物に正面から向き合うことになった不思議を思う。

バラバラなまま書き遺された小池辰雄の遺稿詩をこのような形にまとめられたのは、ひとえに沢田正信氏のおかげである。また、ルビや注をつける作業をかつての武蔵野幕屋のメンバー、新宿集会の人たちが手伝ってくださった。ここに深く感謝の意を表します。

一九九八年七月十二日

○編集後記

沢田正信

本書の題名について著者はある時、旧約聖書のダニエル書12章3節の次の句を引用した。

「さとし願悟者は空のかがやき光輝のごとくにかがや耀かん。

また衆多おほくの人をただしき義に導ける者は

星のごとくなりて永遠にいたらん」

「靈界の星々」とは、靈的人物即ち天界（パラダイス）に星のように輝く神・キリストの証者たちのことである。「神の幕屋」とは地上にある「キリストの幕屋」（または聖靈の幕屋）を包摂する天界の幕屋であり、その中には、キリスト道に生きたひとだけでなく、仏道や、その他、愛に生きた本当の人らしきひと（靈止）が属している。「キリストのキの字も知らないひとでも天国に入る反面、聖書を何十年も研究した者が天国の門前で「ちょっと待て」と言われる」とは、著者が折りに触れて語った言葉でもある。

著者の詩作の立場に言及した言葉として、

「私の詩作の立場は、現世を越えた靈界（パウロが第三の天といったような）またキリストが『汝今日我と共にパラダイスだ』と心くだけた悪者に言われた超現世の次元、パラダイス＝靈界が私が詩人として詩作している現実です。ですから、この長詩はその次元で書きまたその次元から、その次元の靈的な人物或は靈的といわなくても、その次元に入れられた人々を相手としたり、第

三者的にとりあつかったり、またその靈界から現世を見おろして色々書くといった立場です」(一九九三年二月二十一日付私信)とある。また、執筆の予定について、「一九九三年前半は仏教、後半はキリスト教会史。一九九四年からは旧約・新約……というわけ(第十巻を土台にして)。一九九五年、一年間は原稿、ワープロを見直して推敲したいと思います。一九九六年あたりから最後の冥想をして私の天国篇を書きます。これが二年はかかるでしょう。それでいよいよ印刷へとかかり本になるのは一九九八年から一九九九年という段取りと思います」(一九九三年三月十五日付私信)とある。

著者は当初、九十人以上の人物を描く構想であつたが、遺された原稿はその約三割である。その殆どは一九九三年暮れまでに執筆されており、著者自身が「これは書きつばなしの原稿です。で、本格的な本にするまでに推敲しておきます」といつて渡された原稿ばかりである。なかには単に資料として書きとめたようなものもある。推敲も完全になされているわけではない。著者のよくいう、「地上では三日月的な未完成交響楽」となつてしまった。最後に執筆予定の「黙示録に因んで新天新地を書きます。これは天弓の創作、この大詩篇のフィナーレです」と著者が夢見ていた詩が遺されなかつたことが惜しまれる。

著者は一九六一年から六二年にかけて西独ハンブルク大学の日本学交換教授として渡独していた時に次の歌を作った。この頃既に長篇詩執筆の有望を抱いていたことが読み取れる。

「わが心今や決せり情熱を傾け尽くして大詩ものせん」

「天来のみ霊よわれを貫きて一大叙事詩を世に投ぜしめよ」

「さるにても準備は永くカイロスの迫るときまで筆は執らざり」

一九六一年六月二十五日作（小池辰雄著作集第八卷「詩歌集」55頁）

「日本の精神の歴史の此の危機を突破せよと主は宣たまへり」

「かがなべて五十と八つの生誕をここに迎へて大望の湧く」

「わが神よなほ藉し給へ三十年を三つの使命貫徹すべし」

「伝道と神学論文、大詩篇三相一如のわが使命なり」

一九六二年二月七日作（同「詩歌集」63頁）

また、著者主筆の聖書伝道誌「エン・クリスト」50号に掲載された詩（一九九二年二月七日作）の中からこの長篇詩に関わる句を次に抜粹する。この頃には、詩のかなりの部分を書き進んでいたことがうかがえる。

「千九百の九十二年 我は米壽を迎へたり……」

啓示に因れる詩の旅路 み光のもと十余年

険路なれども跋涉の わが脚にみ力臨み

二十世紀を突破して 無限性なる詩よ成れよ（詩「米壽を迎えて」より）

「何を以て報いているか、聖書告白の著作を以て

最後には宇宙的、永遠的な自由の詩作を以て！

そこには何が出現するか、どんな詩であろうか」（詩「八十八路の峠にて」より）

「今や八十八路の峠だ、リュックの中には聖書一巻

この旅路の果にこのサツクの中から一卷の詩が現れる！」（詩「八十八路峠の眺望」より）

一九九四年九月二五日、著者が主宰している武蔵野幕屋創立五十四周年記念集会で、

「こういう詩を少し前に書いた。今、読み上げたのが私の本当の気持です」

といつて「わが賜りたる福音」と題する詩を披露した。福音の伝道者として、詩人として、著者の生涯を告白する詩として、本書の最後に掲げた。

表記等

「私の仮名づかいは一般のものに従いません。むしろ旧い書き方（厳密ではありません）です。明治の人間だから仕方ありません。詩的自由を以てやっていますので、印刷のときにそのことをハッキリ注をするつもりです」という著者の意に反し、本書の表記は原則的に次のとおりとした。歴史的仮名遣いは現代仮名遣いに、旧漢字は新漢字に、不統一に使われている単語等は統一的なものになおした。行末の読点“、”、引用符“”の直前の句点“。”は省略した。一句が二行以上にまたがる場合は、意味や口調の切れ目で適宜改行を入れた。

参照文献

ふりがなや注を付すために、主に次の文献を参照した。講談社「日本語大辞典」、角川書店「漢和辞典」、平凡社「世界大百科事典」、小学館「例文仏語大辞典」、岩波書店「仏教辞典」、いのちのことは社「新聖書辞典」、日本聖書協会「旧新約聖書」（文語訳）。

○著者略歴

小池辰雄 (いけ たつお Tasuo Koike)

一九〇四年二月七日、東京に生まれる。高等師範附属小学・中学校、旧制水戸高校出身。

一九二九年春、東京大学文学部ドイツ文学科卒業。東京陸軍幼年学校・陸士・陸大教官。終戦後、一高東大教授。その間断続的に、昭和医専・医大、早稲田大学、東京歯大等の講師を勤めた。

一九六一・六二年、西独ハンブルク大学の日本学交換教授。東大定年退職後、獨協大学教授並びに獨協中学・高等学校校長。

一九七九年春、五十年間の教職を退き、以後、福音伝道と著作に献身。

一九八〇年三月一日、西ドイツ政府から第一級功労十字章を授かる。獨協大学名誉教授。

一九八〇年夏から機関誌「エン・クリスト」を刊行。

一九八八年夏、小池辰雄著作集(全十巻)が完成。

一九九六年八月二九日 没

内面史

水高・東大時代から無教会の内村鑑三・藤井武・塚本虎二の聖書集會に相前後して列席したが、一九四〇年秋から武蔵野市の自宅で日曜聖書講筵を開く。その集會を武蔵野幕屋とも東京キリスト召団とも称した。一九五〇年秋、十字架・聖霊の本格的体験以来、使徒的次元の原始キリスト道を唱道し、日本キリスト召団を結成。独立伝道者にして詩人。

著作活動

かつて、「旧約知識」誌、「キリスト教常識」誌の同人。後に「曠野の愛」誌(37号まで)、「曠愛新書」(6号まで)及び「エン・クリスト」誌の主筆。「小池辰雄著作集」(全十巻)。「使徒らの昔を慕ひて」(独和対照の詩)。召団讃美歌約百歌。長詩(人物列伝)を執筆。「眠られぬ夜のために」(ヒルティ著作集第4巻、白水社)、「神と人間の実存的弁証法」(ベルジャーエフ著作集第6巻、白水社)、スピーリー等の翻訳、学術論文等多数有り。

霊界の星々

神の幕屋人物詩伝

小池辰雄

1998年8月21日 初版印刷

1998年8月29日 初版発行

曠野の愛社

発行人 小池信雄

〒180 武蔵野市吉祥寺東町4-15-19

電話 (0422) 21-3433

振替口座番号 00190-0-74715

装幀 手代木克信

印刷 株式会社亨有堂印刷所

頒価 3000円

小池辰雄著作集 全十卷

- | | | |
|---------------|-----------|------------------|
| 1 無者キリスト | 四版（一九七五年） | 無即無限無量者たるキリスト |
| 2 芸術のたましい | 再版（一九七六年） | 芸術論及びダンテとゲーテ論 |
| 3 無の神学 | 初版（一九八二年） | 靈的な無の著者独特の神学論 |
| 4 詩篇珠玉集 | 再版（一九八〇年） | 五十の詩篇の著者一流の訳と解説 |
| 5 百世の師ヒルテイー | 再版（一九七七年） | 彼の著書の解説、人生の道の好伴侶 |
| 6 随想集 | 再版（一九八二年） | 福音的瞑想、師友の想出、母の生涯 |
| 7 聖書の人ルター | 初版（一九八四年） | ルターの劇的生涯、讃美歌と名序文 |
| | | 著者の論説三篇 |
| 8 詩歌集 | 初版（一九八六年） | 和歌、詩、讃美歌、独和対照 |
| 9 感想と紀行 | 初版（一九八七年） | 海外旅行及び、伝道の諸紀行文 |
| | | 諸種の感想文 |
| 10 聖書は大ドラマである | 初版（一九八八年） | 聖書の縮図とも言うべきもの |

四六版上製箱入 四五〇頁平均 各巻三〇〇〇円（割引価格）送料不要 分買自由

お申込は郵便振替にて左記へ

口座番号 〇〇一五〇一〇一六二三一八

加入者名 小池辰雄著作刊行会